可相心得候事、

六月廿六日　　高嶋少将

黒木宛

別紙

其隊歩兵二中隊明廿七日伊集院辺内、二中隊谷山麓辺へ巡邏可為致、尤第三旅団ヨリ一大隊、同時ニ川内ニ出発為致候ニ付、時刻等同隊打合、二中隊ハ伊集院辺まて同行可致、且当県官員ヲ両道へ随行之上、各所ニ告諭書掲示為致候ニ付、此旨可相心得候事、

六月廿六日　　川村参軍

高島少将殿

追テ詳細ハ県官ヨリ其団へ打合候筈ノ事、

一明廿七日垂水（たるみず）へ転移、夫ヨリ都城へ進軍ノ筈ニ候処、都合ニヨリ見合セニ相成ル、

旧五月十七日

六月廿七日　曇（午後五時五十分ヨリ雨降十分間）　水曜

一午前第九時、我第一大隊ノ第一中隊ヲ谷山麓辺へ巡邏トシテ差出ス、

但シ大尉齋藤太郎引率ス、午後五時過帰リ異情ナキヲ報ス、

一午前十時、本陣ニ至リ、会議ニ列座、午後四時三十分城山ニカヘル、

一此夜新波戸場ニテ花火発揚、

一本日我第二大隊第一中隊ヲ犬迫（いぬさこ）ヘ差遣ス、賊ノ捨置去ル米八千俵之レアル旨報知アリ、鹿児島ヘ運送ノ為メ県官同行、此日六十俵ヲ運送スト云、

旧五月十八日

六月二十八日　曇　蒸熱　木曜

一第一大隊第二中隊ヲ米運送ノ為メ、昨日ノ通犬迫ヘ差遣ス、

一午前十時、本陣ニ至リ、会議ニ列座、正午十二時過キ城山ニ帰ル、

一明二十九日午前第八時、玄海丸ニ乗船、垂水ヘ転移、夫ヨリ都城ヘ進軍ノ命アリ、再ヒ明廿九日午前八時玄海丸ヘ乗船ノ筈ノ処、同日午前七時我隊ハ敦賀丸ヘ乗船可致旨被達候事、

一午後四時頃、高嶋少将ヨリ、本陣ニ来リ泊ス可キ旨申越シ、直ニ城山本部用向キ取片付置キ本陣ニ至リ泊ス、

一午後五時過、葉山・山口・伴氏三名中尉ニ任セラル、山田積之以下四名一等給下賜、阿部少尉試補我隊旗手

被申付候事、

一垂水転移ニ付城山并西田橋ノ我哨兵所ヲ、第四旅団兵ト別働第三旅団兵ト我隊今夜交代ス、

旧五月十九日

六月廿九日　曇　午前七時ヨリ晴　金曜

一午前七時ヨリ我隊順次敦賀丸ニ乗船ス、予・眞鍋本承並参謀部尉官山縣某等玄海丸ニ乗船ス、

一午前十時三十分、敦賀丸鹿児島湾出帆、正午十二時前垂水沖着、夫ヨリ午後二時頃上陸ス、

一午前十一時五十分、玄海丸鹿児島湾出帆、午後一時十分垂水沖着、予、相良(長発)少佐・山縣某ト、バーテヘラニテ直ニ上陸、跡ヨリ端舟ニテ眞鍋本承等其他諸荷物等順次上陸、

但シ、予、相良以下人夫迄我総員三百七十六名、右証書ヲ川本之生ニ渡ス、

一垂水ニテ暫時総員休息シ、夫ヨリ各諸中隊分遣部署左ノ通、

一垂水　二中隊第二ノ第一・第二中隊井上少佐引率

一新城岩本市兵衛方聯隊本部トス　二中隊第一ノ第四中隊第二ノ第三中隊

一花岡　三中隊第一ノ第一・第二・第三中隊阪井少佐率之

右部署相定リ、夫々垂水出発、予・山縣某・眞鍋本承等午後七時頃新城ニ着、直ニ要地ヲ検シ哨兵配布セシム、夫ヨリ聯隊本部岩本市兵衛方ニ至ル、

一高雄丸・寶來丸ノ両艦ニ、独立第一大隊乗組、高須(たかす)ニ至リ上陸、直ニ鹿屋ニ至リ宿陣ス、

一垂水ヨリ新城ニ至ル途中、新城境杭ノ処並新城・宮脇等ニテ休足ス、此日初テ婦人稚子ヲミル、

一此夜加治木・帖佐ニ当リ火ミユル、

一本日垂水ヨリ新城ニ至ル道程二里半(但シ四十八丁一里)

旧五月廿日

六月三十日　晴(午前八時頃迄曇)　土曜

一午前第五時三十分、新城ヲ二中隊ト共ニ出発、同十一時五十分鹿屋ニ着、昨日花岡(鹿屋市)ニ分遣隊モ鹿屋着、垂水駐在二中隊ノ内、第二大隊第一中隊モ鹿屋着、夫ヨリ要地ニ哨兵配布ス、本部ハ鹿屋商木下吉左衛門方、

一本日新城ヨリ花岡ニ至ル途中、新城麓ハ元島津某旧知行処ニシテ嶮山アリ、之レヲ切割テ道ヲナス、号テ市ノ瀬戸(十丁程)ト云、之レヲ去ル暫クシテ山間ニ田アリ、之レヲマサカリタンボト云、此処ニテ暫時休足ス、

一大姶(エラ)ノ内柳村ニ至リ又休足、此処ノ土人ニ聞クニ、昨

廿九日鹿屋ニ賊伊東權平隊長ニテ二百名集合、皆火縄銃ヲ持ツ、シカルニ官軍ノ来ルヲ聞キ、志婦志(しぶし)ノ方ヘ遁逃スルト云、又大崎ノ横脊(よこせ)ト云処ニ賊アリ、串良(くしら)ニモ賊アリト云、又此辺ノ士族賊ニ組シ出兵ノ処、肥後人吉其他処々ニテ、左手或ハ足ニ自ラ傷ヲ付テ帰宅ス、官軍ノ此処ニ来ルヲ聞キ、山間ニ潜ミカクル、ト云、自ラ傷スルモノハ戦ニ倦ム故ナリ、

一鹿屋入口ニテ休足、此処ニテ土人ニ聞クニ、昨廿九日官軍高須ニ来ルヲ聞キ、午後四時賊徒二百名串良・志婦(布)志ノ方ヘ遁逃スト云、

一垂水ヨリ鹿屋ニ来ル途中ノ大小人民ニ聞クニ、之レヨリ先キ、賊徒等貧民ニ至ル迄壱円以上出金致サセル由、

○此節ハ衆民賊ヲウラミ、早ク官軍ノ来ルヲ待ツト云、

一本日新城ヨリ鹿屋ニ来ル途中総テ山ナリ、

一午後一時過、畠山軍吏補来リ、午後二時過又花岡ニカヘル、

一井上少佐・副官安永中尉午後四時過垂水ヨリ来ル、

一畠山云、昨夜ノ火事ハ鹿児島大門口ヨリ運輸局辺迄焼亡ト云、

一新城ヨリ鹿屋迄道程三里四十八丁一里、

一井上少佐云、牛根並ヘタ(辺田)村等ニ賊二百名集合ノ由、相良少佐ヨリ報知アリト云、

一本日鹿屋ニテ、本部ニ児玉少佐外壱名来リ同宿ス、

一此夜別働第一旅団第一聯隊鹿屋宿陣ス、之レヨリ高隈(たかくま)街道ニ向ケ都ノ城進軍ノ筈ナリ、

旧五月廿一日

七月一日　晴(午前八時過キ迄霧人曇)　日曜

一午前四時ヨリ順次各中隊出発、午前七時半串良(くしら)ニ着陣、直ニ第二大隊ノ内二中隊ヲ大崎ェ分遣、井上少佐率之、又第一大隊ノ第三中隊ヲ以串良ノ要地ニ哨兵ヲ配布ス(鹿屋ヨリ串良道程三里)

一午前第五時、予鹿屋ヲ出発、途中両度休足シテ、午前第八時串良ニ着、宿処差支ヘアリ、暫時輜重部ノ宿処ニテ休足、午食ヲ喫シ、正午十二時五十分聯隊本部(農日高平助方)ニ至ル、

一独立第一大隊本日未明串良ヲ出発、今朝大崎ノ村落ヨリ開戦、暫時ニシテ賊敗走(此時大崎ノ町分悉ク焼亡)、夫ヨリ第一大隊ハ追撃シテ菱田川ニ至ル、賊ハ川向フニ寄リ、第一大隊ハ川ノ前堤ニ寄リ戦争(此川大崎ヲ去ル一里半計)、此処ヘ我第二大隊ノ第三中隊ヨリ一小隊援兵トシテ差出ス、予ハ大崎ニ

宿陣ノ旨、井上少佐ヨリ伍長佐藤晴義ヲ以テ申越ス、
○賊ハ多分敗走ノ見込也ト云、時午後第二時ナリ、
一正午十二時頃山縣(前顕)大尉大崎ニ至ル、午後八時過串良ニカヘリ本日戦争ノ景況ヲ報ス、其節独立第一大隊長上野大尉ヨリ黒木中佐宛ノ書翰持帰ル、其文左ニ、
未朝(明)第三時串良村出発、大崎村入口ヘ参候処、賊ヨリ砲撃、下士官壱名即死、速ニ前衛隊撒兵ヲ布キ砲撃、預メ彼ノ地ニ賊台場ヲ築キ待受候由、昨日探偵ノ者申出候ニ付、第三中隊ヲ以左翼ニ迂回シ、第四中隊ヲ以右翼ニ迂回シ、一時間程戦ヒ候処、賊逃走、夫ヨリ尾撃候処、行衛不相知、又隊ヲ纏メ菱田村ヲ差進軍、菱田川端ニ至リ候処、又〻賊ヨリ砲撃ス、第一中隊ヲ以川ノ上流ヨリ迂回シ候処、賊軍敗レ二時間余リノ戦ヒナリ、此処ニテ賊ノ人夫召捕候処、彼ノ者申口ニ、伊東權平怪我致候由、是迄弥之事ト申、此地之賊軍五百名之炊出シ致居候由ナリ、賊ノ死人二十名余棄テ置、夫ヨリ尾撃、菱田村ヲ出抜ケ兵ニ食事ヲ為致、直ニ志布志(し)ヘ進軍、然ル処我隊ノ繰込ミ不申候内、賊志布志江火ヲ放チ、逃走ス、夫ヨリ防禦線ヲ取リ守備罷在候、
○本日之死傷都合六名ナリ、本日之景況大略申上候也、

七月一日　　上野大尉

黒木中佐殿

追テ志布志之土人壱人モ不居逃去リ、賊之行衛探偵ニ大困リ御座候、何レ明日得拝顔候ニ付、猶其節ト早〻頓首、

一午後十時十五分、芝大尉早駕ニテ本日独立大隊戦争ノ景況及ヒ我隊行進程度ノ義伺ノ為メ串良出発、鹿屋ニ至ル、然ルニ高島少将ハ本日高須着陣、明二日鹿屋ニ来ルノ由、依テ茨木中佐ニ托シ置キ帰ル、其節茨木(権照)中佐ヨリ来書、左ニ、
連日御配慮ト存候、当隊モ昨三十日午後五時高洲(須)着船、夫ヨリ新庄(城)、鹿屋江繰込、今朝当地江来ル、高隈江三中隊差遣候処、賊二百有余悉ク高隈ヲ捨テ引退キタリ、其他近傍ニ賊屯集ノ模様ナシ、別紙唯今本郷中尉ヲ以差立候間、同人直様其地江可罷越候処、都合有之明朝罷越候間、不取敢書翰而已差出申候也、

七月第一日　　茨木中佐

黒木中佐殿

一本日大崎ヘ分遣ノ第二大隊ノ二中隊ノ内、一中隊ヲ以菱田村ニ分遣ス、

(五月)
旧廿二日

七月二日　晴午後曇、夜ニ入細雨至ル　月曜　半夏生

一午後三時、予串良ヲ発シ、鹿屋本陣ニ至ル、午後第八時三十分過串良本部ニ帰ル、
　但シ少将(高島)ト軍議アリ、
一午前第五時、鹿屋ヨリ芝串良ニカヘル、
一垂水滞在ノ第二大隊ノ第二中隊、昨一日垂水出発、同日花岡ニ宿シ、本日午前花岡出発、午後第四時過串良ニ着陣、
一本日串良滞陣ニ付、第一ノ第四中隊ヲ以、要地ニ昨日ノ如ク哨兵ヲ配布ス、
一午後四時過、大崎ヨリ第二ノ副官安永中尉来リ泊ス、
一此夜賊ヨリ官軍ニ切込ミアリト云テ、土人等荷物ヲ他ヘ持出スモノアリ、
一夜半過賊我哨兵線ニ来リ、我兵二三発銃ヲ放ツニ賊去テ来ラス、
一夜中各中隊ヨリ巡邏アリ、

旧五月廿三日

七月三日　晴午前十一時頃曇午後一時過ヨリ時々細雨至ル　火曜

一本日モ串良滞陣ニ付、第一ノ第一中隊ヲ以、昨日ノ如ク哨兵ヲ配布ス、
一午前十時、第一ノ第三中隊、第二ノ第二中隊ヲ以、細山田ノ内下立野ニアル賊ヲ進撃セシム、
一正午十二時、第一ノ第二中隊ヨリ一半隊ヲ斥候トシテ、持留・茶ノ木ノ方ヘ差出ス、異情ナク午後六時三十分串良本部ニ帰ル、
一午前十時頃、高嶋少将(別働第一旅団司令長官)・岡澤中佐(同上参謀長)其他尉官数名随行、鹿屋ヨリ串良ニ来リ軍議アリ、午後一時三十分頃菱田・志布志等ニ至リ、夫ヨリ午後十一時過キ串良ニ帰リ、暫時休足シテ午後十二時過串良出発、鹿屋本陣ニカヘル、

旧五月廿四日

七月四日　晴　水曜

一本日モ串良滞陣ニ付、第一ノ第二中隊ヲ昨日ノ如ク哨兵配布ス、
一午後芝ヲ大崎・菱田等ヘ遣ス、同七時頃串良ニカヘル、
一第一大隊ノ内、一中隊ヲ草野村分遣可致旨該隊ヘ相達候事、
一串良ノ戸長等降伏ス、

旧五月廿五日

七月九日　晴　木曜

一午前五時、第一ノ第四中隊草野村ニ分遣ス、

一午前五時頃、芝大尉ヲ大崎並鍋村ヘ遣ス、午後五時三十分本部ニカヘル、

一第二ノ第三中隊ヲ鍋村ニ分遣セシム、

一午前八時過、山縣大尉ヲ草野村分遣所ニ遣ス、午後四時過カヘル、

一滞陣ニ付、第一ノ第一中隊ヲ以、哨兵ヲ配布スル、昨日ノ如シ、

一昨今賊降伏スル者八十六人、外ニ正副戸長ノ賊ニ脅迫セラレ組スル者二十余名降伏ス、仍テ右事情ヲ旅団長ニ報告ス、

但シ降伏人ハ各自宅ニ謹慎ヲ命シ置、

一第四旅団加治木ヲ乗取リ、降伏人二百卅余名有之、又本道三浦（梧楸、第二旅団長）少将・三好（重臣、第二旅団長）少将ノ両団モ加治木ニ突入、三団長会議云々、昨四日付ヲ以川村参軍ヨリ高嶋少将（野津鎮雄少将旅団長）ヘ申シ越ス、

但シ第一旅団都城ヘ進軍スルヤ否、景況至急報知スヘキ旨アリ、

一午後四時頃、井上少佐（光、第三大隊長）・西澤軍吏補（敬一、第三大隊会計官）大崎ヨリ来リ、同五時過大崎ニ帰ル、

一午後四時過、大島（遺義、第一大隊会計官）軍吏補草野村ニ至ル、

一明六日我隊諸口ヨリ進軍ノ命アリ、

旧五月廿六日

七月六日　曇（午後七時頃雨降）　金曜

一午前五時、第一ノ第一・第二中隊串良出発、草野・野上ノ両村ニ至リ宿陣、但シ各半隊ヅヽ、

一午前五時四十分、予等出発、午前八時四十分草野村ニ着、

一第一大隊第三・第四中隊、第二大隊第二中隊都合三中隊槻野（月野）ニ進軍ヲ命ス、

一第二大隊第一中隊ハ大崎滞陣、明七日槻野ヘ進軍可致旨相達ス、

一第二大隊第三中隊ハ鍋村滞陣、

一独立第一大隊ハ菱田（ひした）村滞陣（此日志布志ヘ巡邏差出スニ、賊一人モ見エザル旨報知アリ）

一明七日岩川ヘ進軍ノ旨各中隊ヘ相達ス、

一第一ノ第三・第四中隊、第二ノ第二中隊都合三中隊、午後第一時槻野ニ進軍スルヤ賊アリ、開戦一時甚劇戦、依テ鍋村ニアル第二ノ第三中隊ヲ阪井（重季）少佐引率、槻野ニ進入、夜半過ヨリ賊ノ砲声止ム、翌七日未明ヲ待チ

我軍ヨリ斥候ヲ出シ、賊ノ守衆ヲ探偵セシムルニ、賊退去シテ其踪跡詳ナラス、

但シ此戦争ニ我兵傷者九名、○賊即死九名、傷者三十四名ト云、（城ノ間諜ノ口供）

旧五月廿七日

七月七日　雨（午前十一時過ヨリ晴天）　土曜

一午前三時、中島少将、高嶋少将ヨリ伝令、第一旅団ニテ昨六日市成ヲ乗取リ、賊敗北スト、○又我二聯隊ハ、岩川近辺ヘ進入ト心得、槻野ニ来ルニ戦争中ニテ甚困却、漸ク我軍ノ大石大尉ノ処ニ来リ情実ヲ詳ニスルニ、賊ハ山上（地利アリ）ニアリ、我軍ハ山下ノ谷間ニテ地利甚宜シカラス、依テ必死ノ苦戦ナル旨ヲ報ス、

一午前四時過、阜野出立、予第一ノ第一・第二中隊ヲ引率シ、同九時二十分月野ニ進入スルニ、昨六日夜半過ヨリ賊ノ砲声止ミ、今朝ニ至リ賊ク一人モミヘス、依テ我兵要処〻〻ニ哨兵ヲ配布スルアリ、

一午前十一時過ヨリ諸哨処ニ至リ地利ヲ見ル、午後三時頃学校ニ帰ル、月野学校ナリ、之レヲ本部トス、

一午後四時過、伝令吉田大尉来リ、昨日以来ノ実況ヲ詳ニシテ、高隈ノ本陣ニカヘル、

一東京ヨリ五大隊豊後ニ差向ケラル、内二大隊ハ豊後ヘ到着スルト本陣ヘ報告アル由、吉田大尉ヨリ聞ク処ヲ記ス、

一土州ハ板垣ノ説諭ニヨリ無事ノ由、是又吉田大尉ヨリ聞ク、

一午前十一時頃、第一ノ第一中隊ヲ伊ヤ松（伊星松）村ニ分遣ス、

一午後六時頃、藤田少尉馬ニテ高隈ヨリ来リ、暫時ニシテ高隈ニカヘル、

一午前十一時頃、第二大隊ノ第三中隊鍋村ヘ分遣ス、

一午前四時、第二大隊第一中隊大崎出立、岩本ニ分遣セシム、

旧五月廿八日

七月八日　晴（午後六時過疎山ニ至ル）　月曜

一午前七時頃、高嶋少将ヨリ来翰、今未明出立、岡澤中佐ヲ差シ向ケル旨申越ス、

一午前七時過、芝大尉ヲ菱田滞陣ノ上野大尉ノ処ニ遣ス、

一午前九時頃、高隈ヨリ岡澤中佐来ル、中島少尉随行、

一午前十時頃、上野大尉ヨリ捕縛人弐名護送ス、

蓬原村平民　孫右衛門

賊ノ探偵トシテ線内ニ来ル者

同村平民　　新兵衛

探偵人孫右衛門ニ味方ノ情実ヲ告ケル者、此者過日迄賊ノ農兵ナリト云、

一午後一時岡澤中佐外随行ノ人月野ヲ発シ高隈ニカヘル、

一午後一時三十分、本田少尉、高隈本陣ヨリ伝令ニ、百(もも)引(びき)ヘ援兵ヲ二中隊差出スヘシト、依テ直ニ第一ノ第一中隊・第四中隊ヲ差出ス、

一左ノ図面ノ部署本陣ヨリ被達、依テ直ニ我隊ヲ各処ニ分遣ス、

一午後三時頃、串良ヨリ戸長共二名月野本部ニ来リ、賊情ヲ告ケテ同六時前カヘル、

一本日午前七時、賊市引(百引カ)ニ突入シ、官軍支ユル能ハス敗北、遂ニ賊ニ乗取レタリト報知アリ(但シ宗木中佐所在不分明ナリト云)

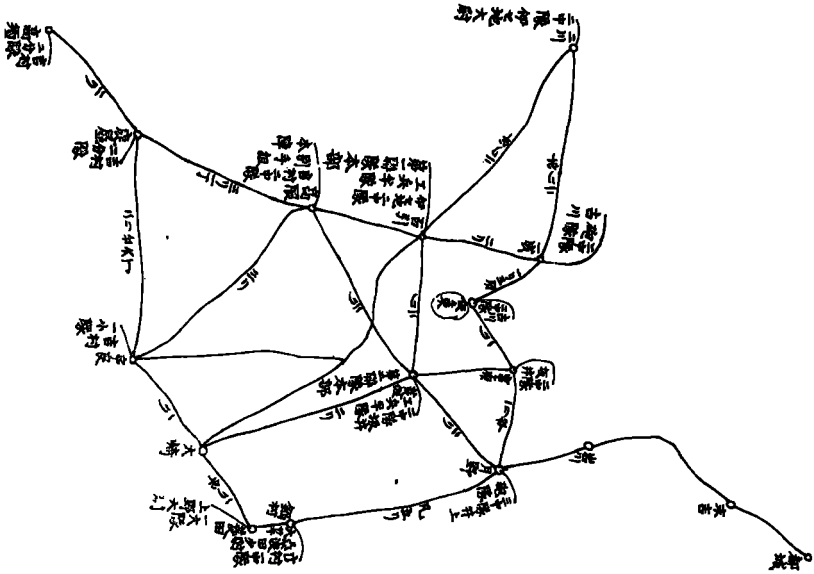
旧五月廿九日

七月九日　曇(午前六時迄疏雨、午後三時頃ヨリ雨降)　月曜

一午前三時過、宮ケ原阪井少佐ヨリ来書アリ、

書中ニ市引ノ景況(斎藤大尉一小隊ヲ引率斥候云々)

一午前八時過、高島少将ヨリ達書アリ、



書中ニ市引快復(快)ニ付、諸隊ヲ荒佐ニ移スベシ、上野ノ隊ハ先ツ其儘タルヘク云々、

一達ニヨリ、荒佐ニ諸隊転移可致旨相達候事、

一午前第十時頃、第二大隊月野村ヲ引揚、午後第二時頃荒佐村ニ着ス、予軍旗ヲ護シ同行、谷元少佐等モ同行、

一此日第一大隊ノ分遣隊モ荒佐村ニ転移ス、又第二大隊二中隊ヲ荒佐村ヨリ福岡村(大崎町)ニ分遣ス、

一午後四時頃、荒佐村ヲ発シ、予谷元氏ト高隈本陣ニ至ル、

一荒佐村・福岡村ニ我聯隊ヲ以哨兵ヲ配布ス、

一午後十一時過、予高隈本陣ヨリ阪井・井上両少佐ニ達書、荒佐村ニ着ス、

書中ニ此夜賊福岡ニ襲来ノ模様アリ、依テ第二ノ村井中尉ノ隊ヲ福岡ニ差出ベシ、尚荒佐モ厳戒アルベシトアリ、

一荒佐村中邑学校ヲ聯隊ノ本部トス、

一午後第一ノ第四中隊ヲ横内(大崎町)ヘ分遣セシム、

但シ荒佐去ル五合ト云、

一之レヨリ前、菱田村ニアル上野大尉ノ一大隊大崎ニ転移ス(午后三時卅分少将ヨリ、転移ノ達シアリト云)

旧五月卅日

七月十日　曇(午前十一時四十分ヨリ雨降)　火曜

一午前第三時過、井上少佐、村井中尉ノ隊ヲ引率シテ荒佐出発、福岡村ニ至ル、

一午前八時頃、大谷荒谷村(大隅町)五次右衛門賊情ヲ報シテ曰、左ニ、

一百引ノ賊ハ悉皆恒吉ヘ引揚、残賊園田正義ト云者一人、道ニ迷ヒ荒谷村ニ来リ、道案内ヲ乞フ、依テ太郎ト云者之レヲ恒吉ノ並木迄導ク、

一末吉ノ内深川ヨリモ恒吉ヘ賊集合スルト云、

一賊ヨリ進撃スルハ不利、依テ官軍ノ来ルヲ待ツト云、

一右同刻百引敗軍ノ時、賊ノ俘虜トナル近衛砲兵人夫熊本県ノ者、

西川　庄吉
上山　直吉

右二名賊ノスキマヲ見合セ、昨九日遁レテ我軍ニカヘリ報ス、

一賊ニ使役セラレ、終夜諸荷物ヲ運送ス(但シ荷物ハ百引ヨリ三里半計ヲ去、川原ヘ運フ、ト云)

一賊ハ凡千人計之レアリ、

一賊私ヘ云、能ク働ケハ刀ヲ渡スト、
一賊ノ人夫ハ悉ク刀ヲ帯シタリ、
一賊ノ銃ヲ持ツモノハ十七八才ノ者計ナリト云、
一右同刻人夫二名百引敗軍ノ時、終日山ニ籠リ潜伏シ帰リ来ル、賊情不分明ナリ、
一午前九時過、予谷元等ト高隈本陣ヨリ荒佐村ニカヘル、
一午前十一時過、荒谷村百姓　上荒　平右衛門
一右ノ者賊情ヲ報シテ曰、
一大崎ノ百姓高崎ヘ賊ノ人夫ニ出ル者、昨夜十二時頃荒谷村ニ遁レ帰リテ曰、官軍上庄内ニ攻メ入リ、賊敗走シテ都ノ城ニ入ルト云、
一賊末吉ニハ僅少ノ由ナリ、
一賊岩川ニハ哨兵計リナリ、其余ハ皆恒吉ニ屯集ナリト云（此賊凡五千人計、之レハ岩川土人ノ説ナリ）、
一市成ニハ賊一人モ無之由ナリ、
一午後一時十分、和田大尉荒佐ヲ発シ、大崎ニ遣ス、
一午後頓野大尉・清水中尉来リ、暫時シテカヘル、
一午前九時過、荒佐出立シテ、芝大尉ヲ高隈本陣ニ遣ス、
午後二時過荒佐ニカヘル（此時茨木中佐本陣ニカヘル、同人ノ隊モカヘル、同人ハ軽傷、会計田所某賊ノ俘トナル、砲兵山県大尉行衛未タ不分明、其他死傷多数アリト云）、
一午後二時頃、阪井少佐高隈ニ至リ、同七時荒佐ニカヘル、
一午後五時頃、山縣大尉荒佐ニ来ル、
一昨日ノ如ク要地ニ哨兵ヲ配布ス、
但シ胸壁ヲ処々ニツクル、
一本日ヨリ旗号・喇叭暗号改正、左ノ通被達、
旗号（半ノ日赤　丁ノ日白）
問　直立頭上ニテ〇形
答　横一文字
喇叭暗号
問　止レ（ト、タン　ト、タン）
答　打方止メ（ピテ、ピテ、ピテ、ピテ、ピテ、ピテ、）
一　荒佐村　六日ヨリ雇　田原武右衛門
本日探偵人　七日ヨリ雇　喜助　助次郎
右之者ニ雇賃ヲ渡ス、武右衛門ヘハ別ニ金壱円（マヽ）ヘ遣ス、
一夜半頃賊ガンドウヲ照シ、線外ニ来ルト田上少尉試補ヨリ報ス、

旧六月二日

七月十一日　曇時々驟雨　水曜

一午前第四時頃、荒谷村百姓某来リ、多人数大崎並荒佐野向ケ来ル旨報知アリ、

一午前第四時三十分、賊荒佐野東北ノ方ヨリ、凡五六百名襲来、我第一大隊第一・第二・第三中隊各吶兵ヲ厳戒ヲ加ヘ俟チ受ケ、遂ニ午前第六時開戦、我怒気大劇戦賊大敗、死体ヲ十五六名ヲ捨テ走ル、我兵大勝利、時午前十時ナリ、我兵此時ノ死傷三十六名内即死五名、

○午前九時ノ第二ノ第二中隊ハ吶兵トシテ来ル

一開戦ノ頃、山縣大尉ヲ以高隈本陣ニ賊情ヲ上申ス、

一戦争中事情ヲ書シ、兵卒ヲ以テ本陣ニ上申ス、

一又、安永中尉ヲ以戦争ノ事ヲ本陣ニ上申ス、

一今朝大崎ヘモ賊襲来、戦争アリ勝敗決セス、

一午前十一時過、第一ノ第一中隊ヲ持留（大崎町）ニ分遣ス、

一同十一時過、第二ノ第二中隊ヲ大崎ヘ援兵トシテ差遣ス、

一午前岡澤中佐来リ、戦争事情ヲ詳ニシテ午後高隈ニカヘル、

一午後五時頃、荒谷村百姓某来リ、武右衛門ヲ以報シテ曰、賊又多人数当荒佐野ニ向ケ来ルト云、

一午後伊勢地大尉来リ、暫時軍議シテカヘル、

一午後五時頃、谷元氏本陣ニ至ル、

一午後四時頃、横内分遣ノ第一大隊ノ第四中隊荒佐野村ニ引揚カヘル、

一本日左ノ通高嶋少将ヨリ被達、

三浦少将旅団ハ現ニ大窪村・田口村辺ヲ昨日攻撃、其地ヲ占メ、亦警視隊別働第三旅団（川路少将増京後大山巌少将増攫）ハ、三浦ノ右翼ヨリ襲山之方（そのやま）ヘ線ヲ取リ、前面ノ賊ヲ追攘ヒ、又曽我少将（第四旅団）ノ旅団ハ清水（きよみず）ヨリ右ヘ、国府（こくぶ）ヲ経テ海辺迄線ヲ占メ居候ニ付、本日各旅団共一斉ニ都城ヲ指シテ進撃ノ部署ニ有之候、尤大窪ノ敗賊大概圧内・財部ヲ望ンテ退去セシ趣ナリ、仍テ今一層ヲ進メハ直ニ財部ヲ衝クモ容易ナルヘク、尤モ敷根・福山ノ方ヘ連絡ヲ取リ可進候手順ニ付、両三日ノ内ニハ三旅団共必ス前面ニ可相進候、尤圧内ヨリ二里程手前ヘ相進居候儀ニ有之候、此段申入候也、

大山少将

七月九日

一午後八時過、福岡分遣ノ第二ノ第三中隊ヲ荒佐野村ニ引揚ル、

一百引敗軍後今日迄取纒ノ砲兵人員堀田軍吏補以下四拾名、荒佐野在陣ノ砲兵ヘ人員受取ノ上引渡スベク、本陣ヨリ達書アリ、

旧六月二日

七月十二日　曇時〻驟雨　木曜

一午前一時半、串良ヨリ三宅少尉来リ報ス、大崎ハ賊ニ囲マレ居ル、我第二中隊地利ヲシラス、且又沖原大尉ニ出会ノ処、夜中致方モナシ、依テ沖原ノ隊モ我第二中隊モ串良ニ今夜宿陣イタシ、未明海手ヨリ賊ヲ撃ツノ部署ヲ定ム、シカルニ今持留ニアル第一ノ第一中隊ヲ以、同時大崎ノ本道ヨリ攻撃スレハ、必ス賊ハ敗走スベシ、依テ第一ノ第一中隊ヲ差出シアランコトヲ乞フ、〇三宅ハ弾薬運輸兵ト午前、第二時過串良ニカヘル

一午前第三時頃、第一大隊下副官吉松某ヲ以持留ニ遣シ、第一ノ第一中隊ヲ本道ヨリ大崎ニ進入シテ、賊ヲ撃タシム、〇吉松ハ午前七時頃荒佐本部ニカヘリ、斎藤大尉命ヲ拝シ、直ニ大崎ニ趣ク旨ヲ予ニ告クル、又大川大尉ノ隊モ持留ニアリ、同行ト云

一午前七時過、第二ノ第三中隊ノ内一小隊半渡邊大尉引率、荒佐野村出発持留村ニ遣ス、

一午前第十時頃、第二大隊第二中隊給養掛小原軍曹ヨリ、今午前二時三十分大崎村ヘ至ルニ、官軍モ賊徒モヲラス土人モ居ラス、依テ同第三時持留村ニ帰リ、第一ノ第一中隊ニ聞クハ、大崎ノ官軍悉ク昨午後第十時串良ヘ引揚ケ、午前第二時ヨリ再ヒ串良ヨリ大崎ヘ進撃ノ手筈ナリト聞ク、〇食事ハ第一ノ第一中隊ニ依頼ス、猶悉敷事ハ中隊長ヘ面会ノ上報知スルト、木村曹長ニ報知アリ、

一午前十時過、荒佐野ヲ発シ、山縣大尉持留ニ行ク、午後二時頃カヘル、

一正午十二時過、第一ノ第二中隊ノ内ヨリ佐土原辺（曽於郡大崎町）ヘ斥候ヲ出ス、

一午前十時過、井上少佐ヲ高隈本陣ニ遣ス、午後三時過荒佐本部ニカヘル、

一午後二時過、高隈ヨリ本田少尉来ル、

　但シ少将ノ書翰持参、

一午後一時過、持留村ニアル渡邊大尉ヨリ来書ニ曰、今朝齋藤大尉・大川大尉等各一中隊ツヽ引率、大崎ニ向ケ出発ノ途中、今田村（持留ヨリ三十丁余）行ニ賊三百名計アリ、開戦今ニ砲声アリ、土人云、跡ヨリ賊徒増加スル由ト云、依テ我第二ノ第三中隊ヨリ斥候ヲ出スニ、持留ヲ去ル二十丁計ニシテ賊アリ、一二分隊程散布アリ、発射ス、

依テ我兵僅カニ応シテ持留ニカヘル、○又大崎上野ノ隊・村井ノ隊其所在不詳、○我隊ハ串良ニ向ケ進軍シテヨロシキヤ、大崎街道ヲ進軍シテヨロシキヤ、至急御指揮ヲ乞フ、

一午後三時過、本田少尉ニ土人探偵書並渡邊大尉ノ報告書等ヲ持セ、高隈本陣ニカヘス、

一午後二時頃、持留ニアル第二ノ第三中隊ヲ荒佐ヘ引揚グベキ旨渡邊大尉ニ相達ス、

一午前十時頃、遊撃別手組一小隊当荒佐野ニ来ル、午後五時半荒佐ヲ発シ高隈ニカヘル、

　但シ云〻アリ、

一午後五時三十分、荒佐ヘ引揚クベキ旨相達置候処、至急高隈本陣ヘ引揚クベキ旨、更ニ渡邊大尉ニ相達ス、

一諸隊高隈ヘ繰上ケノ旨本陣ヨリ被達、

一午後五時半、上野・大川・齋藤大尉、村井中尉ヘ賊追払ハス共、今夜陰ニ乗シ高隈ヘ繰上ケ可致旨相達ス、

　但シ串良ニ各中隊在陣也、

一午後五時半、土屋大尉来ル、

一午後七時頃ヨリ荒佐野在陣第一ノ第二・第三中隊、第二ノ第一中隊順次出発、高隈ニ繰上ケル総員ノ着、夜二時二十分ナリ、○予等高隈ニ着スル時夜十一時過也、

一午後六時過、第二ノ第三中隊持留村ヲ発シ、夜第十一時頃高隈ニ着、援隊トナル、第一ノ第二中隊モ早着ニ付援隊トナル、

一高隈士族小野田源右衛門方ヲ聯隊本部トス、

一本日午前六時三十分、持留村ヲ発シ、第一ノ第一中隊並大川大尉ノ隊ト共ニ大崎ニ進軍スルニ、大崎ノ麓ニ賊アリ戦争ス、一時賊ヲ撃ツト雖、大川大尉ノ隊ハ中途ヨリ戦ハスシテ引去ル、故ニ我兵孤立、賊ハ多数ニシテ我兵支ユルコト能ハス、遂ニ我兵ヲ串良ニ引揚ケタリト云、此トキ我兵死傷十六名内即死四名死生不明二名重傷五名此内二名死体ヲ引揚ケス軽傷五名

旧六月三日

七月十三日　晴　金曜

一本日未明第一ノ第一中隊、第二ノ第二中隊串良ヲ出発、午前第十時高隈ニ着ス、

一本日第一ノ第三第四中隊、第二ノ第一中隊高隈ノ要地ニ哨兵ヲ配布ス、

一第一ノ第二中隊垂水ニ分遣ス、高隈ヨリ行程五リ、

一暗号之儀ニ付、別紙之通リ、総督本営ヨリ御達相成候

条、為心得此旨相達候也、

七月十一日　　在鹿児島
　　参軍本営

在高隈
　　高島少将殿

暗号之儀ハ、是迄其地ト道路梗塞致居候間、御廻不申候処、先般已ニ連絡相成候上ハ、毎週暗号従是御廻可申、則米ル十五日ヨリ一週間分別紙之通相定候条、各旅団へも御達有之度、此段申入候也、

七月八日　　征討総督本営
　　川村参軍殿

七月十五日ヨリ同廿一日迄一週間
　　暗号表

問号	答号
時政トキマサ	鳥取トツトリ
正行マサツラ	松江マツエ
嗣信ツキノブ	津山
龍興タツヲキ	龍野
藤孝フジタカ	福山
嘉明ヨシアキラ	米子
秀長ヒテナガ	姫路

一本日巡査隊百十余名高隈ニ着陣ス、

一本日曽我少将ノ隊福山ヲ乗取リ、昨今財部ヘ進撃ノ旨ヲ二川ニアル古川少佐ノ処ヘ報知アリト云、

旧六月四日

七月十四日　晴（午後九時頃ヨリ風雨）　土曜

一午前第二時、第二ノ第二中隊高隈出発、荒佐野ニ遣シ、

一昨十二日残シ置米四十俵ヲ運送セシム、午前十時右米護シテ高隈ニカヘル、

一本日第一大隊ヨリ一中隊、第二大隊二中隊ヲ以、昨日ノ如ク哨兵ヲ配布ス、

旧六月五日

七月十五日　曇風（午前七時頃迄雨降）　日曜

一正午十二時、垂水分遣ノ第一ノ第二中隊高隈ニカヘル、

一本日第一大隊ヨリ二中隊、第二大隊ヨリ一中隊ヲ以、昨日ノ如ク哨兵ヲ配布ス、

一二川ヨリ古川少佐第一聯隊ノ第一大隊ヲ引率シ高隈ニカヘル、

一谷元氏鹿児島ヨリカヘル、

一午後六時過ヨリ雨降ル、

旧六月六日

七月十六日　雨　月曜

一午前六時頃、第一ノ第一第二中隊高隈出発、斥候トシテ串良ヘ遣ス、午後第二時半頃帰リ、異情ナキ旨ヲ報ス、

一本日第一大隊ヨリ二中隊、第二大隊ヨリ一中隊哨兵ヲ配布スル昨日ノ如シ、

旧六月七日

七月十七日　曇風夜ニ入雨降　火曜

一午前四時頃、高隈ヲ出発、第一聯隊ハ恒吉（つねよし）、独立第二大隊ハ宮ケ原ニ進軍ノ筈ニ部署相定マリ居ル処、荒佐野ニ賊二千計屯集ノ由、探偵ノ者ヨリ報知アリ、依テ進軍ヲ見合セニナル、

一本日第一大隊ヨリ一中隊、第二大隊ヨリ二中隊ヲ以、昨日ノ如ク哨兵ヲ配布ス、

旧六月八日

七月十八日　曇　水曜

一午前四時過、高隈ヲ発シ、第一聯隊恒吉ニ、独立第二大隊宮ケ原ニ進軍ス、

一昨今ニ降伏ノ者十人余アリト云、

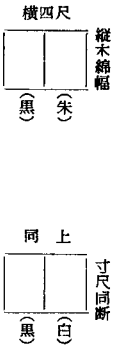
一記号・喇叭暗号左之通、明十九日ヨリ改正ノ旨被達、

記号

問　輪形ヲ以テシ、

答　ルモ輪形ヲ以テス、

丁ノ日　赤黒
半ノ日　白黒　図ノ如シ



喇叭暗号

問　ガルダボー譜

答　ラツベル

一明十九日高隈出発、市成（いちなり）ヘ進軍ノ命アリ、

一此日第一大隊ヨリ二中隊、第二大隊ヨリ一中隊ヲ以、哨兵ヲ配布スル昨日ノ如シ、

旧六月九日

七月十九日　晴　木曜

一午前第四時頃ヨリ我二聯隊高隈ヲ順次出発、同十時市成郷ニ着陣、士族佐々木丈右衛門方ヲ聯隊本部トス、

一午前第五時過、別働第一旅団本陣モ高隈ヲ出発シ、午前第十時市成郷ニ着陣ス、

一第一大隊第二大隊ヲ以、要地ニ哨兵ヲ配布ス、

旧六月十日

七月廿日　晴　金曜

一午前六時過、市成出発シテ、第一大隊ノ第三中隊ヲ通山辺ヘ斥候トシテ差出ス、午後第三時頃市成ニ帰ル（昨日陣ケ岡ヨリ第四旅団別第三旅団ノ兵進軍ス、賊敗走スト云）

一此日哨兵ヲ配布スル昨日ノ如シ、

一此日午後二時頃、丸亀信書来ル、

旧六月十一日

七月廿一日　晴　土曜

一明廿二日払暁、当陣恒吉ヘ転移候条、其隊之義モ同刻引揚可申、此旨相達候也、

十年七月廿一日　高嶋少将

黒木中佐殿

一明廿一日ヨリ之暗号左之通候条、此旨相達候事、

七月廿一日　高嶋少将

問号　答号

廿二　道眞ミチザネ　壬生

廿三　国香クニカ　久保田

廿四　顕信アキノブ　会津

廿五　義平ヨシヒラ　米澤

廿六　重忠シゲタダ　白川

廿七　高徳タカノリ　棚倉

廿八　光政ミツマサ　三春

一哨兵配布スル昨日ノ如シ、

一午後降伏人十余名アリ、

旧六月十二日

七月廿二日　晴（午後三時頃ヨリ暫時夕立雨雷鳴涼風）　日曜

一午前第五時、我聯隊市成ヲ出発、午前八時恒吉ニ着陣、士族堀切佐左衛門方ヲ聯隊本部トス、

一別働第一旅団本陣モ同時恒吉ニ転陣ス、

一第一第二大隊ヲ以、要地ニ哨兵ヲ配布ス（恒吉郷ハ山間ニアリ、依テ山上・山下ニ哨兵ヲ配布スル地面甚広大也、）

一明廿三日岩川ヘ進軍ノ命アリ、

（彰七）

一東伏見少将新撰隊ヲ引率、鹿児島港ニ着艦、夫ヨリ都ノ城ニ向ケ進軍ノ由、報知アリト云、

一是ヨリ先月野戦争ニテ、賊ノ即死スル者恒吉並末吉埋葬スルト土人云ヘリ、

旧六月十三日

七月廿三日　曇蒸（午前十一時後暫時夕立雷鳴夜ニ入雨降）　月曜

一午前五時過、第一旅団本陣、我聯隊並砲工兵共岩川ニ転陣ス、
一午前第三時頃、末吉ノ方ニ当リ、砲声ヲ恒吉ニテ聞ク、
一今朝岩川別ノ第一聯隊哨兵線、鍋村第四旅団哨兵線ニ賊襲来戦争、午後第三時賊敗走、官兵勝利、
一明廿四日午前第二時三十分岩川整列、
一岩川警備トシテ、沖原ノ一中隊半ヲ残スヘシ、
一末吉ヲ略シタル後ハ、砲廠部糧食課繃帯所ヲ爰ニ移シ、警備トシテ茨木中佐（催肥）ノ一大隊ヲ残スヘシ、
一都城ヲ略シタル後ハ、諸隊前後久村ト安久村（やつさ）ノ間ニ集合スヘシ、

末吉攻撃ノ部署

右翼　一大隊「長、吉村少佐（守廉）」岩崎村ヨリ手嶋村ヲ経、橋野要地ニテ位地ヲ占ム、
中央　二大隊半「長、黒木中佐」（上野ノ二中隊）五十丁村ヨリ、直ニ大園ヲ経テ末吉ニ到ル、
左翼　二大隊並別手組「長、茨木中佐」砲兵本道鍋村及ヒ牧野ヲ経テ末吉ニ到ル、

末吉ヨリ都城進撃ノ部署

右翼　一大隊半（長、吉村少佐）橋野ヨリ間道ヲ常福寺村及益貫村ヨリ安久村ヲ経テ都城攻撃、
中央　二大隊半（長、黒木中佐）（上野ノ二中隊）砲兵橋村ヨリ内留・梅北ヲ経テ都城ニ到ル、
左翼　一大隊並別手組（長、茨木中佐）本道有里東五十丁村ヨリ都城ニ到ル、
一喇叭暗号・記号左之通リ改正之趣被達、

喇叭暗号

問　剣付ケ　　答　前ヘ
　　旗号
問　半円　　答　上下鉛直線

一午後八時頃ヨリ徹夜雨降、

旧六月十四日

七月廿四日　雨時々而ノ止コトモアリ　火曜

一昨日部署達ノ如ク別働第一旅団ノ兵、悉ク末吉ニ進撃、賊敗走シテ末吉ヲ略スル、午前七時三十分又部署之如ク都城ニ向ケ進撃、賊又敗走、正午十二時都城ニ攻メ入ル、此日別ノ巡査隊・第三旅団・第四旅団・第三旅団新撰隊等モ諸向ヨリ攻撃、正午十二時前後都城ニ攻メ入ル、賊敗レテ水俣（ミマタ）（三俣）ニ走ル、夫ヨリ別ノ第一旅団ハ悉

皆末吉ニ引揚宿陣ス、官兵ニ死傷アリ、賊死体ヲ捨ツル者現ニ見処二十余名アリ、

一又第四旅団ニ降伏人モアリト云、

一過日百引・大崎ニテ、我兵ノ賊ノ為メニ俘虜トナル者佐山軍曹・看病人某等、賊ミマタニ走ルトキ、岡ニ潜居シテ都城ニテ我軍ニ帰ル、

一此日我第二聯隊ハ末吉ヲ略シ、直ニ東南谷間ノ小川ヲ越シ、日向国（当時大隅ノ国ニ属ス）青木ケ原（此処ニ青木神社アリ旧跡也）ニ兵ヲ繹メ夫ヨリ梅北（西南ニ当リ山アリ剣ケ峯ト云古戦場）ニ至リ、九時頃暫時休足、夫ヨリ都城ニ進撃ス、

一青木ケ原ヨリ西南ニ当リ住吉社アリ、旧跡ニテ俳優ノ三番叟ニ云、日向ヨリ小戸ノ青木ケ原ナリ（鵜戸ハ此処ヨリ十里ヲ去ル）

一都城ニテ諸団長始予等軍議ヲナス、午後九時過末吉ニ着、

此日山縣参軍都城来リ軍議ス、

旧六月十五日

七月廿五日　雨（時々晴ルコトモアリ）　水曜

一兼テ相達置候旗号問答之儀、左之通改正相成候条、此旨及回達候也、

十年七月廿五日

旗号

問　答

大輪ヲ以テスレハ　竪一文字

一来ル廿九日ヨリ八月四日ニ至ル暗号、左ノ通被定候条、此旨相達候也、

七月廿九日ヨリ八月四日ニ至ル暗号

問号	答号
廿九　広元ヒロモト	日向
卅　範頼ノリヨリ	延岡
卅一　実朝サネトモ	薩摩
一日　勝頼カツヨリ	鹿児島
二日　親光チカミツ	筑前
三日　藤房フジフサ	福岡
四日　晴信ハルノブ	博多

前書之通、

一今朝都城ヨリ各旅団、宮崎ニ向ケ諸道ヨリ進軍ス、

但シ進撃ノ道ハ、別ノ第三旅団ハカジ（梶）山口並支道、第四旅団ハ山ノ口通リ、第三旅団ハタカジ（高城）ヤウ通リ、

一別働第一旅団ハ志布志海道ヨリ二手ニ分チ、飫肥（おび）ニ向ケ進軍、明廿六日末吉ヲ出発ノ命アリ（独立第二大隊ヲ吉村少佐引率ンテ、本日末吉

ヲ発ン、松山ニ至リ宿陣ス、独立第一大隊ハ沖原、大尉引率ンテ、本日末吉ヲ発ン、岩川ニ宿陣ス

旧六月十六日

七月廿六日　晴　木曜

一午前第五時整列、末吉ヲ出発、同十一時過井崎田村ニ着陣ス此日宿割トシテ、芝・真鍋先発

一農南田喜總太方ヲ聯隊本部トス、同家ニ賊ノ米二十四俵ヲ預リヲル、其外ニ同村ノ者賊糧米ヲ二百十俵預リヲル、都テ二百三十四俵アリ、之ヲ分捕ス、

一要地ニ哨兵ヲ配置ス、

一此日第二ノ第三中隊ヲ末吉ニ輜重衛兵トシテ滞陣セシム、

旧六月十七日

七月廿七日　晴　金曜

一午前第五時、井崎田村ヲ順次出発、同十時頃志布志府下ニ着陣、士族田中國助方ヲ聯隊本部トス此日宿割トシテ、久宗中尉前発

一要地ニ哨兵ヲ配布ス、

一此日第一聯隊並独立第二大隊内ノ藏・松山等ヨリ出発、福島ニ着陣スルニ賊ハミヘス、土人ニ問フニ、外ノ浦・飫肥ヲ差シテ遁逃スト云、依テ右ノ旨本陣ニ報知アリ、

旧六月十八日

七月廿八日　晴夜ニ入リ曇　土曜

一志布志滞陣ス、

一我第一ノ第一中隊ノ内一小隊ヲ大崎ニ巡邏、且戦死等ノ者取片付トシテ差遣ス戦死ノ者墓碑等ヲ土人ニ頼ミ置、午後六時過志布志ニカヘル、

一独立第一大隊ノ内一中隊ヲ安樂村ニ巡邏トシテ差遣ス午後異情ナ、クカヘル

一大崎ノ者、高山ノ者両人我第一ノ第一中隊ニ降伏ス、直ニ本陣ニ送ル、

一午前第十時頃、我第二ノ第三中隊、当志布志府下ニ着陣ス、

一哨兵ヲ配布スル、昨日ノ如シ、

一飫肥ハ別ノ第三旅団ニテ乗取ル旨、茨木中佐ヨリ報知アリ、

一軍艦一艘志布志沖ニ来リ投錨ス、

一午後第三時過、新城者士族岩本岩吉、別ノ第三旅団ヘ飫肥ニテ降伏シ通券持参、聯隊本部ニ来ル、依テ直ニ本陣ニ遣ル、

旧六月十九日

七月廿九日　曇半晴半雨　日曜

一早天独立第一大隊当志布志出発、福島ニ進軍ス、

一本日モ我聯隊並本陣等志布志滞陣、
一哨兵配布昨日ノ如シ（但シ独立隊進軍ニ付同隊ノ哨所ヲ我隊ニテ持之）、
一午前軍艦一艘志布志沖ニ来リ投錨ス、午後六時過一艘出艦ス、
一明三十日我聯隊福島ニ向ケ進軍ノ命アリ、
一此日飫肥ノ戸長本陣ニ来リ、早ク官軍ノ繰込ヲ願フ、飫肥ニアル賊ハ悉ク宮崎ヲ差シテ走ルト云、人数五百名、

旧六月二十日

七月卅日　晴（午前六時頃迄曇）　月曜

一午前第五時、志布志ヲ出発、同十時福島（元高鍋領ニテ海浜也）ニ着陣（但シ志布志ヨリ福島ニ至ル里程三リ、山道ナリ）、
一福島今町ノ内字上エ町平民商林彌平次方ヲ聯隊本部トス、此裏ノ沖ニ賊鉄ヲ数十俵埋匿アリ、土人報告ニ依リ官有トナル、
一明卅一日外浦ヘ進軍之命アリ、
一要地ニ哨兵ヲ配布ス（第二ノ第二中隊）、
一此処ニ賊ノ米千三百俵余アリ、官有トナル、外ニ数百俵ノ米アリ、之レハ前ニ鹿児島人佐土原ニテ買入タル由、処有人不分明、
一此処ニ賊ノ製造スル金札ヲ多数（数千金）所持スル者アリ、憐ムヘシ、
　但シ売物代金ニ受取ト云、若シ此札受取サレハ切害ト云、実ニ憎ムヘシ、
一此地富家多シ、
一高島旅団長此日軍艦ニテ外浦ニ至リ、夫ヨリ直ニ油ノ津ニ至リ本陣ヲ占ム、依テ我聯隊並砲工兵トモ飫肥ニ向ケ進軍スヘキ旨再命アリ、

旧六月廿一日

七月卅一日　晴　火曜

一午前第三時ヨリ順次福島出発、同十時頃外浦（旧飫肥領也）ニ着陣、安藤熊三郎方ヲ聯隊ノ本部トス、本日ノ行程五リ、山坂ニテ道アシ（商安藤氏ハ当処第一ノ富家ニシテ、大船ヲ持チ又杉山ヲ多数所持ス、）
一此日宿割トシテ、芝・眞鍋午前一時前福島ヲ発シ、同六時過キ外浦ニ着ス、
一第一ノ第三中隊ハ此日福島ニ滞陣ス、
一福島ヨリ外浦ニ至ル里程五リ、山道ニシテ登リ下リ多ク、加ルニ道甚ヨロシカラス、
一要処ニ哨兵ヲ配置ス、
一今朝団長高嶋少将飫肥ヘ被赴候旨、岡澤中佐油ノ津ヨ

リ報知アリ（時午後六時三十分過）、
一之レヨリ先キ賊此ノ外浦ニ台場ヲ築キ、厳ニ守備シタルヲ、軍艦来リ砲撃スルニ、賊支ユル能ハス、飫肥ヲ差シテ走レルト土人ノ説アリ（此時賊即死スルモノ五人アリト云）、

旧六月廿二日

八月一日　晴　水曜

一午前第三時、我隊其外砲工隊順次外浦ヲ出発、同八時総員飫肥ニ着陣ス、士族平部嶠南方ヲ聯隊本部トス、本日ノ行程四リ、山間平坦ニテ道ヨシ（此日宿割トシテ夜十二時久宗・真鍋先発ス）、
一此処旧城内ニテ賊大砲ヲ鋳造ス、
一去ル廿六七日頃別ノ第三旅団（大山）・第四旅団（曽我）ト連絡ヲトリ、木田野・田野・庵屋・細江ト云処ノ間、哨兵守備セル処ヘ賊襲来劇戦、両団甚苦戦、シカルニ程能ク持直シヨル処ヘ、両団ヨリ二大隊ノ援兵至ル故ニ、勢ヲ得テ賊ヲ撃ツ、賊支ユル能ハスシテ走シル、両団ノ兵之ヲ尾撃シテ今泉・清武ニ至ル（此道里数四リ程ト云）、
一報知書ノ写シ、
昨日吹毛井（ふけい）ヨリ報知致置候通、本日両隊共午前ニ夫〻到着異条ナシ、然ルニ昨日宮崎ヨリ帰リタル者ノ噺ニ、昨日払暁官軍赤江川（大淀川）ヲ渉リ宮崎ヲ衝突、賊廣崎ニ退去セシ由、因テ官軍本営ヲ元県庁ニ移シタル由、吉村少佐ヨリ唯今報告致越、又途中及前面地方ノ土人及昨日吹毛井ヨリ差出タル探偵人等ノ説ヲ考合スルニ、多分相違ハ無之、一説ニハ赤江川ヲ渉ルコト難キヲ以テ、上流（カシハダ）ト云処ヲ渉リ大挙進撃スルニ、賊不居全ク空虚ナリト云、賊ハ佐土原ヲサシテ退去シタリト、
右等ノ情形ナレトモ、兼テ御下令之如ク、明日ハ吉村隊ヲ城崎ニ、古川ヲ赤江（聯隊モ同行）、伊勢地ヲ木崎ニ進軍セシムル筈ニ付此旨御承知、其後進地之義モ佐土原ニ向テ進軍ト相心得可然哉、伺旁前情申進候也、

内海（うちうみ）在陣　　茨木中佐

八月一日

飫肥本陣

高嶋少将殿

右茨木氏ノ報告書、当夜中後ニ本陣ヨリ到来、
一是ヨリ先キ当飫肥ノ賊五百名余、別働第二旅団ニ降伏ス、残賊ヘハ降伏人ノ内ヨリ手ヲ賊地ニ廻シ、早ク降伏ノ手順ニ相運フ様子ナリ、
一要地ニ哨兵ヲ配布ス（但シ両隊ヨリ一中隊ノ、）

旧六月廿三日

八月二日　晴（午前第五時瞬時微雨至ル）　木曜

一午前第九時過キ、第一ノ第三中隊飫肥ニ着陣ス（但ノ今払暁外浦出発ス）、

一本日午後第三時、本陣始我聯隊並砲工隊共飫肥ヲ出発、油ノ津エ転移ノ旨被達候処、都合有之、本日ハ我第二大隊丈出発可致、其他本部等ハ明三日当地出発転移之旨再ヒ被達、

一午後第三時、第二大隊当飫肥ヲ出発、油ノ津ヘ転移ス、

一此日佐土原ノ方ヨリ帰ル土人ノ説ニ、佐土原ハ官軍ノ有トナリ、宮崎近傍ハ官軍充満スルト云、

右午後八時過高嶋少将本部ニ来リ談スル儘ヲ記ス、

一要地ニ哨兵ヲ配布スル昨日ノ如シ（但ノ第一大隊ヨリ二中隊ヲ出ス）、

一本日飫肥帯陣、

旧六月廿四日

八月三日　晴（午後八時頃ヨリ曇）　金曜

一午前第四時ヨリ我隊並団長等順次飫肥出発、同七時二十分油ノ津ニ着陣ス（但飫肥ヨリ油ノ津ニ至ル行程二リ、山間平坦ノ道ナリ）、

一平民兒玉長一郎方ヲ聯隊本部トス、

一我第二大隊並砲工隊共、蒸気青龍丸・全濟丸ニテ内海ニ至リ上陸、直ニ折生迫（おりゆうざこ）ニ至宿陣ス、

一会計官畠山以下付属等荷物ヲ護シ、鰹舟（松魚）数艘ニテ内海ニ至リ、夫ヨリ直ニ折生迫ニ至宿陣ス、

一明四日午前第三時、我第一大隊並聯隊付、大隊付、青龍丸・全濟丸ニ乗組、内海ニ至リ上陸云々被達、

一午後第八時前、高嶋少将・和田大尉等本部ニ来リ、暫時談シアリテカヘル、

一午後十二時、高嶋少将並属官等ト油ノ津出発、宮崎本営ニ至ル、

一要地哨兵ヲ配布ス、

一是ヨリ先川村参軍、宮崎本営来ルト云、

一昨二日茨木中佐ヨリ報告ニ、官軍佐土原・高鍋等ニ進撃、佐土原ニハ砲声アリ兵火燃ヘ上ル、依テ多分官軍ノ有タラント云、

旧六月廿五日

八月四日　雨風　土曜

一午前第二時頃、天気都合ニ依リ乗船難出来、依テ油ノ津ヨリ陸地出発、折生迫ニ進軍スヘキ旨達書来ル、

一午前第三時ヨリ我第一大隊並予等順次油ノ津ヲ出発、海手街道ヨリ午後第三時五十分内海ニ着陣ス、農日高

重五郎方ヲ聯隊本部トス、但シ油ノ津ヨリ五十丁道三リ、吹毛井ト云処ニテ休足、此処ニ鵜戸山官幣小社鵜戸神社アリ、夫ヨリ小見浦ト云処ニテ休足、午飯ヲ喫ス、夫ヨリ内海ニ着ス、都テ本日ノ行程五十丁道七リ、海辺山坂狭小ノ道ニシテ淤泥行路ニ苦ルシム、〇土人云、油ノ津ヨリ折生迫ニ至ル海手街道ニ七浦七峠アリト云、

一本陣吉田大尉・和田大尉以下内海迄同行、夫ヨリ折生迫ニ至ル、

一別働第三旅団宮崎ニ隊ヲ纒メ止戦、外浦ヨリ汽船ニ乗組帰京ノ由、

但シ本日宮崎中村ヲ出発スト云、

一哨兵配布昨日ノ如シ、

旧六月廿六日

八月五日　曇半晴半雨　日曜

一午前第四時三十分、内海出発、同十時十分城ケ崎ニ着陣、商太田嶋太郎方ヲ聯隊本部トス、此日折生迫在陣ノ我第二大隊並砲工隊・旅団本陣等モ城ケ崎ニ転陣ス、

但シ内海ヨリ城ケ崎ニ至ル行程、五十丁道四リ半ナリ、木崎ト城ケ崎ノ中間ニ本郷ト云処アリ、此処ニ宮崎中村三枡屋・金子屋ノ遊君五六名、茶店ノ縁側ニ並ヒ居タリ、此遊君上方産ニシテ美麗ナル海棠ノ初メテ笑咲スル如シ、実ニ是九州第一ノ梅、堂々タル軍人モ之レヲ見テ、目ヲ驚カサルモノナシ、

一明六日我隊佐土原ヘ繰込ノ命アリ、依テ第一・第二大隊並会計等ヘ相達ス、

一是ヨリ先、高鍋ニ本営ヲ移サレ、山縣参軍・川村参軍・西郷中将等之レニ転セラルト云、

一高嶋少将本日高鍋本営ニ至ルト云、

一本日山縣大尉佐土原ヨリ城ケ崎ニ帰ル、茨木中佐ノ隊佐土原在陣ノ処、明六日高鍋ニ繰込ノ由也（山縣大尉云、美々川ノ方ニ大小砲ノ声アリト云）

旧六月廿七日

八月六日　半晴半雨　月曜

一午前第四時ヨリ我聯隊、順次城ケ崎町ヲ出発、同十時十分佐土原ニ着陣ス、同処上田嶋町四丁目商闊谷重太郎方ヲ聯隊本部トス（宿割トシテ久宗中尉先発ス）、

一城ケ崎ヨリ佐土原迄平坦ニシテ行程五十丁道四リ、淤泥通路ニ苦シム、

城ケ崎ヲ去十余丁ニシテ、宮崎ノ中村ト云妓楼ノア

ル処、兵火ニテ焼亡シタリ、夫ヨリ赤江川ヲ渡リ宮崎県庁アリ、又江平ト云処ニ宮崎神宮アリ、則国幣中社ニシテ　神武天皇ヲ祭ルト云、赤江川ノ下流ニ青木ケ原アリ、

一本日降伏スル者左之通、

廣瀬住士族　　萩原　兼理　　萩原彌八郎

戸長　　佐土原士族

調所覺太郎　　岩本吉太郎

加納住士族　　佐土原士族

有馬　爲吉　　谷山　瀬平

木元平太郎　　小川　藤藏

右ノ者自宅ニ謹慎之上、県官来レハ降伏ノ旨申出、差図ヲ受クヘキ旨申聞ル、

一昨五日ヨリ来ル十一日迄之暗号左之通被定、

十年八月六日

五日　貞宗　讃岐　　六日　家隆　伊予

七日　時頼　土佐　　八日　敦盛　阿波

九日　清行　紀伊　　十日　兼家　河内

十一日泰村　大和

一穂北口、宮崎口ニ我隊ヨリ哨兵ヲ配置ス、

旧六月廿八日

八月七日　雨午後七時頃ヨリ大雨　火曜

一午前第四時ヨリ我隊順次佐土原ヲ出発、同八時前高鍋ニ着陣、士族岩下信作方ヲ聯隊本部トス今朝宿制トシテ、安永中尉先発ス

一佐土原ヨリ高鍋迄里数五十丁道三リ、サト原ヲ去ル十余丁ニシテ一ノセ川（一之瀬川）アリ、カチ渉リス、

一佐土原ニアル吉村隊、城ケ崎ニアル沖原隊本日出発、外浦ニ至リ乗船、豊後路ノ攻メ口向フト云、

一前日ヨリ高鍋ニ参軍本営ヲスヘラレタリ、

一山縣・川村両参軍・西郷中将等都濃ニ（空　白）

一之ヨリ先諸軍美々津迄賊ヲ追撃シ、即今美々川（耳）ヲ隔テ、賊ト互ニ対持ノ由、

一明八日大進撃ノ部署アリト云、

旧六月廿九日

八月八日　大風雨雷鳴午後三時前ヨリ雨止ム　水曜

一我隊高鍋滞陣、

旧七月一日

八月九日　曇午後第三時前ヨリ大雨　木曜

一午前出発、第一大隊ヨリ前田大尉・山田大尉、第二大

隊ヨリ渡邊大尉・安永中尉ヲ美々川ニ遣シ、諸軍哨兵線並戦地ノ景況ヲ視察トシテ差遣ス（但シ両官一人ニ下士一人兵卒一人宛ヲ附ス）、

一我斛隊現在人員入用ニ付、可差出旨被達、但シ死没等ハ別紙ニ認ムヘシ（本日午後一時、前達書来ル）

一本日モ高鍋滞陣、

一宮軍美々川ヲ無難乗取タル旨、茨木ノ隊ヨリ本陣ニ報知アリ、阪井少佐聞得テカヘル、

八月十日　曇（時々日照又細雨）　金曜

一本日モ高鍋滞陣、

一午前第十時四十分、美々津ヨリ前田・山田ヨリ報知書来ル、〇九日午前第二時高鍋出発、正午十二時宮下村川村参軍ノ本営ニ至リ、彼是景況ヲ伺フニ、既ニ山田・三好少将ノ両団ハ一昨七日富高新町ヘ向ケ進撃、我軍勝利新町ヲ取ル、依テ美々津前面ノ賊兵ハ早クモ散解、苦モナク美々川ヲ渡ル、未タ残リシ各旅団モ今明日ノ内進軍致ス様子ナリ、〇本隊モ繰上ケノ様子、然レハ下官共当地ニテ相待可然哉、御差図ヲ待ツ、

八月九日

一来ル十二日ヨリ至十八日暗号左之通被定、

八月十日　高嶋少将

問号	答号		
十二日秀吉	彦根	十三日信長	能登
十四日永秀	長濱	十五日一益（カツマサ）	蟹江
十六日利家	虎姫山	十七日信玄	信濃
十八日隆景	高松		

一本日西海道全図三部御渡ニ相成候事、

但シ二部ハ第一第二大隊ヘ相渡ス、

旧七月三日

八月十一日　晴　土曜

一午前第七時、都濃ヨリ山田・前田ノ両人、報告書ヲ品川軍曹ニ為持差越ス、〇前文ヲ略ス、第二第四旅団・別第二旅団細島新町ニ繰込ミ防禦線ヲ取ル、賊ハ門川ヲ以テ防禦線トナスヨシ、前日第二・別第二旅団賊ノ右ニ迂回シ、賊ノ美々川ニ防禦スル者退路ヲ採ラサル間ニ、新町ニ突込ミ、賊ハ何レヘ散々シタルカ未タ不分明、此内ニ桐野・別府将帥ノ由、未タ門川進撃ノ日限ハ不聞、第三旅団ハ美々津ニ滞陣ナリ、夫故同処ニ明家ナシ、依テ都濃ニ帰リ滞在ス、品川軍曹夜十二時都濃ヲ発ス、

八月十日

一我斫隊現在人名入用ニ付差出スヘク、尤死没人名別紙ニ認ムヘク旨達シアリ、依テ第一第二大隊取調左之通、

人名本日本陣高嶋少将ヘ差出ス、

総計現人員千百十九名（但ノ即今入院中ノ者共）

戦死七十八名但シ病死共

一午前渡邊大尉美々川辺景況見認メカヘル、

一午後（マヽ）時（マヽ）山田大尉細島辺景況聞得テカヘル、

一午後十一時頃、前田大尉富高新町辺景況ヲ聞得テカヘル、

一高鍋滞陣、

旧七月四日

八月十二日　晴涼風（午後一時過曇リ雷アリ午後七時二分小雨来ル）　日曜

一美々川ニテ賊降伏スル者五百有余名アリ、本陣ノ命ニ依テ早天之レヲ第一ノ第一中隊ヲ以宮崎ニ護送ス、

但シ昨日美々津本営ヨリ当高鍋本陣ニ送リ来ル、

一之レヨリ先キ、本営ヲ富高新町（マヽ）スエラレ、山縣参軍是レニヲル、

一又新町ヘ降伏人弐百有余名アリ、県官ニ引渡スト云、

一又高鍋別弟一本陣ニ三十有余降伏人来ルト云、是亦県官ニ引渡ス由、

一高鍋滞陣、

旧七月五日

八月十三日　晴（午後五時頃小雨後時々曇）　月曜

一午前第二時、当高鍋出発、久宗中尉搭営隊トシテ美々津ニ至ル、

一午後五時頃、明石軍医来ル、

一鹿児島・都城・水俣・熊本等ヘ脚夫ヲ置御用達スル云々、参謀部ヨリ報知アリ、

一高鍋滞陣、

一此日新町ヨリ降伏人二百有余名本陣ニ送リ来ル由、

旧七月六日

八月十四日　晴　火曜

一高鍋滞陣、

一第一ノ第一中隊、一昨十二日降伏人ヲ宮崎ニ護送シ、昨十三日宮崎ヨリ廣瀬ニ帰リ一宿シ、本日廣瀬ヲ出発、午前第九時過キ高鍋ニカヘル、

一賊徒等切迫自首ノ道ヲシラス、山中ニ切腹自尽スル者十五六名、或ハ十名ツヽアリト云、

一本日モ富高新町ヨリ二百人余リ降伏人護送之由、

一昨日土々（呂）口ニ当リ砲声アリト云（新町ニ聞ユ）、

一只今第一聯隊士官帰報ニ、延岡地方別ニ異状無之由、只本日各旅団一気延岡ヲ攻撃之筈ニ候、此旨不取敢及御報候也、八月十四日午後六時前高嶋少将ヨリ予ニ宛来ル、

一明十五日第一聯隊美々津ヘ転陣候ニ付、是迄同隊ヨリ差出居候哨兵ハ、其隊ヨリ交代可差出旨被達、

旧七月七日

八月十五日　曇　水曜

一高鍋滞陣、

一第一聯隊今暁第二時高鍋出発、美々津ニ転陣ニ付、我聯隊ヨリ哨兵ヲ夫〻配置ス、

一降伏人続〻之レアル由、

一安永中尉ヨリ報知ニ曰、

豊後口ノ戦報概略

一去十二日夕軍艦当細島港ニ着、第一旅団ヨリ分派セシ二大隊モ、去十一日彼ノ地着、十二日ヨリ直チニ哨兵ヲ配布シ、即今ハ賊勢モ稍挫折シ、一里ヲ一中隊ニテ受持ツモ危殆ナキ様相覚ユ、尤モ本月二日ハ彼ノ口大進撃、目的ノ通リ勝算アリテ、堡塁モ数ケ所乗取リ、十五丁余モ進軍セリ、併シ未ダ参軍ヨリ御達シ無之ニ付、地名等ハ相分兼候得共、余程都合宜敷趣（マヽ）（空　白）

黒木為楨日記（明治十年自八月十五日至十月九日　九冊之内）八

旧七月七日

八月十五日　曇　水曜（この日節半は七と重複）

一高鍋滞陣、

一第一聯隊今暁第二時高鍋出発、美々津ニ転陣ニ付、我聯隊ヨリ哨兵ヲ配置ス、

一降伏人数多続〻アリ、

一安永中尉（新町）ヨリ報告書来ル、

豊後口ノ戦報概略

去ル十二日夕軍（孟春）艦細島港ニ着、別ノ第一旅団ヨリ分派セシ二大隊モ、去十一日彼ノ地着、十二日ヨリ直チニ哨兵ヲ配布シ、即今ハ賊勢モ稍挫折シ、一里ヲ一中隊ニテ受持ツモ危殆ナキ様相覚ユ、尤モ本月二日ハ彼ノ口大進撃、目的ノ通リ勝算アリテ、堡塁モ数ケ所乗取リ、十五丁余モ進軍セリ、併シ未タ参軍ヨリ御達シ無之

ニ付、地名等ハ相分兼候ヘ共、余程都合宜敷趣(以下空白)

一西郷ヨリ諸隊ニ示教書写

諸隊尽力ノ故ヲ以、既ニ半年ノ戦争ニ及ヒ、勝算目前ニ相見ヘ候折柄、兵気相衰終ニ窮迫余地ナキニ至リ、就テハ兵ノ多寡強弱ニ於テハ敵ト差違無之、然ルニ今日之時機ニ至リ候儀、実以遺憾之至候、敵ニ於テハ此機ニ乗シ必進撃可致ニ付、今一層憤発致シ退歩之念慮ヲ絶チ、一歩ナリトモ進テ斃尽シ、後世之吐辱ヲ不残覚悟此時ト明ラメ候ニ付、一統憤発致候様御示教被下賜候也、

八月五日　　西郷吉之助

一熊ノ江(宮崎県東臼杵郡)賊哨兵所ヲ捨テ、直ニ小船ニ乗リ都濃ニ着船、官軍ニ降伏スル者アリ、降伏人云、昨十四日延岡ニ当リ家ノ焼上カルヲ見ル、必ス賊敗走ナラント、

旧七月八日

八月十六日　曇　木曜

一高鍋滞陣、

一安永中尉昨十五日午前第六時頃延岡出発、午後九時頃都濃ニ帰リ一泊、今暁午前第三時過都濃出発、午前第七時過高鍋ニ帰リ報シテ曰、

一五ル十三日夜野津(鎮雄、第一旅団長)少将ノ隊ハ延岡ニ進入、

昨十四日午前七時過、各旅団部署ノ如ク延岡ニ進入、賊ハ熊田(北川町)ノ方ニ走ル、尤モ諸軍ハ午前九時頃延岡ニ入ル、此夜山手ヨリ残賊六十名程抜刀切込アリ、我軍ニ四五名傷者アリ、賊ニモ傷者アリ、余ノ賊ハ遁逃スル由、

一昨十五日諸団浦尻(延岡市北方)・熊田同処左山手ニ向ケ進撃アリト云、

一明十七日午前第四時高鍋出発、都濃ヘ転陣可致旨達シアリ、

一高鍋ハ元秋月某領地也、賊此処城内外ニテ弾薬ヲ製造シ、又小銃ヲ修理ス、賊ノ参軍阪元清(元高鍋ノ士族)専ラ尽力スル由、

一本日第一旅団長ヘ差出ス我斾隊現在人員并人夫共、総数千三百三十四名ナリ、

一之レヨリ先キ、日薩隅ノ士族十五才以上五十才以下総テ賊軍ニ従事ス、士人ト雖壮者ハ出兵、或ハ他ノ職務ニ従フ、就中脅迫ノ者モアリ、肥後熊本人凡三千名賊ノ為メニ出兵、人吉人モ過半出兵、然ルニ人吉賊ハ人吉敗走ノ時降伏シ、後官軍ノ先鋒タランコトヲ乞フ、

依テ是ヲ別ノ第二旅団ノ附属第二中隊ト称シ先鋒タラシム、大寺(安純)大尉引率之、又薩ノ蒲生(給良郡)郷ノ人降伏シ、是又別第二旅団ノ附属第一中隊ト称シ、先鋒トナリ能ク尽力ス、既ニ過日来延岡攻撃、以後大憤発一歩モ退カス、進テ賊ヲ討ツ神ノ如シト云、

一降伏人続〻之レアル由、

一哨兵配置前日ノ如シ、

一高鍋道具小路ノ近傍ノ野中琴弾ノ松アリ、古松ナリ、其元ニ碑名アリト云、

旧七月九日

八月十七日　晴　金曜

一午前第四時、高鍋出発、午前第八時三十分我聯隊都濃ニ着陣、商河野重平方ヲ聯隊本部トス、但シ此都濃ハ元高鍋領ニシテ人家百四十軒余、国幣小社都農神社アリ、高鍋ヨリ都濃ニ至ル里数五十丁道四リ余、

一来十九日ヨリ廿五日迄、暗号左之通被定候条、此旨相達候事、

八月十七日　高島少将(鞆之助、別働第一旅団長)

問号　答号

十九日　頼義　吉野

廿日　景虎　葛城

廿一　定家　佐敷

廿二　義仲　米沢

廿三　忠度　高倉

廿四　秀衡　廣島

廿五　直政　名取川

一別紙之通被達候条、此旨可相心得候事、

八月十七日　高島少将

別紙

昨十五日戦闘中、第四旅団附志賀(忠篤)陸軍少尉試補戦没之際、暗号紛失候旨届出候ニ付而ハ、左之通改正候条、此段相達候事、

十年八月十六日　山形(山縣有朋)参軍

別働第一旅団

問号　答号

八月十六日　実朝　佐賀

同十七日　忠久　但馬

同十八日

元就　　最上

一此日高鍋ヨリ都濃ニ来ル途中ニテ聞クニ、一昨十五日昨十六日熊田近傍ニテ戦争甚劇戦ナリ、官軍賊軍互ニ死傷アリト云、

一此日我隊都濃ニ着スルヤ否、土人報シテ曰、(日向市土土呂毛)土々呂キ村(カ)ヘ賊三十名計リ来リ間道ノ案内ヲ乞フ、若シ案内セスバ殺スト云、依テ第二ノ第一中隊ヨリ一小隊ヲ山田(貞久、第一中隊長)大尉引率、トドロキ村ニ巡邏セシムルニ異状ナシ、然ルニ残賊折〻山間ヨリ出テ食物ヲ乞、土人甚恐ル、様子ナリト帰リ報ス、

一明十八日第一第二大隊ヨリ士官弐名宛、戦地ニ至リ実況ヲ認メ来ルヘキ旨相達ス、

一降伏人ハ続〻アリト云、

一往来ノ口〻ニ哨兵ヲ配置ス、

旧七月十日

八月十八日　晴　土曜

一今暁第一大隊ヨリ齊藤大尉・内藤中尉、第二大隊ヨリ村井中尉・上山少尉試補都濃出発、戦地(熊田井左山手海手浦尻等)ニ至ル、

一降伏人十名我聯隊本部ニ来リ、一応取糺シ本陣ニ送附ス、

一降伏人ハ続〻アリト云、

一哨兵配置昨日ノ如シ、

一此日赤松軍曹曹長ニ任ス、猶原記一監護ニ任ス、

一此夜高島少将我本部ニ来リ、暫時雑談アリテカヘル、

一眞鍋本承都濃神宮ニ参詣ス、景色至テ美ナリ、神宮小ナレドモ旧跡自崇シ、則チ日向国ノ一宮ニシテ大已貴尊命ナリト云、土人至テ尊崇ス、

一此日総督宮本営ヲ都ノ城ヨリ宮崎ニ転移セラレタリ、

一此日都濃滞陣、

旧七月十一日

八月十九日　晴　日曜

一土屋大尉延岡ヨリ帰リ報シテ曰、

昨十八日午前四時総軍大進撃ノ部署ナリシガ、第一旅団即チ野津少将ノ哨兵ヲ引揚シ跡ヘ、賊五百名計襲来、遂ニ野津・三好両少将ノ仮本陣ニ突出スト云、賊又凡五百名計別働第二旅団ノ線ニ来ルニ、守備厳ニシテ進ムコト能ハスシテ引去ル、第一旅団モ其後チ元ノ如ク哨兵線ヲ守備スルト云、然ルニ突出仮本陣ニ迫リシ賊五百名計、此内ニ西郷・桐野等居ルト云、何レヘ去リシ

ヤ其所在ヲ詳ニセスト云、

一昨十七日・昨十八日・本日等ニ降伏スル者、熊田辺戦地ニテ四千人余アリト云、

一降伏人云ク、

賊窮迫ニ付軍議ヲナスニ、西郷ハ延岡ニ進ミ出テ降伏、天裁ヲ仰クト云、桐野云、其議不然、降ル者ハ降リ我輩ハ自死セント云、又中隊長辺ノ者云ク、其議シカラス、何レヘカ一方ニ突出セン、若シ事行ハレザルトキハ揚火シテ報ス、其時各自分ノ身体ヲ所分スヘシト云、遂ニ其議ニ決スト云、

一去ル十四日弾薬并糧食果尽ノ由、掛リ役ヨリ賊将ヘ申出ト云、

一明廿日午前当本陣ヲ美々津ヘ転移候条、各隊各部ニ於テモ同様転移可致候事、

但シ宿割ノ者ハ本日ヨリ差出可申候事、

十年八月十九日　　高島少将

一此日兵卒松岡龜五郎犯罪有之、本陣ノ指令ニヨリ在宮崎軍団裁判所ニ護送ス、

一降伏人通行続ミ絶ヘス、出張ノ県官都濃神社ノ前ニテ米ヲ炊キ之レニ飯ヲ与フ、

一第一旅団野津少将ノ線ヨリ突出シタル賊凡五百名計、其踪跡詳ナラサルニ付、即日別ノ第二旅団ヨリ一大隊、第一第二旅団三好少将ノ隊若干、第四旅団ノ隊若干ヲ差出シ、其踪跡ヲ探偵セシムルノ由、

一本日ヨリ暗号左之通改定相成候条、此旨相達候事、

高島少将

八月十九日

問号	答号
十九日　貫之	對馬
廿　日　廣之	飛彈
廿一日　夏野	奈良
廿二　定宗	讃岐
廿三　護良	守山
廿四　業平	浪花
廿五　小野	小倉

喇叭号

一問　止レ　一答　前ヘ、

旗号従前之通、

一此日都濃滞陣、

旧七月十二日

八月廿日　晴　月曜

一午前第四時、我聯隊順次都濃ヲ出発、同午前八時前美々津ニ着陣、医業金丸元貞方ヲ聯隊本部トス、
都濃ヨリ美々津ニ至ル行程三リ弱、此日第一聯隊ハ美々津ヨリ細島ヘ転移ス、
一先方ノ模様少〻相分リ候間、即刻御出頭有之度候也、
十年八月廿日　岡澤(精)中佐
午後三時本部ニ達シ、即刻本陣ニ至ル、
一明朝第四字細島(ほそじま、日向市)ヘ転陣ニ付、即刻ヨリ設宿隊差立テ、
且ツ右之趣各隊ヘ達方可取計、此旨申進候也、
本陣ヨリ
黒木中佐

八月廿日午後三時三十分達ス
本部ニテ
芝大尉殿
追テ細島ノ第一聯隊ハ本日発艦ノ都合ニ有之候事、
一午後四時三十分、村井中尉・内藤中尉戦地ヨリ帰リ実況ヲ報ス、
去十八日暁第一・第二旅団ノ間ノ哨兵線(至極險ナル処)ヘ、賊四百名計突出シ、第一(野津少将)・第二(三好少将)旅団仮本陣ニ向ケ発火、後チ僅カニ此兵モ自然ニ何レヘカ行ク、殿兵ヲ以我官軍ニ当ル、他ノ賊ハ何レヘ行シヤ其踪跡詳ナラス、〇山田少将ヨリ河野(通好)少佐ヘ達書ニ、窮賊囲ミヲ脱シ、獅子川ノ方ニ遁逃ノ模様ニ付、其隊ヨリ二中隊可差出旨達シアリ、直ニ二中隊ヲ獅子川ノ方ニ出スト云、
一本日脱賊ノ是迄ヲル処ヲ攻撃ノ由、
一降伏人数多続〻絶ヘスアリト云、
一午後六時前、参軍ヨリノ達書到着、即左之通、
其旅団早急熊本ヘ出張可有之、此旨及御達候也、
八月十九日　山縣参軍
別働第一旅団長
高島少将殿
追而二大隊ハ即刻出発候様、御取計可有之候事、
右高島少将ヨリ部下ヘ被達候事、
但シ達書来ル、直ニ我第一第二大隊ヘ相達ス、
一午後四時過、搭営隊引率安永中尉美々津出発、細島ニ至ル、
旧七月十三日
八月廿一日　晴　火曜
一午前第四時、美々津(元高鍋領、家四百軒余)ヲ順次出発、同午前第八時十分細島ニ着陣、商(宿屋渡世)日高喜代次方ヲ聯隊本部ト

ス（此処人家六百廿軒）、

一午前第八時過、戦地ヨリ齋藤大尉帰ル、齋藤曰、去ル十八日午前第一・第二旅団ノ哨兵線ニ賊来リ、山上ニテ夜ノ明クル待チ賊突出シ、野津・三好両将仮本陣ニ迫ル、両将始兵卒等散〻敗走ス、賊本陣ノ諸物品ヲ分捕、本陣ニ放火シテ去ル、此トキノ賊人数四百名余ト云、

曽木ヘハ（宮崎県東臼杵郡北方町）高島少佐・河野少佐ノ隊出張スト云、未タ賊ノ所在詳ナラスト云、

一賊延岡敗後降伏人総テ一万人余ト云、

一降伏人通行続〻絶ヘス、

一富高新町（日向市）人家百廿軒・細島（日向市）人家六百廿軒此処元幕府支配地ナリト云、

旧七月十四日

八月廿二日　晴　午後四時過ヨリ雷鳴、夫ヨリ暫時夕立　水曜

一昨日午後上山少尉試補戦地曽木ヨリ帰リ、今午前第六時半来リ報ス、

去ル十八日賊永井村（東臼杵郡、北川町）ヨリ烏帽子山ニ突出シ、第一・第二旅団三好（重臣）少将・野津少将仮本陣ニ迫ルニ、少将始散〻遁去、賊本陣ニ至リ諸物品ヲ分捕、本陣ニ放火シテ去ル、此トキノ賊勢凡四百名余ナリト云、然ルニ賊ハ烏帽子山ニ僅カニ殿兵ヲ置、終日互ニ戦争スト云、之レ全ク四百余名遁逃ノ助ケナラント云フ（此夜中殿兵モ何レヘカ遁逃スト云）

翌十九日此迄閉ム処ヲ進撃スルニ、手負病者等ニシテ、賊戦争スルモノナシ、就中降伏スルモノアリ、賊魁ハ一人モ居ラスト云、

即今延岡ヨリ曽木ヘ三リ半、夫ヨリ新町ヘ、夫ヨリミ（美々地）、チヘ、夫ヨリ宮水ヘ、夫ヨリ三田井（みたい）ヘ、夫ヨリ馬見原（熊本県）ヘ順次進撃ノ由也、

七リ　十リ　十二リ　十八リ

未タ賊ノ所在詳ナラスト云、

一本日牛尾陸軍曹長・矢橋軍曹・渡邊英司ノ三名ヲ鹿児島遣シ、運輸局預ケ置荷物取調、丸龜ヘ運送ノタメニ差遣ス、

一来ル廿六日ヨリ九月一日ニ至ル暗号左之通被定、

八月廿二日　高嶋少将

廿六日　家光　伊豆
廿七　元春　最上
廿八　正行　松江
廿九　高家　多久
卅日　時宗（ムネ）　土佐
三十一　政宗　松島

一日　經基　鶴見

右

一明廿三日乗船部署別紙之通、

熊本丸　人夫共千二百〇四人 第二聯隊ノ内六中隊 馬疋十五頭、馬丁廿一人、病院部医官一・看病人卒三、人夫ニンテ六人

合計千二百三十一人

蒼準丸　砲兵二百四十三人

同二百四十三人

千年丸　別手組百五十人 輜重部人夫百人

同二百五十人

兵庫丸　本隊并我第一ノ第一中隊人夫共百七十人、其他乗組アリ、

同九百七十九人

総計二千七百十人

追而出帆ハ未タ確ト相分リ不申候へ共、多分明朝ノ筈ニ付、本船積荷陸揚次第、今晩ニモ御積荷御著手可有之候也、

一乗船ニ付我聯隊人員取調左之通、

将校　四十二名

下士　百七十八名

文官　一名

兵卒　七百三十九名

従僕　二十名

小使　一名

〆九百八十一名

人夫三百九十三名

合計千三百七十四名

一明廿三日正午十二時乗船可致旨被達、八月廿二日午後七時過、右直ニ各隊ヘ相達候事、

一此日細島滞陣、

旧七月十五日

八月廿三日　晴　木曜

一午前第八時前、宮崎軍団裁判所ヨリ、犯罪人兵卒松岡龜五郎、杖三十・錮二十八日申付ラレ、護送人ト共ニ細島ニカエル、

但シ盗取金円并手帖ハ倍償スベシ、

一昨日達ノ如ク、正午十二時ヨリ我聯隊熊本丸ニ総員順次午後四時乗組、午後五時十分細島出艦、

一蒼準丸・千年丸・兵庫丸ハ午前出艦但シ第一ノ第一中隊人員、兵庫丸ヘ部署ノ如乗組、

一午後第三時過、山形(縣)参軍延岡ヨリ午後一時五十五分ニ差出ス電報ニ曰、

タダイマノヅ（野津）・ヲヽヤマヨリ（大山）、ダツゾクサクチヤウヨリ、マミハラノホウヘツキイダスムネ（馬見原突出）、タダイマデンキニテホウチアリ、ツイテハ、クマモトチホウケンネン（熊本懸念）、イチジモハヤクシユツパンアルベシ、松橋（熊本県）着ノ上ハ探偵ノ上揚陸スヘシ、

一此日海中静浪一望万里、是我国名ニ高キ日向洋ヲ通過ス（夜半後日向・大隅ノ間ニテ船大ニユルグ）、

一大隅百引ニテ賊ノ俘虜トナル田所軍吏補帰来同船ス、同人云、去ル十八日賊永井村ニアリ、戦ヒ夜九時頃ヨリ烏帽子山ノ上ニ進撃、翌十九日終日戦争、此日西郷・桐野始多人突出何レヘカ遁逃ス、翌廿日全ク止戦ニ付、土人ヲ以新撰旅団ニ申入レルニ、同団ヨリ迎兵来リ帰ルト云、

旧七月十六日

八月廿四日　晴（午前一時後暫時小雨）　金曜

一午前六時、薩州枚聞山（ひらきき）ヲ右ニ見ル、此日モ浪静ナリ、

午後六時二十分少シ前、肥後（熊本県宇土郡）松合沖ニ著艦、

一午後七時、西澤・大島ノ両会計官ボートニテ先ヘ上陸ス、

午後八時前、予兵庫丸ニ至リ、高島少将ニ面会、暫時ニシテ熊本丸ニ帰ル、

同十一時過ヨリ数多端船来リ、順次ニ総員并諸荷物等迄上陸、翌十五日午前第六時四十五分総員松橋ニ著陣、瓦焼師黒田文平方ヲ聯隊本部トス（但シ松合ヨリ上陸スル者モアリ、細島ヨリ松合沖迄海上里数百五十里ト云）、

一此日松合沖ニ著艦左ノ通

一番　兵庫丸

二番　熊本丸

千年丸

蒼準丸

旧七月十七日

八月廿五日　曇（午前八時過迄細雨同時ヨリ日照ス）　土曜

一午前第六時四十五分、総員松橋ニ着陣、瓦師黒田文平方ヲ聯隊本部トス、

但シ先着第二ノ第二中隊ヲ以、要地ニ哨兵ヲ配布ス、

予等午前第四時過松橋ニ着ス、

一午前第二時、矢部（熊本県上益城郡）ノ濱町ヨリ出ス電報同四時過本陣ニ来ル、

一其聯隊第二大隊之儀小川（熊本県）ヘ分遣可為致、此旨相達候事、

十年八月廿五日　高嶋少将

午前第八時過来ル、
右之旨直ニ第二大隊へ、本日出発小川へ分遣可致旨相達ス、
一午後第二大隊松橋出発小川驛ニ至ル、井上少佐引卒ス、
一第二大隊小川へ分遣ニ付、第一ノ第四中隊第二ノ第二中隊ト交代哨兵ヲ配布ス、

旧七月十八日
八月廿六日　大暴風雨　満潮陸ニ比ル、午後三時風漸ク治マル、同五時過雨止　日曜
一午前十時過、高嶋少将来リ云、昨廿五日朝ヨリ終日、日向神門(かど)・鬼神野(きじの)辺ニテ、官軍脱賊ト戦争ノ旨、昨夕(午後八時)ノ電報今朝来レリト云、夫ヨリ午飯ヲ喫シテ帰ル吉田大尉随行、
一此日満潮ノ為メ松橋ニ入、海川筋ノ堤破損ス、
一哨兵配布昨日ノ如シ、
一此日暴風雨ノ為メニ、大区内人家ヲ斃ス四百軒余ト云、
又道並松大木等ヲ折斃ス無数アリ、

旧七月十九日
八月廿七日　晴　月曜
一午前十時過、熊本ノ産ニテ賊ノ人夫ニ雇役セラレシ者六人ヲ哨兵護送ス、依テ尋問スルニ、去ル十八日降伏シ、延岡ヨリ一里計離レシ島ニ被送居リ、去廿日放免ニ相成、富高新町ヨリ尾崎越ヲ通リ、湯山・湯(熊本県)ノ前・人吉ヲ経テ当地ニ帰ルト云、○熊本ノ者中津大四郎ハ、去ル十七日午時永井村ノ山ニテ切腹(腹)スルト云、去ル十八日夜半後迄砲声止マスト云、
一午前第十一時過、高島少将・阪井(重季)少佐・山縣(朝顕)大尉等来リ、本部前ニテ乗馬ス、正午十二時過各カヘル、
一哨兵配布スル前日如シ、
一之レヨリ先、第一聯隊ハ隈(熊本県)ノ圧并御船(みふね)等ニ在陣、

旧七月廿日
八月廿八日　晴　火曜
一午前八時四十分、
左之通岡澤(精)中佐ヨリ通知アリ、
電報訳、
廿五日午後二時頃、神門ニテ別働第二旅団ノ兵、賊ト戦ヒ我軍勝利、賊ハ中渡川(なかどがわ)ニ向タル由、又当団ノ兵、下椎葉(東臼杵郡南郷)ニテ薩賊四名ヲ生捕タリト、当団桑弓野ノ出張先ヨリ、報知アリタリ、
尚高島少将ヘモ御通知アリタシ、
八月廿七日午后第六時着
馬見原出張

第一旅団参謀部ヨリ

一哨兵配布昨日ノ如シ、

一明廿九日当旅団総テ八代ヘ繰込候旨、芝大尉ヘ直ニ本陣ニテ被達、依テ我第一・第二大隊ヘ右之旨相達候事、

但シ第一聯隊ヨリ二中隊ツヽ小川・宮ノ原ヘ分遣候事、

一此日小使藤澤専次郎病気ニ付入院候事、

旧七月廿一日

八月廿九日　晴（今朝霧深シ）　水曜

一午前第四時、松橋出発、同午前第九時四十五分冲供道ヨリ八ツ代ニ着、（士族酒造商売）出水泰行方ヲ聯隊本部トス、

第一大隊モ順次松橋ヨリ八ツ代ニ着陣、直ニ第四中隊ヲ以哨兵配布ス（松橋ヨリ八ノ代ヘ冲供道四リ半ト云、松橋ヨリ本道小川宮ノ原ヲ経テ八ノ代迄六リ）、

一去ル廿五日神門（宮崎県）ニテ、肥後人降伏二百人アリト、探偵ノ者帰リ報スト云、降伏人云フ、西郷ハ二ケ所ニ傷ヲ受タリト、

一明三十日第一大隊八ツ代出発、佐敷（葦北郡）ヲ経テ夫ヨリ人吉ニ分遣セシムヘキ旨被達、

右ニ付、哨兵ヲ第二大隊第一中隊ヨリ交代ス（但シ交代夜半ニ至ル証引ニ付云ミ、アリ）

一午後五時頃、第二大隊（小川ニテ第一聯隊ト交代、同地出発ス、）八ツ代ニ着陣、

一在人吉中村中佐ヨリノ電報、午前十一時十分樺山中佐（資紀）ニ達シ、夫ヨリ午後七時過八ツ代本陣高島少将ニ達ス、

電報訳左ノ通、

賊飯野（宮崎県）・加久藤（かくとう）ヘ出テ小林警察処ヲ襲ント、依テ当方ヨリ已ニ出兵セリ、又彼自ラ云フ、八代目的トシテ出ルト、御心得迄報知ス、此段高島少将殿ヘ御報知ヲ乞フ、

一別紙之通各処ヨリ電報相成候ニ付テハ、明日出張之隊ハ可成迅速ニ人吉ニ行進候方可然ト存候、右賊情御参考之為メ指回候間、御見済之上ハ早々御返却可有之候也、

八月廿九日　　岡澤中佐

一別紙

野津少将ヨリノ電報樺山中佐ヨリ報ス、

富岡敬明（熊本県権令）　人吉出張新宮簡（タケマ）（竹間カ）

一昨廿七日、賊三百計槻木（熊本県球磨郡）村ヲ過キ須木（宮崎県西諸県郡）ヲ指シテ落行ク、亦昨日賊三人ウエ（E）村ヘ来ニ付、昨夜松村秀實取締兵三十ヲ率ヒ斥候ニ出ル、亦今廿九日暁飯野・加久藤ニ賊五六百計降伏人ノ形様ニテ、人吉ニ切リ込トノ景

況アリト、ヨヽコバ(マヽ)田中少尉(大畑)ヨリ報知アリ、今其用意ヲナス、委細ハ跡ヨリ報ス、

右ハ信偽不分明ナリト雖モ、県官ヨリ通知ノ儘御報ニ及フ、

一電報訳　　馬見原　野津少将

椎原之春、元近衛軍曹ヲ勤メタル者、年齢三十七八、右ノ者足ヲ傷付、江代(熊本県球磨郡)ニテ跡ニ残リ居リ、都合四人共清水少尉・時澤少尉ノ手デ捕縛ニ就ク、極メテ強情ニテ道ヲ歩行セズ、歩行シ得レバ此場ニハ至ラズト云フ、終ニ頭一二討(打)タセシカバ、寧ロ殺セヨト云フニ至ル、○右ノ者云フ処ニ依レバ、賊ノ方向ハ賊中ニテモ未タ確定セス、先人吉ニ向フテ行進遮ギラルレバ、富高新町ノ方ヘデモ打抜ケントノ評議アリタリ、到底勝算モナク、何地ヘ出ルト云フ目的モ無ク、躓ヅイテ死スルノミト云エリ、○右椎原ノ云フ処ニ賊ハ真先ニ斥候兵士人四五人位引立教導セシメ、一里計リ経テ先鋒七八十人進行シ、亦一二里経タテ、二百人位ノ中軍ヲ行進シ、又一二里(ママ)リ計リモ経テ殿軍行進ス、殿ノ数(ママ)人不明、○右ノ通リ山縣参軍ヨリ電報有之候、尚高嶋少将ヘモ御報知アリタシ、

八月廿九日午後二時着

一来ル二日ヨリ一周間暗号表左ノ通被達、十年八月廿九日

二日	貞光	佐敷	
三日	経時	鶴崎	
四日	道長	三池	
五日	爲義	但馬	
六日	家綱	今津	
七日	實平	坂本	
八日	光盟	美々津	

右之通相定候事、八月廿三日

旧七月廿二日

八月三十日　晴　木曜

一中村中佐ヨリ別紙ノ通電報有之ニ付テハ、人吉地方ハ指シテ懸念モ無之ニ付、先ツ佐敷(熊本県葦北郡)ニ進メ置、賊ノ方向等ヲ見テ臨機進退可致様、阪井ヘ可申含候様、吉田ヘ申含旨相達置候間、為御心得申進候、尤此趣モ人吉中村中佐ヘ申遣シ置キ候也、

八月三十日　　岡澤中佐

別紙

八月三十日午前第一時四十分発ス、同第三時五分過着、中村中佐ヨリノ電報、

賊吉田・大口ヘ向ケ出タルニ付、当地ノ兵ヲ急ニ進メタリ、彼レ鹿児島ヘ入ルノ目的ト見ユ、人吉ハ已ニ長(好道、歩兵第一聯隊長)谷川中佐引卒ノ隊追々繰込ミシ故更ニ懸念ナシ、御手ヨリハ佐敷・鹿児島ニ御出兵ヲ希望ニ絶ヘス、

右電報ニ依リ、第一大隊人吉分遣ヲ止メ、佐敷ニ分遣セシム、

但シ午前九時頃、当八ツ代前ヘ川尻ヨリ和船数艘ニ乗組直ニ出船、押切ニテ佐敷ニ至ル、

一午前十一時頃、茨木中佐(惟昭、歩兵第十聯隊長)来ル、同午飯ヲ喫シテ後帰ル、

一此日安部少尉試補以下七名被任少尉、又畠山軍吏補被任軍吏副候事、

一歩兵第二聯隊

其隊之儀、明三十一日舟行ニテ水俣ニ繰込、已ニ佐布(佐敷)ニ分遣致居候一大隊之義モ同処ニ合併可致、此旨相達候事、

但通船之儀ハ旅団会計部ヘ可打合候事、

十年八月三十日　　高島少将

一此日戦死之者墓処一覧ス、

一明三十一日午前八時出発可致旨、高島少将ヨリ被達候事、

一此日八ツ代滞陣、

旧七月廿三日

八月卅一日　曇時々小雨　金曜

一午前第八時、八ツ代出発、立馬夷子刎ヨリ乗船、我第二大隊順次出帆、午後九時三十分水俣港ニ着上陸、士族徳富溪翁(家号北酒屋)方ヲ聯隊本部トス、八ツ代ヨリ水俣迄行程十三リ余、

此日参謀部和田大尉同船タリ、

一此日第一大隊ハ佐敷ヨリ水俣ニ転陣、

一明九月一日第一大隊午前第四時水俣出発、米ノ津(鹿児島県出水市)ヘ進軍可致旨相達候事、

一八ツ代本陣ヘ、予水俣着ノ届ケヲ阪井少佐(第十二聯隊第一大隊長)ヨリ出ス、

一八ツ代ヨリ水俣迄行程十三里余、此途中綱木(津奈木)太郎・佐敷太郎・赤松太郎ノ三嶮坂アリ、土人此ノ三坂ヲ呼テ三太郎ト云、

一人吉ヨリ電報并賊情探偵等ノ其模様詳ナラス、依テ略之、

一此日阪井少佐ヨリ、大口ノ方ニ向ケ賊情探偵人三名差

出ス、

一要地ニ砲兵ヲ配布ス、

旧七月廿四日

九月一日　晴夜ニ入雨降　土曜

一午前第四時、我第一大隊水俣出発、米ノ津ニ至ル、阪井少佐引卒之、参謀部吉田大尉同行タリ、

一第二大隊今朝水俣出発、米ノ津ヘ進車為致旨、八ツ代本陣高島少将ヘ届書差出ス、

一八月卅一日午後九時五分人吉ヲ発シ、今九月一日午前十一時四十五分水俣ニ着、黒川大佐ヨリ電報訳、

電報承知、然ルニ其後ノ賊情ハ今朝電報ニテ申進タリ、尚又吉田出張ノ中村ヨリ、賊昨日来横川(始良郡)近傍ニ出テ、昨夕ヨリ今朝ニ至ル迄砲声止マス、加治木(始良郡)口ノ官軍開戦セシナラント、依テ中村・長谷川ノ手ニテ挟撃ヲハカリ、今午前一時ヨリ横川ヘ向ケ追々出兵ストノ報知アリ、付テハ賊又方向ヲ転ズルモ知ル可カラス、此ノ口ハ兵員モ少ク、夫々押ヘモ行届キ兼ヌル故、其地ヘハ熊本鎮台ヨリモ出兵ノヨシナレバ、大口ヨリ右ノ要地ヘ至急御配兵相成度存候也、

右電報訳、米ノ津在陣阪井少佐ヘ、別仕立郵便ヲ以差遣ス、八ツ代高島少将ヘモ報ス、

一在米ノ津阪井少佐ヨリ報知、

本日午前第四時当隊其御地出発、同八時米ノ津着、該地近傍不取敢探偵候処、更ニ異事無之、殊ニ人気等至テ静謐、近時大口ノ景状モ東京ヨリ出張ノ巡査屯在、要処々々人数ヲ配布シ、若シ異事有之節ハ、直ニ近傍諸口ヨリ、当隊ヘ報知有之筈ニ付、彼地ノ景況モ甚静平、探偵ノ者モ過日水俣ヨリ差遣置候処、今以帰報無之、又鹿児島表之形勢モ、異事アル際ハ直ニ県官ヨリ本道迚リ飛報有之筈ニ候処、未ダ何等之報知無之候ニ付、該県モ定メテ静謐ナルコトヽ考慮致候、右形勢見聞候儘相認メ、御遅送申候間、決テ御掛念無之様、右概略申進候也、

九月一日

右阪井報知書、八ツ代高島少将ヘ差出ス、

一予水俣ニ在陣、阪井ハ米ノ津ヘ転陣候ニ付、賊ノ景況ハ水俣ヘ御通シ有之度旨、人吉黒川大佐ヘ申遣ス、但シ佐敷ヨリ電報、

一砲兵配置昨日ノ如シ、

一此日滞陣、

一此宵天草・長島へ探偵人二名差出ス、

九月二日　晴　日曜

一午前第六時三十分、去ル八月卅一日佐敷ヨリ阪井少佐差出ス探偵人、八ツ代士族木付鎮静・高野定義・宮川英相ノ三名大口ヨリ帰報、各所ノ警視分署ハ悉ク賊ニ襲ハレ、巡査ノ行衛シレザルモノ多シ、只大口計守備シタリ、此人員僅カニ二十人計、同処巡査ヨリ湯(伊佐郡)ノ尾ニ探偵ヲ出スニ、「モミ蔵」ニ賊ノ小隊長平田幾二郎(幾助ナランカ)ナル者、新ニ兵ヲ募集ノ為メ、横川(給良郡)辺ヨリ湯ノ尾ニ帰ルト云、依テ直ニ「モミ蔵」ニ至リ、同人ヲ昨一日浮(浮カ)トス、同人ノ口供ニヨレハ、賊ハ加治木(給良郡)ニ向フト云、又大口ヨリノ探偵者ノ口ニテハ、踊(給良郡牧園町)ノ方ニ赴キタリトモ云、○人吉口ヨリ栗野(給良郡)ニ官兵進軍シタル由、○「又土人云、昨一日朝人吉ノ方ニ砲声アリト云、信偽如何」、

右八ツ代本陣并米ノ津阪井少佐等ヘ郵便ニテ報ス、

一午前八時頃、和田大尉水俣ヨリ米ノ津ニ至ル、

一昨九月一日午後第十一時人吉ヲ発シ、同二日午前九時三十分水俣ニ着、山田少将ヨリ、去ル八月三十日第一旅団ノ兵横川辺ニ於テ、午前五時ヨリ戦争ノ末、左翼ノ兵寡少ニシテ第一線ヲ保ツ能ハス、第二線ニテ戦ヒ、午後四時援隊来リテ之ヲ補接スト、卅一日午前二時賊退散ス、則チ横川ト踊(牧園町)ノ間ノ空居ヲ経、溝(給良郡)部・加治木トノ間ヨリ有川(給良郡)ヲ通リ、山田(給良郡)ヲ経テ鹿児島ニ向フ、則チ近衛一聯隊ヲ、至急船ニテ鹿児島ニ向ケタリト、溝辺部出張ノ石本少佐ヨリ偵察士官承リ取リ、又野崎中佐ヨリ、其四中隊ヲ午後六時山田ヘ向ケ尾撃スヘキニ付、当団ノ兵モ至急鹿児島進発アリタリト申来ルニ付、第一旅団長谷川ノ手ト我団中村中佐ノ手ト合シテ、二大隊半本日鹿児島ヘ繰込ト、只今右両人ヨリ報告セリ、然シテ横川ヨリ栗野迄ノ警備ハ、当団第三方面ノ兵三中隊、栗野ヨリ吉田迄ノ間ハ第一旅団大島少佐ノ一大隊ニテ付ケ置シ由、又西郷・桐野モ鹿児島ヲサシテ遁レタリト、此段不取敢御報ニ及ブ、

右高島少将本陣并米ノ津阪井少佐ノ処ヘ、別仕立郵便ニテ報ス、

一此日午前米ノ津ヨリ、岡澤中佐ノ伝令トシテ頓野大尉来リ、明日米ノ津ヘ繰込ムヘキ旨申述タリ、シカルニ今朝動止相伺置候ヘドモ、明三日右命ニヨリ、午前第四時水俣出発米ノ津ヘ繰込候間、此段御届申候也、

九月二日午後一時

八ツ代本陣

高島少将殿

追テ下官ハ只今ヨリ米ノ津ヘ船ニテ先発仕候、

一明三日午前第四時出発、米ノ津ヘ繰込ムヘキ旨部下ヘ相達ス、

一此日モ滞陣、

一哨兵配布昨日ノ如シ、

一水俣詰熊本県二等巡査中島官太郎ヨリ直報、九月一日午後三時熊本県第四課ヨリ発ス、本日午前四時水俣ニ着電報訳、

賊徒栗野・横川ニ向イ来リ、横川・栗野ノ間ニテ、昨三十日午前五時第二旅団ト戦端ヲ開キ、午後三時戦ヒ中ナリト、加治木三好少将ヨリ報知アリタリ、又賊ノ一手出水・仙臺川(川内川)ニ向フモ難計ト、細島山縣(宮崎県)参軍ヨリ報知アリト、岩村県令ヨリ昨卅一日仕出シノ電報、本日長崎ヲ経テ報知アリタリ、此旨御通知ニ及ブ、

右八ツ代高島少将、米ノ津黒木中佐ノ処ヘ、芝直照ヨリ報ス、時午後第三時ナリ、

一人吉支庁熊本県北垣大書記官ヨリ発スル電報、今二日午前十時佐敷着、同午後第五時四十五分水俣詰同県七等警部神昌忠ヨリ報ス、

電報訳、

賊横川ニテ破レ鹿児島ニ走シル、官兵已ニ鹿児島ニ充実スレバ、賊又何地ヘ遁ルモ難計、海岸警備一層注意スベシ、

旧七月廿六日

九月三日　晴　月曜

一午前第四時、水俣ヲ、聯隊本部第二大隊並会計等順次出発、同十時米ノ津ニ着スルニ、都合ニヨリ直ニ同処ヲ発シ、午後第六時前阿久根ニ着陣、士族込田村久保彦助方ヲ聯隊本部トス、

一昨二日鹿児島表探偵トシテ巡査一名差越候処、高城(たき)之内水引迄罷越候折柄、同処警察署ニ於テ聞繕ヒ候処、賊ハ過ル一日午前鹿児島表ヘ襲来ノ由ニテ、県庁並警視出張所等、軍艦一説ニハ櫻島ヘ引移リ候トモ云、且賊伊集院(いじゅういん)ニ突出、官軍二中隊ニテ伊集院(日置郡)ニテ戦争ノ趣是ハ昨二日ノ事、勝敗不知、鹿児島ニ於テハ、裁判所囚人ヲ引出シ、其他募兵候趣ニテ、既ニ伊集院ニテハ、粮米ヲ以テ胸壁ヲ築キ居候由、水引ヨリ先キハ、人民家財等取

片付動揺致ス趣キ、但シ伊集院ニテ二中隊戦争候隊ハ、鹿児島(駐)在ノ隊ト云、

九月三日　　出水分署詰

二等少警部末田志弘

米ノ津
岡澤中佐殿

右米ノ津別ノ第一旅団ノ参謀部ニテ写ス、

一此日途中野出(出水郡)麓ニテ、巡査ニ出会実況ヲ問フ、巡査云フ、阿久根近傍人気甚宜シカラス、サキニ降伏帰郷ノ士族再ヒ賊ニ組シ、已ニ巡査ヲ捕縛セントス、然ルニ巡査ハ僅カニ五六名、阿久根ニ出張守備スルコト能ス、依テ一応出水分署ヘ引揚クルト云、又鹿児島城下ハ去ル一日賊有トナル、新撰旅団大ニ敗北ナル由、早ク官軍ノ来ルヲ希フト云、

一又途中鹿児島ヨリ帰ル人夫ニ出会、景況ヲ問フニ、人夫云ク、前キニ別ノ第三旅団砲廠本部(カゴシマ新地フンダト云家)松永大尉ニ使役セラル、松本平吉(ブンゴロ田ノ者)ト云者ニテ、過日右別ノ第三旅団砲廠ヲ新撰旅団ニ引渡シ、松永大尉ハ長崎ノ方ヘ向ケ乗船ス、私ハ放免相成ル、然ルニ、去ル一日賊徒城下ニ突入シ、県官其他ノ諸官モ何レヘカ遁ル、凶獄人ヲ賊徒ヨリ解放ス、多分砲廠本部モ賊ノ分捕トナル、私等ハ漸ク同日城下ヲ出立伊集院ニ泊ス、囚獄人ノ内西方(にしかた)辺ノ人ト存候、伊集院迄ハアトサキ道ヲ同フス、其後ハ存セス、翌二日伊集院出立西方(川内市)ニ泊ス、今三日朝賊徒来リ出立ヲトヾム、午前十時頃出立セヨト云ヒ付出立イタス、此ノ朝賊徒等巡査ヲ六名捕縛シ、同頭取一名ヲ切害セリ、現ニ此ノ死体ノ跡ヲ見ル、西方宿屋鮫島孫左衛門云フ、此切害スル者ハ同地山下ノ士族ナリト、〇右人夫松本平吉ノ云フ儘ヲ記ス、

一阿久根人気甚宜シカラス、前キニ降伏帰郷ノ士族、再ヒ賊ニ組シタリ、

一午後八時四十分、阿久根和田大尉ヨリ本日見聞スル処ヲ書シ、米ノ津岡澤中佐ニ差出ス、

一　別ノ第一旅団付人夫百長

和田司馬記

右ハ九月一日、賊鹿児島城下ヘ突入ノ際谿山ヘ遁レ、二日午後同処発シ、山田・伊集院ヲ経テ伊地(イチク)來(市来)ニ泊ス、今三日阿久根ニ帰ル、依テ尋問スルニ左ノ通、

九月一日午前第八時頃、賊三百名計リ、突然鹿児島城山鐘衝堂ノ処ヨリ小銃ヲ発ス、此時官兵市中ニ居合ス

者五十名計リ、直ニ之レニ応ス、戦争二時計ニシテ終ニ官兵敗走、波戸場ノ処ニテ斃ル丶者多シ、是日新撰旅団巡査ト合シテ五百名程、武ノ山ヘ出張致居、城下ノ戦ヒニ応スル能ハス、又其後何地ヘ引揚ケシモ知レス、又是日賊襲来ノ事ハ略知ル故、前日ヨリ弾薬並米等蒸汽ヘ積込ム、シカルニ弾薬ハ漸ク半分、米ハ三分ノ一運搬シ、余ハ賊ノ有トナリタリ、賊又此米俵ヲ以市中ニ台場ヲ築クト、又人夫モ五百名計賊ニ捕ヘラレタリト云之レモ和田ヨリ、岡沢ニ差出ス、

一此日第一大隊ハ阪井引率シ、米ノ津ヨリ宮ノ城ニ至ル、此行程九リ、嶮坂多ク道宜シカラス、土人此道ヲ呼テ七リシブ(紫尾)山五リ五リ坂ト云、又シブ山ノ下出湯(紫尾温泉)アリト云、

一薩肥往還ノ並松大木、去月廿六日ノ暴風ノ為メ折レタヲル丶モノ無数、

一此日水俣ヨリ米ノ津ニ来ル行程三リ廿丁、米ノ津ヨリ阿久根迄五里余ト云、シカルニ土人ノ云処ニヨレバ、水俣ヨリ阿久根迄ハ十里ナリ、此途中出水郷出水麓アリ、士族多シ、元二万石ノ地、国界ニシテ堅固ノ場所ナリ、又高尾野・野田ノ麓アリ、皆士族多シ、

一要地ヲ占シ哨兵ヲ配置ス、

一阿久根町家百五十軒余、士族都合二百五十軒ト云、

旧七ノ(月)廿七日

九月四日　晴　火曜

一去ル二日賊徒ヨリ回達アリ、云ク、

鹿児島ニ突入我有トナル、依テ元私学校ノ者ハ、巡査ヲ捕縛シ鹿児島ニ罷出スベシ、此回達ヲ出水士族伊東(藤)四郎左衛(蔵)門ヨリ参謀部ニ報告スト云、

一伊勢地ノ隊ハ、昨夜十時米ノ津ヲ発シ、今午前第五時頃阿久根ニ着陣ス、

一午前第七時過キ、探偵トシテ熊(隈)ノ城ノ内ムコダ(向田)ヘ平民田中助太郎・大平袈裟一ノ両人ヲ差出ス、午前八時過キ、東郷ニ阪本太兵衛・脇園丑之助ノ両人ヲ差出ス、

一予今朝米ノ津出発、午後二時前阿久根本部ニ着ス、

一午後四時過、探偵ノ為メ雇入タル出水士族十名、阿久根聯隊本部ニ着ス、近傍ノ人家ニ置ク、

一昨三日、宮ノ城在陣川上少佐ヨリ、樺山中佐ヘノ報知ニ云ク、宮ノ城住居佐々木權之助旧主家(鹿児島屋敷)ニ在リ候処、去ル一日残賊鹿児島市街ニ参リ候間、二日同処出発、今三日宮ノ城ニ帰着ス、去ル一日残賊吉野村・伊敷村ヨリ市

街ニ来ル、○同日宮軍ノ火薬ヲ掠奪ス、賊凡四百名計、
一官軍元加治木屋敷ヘ引揚警戒ヲ加フ、○残賊城山ヨリ下浜手ヘ掛ケ哨兵ヲ配布ス、○昼夜砲声ヲ聞ク、○私学校内ヨリ城山ヘ掠奪ノ火薬ヲ運搬ス、○県庁官員ハ舟ニテ逃ケタリト云フ、○本日到着ノ兵隊明日入來ニ繰込可申都合ニ付、後隊無遅〻御繰込相成度此段申出候也、
一昨三日宮ノ城(薩摩郡)在陣阪井少佐ヨリ、岡澤中佐ヘノ報知来ル、前顕川上少佐ヨリノ報知ト大同小異、依テ略之、
一明五日向田ヘ進軍云〻、米ノ津岡澤中佐ヨリ申越ス、
○此日高嶋少将船ニテ米ノ津ヘ着陣ノ旨申越ス、
昨三日向田・郡山(日置郡)ヘ探偵人ヲ宮ノ城出張吉田大尉ヨリ差出ス、其報知書来ルニ、川上少佐等ヨリ申越賊情ト大同小異、依テ略之、
一明五日午前第四時三十分、阿久根出発向田ヘ繰込ムベキ旨、我第二大隊並伊瀬知ノ隊トヘ相達ス、

旧七ノ廿八日

九月五日　晴(正午十二時ヨリ雨降)　水曜

一午前第四時三十分ヨリ、我第二大隊ト伊瀬知大尉ノ隊ト阿久根ヲ順次出発、午前十一時頃西方浦(川内市)(阿久根ヨリ三リ余)ニテ午飯ヲ喫ス、夫ヨリ途中異事ナシ、向田ニ宿陣ノ筈ナレドモ、人家ノ都合ニヨリ無拠水引(川内市)ニ午後第五時着陣ス、同処大小路町商永井徳兵衛方ヲ聯隊本部トス、但シ輜重部同宿、○阿久根ヨリ水引迄八リ、
一途中高城(タキ)麓アリ、
一樺山中佐宮ノ城ヨリノ報知水引ニ達ス、左ノ通、
別紙之者当方面出張其御団一大隊江昨四日来報シ、且外探偵等ヨリ申出ル趣モ悉ク符合致シ、賊ハ自然鹿児島城ヘ占拠ニ相違有之間敷、然ルニ御団一大隊ト十三聯隊一大隊ヲ本日入來峠被繰出レ、各旅団之連絡鹿児島城外江近接之認メアレハ、直ニ鹿児島ニ進軍之筈ナリ、向田・桶脇之連絡ヲ取ルハ自然後線トナルモ難測、各旅団近〻進入之模様、蒲生ニハ新撰旅団一中隊屯在、其他都テ吉田ヘ繰込、重富江ハ陸続繰入レタリト、蒲生ヘ差出候探偵昨午後帰報ス、此段不取敢及御急報候也、九月五日

再伸、阿久根辺情実ハ如何之都合ニ御座候哉、当地方ニテモ賊ノ回章案ニ不違、悉ク承知之、附箋回達致候由ニ候、総テ戸長呼出シ証書差出サセ申候、併兵隊繰込ニハ、反テ強迫之憂ヲ免レ候気合モナキニ

シモ非ス、賊ニ応接スルモ六ケ敷被伺申候、

別紙

豊前第三大区三小区浦河内平民　桃阪直次郎

右ノ者第二旅団輜重夫ニテ、人吉ヨリ野尻(宮崎県)江出テ、客月廿七日小林(宮崎県)ニ於テ賊ニ捕縛セラレ賊之人夫トナリ、吉松(姶良郡)ヲ経テ横川(姶良郡)之戦争ニ出テ、横川ト蒲生之間平野ニテ又戦争ニ及ヒ、続テ蒲生ニ於テ同様戦ヒアリ、官軍敗走十二三名戦死セリ、同卅一日蒲生一泊、翌九月一日賊鹿児島江突入候節ハ、少々ノ戦争ナリ、然ルニ官軍ハ金蔵ニ拠リ、米俵ヲ以テ胸壁ヲ築キ戦ヒシニ、終ニ官軍敗走シテ甲突川ヲ隔テ退却セリ、賊徒ハ必死固守、鹿児島ヲ掠取スル能ハサレハ戦死スルノミト、弾薬百五十箱程・臼砲四門・山砲四門分捕セリ、官軍ハ概略六百名及ヒ軍艦五艘ニテ砲射シ、賊モ困却、市中等モ過半焼失之様子ニテ、賊ハ城ケ谷辺ニ次テ根居ス、昨三日午前南林寺ニテ戦争、賊ハ海辺ヨリ城山江遁逃ス、同日午後伊敷ヨリ草牟田(そむた)江官軍二百名程進撃、開戦ニナリシヲ見タリ、是ハ右人夫賊中ヲ脱シ郡山江逃走之節ナリ、又草牟田山上ニ厳重之胸壁ヲ築キタリト、

九月四日

右樺山中佐ヘ返書ヲ出ス、

但シ書中之本日途中異事ナシ、賊ノ回章ハ回レトモ、水引・隈ノ城士族ハ出発ノ景況相見不申、唯阿久根一郷ハ賊地ヘ出発ス云々ヲ書ス、

一当隊本日午後第五時当地着、然ルニ人家ノ都合ニ依リ無拠水引(川内市)ヘ宿陣仕候、附而ハ明六日一大隊市(日置郡)來迄繰込之御下命ナレトモ、二大隊共繰込候テハ如何ニ御座候哉、此段相伺候間、至急何分之御指揮被下度候也、

十年九月五日　水引　黒木中佐

阿久根　高嶋少将殿

追而当地江賊ノ回章相回リ候得共、未タ出発等之景況無之、隈ノ城モ同様之由ニ御座候、尚探偵人ハ直ニ差出候、○別紙樺山中佐ヨリ報知有之候条、及御報告候也、但シ別紙略之、

一此日高嶋少将阿久根ニ着陣ス、

一要地占シ哨兵ヲ配布ス、

一此日鹿児島士族(親子三人 種子島住)城下ニ去ル一日在宿ノ処、賊突入乱暴ヲ極ム、漸ク辛シテ同処ヲ出タリト云、○併賊人数

ハ凡四百名計ト云、○市中ノ者多ク左袒スルモノアリト云、○降伏人再ヒ出ルモノアリト云、○独行スレハ賊ノ為メニ害ニ逢フト云、

一此日水引着、直ニ同処平民永井伊次郎・大原森次郎両人ヲ、市來迄探偵トシテ差出ス、○松尾覺兵衛・横山民右衛門ヲ伊集院迄探偵トシテ差出ス、

一此日我第一大隊ハ宮ノ城（薩摩郡）ヨリ入來峠（いりき）ニ繰出シタリ、

旧七ノ廿九日

九月六日　晴（午後五時過キヨリ雨降）　木曜

一午前七時前着、○明六日午前第四時当地発程、長官始メ古川少佐之隊モ一同其地ヘ繰込候間、此段為御心得申入候也、

在阿久根

九月五日午後七時廿分　岡澤中佐

向田出張

黒木中佐殿

追而本陣適宜之場所御撰定及御依頼候也、

一午後第三時前、高嶋少将始属官并茨木中佐等、今朝阿久根出発水引ニ着ス、本陣ハ我聯隊本部ト同居、

一午後四時過、伊作（目置郡）ヘ探偵人ヲ両人出ス、

一昨五日午後当処ヨリ市來ヘ差出ス探偵帰報、異状無之ニ付略ス、

一午前八時頃、伊瀬知大尉第一聯隊第二大隊ヲ引率、水引出発市來ニ繰込ム、

一明七日第五時第二大隊ノ内二中隊水引出発、市來ニ進軍之旨被達、依而部下ヘ相達候事、

一昨日伊集院ヘ差出ス探偵ノ者両人、午後八時過キ帰報ス、異状無之、略之、

一此日帰陣、

旧八月一日

九月七日　晴（時ミ曇徹夜強雨）　金曜

一午前四時、更ニ伊集院（目置郡）ニ進軍可致旨被達、直ニ部下ニ相達ス（但シ市來在陣ノ伊瀬知ノ隊ヨリ伊集院ニ進軍ノ事）、

一午前第五時、水引出発、市來湊町ニテ午飯ヲ喫シ、午後第四時三十分伊集院着陣、商安樂惠助方ヲ聯陣本部トス、参謀部同宿ス（水引ヨリ伊集院迄里数八里）、

一午後第一時頃、鹿児島田上村在陣阪井少佐ヨリ報知書来ル、左ノ通、

昨六日午後伊敷ヘ着、直チニ武村ヨリ高麗橋迄、熊本鎮台兵ト当隊ニテ哨兵配布、高麗橋ヨリ海岸マテ、第

三旅団ニテ配布罷在候得共、防禦線甚薄弱ニシテ、賊ノ衝突有之候節ハ支ヘ兼候ニ付、至急御繰込被下度、此段及御報知候也、

九月七日

猶以昨日ヨリ賊ノ周囲哨兵ニテ連絡相付候間、是又申添候、

一堡塁等築造致度候間、工兵至急御呼寄相成度候、右途中ヨリ直ニ水引本陣高嶋少将ヘ差出候事、

一市來郷・伊集院ノ間、即チ伊集院郷ニ属スル壺谷（つぼや）ニテ（苗代川）食器ヲ買得シタリ、

一市來郷ニ温泉アリ、

一隈ノ城ト市來トノ間ニ金山アリ、又分兵所アリ、島津家ノ所有ト云、

一午後五時、阪井少佐ヘ返書ヲ遣ス、

一明八日午前第五時伊集院ヲ出発、鹿児島田上村ニ繰込ベキ旨我部下ヘ相達ス、但シ伊瀬知ノ隊モ同シ、

一鹿児島ニ当リ兵火見ユル、

一過日我手ニ入ル賊徒各郷ニ回文スル左之通（出水士族伊藤四郎左衛門ヨリ官軍ニ出ス、）

今日鹿児島県下ヘ突入及戦争候処、県庁役人等ハ悉ク船ニテ逃去、台兵并巡査等既ニ引色ニ相成、十分之勝利ニ至候、就テハ各郷ニ於テハ巡査等ハ見当リ次第捕縛致シ、当所本営ヘ才領相付可被差回候、此段及御達猶余セス着手可有之候、左候而此書面刻付ヲ以順々可被相回候也、

九月二日　　本営　印

高城郡
高城二日午後六時、阿久根三日午前八時、野田三日午前十一時、高尾野三日午前十二時、

出水戸長
副戸長　御中

一此日市來郷士族山下平左衛門三男同銀彌不審ノ筋アリ、伊瀬知大尉ノ隊ニテ捕縛シ取調候処、同人云ク、去ル二日賊徒ヨリ回文アリ、是ヨリ先キ兒玉幸平ト云者、私学校頭取某氏等子供ヲ出兵致サセ、甚不宜旨楽書スル由ヲ以、私弟勇二郎、幸平ヲ切害シ其節幸平同道ノ者ヲ縛シ尋問スルニ、湊町出張ノ巡査ナリト云、依テ直ニ弟唐釜岩助ト勇次郎之両人ニテ鹿児島ニ送ルト、勇次郎私ヘ噺シアリ、去ル三日帰郷候得共、直ニ伊集院松崎某方ヘ行クト親ニ申置出テ行キ、未タカヘラスト云、

一此日市來ニテ苗村求吾（丹波ノ人）、鹿児島県一等属田邊某方ニ至ル、途中賊徒ノ為メニ困難ニ付救助ヲ乞フ、依テ金拾円遣之、水引大小路町ト隈ノ城向田町ノ間ニ仙臺（川内）川アリ、其源伊佐郡ノ諸山ヨリ出ル、

旧八月二日

九月八日　雨（午前八時五十分市止ム、其後時々晴然）　土曜

午前第五時順次伊集院ヲ出発シ、薩摩迫ヲ越ヘ午前十一時三十分田上村ニ着、樺山中佐・川上少佐等ニ面会シ、夫ヨリ阪井少佐受ケ持ノ哨兵線ヲ巡検シ、聯隊本部ニ帰ル（上之園種田少将邸ヲ本部トス、参謀部モ同居）

一海陸ヨリ官軍大砲ヲ賊星城山ニ向ケ発射スル無数、但シ昼夜トモ、

一我聯隊第一大隊ト伊瀬知ノ隊トニテ、西田橋河流中程ヨリ武村ニ至ル中央ヨリ以東ヲ二ツニ分チ、右翼ヲ酒井ノ隊、左翼ヲ伊瀬知ノ隊ニテ哨兵ヲ配布ス（夜中鹿塞胸壁ヲ築ク）、

一我聯隊ノ第二大隊ノ内第一中隊ヲ援隊トス、第三中隊休兵ス、

一去ル三日夜別働第一旅団独立第一大隊吉村少佐ノ隊ニテ賊将貴島清ヲ銃剣ニテ突斃シタリ、吉田大尉現ニ貴島ノ刀ヲ持チ来ル、又独立第二大隊沖原ノ隊ニテ賊将邊見十郎太ヲ射撃ス、其頭部ニ中リ死セス、賊ノ本営ニ引取ル由、

一伊集院ヨリ上之園迄里数四里余、

一此日山縣参軍鹿児島ニ着陣ス、

旧八ノ三日

九月九日　晴　日曜

午前第四時三十分、我哨兵線ノ右翼ニ賊来リ、互ニ発射ス、暫時ニシテ止ム、

一午前六時、予岡澤中佐ト同道、参軍川村海軍中将ノ本営ニ至リ、午後第二時過本部ニ帰ル、

一別働第一旅団付工兵着陣ス、

一暗号左之通被達、

問号	答号
九日　光平	美濃
十日　實盛	佐倉
十一日盛綱	盛岡
十二日知度	鞆津
十三日兼光	加島
十四日頼盛	四ツ谷
十五日重能	重岡

一午後六時前、山縣参軍ヨリ渡邊中佐ヲ以、哨兵線ノ儀ハ追而部署別段被相達候得共、延岡烏帽子(可愛岳)山ノ轍モ有之、申迄モ無之事ニ候得共、精〻注意可有之旨被相達候事、但シ樺山中佐ヘ直ニ渡辺中佐ヨリ通スヘクノ処、予ニ渡辺依頼ニ依リ直ニ手紙ヲ以、右ノ次第ヲ樺山中佐ニ相通知候事、

一哨兵配布昨日ノ如シ、

一官軍大砲ヲ発ス、昨日ノ如シ、

一賊ニ使役セラルヽ人夫、我隊ニ降伏スル者数人アリ、

一此夜十一時頃、吉村少佐ノ哨兵線并第三旅団哨兵線右翼ニ当リ、頻リ戦争(ニ脱カ)発射ノ声喧シ、二十分間余ニシテ止ム、

旧八ノ四日

九月十日　曇午後細雨　月曜

一午前八時、我哨兵ニ降伏スル賊人夫谿山松山村厚地新太郎ト云者、糺問スルニ、本月二日戸長ノ達ニヨリ、鹿児島岩崎賊ノ本営ニ至リ、人夫頭トナリ、七日迄使役セラレ、同八日ノ夜新正院(照)ノ山間ヨリ脱出ス、○賊勢三百人計、外ニ人夫五十名余アリ、○岩崎島津邸ヲ大本営トシテ、桐野・村田・別府ノ三人居ル、邊見ハ深疵ト云、○兵糧八十俵アリ、薬品乏シト云、○西郷ノ事ハ一切不知ト云、○所〻要地ヲ警備アル由、○其他口供長キヲ以略之、

一午前十一時過、川村参軍哨兵線巡回ノ途中我本部ニ来リ午飯ヲ喫シ、休息シテ午後第一時頃カヘル、但シ随行人アリ、

其方面共賊中ヨリ投シ来ル者アラバ、仮令我ヨリ渠ニ陥リ居シ人夫タリトモ、之ヲ放解セズ、其手ニ於テ堅ク監護シ置欤、又ハ警視之手ニ可引渡(敵脱カ)、此段相達候事、

九月九日夜　　山縣参軍

岡澤中佐宛

追而至急順達、回尾ヨリ返却有之タシ、

別紙意見書御一覧相成度候也、

九月八日　　山縣参軍

山田・野津・谷・高島少将宛

長官不在ノ分ハ先鋒司令ニテ閲読有之タシ、

征討参軍山縣有朋　謹テ出征将官諸君ニ白ス、嚮キニ都ノ城攻撃ヨリ以来、各処之行軍一モ意ノ如クナラザルハナク、容易ニ大敵ヲ駆逐シ、遂ニ長井村之合囲ニ至リシハ、諸君ガ親シク経歴セラレタル所ニシテ、其ノ

此如クナリシ所以ハ、一モ諸君ノ指揮ト共ニ、各軍ノ動作進止善ク機ニ合シタルノ故ニ因ラザルハナシ、此時ニ方テヤ、賊勢窘縮復タ為スベキノ余地ナキ者ノ如シ、而シテ一旦忽チ可愛(えの)之変アリ、是ヨリシテ諸君一段ノ勉励ニヨリ、急行追撃至ラサル所ナシト雖モ、一タビ之ヲ三田井(みたい)ニ逸シ、二タビ七ツ山ニ逸シ、三タビ鬼神野ニ逸シ、逸スル者三タビニシテ、遂ニ渠ヲシテ少立息セシム、此間或ハ風雨地勢ノ之レガ障碍ヲナスモノ無キニ非ラスト雖モ、然レドモ搔痒ノ歎ニ堪ザルモノ少シトセズ、已ニシテ三好少将海路ヨリ重富(給良郡)ニ上リ邀撃ス、而シテ三好ノ発スルヤ、亦風浪ニ沮セラレ行程二日ヲ誤リ、纔ニ横川(給良郡)ニ至テ既ニ渠ト会シ、眞幸街道ノ狭隘ニ邀フルコトヲ得ス、遂ニ四タビ逸シテ縦ニ其ノ旧拠ニ入ラシメタリ、有朋ヲ以テ之ヲ視ルニ、此賊ヲシテ転遷此極ニ至ラシメントハ、実ニ意想ノ外ニ在リ、諸君ト雖トモ之ヲ反求セバ、或ハ有朋ト此感ヲ同ウスル者ナキニアラザルベシ、雖然今ヤ幸ニシテ合囲再ヒナル、是寔ニ諸君拮据収捨ノ然ラシムル所、有朋須ク復タ多言スベカラザルナリ、而シテ来ラザルヲ恃マズ、待ツベキヲ恃ムハ警戒ノ至訣、他日ノ覆車、之ヲ今日ノ殷鑑ト為スハ慎重ノ要領、乃チ有朋ガ心ニ思フ所、未タ輒チ之ヲ包蔵ス可ラザル者アリ、既ニ今日ニ於テ、我カ以テ恐ルヘキ者三ツノミ、一ニ曰ク、寡ヲ窺テ脱出、二ニ曰ク、嬰守死拒固気ノ相応ヲ待ツ、三ニ曰ク、我諸軍ノ蜂圧ヲ待チ、突然精鋭ヲ一隅ニ攢メ、囲ヲ衝テ我カ無備ノ後背ニ出ル是ナリ、此ノ事ハ間過(ママ)慮ニ属スル如キ者アリト雖トモ、之ヲ恐ルヽハ乃チ警戒慎重ノ在ル所ナリ、其レ此ノ如キナル時ハ、則チ今日ニ在テ我ガ首トシテ目的トスル所ハ、独リ守備ヲ先ニシ攻取ヲ後ニスルニ在ルニ非耶、蓋シ此レ等ハ諸君モ亦既ニ有朋ノ言ヲ須タズシテ、之ヲ心ニ独語スル者アラン、果シテ然レハ有朋ノ言亦未タ過慮ヲ以テ断ス可ラズ、諸君其レ善ク守備ヲ唯是レ益ゝ厳ニスルヲ務メヨ、望ム所ハ是レノミ、而シテ後チ夫ノ一挙覆巣ニ至テハ、尚重議スル所アルベキナリ、有朋謹言、

明治十年九月八日夜

右本書ノ儘ヲ写ス、

一午後第四時前、第二ノ第二中隊村井中尉引率シテ、当地着ノ旨本部ヘ届出ル、

但シ今朝市來出立、

一昨今ノ形勢周囲ノ囲已ニ致完全候、然ル処渠レ拠守以来已ニ一週ニ垂ントス、粮食ノ闕乏ハ自然免ル可ラスト被察候、付テハ、何時再度突出ノ挙動ヲ為スモ測ル可ラサル義ニ候得共、此際夜間ハ申迄モ無之、昼間ト雖モ、各哨兵線ニ於テ愈戒厳可為致、各位ヨリ其筋ヘ夫〻至急御警示相成度、此段態ト申進候也、

九月十日　　山縣参軍

高嶋少将殿

追テ長官不在ノ分ハ、先鋒司令ニテ閲読有度候、猶至急順達、回尾ヨリ御返却ノ事、

一伊集院ニ若干兵ヲ備置クベキ旨、山縣参軍ヨリ高嶋少将ニ可相通、樺山中佐ニ申聞ケ、同人ヨリ又予ニ通知アリタリ、依テ直ニ高嶋少将ニ報ス、

一哨兵所昨日ノ如シ、

一官軍大砲ヲ発ス、昼夜、

一賊モ数発大砲ヲ放ツ、

旧八ノ五日

九月十一日　雨（午前十一時三十分雨止時〻晴曇）　火曜

一午前第二第三時頃、両度ニ降伏ノ人夫二人、我哨兵所ヨリ護送ス、

一午後四時頃、団長高嶋少将鹿児島ニ着陣（但ン我本部ニ同居ノ岡沢中佐以下属官等本陣ニ、カヘル、）

一茨木中佐・古川少佐等来ル、

一即今各旅団哨兵持場大略左図面ノ如シ、（次頁ヘ）

此日海軍大砲ヲ武ノ丘ニ備ヘ、昼夜発射ス、○官軍各所ニテ大砲発スル前日ノ如シ、○賊亦此大砲ヲ打ツ数発、○賊ヨリ降伏スル人夫三人アリ、本陣ニ送リ吉出大尉ニ引渡ス、

旧八月六日

九月十二日　晴（午四時頃ヨリ曇夜ニ入雨降）　水曜

一午前七時過本陣ニ至リ、同十時過本部ニカヘル、

一午後四時頃、安部少尉軍旗ヲ以別ル、

但護衛シテ本部ニ着ス、

一午後五時頃、久宗中尉病全快シテ大隊ニカヘル、○同七時頃井上少佐以下着ス、聯隊本部ニ泊ス、此日ヨリ同居

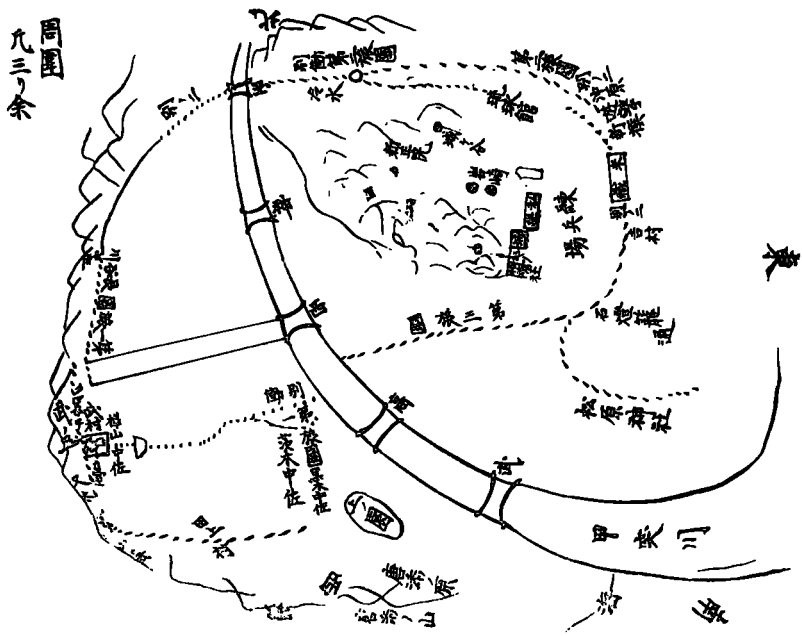
一官軍昼夜大砲ヲ発スル、昨日ノ如シ、

一我哨兵所昨日ノ如シ、

旧八ノ七日

九月十三日　晴（午後四時頃ヨリ微夜風雨降雷鳴）　木曜

一来ル十六日ヨリ廿二日迄之暗号左之通被定、



九月十二日　高嶋少将

問号　答号

十六日　憲實（ノリサネ）　野尻　ノジリ

十七日　義貞　淀　ヨド

十八　時能トキヨシ　戸ノ浦トノウラ

十九　護良モリヨシ　百引　モビキ

廿　忠顯タダアキ　竹田　タケダ

廿一　公綱キンツナ　木山　キヤマ

廿二　則村ノリムラ　野母　ノモ

一追々城中ヨリ脱帰人等有之趣、然ルニ右ハ過般モ申進候通（彼レ人足ハ素ヨリ）、我軍夫等ノ脱帰ト雖トモ軽易ニ取扱ハス、必ス一通リノ吟味ヲ遂ケ、然ル後護送兵ヲ付ケ、磯警視受継所ヘ護送致シ、其都度顛末当営ヘ届出相成度、将又取扱方ニ付テハ、部下ヘ夫々厳命相成度、此段層テ申進候也、

九月十三日　山縣参軍

各旅団長宛

右山縣参軍ヨリ被達候、付テハ降伏人有之都度、於該隊仮口供ヲ俱ヘ、本人ヲ当本陣ヘ護送可致旨、高嶋少将被達、

九月十三日

右高嶋少将ヨリ被達候ニ付、降伏有之都度於大隊取調、口供ヲ以当本部ヘ護送可致旨、両大隊ヘ相達ス、

九月十三日

一龍驤艦修覆中、雇人ヘ雛形ノ通印鑑相渡候条、右所持之者ハ無異儀通行差許候様、其向ヘ至急被相達度、川村参軍ヨリ被相達候事、

九月十三日

各旅団宛

印鑑雛形

番号
鹿児島県
○日雇引受証人
住所
雇人
姓名
何某

裏ニ
龍驤艦
焼印アリ

第九百十六号

去ル十日頃賊本営ニ於テ大会議有之、不日衆期之一戦ヲ決セントスル趣ニテ、汾陽・松本・山野田等ハ一新衣ヲ求メ、邊見ハ所持ノ金子并時計ヲ宿許ニ送ル手段ヲナス等ノ事有之、決心ノ模様相顕居候由、城中ヨリ手許ニ漏聞ヘ候、此件ハ多ク疑フヘキ者ニモ無之様被察候ニ付テハ、各旅団共一段緻密ニ守備イタシ、昼夜無抜目様、夫々御指揮相成度、此段申進候也、

九月十三日午后三時十分　山縣参軍

各旅団長宛

追而将官遠隔ノ地ニ所在ノ分ハ、先鋒司令ニテ閲読有之度、尚以刻付御廻達、終尾ヨリ返却有之度候也、

一官軍周囲ヨリ大砲ヲ発、昨日ノ如シ、

一我哨兵場所前日ノ如シ、

旧八月八日

九月十四日　晴　金曜

一午前七時過、馬ニテ本陣ニ至ル、暫時軍事ヲ議シ又本部ニカヘル、

但シ本陣ハ栗本島津邸、

一午後一時前ヨリ阪井少佐・安部少尉・眞鍋本承三名哨兵線ヲ巡見、冷水谷(ひやみず)ノ山上ニ至リ暮レニ向ヒ、半途ニシテ各本部ニカヘル、

一官軍大砲ヲ発スル事昨日ノ如シ、

一我哨兵場所前日ノ如シ、

旧八月九日

九月十五日　土曜

一官軍大砲ヲ発スル、前日ノ如シ、

一我哨兵所前日ノ如シ、

一コレラ病当県下ニ於テ流行候付、各自注意予防可致旨

達シアリタリ、
　但シ予防法略之、
一賊徒ニ組シ帰郷潜伏ノ者、来ル三十日マテニ自首セサル者ハ厳科ニ可処旨、県令ヘ総督本営ヨリ達シアリタリ、又各団ヘモ達シアリタリ、
旧八月十日
九月十六日　晴風　日曜
一午前八時頃、本陣ニ至リ、軍事ヲ議シ、午後本部ニ帰ル、
一官軍大砲ヲ発スル、前日ノ如シ、
一我哨兵持場前日ノ如シ、
一昨日熊本鎮台兵哨所ニ、賊二十人降伏スルト云、信偽詳ナラス、
一長崎ヨリ来ル品川丸乗組ノ巡査、コレラ病ニテ死ス、知林島（ちりんがしま）ニ埋ム、依テ軍人等各自注意可有之旨、山縣参軍ヨリ被達、予防法略之、
旧八月十一日
九月十七日　晴　月曜
一午前第五時頃ヨリ本陣ニ至リ、近海ニテ漁猟スルヲ見ル、午後八時頃本部ニカヘル、
一官軍大砲ヲ日々増加発スル事前日ノ如シ、
一我哨兵所前日ノ如シ、
一此日城山鐘衝堂焼亡ス、
一此日野溝少尉来リ云フ、去十四日頃、別ノ二旅団ヘ降伏スル者十余名アリト云、
旧八月十二日
九月十八日　曇（午後六時過雷ニ微雨）　火曜
一コレラ病人夫ニ伝染ニ付、人夫減少云々、山縣参軍ヨリ各団ヘ達シアリ、
一午後七時過ヨリ処々哨兵所巡回、午後八時頃本部ニカヘル、
一官軍大砲ヲ発スル、前日ノ如シ、
一賊夜ニ入大砲ヲ発スル二三発、
一我哨兵所前日ノ如シ、
旧八月十三日
九月十九日　雨　水曜
一明二十日午前四時三十分ヨリ城山正面ヲ虚撃ス、就テハ大砲ノ矢先、我哨兵所カ第一聯隊哨兵所カニ当ル、依テ海軍士官一名来リ、矢先ヲ砲台ニ知ラス為メ火矢ヲ上ル、其時哨兵何レヘカ転移イタスヘキ旨、頓野大

尉ヲ以高嶋少将ヨリ被達、
右ノ旨直ニ芝大尉ヲ以、大隊長并中隊長ニ相達ス、時午後第七時ナリ、
一我哨兵所前日ノ如シ、
一官軍大砲ヲ発スル前日ノ如シ、
一明二十日午前九時本陣ヘ予ニ出頭ノ旨申越シタリ、
旧八月十四日
九月二十日　曇（午後第三時過ヨリ微雨）　木曜
一午前第五時頃ヨリ昨日部署ノ如ク、城山正面ヲ虚撃スル、賊之レニ応ス、然レドモ僅カニ時十四五分間ニシテ止ム（此時新撰旅団兵一名、即死、傷者詳ナラス）
一午前八時頃、本陣ニ至リ軍議アリ、午後一時前本部ニカヘル、
一官軍大砲ヲ発スル前日ノ如シ、
一我哨兵所前日ノ如シ、
一此日山縣・川村両参軍ヨリ、賊徒攻撃部署ノ書類ヲ渡サレタリ、然ルニ時日ハ未タ確定セス、追テ達セラルル筈ナリ（攻撃部署書類ハ、長キヲ以略之）
旧八月十五日
九月二十一日　雨　金曜
一官軍大砲ヲ発スル前日ノ如シ、
一我哨兵所前日ノ如シ、
一此日谷少将・高崎（嶋）少将ヨリ城山賊巣攻撃ノ立約ヲ奉シ協議ヲ遂ケ、別紙ノ通部署相定ムル云々、山縣参軍ニ進達セラレタリ、○（別紙部署ノ書類ハ略之）
一此日島津邸（元二ノ丸）砲丸ノ為メニ焼亡シタリ、
一此日賊ノ山野田某・河野某、別働第一ノ吉村少佐ノ隊ニ来リ、歎願有之旨申出ルニ付、直ニ軍団本営ニ護送シタリト本陣ニテ聞ク、
一午後阪井少佐ト共ニ本陣ニ至リ軍事ヲ聞、同七時頃本部ニカヘル、（此日本陣ニテ、角力ヲ見ル）
一陸軍少将大山巌
攻城砲隊指揮長官被仰付候事、
十年九月十九日　征討総督本営
右之通御達相成候ニ付、各旅団及ヒ熊本鎮台等之砲隊ハ、同人之可決指揮、此旨相達候事、
九月十九日　軍団本営
右高嶋少将ヨリ被相達候事、

九月廿一日　即日我隊ヘモ相達ス、

一来ル廿三日ヨリ至廿九日暗号、左之通被定候条、此旨相達候事、

九月廿一日　高嶋少将

問　号　答　号

廿三日　重成シゲナリ　重岡　シゲヲカ

廿四日　基次モトツク　元山　モトヤマ

廿五日　昌幸マサユキ　松江　マツエ

廿六日　忠隣タタチカ　多度津タドツ

廿七日　正純マサヅミ　前野　マエノ

廿八日　直政ナヲマサ　奈良　ナラ

廿九日　高虎タカトラ　高尾　タカヲ

旧八月十六日

九月二十二日　曇　土曜

一午前七時過、本陣ニ至リ、同十時過本部ニカヘル、

但ン馬行、

一午前十時頃、河野少佐・津田軍吏補来ル、

一昨二十一日別ノ第二旅団ヘ降伏二名アリト、河野少佐云ヘリ、

一官軍大砲ヲ発スル前日ノ如シ、

一我哨兵持場前日ノ如シ、

旧八月十七日

九月二十三日　曇（午前五時ヨリ暫時雨降夫ヨリ又日照又曇、）　日曜

一午前九時頃、本陣ヨリ出頭可致申来リ、直ニ阪井少佐ト共ニ本陣ニ至ルニ、明二十四日午前第四時ヨリ、予テ部署ノ如ク城山攻撃可致旨被達、依テ阪井少佐直ニ本部ニカヘリテ、右ノ次第ヲ部下前田大尉以下達セシム、

一午後第四時前、予本部ニカヘル、賊山野田某ヲ賊営ニカヘス、時午前十一時過ナリト云、

一我哨兵所前日ノ如シ、

一官軍大砲ヲ発、前日ノ如シ、

一午後八時前、阪井少佐明日攻撃ノ都合ニヨリテ、第一ノ第二中隊ト加藤大尉ノ一中隊ト工兵トヲ引率シテ、玉江橋ノ近傍迄繰出シタリ、

旧八月十八日

九月二十四日　晴（正午十二時過ヨリ大雨、雷一声、三時頃暫時雨止ミ、又降ル、徹夜）　月曜

一予テ部署ノ如ク、城山賊巣ヲ周囲ヨリ攻撃ス、午前第四時過開戦、暫時激戦ナレトモ、遂ニ午前七時過賊将西郷・桐野・別府・村田・邊見等以下数十名、敗レテ

官軍ノ弾丸ニ中リ、岩崎谷ヲ下ル詰角ノ胸壁中其地近傍ニ斃ル、依テ同時全ク止戦、降伏人数多俘虜モ数多アリ、然レトモ尚城山ニ哨兵ヲ配布ス、（此日官軍ニモ死傷アリ、分捕大砲数門其他諸品多数アリ）

一午前九時頃、山縣・川村両参軍、谷少将・高嶋少将、茨木・予等ト共ニ西郷・桐野外一名某ノ死体ヲ検ス、又海陸軍医ヲシテ其疵所ヲ検査セシメタリ、

一午前十一時過、予阪井少佐ト共ニ本部ニカヘル、

一午後第二時頃、阪井少佐・井上少佐・伊瀬知大尉等ト共ニ本陣ニ至ルニ、酒宴ヲ張リ楽ヲ奏シ、本日ノ勝利且鎮静ニ至ルヲ祝ス、午後十一時頃本部ニカヘル、

一酒ニ樽第二中隊ヘ本日ノ慰労トシテ差遣サル、

一我哨兵所前日ノ如シ、

一午前七時過、賊敗死後銃砲ノ発声絶シ、殊ニ午後大雨、実ニ寂然タリ、然ルニ其欝屈ヲ慰スルガ為メニ、武ノ岡ノ山上ニ夜八時頃ヨリ花火ヲ雨中ナガラ発揚シタリ、

一今朝開戦暫時ニシテ、城山正面島津邸其他ニ放火、又我第二中隊ハ新照院ノ山ヲ攻収シテ、城山ノ背後ニアル士族邸ニ放火（元聯隊本部）、城山背後南北ノ山ヲ一時ニ占領スルニ、賊ハ或ハ斃死シ、或ハ岩崎谷道ヨリ島津某邸ノ方ニ敗走、是レヨリ前キ城山背後ノ山ヲ占領スル時、別ノ第二旅団ヨリ線外ニテ花火ヲ発揚シタリ、

一我第一ノ第二中隊死傷七名（死一名、重軽傷六名）、

一賊ノ斃ルヽ者百五十三余名、内岩崎谷下リ詰ノ胸壁中ニ斃ルヽ者、桐野・別府・邊見等以下三十八名、西郷ハ少シ隔テ同処島津某邸ノ辺ニ斃タリ（腰部ニ小銃ノ跡アリ）、首ハ無之、後首ハ埋匿スルヲ索得タリ、

旧八月十九日

九月二十五日　雨（午前ヨリ雨止、シカレトモ晴ニ至ラス）　火曜

一午後城山哨兵ヲ解ク（但シ参軍ノ命ナリ）、

一我哨兵所前日ノ如シ、

一西郷以下ノ死体ハ岩村県令貰受丑葬シタリト云、

一高嶋少将本部ニ来ル、

旧八月二十日

九月二十六日　晴　水曜

一午前八時、第三旅団三浦少将ノ本陣ニ至リ、午後五時過本部ニカヘル、

一我哨兵所前日ノ如シ、

一丸亀ニ帰営スル人員可取調旨、部下ヘ相達ス、

一明二十七日総督宮御着艦ニ付、佐官以上御出迎可致旨

被達候事、

一此日第二大隊本部、元砲廠部ノ跡ヲ本部トシ、井上少佐始メ移之、

旧八月二十一日

九月二十七日　晴　木曜

一午前七時前、阪井・井上等ト共ニ田ノ浦製鉄所辺ニ至リ、総督宮御着艦ニ付奉迎ス、直ニ宮ハ同処島津邸ヲ本営トセラル、午後二時本部ニカヘル、

一午後三時、高嶋少将ヨリ、我聯隊整列前ニテ総督宮御達ノ趣意ヲ述ヘ、且賊徒平定ニ至リシモ、一統ノ尽力ニアル云々ヲ述ヘ、而シテ解団セラレタリ、

別働第一旅団

賊徒平定ニ付、諸兵隊各自本営江帰営被仰付候、此旨相達候事、

十年九月二十七日　征討総督本営

一賊徒猖獗多ク月日ヲ経、今也元悪誅ニ伏シ、西陲全ク安シ、我カ

天皇陛下ノ宸襟ヲ慰セラルヽ、果シテ何トカナス、是一ツモ卿(ニカ)等各将校指揮ノ其宜シキヲ得タルニ由リ、下士兵卒ニ至ルマテ殊ニ感憤勉励事ニ従ヒシノ力ニ因ラサルハナシ、余深ク之ヲ喜フ、茲ニ本営ヲ此ノ地ニ移ス、由テ乃チ卿等ヲ招キ聊カ微衷ヲ表ス、其佐尉官ノ此席ニ列セサルモノヽ、及ヒ下士兵卒ハ卿等其レ幸ニ予カ意ヲ瞟示セヨ、

右御達ニ相成、我部下ヘ夫々相達候事、

十年九月廿七日

一解団ニ付、午後二時前ヨリ喞兵ヲ止メタリ、

一此日解団ヨリ第十二聯隊ニ復シタリ、

旧八ノ二十二日

九月廿八日　晴　金曜

一午前九時、予両大隊長以下尉官ヲ率ヒテ本陣ニ至リ、高嶋少将ニ面謁シテ平定ヲ祝ス、且戦時中ノ恩儀ヲ謝ス、少将一統ヘ酒肴出ス、而シテ午前カヘル、予ハ午後二時前本部ニカヘル、

一昨廿七日午後ヨリ東京鎮台ノ兵ヲ始メ帰営ニ付、順次鹿児島港出艦ニ相成ル、且又熊本鎮台兵其他陸行ニテ鹿児島出発スルモアリ、

一此日総督宮御帰京ニ付、鹿児島港午前出艦セラレタリ、

一此日午後西澤軍吏補御用都合ニ依リ、丸龜ニ向ケ鹿児島出艦、

一今般ノ役ニ即死并負傷後死没ノ人員、第一大隊ニ石川大尉以下(下脱カ)五十四名、外ニ兵卒二名、見竝要助等病死、第三大隊ニ興津大尉以下二十八名、外ニ兵卒一名、従僕一病死、

惣計八十七名(ママ)、右取調書本陣へ出ス、

旧八月二十三日

九月廿九日　晴　土曜

一九月三十日ヨリ十月六日迄、

暗号

問号		答号	
三十日	晴元ハルモト	萩　ハギ	
一　日	基氏モトウジ	最上　モガミ	
二　日	義明ヨシアキ	横川　ヨコガハ	
三　日	信長ノブナガ	延岡　ノベヲカ	
四　日	惟政コレマサ	兒島　コジマ	
五　日	久秀ヒサヒデ	人吉　ヒトヨシ	
六　日	定正サダマサ	堺　サカイ	

右昨廿八日被相達候ニ付、部下へ直ニ相達候事、

一此日第二大隊、上伊敷ヨリ上園(うえのその)即聯隊本部ノ隣家東郷一介方ニ転移ス、

一此日岡澤中佐・土屋大尉等鹿児島港出艦セラレタリ、

一山田少将・黒川大佐等以下出艦セラレタリ、

一午後高嶋少将ノ本陣ニ至リ、暫時シテ本部ニカヘル、

一西郷隆盛以下三十九名浄光明寺山ニ仮埋葬、其他百十四名各所ニ仮埋葬イタシ候旨、県令ヨリ各所ニ掲示アリ、

一午後八時過、降人士族木脇助三ヲ阪井少佐ヨリ差出、

旧八月廿四日

九月三十日　晴　日曜

一午前八時十分、降人木脇助三ヲ警視出張所ヘ護送ス、

一午前八時ヨリ運輸局并高嶋少将本陣等ニ至リ、午後本部ニカヘル、

一午前三時、左ノ通乗組隊号并航海着地名等、鹿児島運輸局ヘ相通知候事、

鵬翔丸　但シ五百五十人乗

右ハ広島鎮台丸亀(亀脱カ)営所歩兵第十二聯隊第三大隊、讃州高松着、

品川丸　但シ千百人乗

右ハ広島鎮台丸営所歩兵第十二聯隊第一大隊・第二大隊乗組、讃州多度津港着、

一午後四時ヨリ第三大隊順次鵬翔丸ニ乗組、鹿児島出艦ノ事、

一午後六時、

明十月一日午前八時品川丸乗組ノ儀、第一第二大隊其他医官・会計等ヘ相達候事、

旧八月廿五日

十月一日　晴午前七時暫時ノ間雨　月曜

一午前八時、第一第二大隊其他部下一統、順次品川丸ニ乗組此人員千三十四人、ナリ外ニ馬二疋、

午前十一時過、鹿児島出艦、夫ヨリ隅州佐多岬左ニ見テ、日向洋ヲ夜中経過ス、

旧八月廿六日西北風

十月二日　晴午前八時頃疏雨曇　火曜

一午前六時過、土州ヲ右ニ見ル、洋中平穏ナリ、

一午後三時頃、又驟雨暫時、

一夜十一時頃ヨリ雨、

旧八月廿七日

十月三日　曇時々晴又雨　水曜

一午後四時過、多度津着、直ニ上陸ノ手都合ナスニ、不都合且風悪シク、漸ク一中隊而已上陸ス、余滞船、

十月四日　晴

一午前十二時半、惣員丸亀営所着、分列式ヲ行ヒ、凱陣ヲ祝シ後入営ス、

（表紙ニハ十月九日マデトアルガ、コレ以下ハ錯乱竄入ガアツテ意味不明ノ点アリ、ソノママニシタ、）

八時雨　千三十四人十時四十分乗組済、十一時出艦

三十日午後四時乗組

鵬翔丸　五百五十人乗　第三大隊

品川丸　千百人乗　第一・第二大隊・聯隊本部

右隊号并着地名等、鹿児島運輸局ヘ通知候事三十日午、後三時過

一第一大隊石川大尉以下五十四名、戦死并負傷後死没ノ者共、第一中隊・第四中隊各二等卒二名病死、外見竝要助病死、

一第二大隊興津大尉以下二十八名戦死、負傷後死没ノ者、第三中隊二等卒病死一名、外ニ従僕一名病死、

〆八十七名、

一午後七時頃、大島軍吏補宿割トシテ先上陸、同八時頃揚営隊上陸、

一八時頃、予兵庫丸ニ至、少将ニ面シテ九時前船ニカヘル、

一同十一時前ヨリ端船来リ惣員順次乗組、翌十五日午前四時半松橋ニ着、瓦焼師黒田文平方ヲ聯隊本部トス、

一八日雨（午前八時五十分雨止夫ヨリ晴曇数）

午前五時（マメツ）　午前十一時三十分着（マメツ）

九日午後二時過（マメツ）　六日午後三時前

六時四十五分、会計赤松着（マメツ）

午後二時頃（マメツ）　市來（マメツ）

水俣ヨリ一里三合袋村休（マメツ）

高鍋ヨリ都濃ヘ四リ余、都濃ヨリ美々津ヘ三リ（少シ不足）、美々津ヨリ細島ヘ四リ、熊本丸ニ乗艦、海上日向洋ヨリ大隅・薩摩接岸、肥前天草ノ内海通過肥後松合沖着ス、此海上里数百五十余里ト云、松合沖ヨリ端舟ニ乗組松橋ニ着陸ス、

鹿児島製糸所十八間五十間ナリ、

二十二日藤澤専二郎熊本ヨリカヘル、

百五十三名討死　三十九名午後二時カヘル、百六十九人第一ノ聯隊第二ノ第一中隊加藤大尉、

西郷弾丸腰部ニ中ル、別府頭ヲ切取リ他ニ埋隠スト云、

而シテ別府死スト云、

九月二十五日午後田ノ浦製糸所・製鉄所等ヲ見物ス、
同行阪井・久宗（マヽ、七名）等ナリ、

西南之役探偵書

壱　号　大分県令ヨリ鹿児島県下ノ景況上申
二　号　同県令ヨリ熊本県並日向地ノ景況上申
三　号　九州出張内務属官ヨリ熊本県下ノ景況上申
四　号　大分県令ヨリ管内外ノ景況上申
五　号　同上
六　号　同上
七　号　長崎県令ヨリ肥後地方ノ景況上申
八　号　愛媛・大分両県令ヨリ大分県下ノ景況上申
九　号　同上
十　号　同上
十一号　石井内務権大書記官ヨリ熊本県下ノ景況上申
十二号　長崎県書記官ヨリ熊本県下ノ景況上申
十三号　賊医兒玉某ノ日記
十四号　河野幹事ヨリ三好判事ノ書翰進達
十五号　三好判事ヨリ日豊地方ノ景況上申
十六号　石井権大書記官ヨリ豊後地方ノ景況上申
十七号　西村権少書記官ヨリ豊後地方ノ景況
十八号　鹿児島県令ヨリ同県下ノ景況上申
十九号　三好判事ヨリ豊後ノ景況上申
二十号　河野幹事ヨリ鹿児島地方之景況進達
二十一号　同上
二十二号　西村書記官ヨリ豊後ノ景況上申
二十三号　同上
二十四号　河野幹事ヨリ鹿児島県下之景況上申
二十五号　西村書記官ヨリ豊後ノ景況上申
廿六号　三好判事ヨリ豊後ノ景況上申
廿七号　西村書記官ヨリ日向口ノ景況上申
廿八号　鹿児島県官ノ同県下ノ日記
廿九号　品川大書記官ノ籠城日記
三十号　熊本県令ノ籠城日記
三十一号　福岡県下賊徒ノ景況
三十二号　山口県下賊徒ノ景況

一　大分県令ヨリ鹿児島県下ノ景況上申

別紙上申之景状ニ付テハ、暴挙出兵之模様ハ探偵上ニモ不相見候得共、自然多勢ヲ以当管内ヲ押テ通行候義モ難計ニ付、熊本鎮台ヘ為予備出兵相成度旨、及照会置候得共、未タ報答無之、且該地モ薩より之衝地ニ付、分兵之義ハ先ツ難出来哉ニ被存候、且肥筑地方ヘハ追々出兵警備厳粛之趣、独当県空虚ニ相成居、就テハ若シ多勢管内ヘ押通致シ候節ハ、如何之処分仕可然哉、至急相伺候条予防方詳細御示諭被成下度候也、

明治十年二月廿日　　大分県権令香川眞一

内務卿大久保利通殿

鹿児島県下景況ニ付上申

鹿児島県下之景況ハ、去ル十五日及電報置、猶精々各地ヘ探索之者派遣致置候得共、薩堺ハ往来ヲ緊鎖致居候義ニ付、延岡以西之事情ハ確タル義何分難探知候趣ニ付、左ハ延岡派出探偵者ノ報知之概略ニ候、

鹿児島ヨリ本月二日出ノ達書（趣意不詳）、六日延岡大区扱所ニ着、同七日同所区長ヨリ士族一般ヘ協議有之（其趣意亦不詳、去レトモ薩ヨリ東京ヘ出願ノコトアリ、故ニ宮崎ニ屯集シテ薩ノ後命ヲ待ソト云）、夫ヨリ三人乃至五人ツヽ、銃器ヲ馬ニ付シ、宮崎へ向ケ十四日迄百余人（或ハ弐百余名トモ云）出発ス、右ニ付為手当延岡市中之者へ、身代ニ応シ少ハ一百円、多ハ五六百円ノ賦金ヲ命シタルニ、当時金融梗塞之際人民苦困不少モ、不得止金或ハ米ヲ差出居候、然シ一般人民ハ依然旧正月ヲ祝シ居レリ、

一薩摩ヨリノ郵便ハ相絶タリ、宮崎ヨリノ郵路モ一旦ハ相塞ト雖モ、十八日ヨリ復旧セリ、

一延岡ニテ聞知スルニ、佐土原・飫肥・高鍋士族陸続薩行スト、尤モ延岡ノ士族モ十四日より宮崎地ヲ発シ、公然帯刀、銃ヲ携ヘ薩行スト云、同所ヨリ五里先ニ山ノ口ト云フ所アリテ、番兵厳ニ旅人ヲ検査スル由、

一宮崎警察署ハ八日ヨリ引払ヒ、同所支庁・裁判所モ十四日閉署シ、裁判所長鶴峯某ハ小倉ニ向ケ出発セリト云、

一兼而鹿児島ヘ為説教入県スル僧徒ハ、不残捕縛シ（或ハ海ニ投スルモアリト云説アリ）、其他ニ府県ヨリ入込居候者ハ勿論、薩州ヨリ東京ヘ出仕スル官吏・巡査等帰省ノ者モ、不残就縛或ハ客舎ニ幽閉、他ニ出サヽル由、右ハ西郷隆盛ヲ暗殺ノ聞エアルヨリ、劇徒憤激此ニ至ルト云、就テハ近日

ノ内数万之兵ヲ以テ東京ヘ押出ノ景状有之、已ニ壱万余ハ道ヲ延岡ヨリ豊後地ニ取候趣ニテ、延岡宿屋ヘハ宿割厳敷達シ相成居候趣ニ候得共、当県ヘハ何等ノ儀モ不申越、又士輩入込候義モ無之候、

一右之外追テ探偵確実ノ報ヲ得候ハヽ、更ニ可及急報候得共、先不取敢此段上申候也、

明治十年二月十九日　　大分県権令香川眞一

内務卿大久保利通殿

二　大分県令ヨリ熊本県並日向地ノ景況上申

熊本県并日向地ノ景況上申

一本月廿日午後何時カ不詳鎮台兵一中隊、熊本県下川尻ヘ出兵之処、賊ノ為メニ捕獲セラレ、僅カ十三名翌廿一日午前十時脱帰スルヲ得、同日賊兵熊本ヘ侵入、城ヲ距ル拾町計ノ山ニ拠リ、午後五時三十分頃戦争ヲ初メ、廿二日午後五時迄勝敗不相知、熊本士族ハ三党ニ分レ、一ハ神風連之残徒三百人程、現ニ鹿児島之賊徒ニ左袒、一ハ千人余ニシテ熊本城ヲ乗取リ、尋常薩人ニ渡スト云ヒ、又一党ハ四千人程某山ニ屯集、薩人ノ挙動ヲ察シタル上、速ニ上京、

皇帝陛下ヲ守護奉ルト主唱スル由、

一本月十九日飫肥ノ士族凡五百人戎服ヲ着シ、刀剣ヲ帯シ小銃ヲ提携、隊伍ヲ整ヘ高鍋ニ入込ミ、市中之要口ニ番兵ヲ置キ、厳重警衛スル由、右士族輩過日薩ノ国境ニ出勢随従ヲ乞フニ、一小隊丈随従ヲ許サレ、残徒ハ勝手ニ進退スヘシトノ事ニテ、種々評議ヲ尽シ夫々出勢之用意ヲナシ、日向高千穂豆原通リ熊本ヘ向ケ、廿一日延岡着、廿二日高千穂新町ヘ着スル由、

一延岡士族ハ過日宮崎支庁迄二百名余出張、薩兵ニ随従ヲ乞フト雖トモ許サレス、廿日延岡ニ引取リ、所々ニ集会ヲナシ議論紛々トシテ決セサルニ、飫肥士族ノ延岡ニ着スルニ依リ、士族一戸ニ五円余ノ募金ヲナシ、壮健ノ者百四五十名ヲ撰ヒ、飫肥士族同様高千穂ヨリ熊本ヘ向ケ進ム景況ノ由、

一高鍋ハ区長黒水長慥外二三人、事情ヲ察スル為メ鹿児島ヘ出頭中ニ付、士族輩ハ出勢之用意ヲナシ、区長ノ帰郷ヲ待チ進退スル由、

右ハ熊本并日向地ヘ差出置候偵者ヨリ之報知ニ候、当県下ハ即今平穏、士族輩ニ於テモ猥リニ動揺スル萌モ

無之、精〻注意尽力罷在候条、此段及上申候也、

明治十年二月廿三日　　大分県権令香川眞一

内務卿大久保利通殿

三　九州出張内務属官ヨリ熊本県下ノ景況上申

私共儀、官林調査之命ヲ奉シ、昨年来九州各県巡回罷在候処、今般戦争之景況熊本県区戸長より実地目撃之概略申越候間、不取敢別紙及上陳候也、

明治十年三月二日　　内務十等属原順太郎

同　九等属山本章造

内務卿大久保利通殿

追テ、此先キ之景況ハ実地ニ就キ探偵致シ、可及上陳心算ニ有之候事、

熊本県下戦争景況探偵書

二月十六日区戸長ヲ会シ、地租改正収穫討議ヲ開ク、

十七日討議止ム、蓋シ薩人叛跡アレハナリ、

十八日一等属・四等属某水俣駅ニ至リ薩人ニ応接ス、

十九日鎮台熊本城ヲ焼ク（誤テ鎮台役局ヨリ出火ノタリトノ説アリ）、市中ニ延焼ス、

賊ハ八代小川ニ宿ス、

廿日火勢蔓延、市中概略焼盡ス、賊ノ候兵川尻ニ赴ク、

廿一日賊徒官軍ノ候兵ヲ川尻ニ討ツ、官軍手負六七名、

廿二日賊徒台ノ木村ヲ宿陣トシ、熊本ニ迫ル、両手ニ分裂シ、一手ハ京町ヨリ、一手ハ槇崎村本妙寺牟田ヨリ囲ム、此日賊徒植木ニ分隊ス（此賊旧士或ハ土民ノ類ト云）、官軍木ノ葉村ニ陣シ、向坂ニテ戦端ヲ開、賊勝利、官軍手負十五六名、

廿三日官軍ハ境木、賊ハ田原ヨリ砲戦ス、賊直ニ進撃、刀剣ヲ以血戦ス、為メニ官軍隊伍ヲ乱シ木ノ葉ニ退ク、

賊木ノ葉山上ニ攀リ砲発、官軍支ユル能ハス、南ノ山手ニ登ル、之ヨリ樹木蔽遮、或ハ弾丸達セス、勝敗決セス、

夜ニ至リ官軍川床（玉名市）ニ退ク、

廿四日賊徒伊倉ヨリ高瀬ニ至ル、同所ニテ戦端ヲ開ク、

双方手負討死アリ、最モ賊徒ノ内熊本人旧郷士或ハ旧卒土民ノ類多シ、

廿五日賊ノ候兵六拾名、伊倉ヨリ大濱ニ至リ、高瀬川ニ沿テハ（繁根木）子ギ村ニ至ル、官軍凡四拾名川床ヨリ高瀬ニ至ル、

午後一時過岩崎原（玉名市）ニテ戦フ、賊二名官軍壱名討死、

午後三時過キ官軍山田村（玉名市）ニ凡二小隊、玉名・川床ニ凡弐

千余人、賊五百余人立願寺・中村ニ陣ス、接戦已ニ廿六日午前二時ニ達ス、勝敗決セス、双方手負死人アリ、此日熊本県士族古庄養拙（賊ニ応スルノ見込アリ）福岡県ニ至リ、官軍ノ景況ヲ探偵シテ熊本ニ帰ル、

廿六日賊凡二百名伊倉ヨリ川床ニ向テ進ム、官軍向津多・寺田ノ両所ヨリ、凡六百余ノ勢ヲ以不意ニ襲フ、賊敗走、此日熊本県下七大区〻長前田一角、高瀬村戸長梅田半次官軍ノ先導ヲナシ、地ノ理ヲ示スト云ノ説アリ、且高瀬町区務所ニ蔵スル郷備金壱萬三千円、川島村廣瀬多門ノ貯金六千円賊ノ為メニ被奪タリ、尤賊ハ熊本県下七大区一小区平原村春木某等先導ノ疑アリ、

賊徒ノ勢ハ熊本ヲ囲ム者凡六千、植木・伊倉ニアル者凡弐千、然シテ熊本県旧郷士・旧卒士民賊ニ応スル者、挙テ算ヱ難シ、首鼠両端ヲ懐クモノ間〻又有之、従来ノ士族ハ熊本旧知事（細川護久）ノ帰郷ヲ切ニ希望ス、之レ無他旧知事ノ命ニヨリ方向ヲ定メンコトヲ希フモノト云、且士族之説ニ、今日ノ士族ハ兵職ヲ帯ザレハ、已レヨリ進ンテ官軍ニ応スルノ理ナシト雖トモ、今朝命アルカ旧知事ノ命アラハ、直ニ賊ヲ括（本ノマヽ）シテ之ヲ破ント議スル者多シト云、

賊植木・伊倉ニアルモノハ、該地ハ熊本街道ノ咽喉ニシテ枢要ノ地ナレバ、此両地ヲ以賊ノ要地トシ、官軍ノ進途ヲ沮マンカ為メト云、

熊本県人大禄ヲ辱フスル者ニシテ、賊ニ通スル者ハ三淵榮次郎ナル者アリト云、本人タルヤ、本年一月士民蜂起ニ関スル者ナリ、賊ハ一歩進メハ則其域内ハ勉メテ之ヲ説キ、懐クルニ三年ノ免租ヲ口実トスル説アリ、

賊人夫ヲ役スルニ賃金ヲ吝マス、然ラサルモ賊ニ応スルノ色アル土民等、忽チ賊ノ為メニ煽動サル〻ト云、

賊ノ使用スル金ハ悉ク紙幣ヲ用ユト云、

熊本城ハ該台兵員依然トシテ籠城ス、時アツテ砲発スルアリト雖トモ、血戦ニ及ハス、

官軍ノ使役スル人夫ハ賃金ノ寡少ナルト、帰期ノ図ルヘカラサルヲ厭ヒ、怨言ヲ吐ク者多シト云、故官軍人夫困却ノ色アリト云、

廿六日大坂鎮台小隊長単身独行熊本県金山村ヲ過ル時、同県下川床村土民（名ヲ源ト呼ブ）是ヲ斬ル、隊長即死、土民手負、官吏或ハ区戸長ト認ムル者ハ、土人等之ヲ縛シ或ハ之ヲ斬ル、

四　大分県令ヨリ管内外ノ景況上申

当県目今格別異条無之候得共、過般以来管内外ニ於テ目撃并探知之景況、為御参考左ニ具状仕候也、

明治十年三月十六日　　大分県権令香川眞一

大坂出張

内務卿大久保利通殿

一檜垣権少警視引卒スル処ノ巡査隊、暫時当庁下ヘ駐在、尓後漸次肥後国境ニ発向、兼テ敵ノ挙動ニ依リ熊本ヘ進入之胸算ナリシ由ノ処、尚大警視ヨリ進撃ノ催促モ有之、且南ノ關口大警部ヨリ同様掛合有之、旁愈進撃ニ決議、追〻賊兵近接之地ヘ進軍、先鋒ハ已ニ肥後内牧迄進入、二重峠ノ賊堡ヲ距ル僅三里余、後隊ハ坂梨駅ニ在リ、大分県庁ヲ距ル十六里、阿蘇辺ノ暴民ハ警視隊ノ鎮撫ニ依リ、稍静定ニ帰ス、

一賊ハ二重峠ニ野堡ヲ築キ固守、大津ニ本陣アリ、両所ニ賊数未詳ト雖モ、概スル六百人ヲ下ラス、

一管内士族ハ百方説諭ヲ加ヘ、方向一定、即今毫モ懸念ノ事ナキニ至ル、

一南郷新町ト云ヘル処ニ、鎮台ヨリ相備ヘ置候粮米凡八百俵、賊掠奪セントセシヲ、幸ニシテ警視隊之ヲ取還スコトヲ得タリ、

一同所近傍ノ郷士、賊ニ左袒スル者三十有余名、及党民巨魁数名ヲモ同隊ノ手ニ捕縛ス、

日田郡ノ景況

一同郡ハ境ヲ肥後隈府辺ニ接シ、賊徒若シ此間道ヲ経由シ、舟ニ乗リテ日田川ノ急流ヲ下リ、本管ヘ迫ルノ顧念ナキニアラス、或ハ敗兵ノ潰来モ思ハサルヲ得ス、旁取締尽力シ居レリ、未タ指タル儀ナシト雖モ、過日壱人ノ暴徒一刀ヲ帯シ土民ヲ威迫シ、酒ヲ呑捨ニシ去ル者アリ、惜哉、警邏之者ニ報スルノ暇ナク、終ニ其行処ヲ極メス、

日豊国境之近況

一鹿児島県巡査ト称シ、四十名日州六日浦（延岡ヨリ六里）ト云ヘル処ニ見張ヲナシ、行人ヲ厳督セル由、同州熊田ト云ヘル処ニモ巡査駐在シ、其他各処ニ巡査制服着用之者屯集セリト云、

一薩賊ニ党与シ出兵セシハ、飫肥三百人余、佐土原百人、延岡百五十人、高鍋ハ兼テ応セサリシニ、尚旧藩主秋

月種樹親書ノ告諭ニ依リ、一層志操確立、賊ノ強暴難遁ニ至ラサレハ動カサルノ景況ト云、

但日州地ノ景況ハ探知スル已ニ数日ヲ経レハ、目今果シテ然ルヤヲ信セス、

一大警視ヨリ、賊來島卯太郎兵ヲ率ヒ豊後路ヘ発向云〻探偵スヘキ旨ノ達アリト雖モ、尓後何タル実蹟無之、多分虚説ナラン、

五　大分県令ヨリ管内外ノ景況上申

客月下旬ヨリ、熊本県下肥後国阿蘇郡之内土寇蜂起、一旦鎮定之姿ニ候処、再ヒ蜂起ニ付、檜垣権少警視引卒ノ倉内二等中警部巡査三拾人ヲ卒ヒ、宮ノ原地方ヘ出張及説諭、速ニ鎮静、其他モ警視隊之進発スルニ随ヒ、自然平定、該地方之人民初メハ薩州サマト称ヘ、賊ニ帰向シ、当県探偵者等ヲ敵視シ妨害不少処、警視隊進発ニ付テハ翻テ官軍サマト称シ、之ヲ慰労スル趣、

一内ノ牧ニ蓄積米千八百俵余アリ、阿蘇南郷之郷士弐三名薩賊ニ内応スル者ノ按内(案)ニテ、賊之レヲ掠奪セントセシカ、南郷新町之郷士壱人急ニ警視隊ニ報知シ、直ニ一小隊ヲ繰出シタルニ依リ、賊僅二拾俵ヲ取リ大津ニ向ケ逃レタル由、

右当県探偵者ヨリ申出候ニ付及上申候也、

明治十年三月十七日　　大分県権令香川眞一

大坂出張

内務卿大久保利通殿

六　大分県令ヨリ管内外ノ景況上申

当県重岡仮分署詰ノ者ヨリ、日州地方之景況左ノ通報知有之候ニ付、虚実如何ハ難量候得共、不取敢此段及具申候也、

明治十年三月廿二日　　大分県権令香川眞一

大坂出張

内務卿大久保利通殿

一延岡ヨリ三田井迄出兵セシ士族ノ内七拾名、熊本県下鶴町マテ引揚、其内拾壱名ハ本月十八日既ニ帰邨セシ由、

但勅使鹿児島ヘ参向ニ付、延岡ヨリ引取ヲ促セシ由、

一延岡士族今ハ悔悟ノ景況アル由、

一高鍋士族ハ一応出兵ノ準備ヲセシカト、今以テ其儀ナシトノ風説アリ、
一宮崎支庁ハ事務平常ニ異ナラス、
一同所裁判所ハ本月二日ヨリ閉庁、鎮静マテ長崎上等裁判所ヘ移転合併ノ由、
一鹿児島県ヨリ各処ヘ派遣セシ巡査ハ、勅使参向後引揚相成、道路ノ梗塞今ハ開ラケタル由、
一宮崎・高鍋、近来演劇・相撲等ヲ興行シ、勅使参向後ハ民情安全ナル由、

七　長崎県令ヨリ肥後地方ノ景況上申

上申

兼テ肥後八代口ヘ差出置候当県官員ヨリ、別紙写之通申出候ニ付、為御参考上申仕候也、

北島令代理
長崎県少書記官　河内　直方

十年四月三日

内務卿大久保利通殿

（別紙内容は「鹿児島征討始末二」と同文に付き省略）

八　大分県令ヨリ同県下ノ景況上申

八ノ一

先月三十一日当県中津支庁下士族追々脅迫ニ依リ、随行セシ者ヲ併セ殆百名暴挙有之、支庁始諸官衙ヘ襲来、官員ヲ殺害シ、尋テ本庁ヘ来襲、市中放火、県庁ヘモ砲発ニ及、其暴戾至ラサル処ナク、依之県官百方尽力、肥後坂梨在陣之警視隊ニモ急報ニ及、既ニ着県有之、専ラ追撃着手中ニ有之候得共、不取敢是迄之状景別紙ニ略記及具申候也、

明治十年四月三日　大分県権令香川眞一

内務卿大久保利通殿

県下士賊暴挙之概略

十年三月三十一日午後十二時頃、中津支庁下士族田舎新聞社長増田宋太郎・櫻井貫一郎・梅谷安良、大分郡淵村平民後藤純平等巨魁トシテ、其党類凡五六拾人、支庁并区裁判所・警察署其他官員之寓宅等一時ニ集襲シ、支庁長馬淵二等属始官員三名其難ニ横死シ、其他官員数輩賊ノ囲繞ヲ脱スル事ヲ得、賊公金ヲ掠奪シ去ル、同月

一日午後二時右脱出セシ巡査壱名急ヲ報シ来ル、当庁直チニ在来ノ巡査并旧藩士族等ヲ巡査ニ雇入、所〻分配ス、此時賊猖獗ヲ極メ、愈庁下ニ迫ルノ景況アリ、之ヲ遠ク要所ニ防キ賊ヲシテ一歩モ庁下ニ入ラシメス、追撃捕拿スルノ美ナルニ如カスト雖モ、銃器弾薬共ニ匱乏、之ヲ行フ能ハス、幸県庁旧府内城内ニ在リ、未タ要害一二ヲ存セリ、之ニ依テ兼テ借入有ル所ノ銃器ヲ以テ城墨ニ拠テ固守シ、県庁ヲシテ賊ノ蹂躙ヲ受ケシメサルヲ主トシ、既ニ配賦セシ高崎辺ノ要所ニ在ルノ兵モ、彼ト小戦スルノ後強テ彼レニ抗セス、速ニ城ニ入、哨兵数名ヲシテ彼レノ来ルヘキ街口ニ散布シ、以テ之ヲ待ツ、是ヨリ先キ賊襲来之確報ヲ得ルヤ、市中老幼之者ヲシテ危難ヲ避ケシメ、其準備全ク畢ルニ及テ彼レ果シテ来ル、於是我カ哨兵忽チ発射シ、彼レノ乱入ヲ支ヘ、一ツハ守兵ニ其来襲ヲ報スルノ号砲ニ当ツ、砲戦数分時ニシテ賊近傍屋舎ヲ焼テ左辺ヨリ城ニ迫リ、内外砲戦一時ヨリ五時ニ至リ、彼抜ヘカラサル覚知シ退散スルノ際、又懲役場及市中三ケ所ニ放火シ、午後六時解散ス、同三日朝肥後坂梨在陣ノ東京警視隊一小隊来県ス、其時賊別府村辺ニ在ルノ報アルヲ以テ直ニ該地ニ向フ、当県巡査モ之ト共ニ発ス、尓後未タ賊ノ進退挙動詳ニセスト雖モ、当庁ヲ攻撃センノ挙動ヲ以テ、彼レノ強弱概則スルニ足リ、鎮定近キニ有ルヘシ、庁下放火格別蔓延セスシテ鎮火シ、民情安穏、一時避難之者往〻帰家スルニ至ル、

一賊ヨリ諸方ニ掲記セシ檄文アリ、別ニ謄記ス、

八ノ二

当県下賊徒暴挙之義ニ付、去ル三日付開報ニ及置候后、尚又其後ノ景状別紙之通リニ候条、此旨上申候也、

明治十年四月五日　　大分県権令香川眞一

大坂出張

内務卿大久保利通殿

昨三日午前五時頃警視隊着、直ニ本庁ヲ距ル三十丁位ナル濱ノ市ニ繰出シ、時ニ賊之哨兵一名ノ来ルアリ、捕テ糺問シ、賊別府ニアルヲ審ニシ、直ニ道ヲ本支両道ニ取リ分撃本県巡査モ随行、本道ノ兵午前八時過ヲ以テ濱脇ニ達スレハ、賊既ニ南方嶮山ノ内ニ逃逸セリ、蓋シ是ヨリ先キ海面浅間艦ノ来ルヲ見テ狼狽、先ヲ争テ逃レタリシ、少頃アツテ海兵及支道ノ兵モ亦来会シ、共ニ逃賊ヲ追跡シテ南方ノ嶮山ヲ攻攀スレ共、賊巧ニ険峰深林ヲ右旋左折シ、距離漸ク遠サカリ、加ルニ警視兵ハ

兼程遠路ヲ急行、疲労セシヲ以テ、遠ク偵者ヲ放テ午後二時頃惣兵別府村ニ引揚、海兵ハ直ニ乗艦午後四時頃抜錨ス、午後各方ヨリ之報知ニ拠レハ、賊ハ速見郡東山・大分郡時松村ヲ経テ小狭間村ニ至リ、馬数頭ヲ強募シ、速見郡川上村ノ内字獄本ニ出、馬疋三十頭計・人夫多人数ヲ強募飛也似、同郡谷川村ノ内字湯ノ平ニ投宿、四日午前第八時頃発程、玖珠郡湯坪村ニ泊シタルト云、其向フ処ハ肥後国宮ノ原ヲ経テ、隈府ノ賊ニ投セントスルナルヘシ、彼過ル所沿道用務所及ヒ富戸ノ金ヲ掠奪横行実ニ太甚シ、一豊前国宇佐郡以西土民蜂起、各所横逆至ラサルナク、漸ク東行云々ノ警報昨三日午後八時着、直ニ鎮撫之手ヲ下サント欲スレトモ、時ニ賊跡不タ確詳ナラス、且大分郡荘内谷各村土民蜂起ノ慮リアリ（荘内谷ハ巨魁絶平ノ郷里ナリ）、賊跡未タ定ラサルニ、若シ暴民左右ニ起ラハ、僅ノ現員ニテ警備上隔靴掻痒ノ歎不少ニ付、先ツ防禦ヲ縮メ要衝々々ヲ固守シ、遊兵ヲ以テ進ミ、降ルヲ撫テ反ヲ討チ、速ニ良民ノ疾苦ヲ拯ハント、警候兵ヘ協議手配中、終ニ豊後国々東郡ニ連及シ、既ニ高田村ヨリ沓掛村ノ間村ニ、里正・富戸・学校等ヲ打壊又焼燼シ、将ニ杵築村ニ及ハントシ勢最モ盛ナル旨、連綿報知アルニ付、四日午前別府滞陣ノ警視兵二手ニ分チ、一手ハ本道ヨリ中津ニ向ヒ、本県巡査等三十名及支庁詰県官六名之ニ従ヒ、一手ハ杵築ヨリ高田ニ向ヒ、本県巡査等弐十名之ニ従ヒ進発セリ、依テ忽チ平定ニ帰スヘシト思ハル、猶委曲ハ後報ニ譲ル、

一前記荘内谷ノ内第三大区廿五小区人民百五十名計、用務所ニ集合貢金割戻ヲ強請ス、区戸長百端説諭スレ共服セサル旨、管理ノ分署ヘ急報アリ、依テ直ニ巡査出張セシカ、到底暴挙難計ト四日午前第四時急報アルヲ以テ、直ニ巡査弐十四名ヲシテ帯剣携銃セシメ、警部之ヲ引卒派遣セシカ、未タ至ラスシテ既ニ説諭ニ服シ退散セリ、

右四月四日筆記

八ノ三

県下目今士族民情之概略別紙之通ニ候条、御参考之為メ上申仕候、就而は探偵鎮撫共精々手ヲ尽シ候得共、其頃県地江御派遣之兵員甲来レハ乙退キ、警備上自然充分ナラス、夫カ為メ逮捕等失期之恐レ不鮮候間、即今滞在之兵員ハ、粗鎮定之見込相付候迄、其地位（本支庁共壱小隊宛）ヲ動カサス、暫時御据置相成度、此段併而上申仕候也、

明治十年四月十一日　　大分県権令香川眞一

内務卿大久保利通殿

八ノ四

県内士族及土寇動静ノ見込

中津

暴発後ノ景況ハ、猶暴徒同志之者不鮮、残徒使匿不時再挙ヲ企ツヘキ勢アリ、到底東肥ノ戦状ニ因リ如何ニ変スヘキ哉不可測、即今ノ探偵ニテハ既ニ四十余名ノ残徒アリ、之ヲ捕拿スルニハ兵力ヲ擁スルニ非レハ手ヲ下シ難シ、

鶴崎

頃日屢〻集会密議、或ハ金ヲ借リ弾薬ヲ製シ（一応遂審問候、処申分粗立ソ）其他奇怪疑フヘキモノ鮮カラス、依テ百方探偵ヲ尽シ居レトモ、目下自ラ暴発ハ先ツ七八有之間敷、然レトモ東肥戦状之如何ニ依テ保シ難キモノアリ、

北部三郡ノ土寇

民心恟〻未タ鎮定セス、家富ニ迫リ強談等ヲナスモノ各地皆然リ、兵員ノ向フヲ見テ散シ、退クニ乗シテ又集マルノ景況ニテ、到底兵備ヲ厳ニシ、悉ク其巨魁ヲ縛スルニ非サレハ鎮定ナシ難シ、

外各地先ツ煩慮ナシ、

九　愛媛県令ヨリ大分県下ノ景況上申

大分県下暴徒景況御届

大分県暴徒ノ景況去ル六日飛信ヲ以御届仕候后、同県ニ差遣候之警部ヨリノ報知書別紙ノ通ニ有之候、巨細ハ同県ヨリ御届可仕候得共、為念当県ヨリモ御届仕候也、

明治十年四月九日　　愛媛県権令岩村高俊

内務卿大久保利通殿

一大分県ノ暴徒ハ士族ノミニアラス、全ク烏合ニシテ凡人員六十、役夫ヲ合セテ大約八十人、其巨魁ハ増田宗太郎（元中津ノ士族ニシテ当時同県新聞記者）・櫻井貫一郎・梅若（谷）安良及大分郡淵村平民後藤準平（先年日田県士族蜂起ノ節ノ暴徒中重立モノニシテ、懲役十年ノ囚、親ヲ養フカ為、贖ヲ許スモノナリ）以上四名トス、其他ハ無頼ノ徒又ハ懲役満期ノモノ共ニシテ、士族ハ甚タ稀ナリト云、

一中津支庁・警察所ヲ放火セシ時、三等属馬淵清澄外属官弐人ヲ殺害シ、警部壱人・巡査弐名ヲ捕縛シタリト、

一本庁ヨリ巡査三十名、臨時募集ノ士族三十名ヲ合セテ高崎ヲ固守ス（高崎ハ中津街道大分市街ノ入リ口）、然ルニ賊ハ杵築ヨリ海ニ航

シテ田ノ浦ヨリ上陸シ、高崎ノ背后ヘ出テ不意ニ之ヲ襲フ、故ニ守兵狼狽シテ直チニ退テ庁中ニ入ル、

一本庁ニテハ賊兵ノ多寡ヲ察セス、陸続押来ルヘキ巷説アルニヨリ、元府内城残塁ニ拠テ拒守スルニ決ス（是本月二日ナリ）、

一賊勝ニ乗シ市中ヲ蹂躙シ、所〻放火、凡民戸三百四五十戸ヲ焼キ、猖獗最甚シト、

一三日午后賊城ニ迫ル、砲撃数時賊漸ク退ク、時ニ坂梨ニアル所ノ警視局巡査五十名到ル、賊風ヲ望ンテ別府ニ逃走ル、適タマ同所海岸ニ淺間艦到着ス、賊益狼狽隊伍ヲ乱シ、戦ハスシテ熊本地方ニ散去スト、

一二日夜ヨリ土寇各所ニ蜂起、就中宇佐郡最甚シク、国東郡ハ過半ナリト、大概学校ヲ毀チ、区務所及区戸長ノ居宅ヲ放火ス、依テ官吏ハ勿論、警視隊東西奔走、専ハラ鎮撫ニ力ヲ尽ス趣、

一賊中、姓詳カナラス、名民平ナルモノ、自カラ西郷隆盛代理ト称シ、烏帽子・直垂ヲ着シ、抜刀ニテ民家ヲ抗掠シ、尤惨酷ヲ極ム、然ルニ一夜微行スルヲ同区ノ区長某之ヲ見認メ、忽殺害シテ県庁ニ届ケ出タル趣、

右者昨四日迄ノ景況ニ有之、尤本文ノ通草賊ハ漸次遠隔、竟ニ肥後国宮ノ原ヲ経テ隈府ノ賊営ニ投セントス、又土寇ハ貢金ノ割戻シヲ強請シ、漸ク波及ノ勢アルニヨリ、警部等巡査数十名ヲ引率、各帯剣携銃、直チニ之ヲ鎮圧スヘシト発スルニ望ンテ、既ニ説諭ニ服シタルノ報アリテ止ム、右概略報知仕候也、

大分県出張
愛媛県八等警部近藤縮往

明治十年四月五日

一〇　長崎県書記官ヨリ熊本県下ノ景況上申

高瀬口ヘ兼テ差出置候当県警部ヨリ、去ル廿六日以来戦況ノ略記別紙之通差出候間、疾御承知ニ可有之候得共、為御参考進達仕候也、

明治十年四月十四日　長崎県少書記官河内直方

内務卿大久保利通殿

三月廿六日

一今正午十時（ママ）ヨリ開戦、木留口円台寺村並平野村尾（大）月原辺一同官兵進撃ノ処、賊ハ激砲ニ辟易シ、央ハ敗走、然ルニ円台寺村際ニ於テ、我兵右翼ヘ賊ヨリ切込来ル（此賊ハ肥後人、抜刀隊ナリ）警部・巡査抜刀ニテ之ニ充ル、賊遂ニ破レ

木留ヲ去リ三本松ト申処ニ退陣ス、賊ノ前軍ハ木留本村ト尾月原ノ間一ツノ小谷ヲ隔テ対壘ス、右進軍ノ際我援兵ヨリ一声打方ヲナス、植木口ヨリハ尚大砲及ヒ戦列線ノ小銃同時ニ発ス、故ニ僅カ三拾分ヲ不出シテ賊ノ台場ヲ抜ク、官兵巡査トモ死傷少シ、午後三時防禦壘ヲ築クナリ、味取辺ノ官兵ハ防砲ノミ、

三月廿七日

一今正午進撃アルヘキノ処、俄然見合相成リ、尾月原ヨリ大砲ヲ以木留町並上古閑村・木留本村ノ三ケ所ヘ放火、北風烈敷暫時ニシテ焼失スルナリ、

一轟木村ノ内奈賀名農民梅田某ナル者アリ、藁卸シノ留(為)メ小屋弐階ヘ相越候処、残賊一名藁中ニ潜伏能有候旨官兵ヘ訴出候、因テ巡査并兵隊数十名該家ヲ取囲ミ、種々呼声スト雖モ降ラス、故ニ放火候旨ヲ以威スヤ否階上ニテ一ツノ砲声ス、巡査昇階査検候処、眉間ヲ打チ早絶命罷在候、該賊ハ鹿児島県櫻島ノ住眞村某ニテ金拾円余及砲器等所持致居候也、

三月廿八日

一今午前十一時右翼円台寺村・上古閑村辺ヨリ進撃、賊ハ木留本村ト上古閑村ノ間一ツノ小谷ヲ隔テ防禦ス、官兵進ンテ僅ニ賊ト距離ヲ隔ルコト二十間ニ過サルト雖トモ、其渓深クシテ進撃スルコト不能、大不利、午後三時ニ至リ双方守リ台場ヲ築キ休戦、死傷百五拾名余ナリ、此日滴水村官兵大砲台場辺ニ人夫屯集ス、該夫共倉皇ノ節、一夫携タル処ノ杖竹、内ニ刀剣ヲ仕込タル竹棒アリ、賊タルコト顕然、捕獲ノ際遂ニ其賊ヲ遁逃ス、

一植木駅東小野村ヲ午後一時放火ス、

一今午前味取町官兵ヘ自首候熊本県平民山崎平申立ニ、

一熊本県士族賊ニ与スル者十二番小隊マテ組立ル、

一小隊人員百名ヨリ五十名位ノ由、

一官軍ヨリ発砲候玉壱斤ニ付九銭宛ニテ買上ケ、水前寺ト申処ニテ製造候趣、

一薩賊金札ヲ造リ、米等買上ケ、其他賊地ニテハ異義ナク通用スル赴(趣)、

一熊本県生源寺十等警部、賊ニ生捕レ拘留サレ候途中、賊四人ヲ相手トシテ打合、其四人ヘ疵傷ヲ負スト雖トモ、遂ニ痛ク斬害サル、

一天草際三隅(角)口官兵一昨日松橋宇土ヨリ一里ホト先キヲ焼候ヲ目撃候趣、海軍士官ノ談話ナリ、

三月廿九日

一本日ハ小セリ合而已、
一西郷左右ニ強兵（旧近衛兵ノ由）六百人程引率罷在候趣、
一昨熊本県士族坂本志摩郁自首候ニハ、過日熊本協同隊何条某ヨリ至急出頭候様回章来ル、因テ相越候処、保護隊ニ相定候ニ付事トノ書付相渡候ニ付、翌日差返シ候処、尚左ノ書付相渡候故、即差戻スヘキノ処、賊勢ニ恐怖其儘罷在候趣、

坂本志摩郁

五大区九小区惣代属可相定候事、

鹿児島本営代理

明治十年三月十八日　熊本協同隊

一熊本県官金ノ内、二月十九日御舟へ仮庁移転ノ際持越相成居候七万円、山間ニ隠シ有之候処、其内四万円賊ノ為掠奪サレ候趣、右関係官員ノ談話ナリ、併シ警察探偵上ニハ該金賊ノ掠奪スルヲ早ク知リ破毀候ヨシ、探偵上実説ナランカ、
一熊本県七等警部大塚元吉初巡査数名、賊ニ与シ候段判然候趣、

三月三十日

一本日休戦、
一八ツ代口景況、本月十九日黒田中将（清隆、征討参軍）引率ノ兵八代ヘ着、同二十日熊川（球磨）ヲ隔テ開戦、官軍利アリ、同二十一日休戦、同二十二日同処ヲ破リ進撃、尚千川ヲ隔テ開戦、遂ニ台場ヲ抜ク、賊松橋ニ退去ス、官兵進テ豊福村ヘ陣ス、山田少将（顕義、別働第二旅団長）ノ兵松橋ヲ放火ス、攻撃シ八代口ノ官兵ト并セ川尻ヘ進撃ノ模様、去ル廿七日八代出発ノ戸長渡邊大助ノ談話ナリ、

三月三十一日

一本日モ休戦、
一山鹿口過日来引続休戦ノ処、一昨廿九日午前六時三十分開戦、水島村ヨリ羽衣村ケサヲ橋向迄進撃、数ケ所ノ台場ヲ抜キ、尚隈府賊ノ巣窟ヲ襲撃スル際、前橋ノ辺ヨリ賊横撃来リ、為メニ邊田村迄引、同十一時休戦、勝利、官兵死傷少シ、賊死傷多シ、

四月一日

一今午前五時吉路（吉次）越ヘ四大隊ノ兵ヲ以テ大進撃ノ処、暗ニ計策ノ如ク賊眠リ居ルヤ、殊之外狼狽、尚諸々ニ放火且進ム、山絶頂台場ヲ初数ケ所ノ賊台場忽チ抜ク、其勢真ニ破竹ノ如シ、遂ニ木留町迄進撃ス、田原坂以来ノ勝利ナリ、此日放火ノ村々ハ、原倉村（宝東町）・上古閑（かみこが）村・

原古閑村・三之嶽一時ニ燃上リ、午後四時頃鎮火セリ、

四月二日

一今午前六時過キ進撃喇叭ニテ、木留町右翼左翼ニアル戦列線ノ官兵一整ニ発砲、且激声ヲ以攻撃ノ所、賊其勢ニ恐ルヤ忽チ邊田野村ヘ退ク、官兵進ンテ要害ノ地ヲ得テ休戦、死傷少シ、

四月三日

一植木口休戦、午後一時尾(大)月原ヨリ大砲ヲ以邊田野(植木町)村放火、同四時頃鎮火セリ、

一熊本城下坪井川ト申流水ノ石堤ヲ賊ヨリ立切ル、為メニ城西ノ方路上満水候趣、然ト雖トモ城内ニ害ナシ、全ク賊勢減シ、城外哨兵ニ苦シム、故ニ斯ク計策ヲナストノ説、

四月四日

一植木口本日モ休戦、山鹿口開戦、田島村ヲ放火悉ク焼燼、遂ニ同村迄進撃、勝利ナリ、

一本日山鹿駅第三旅団本営弐里程先キ横田村ヘ移ル、

但第一第二旅団本営ハ植木口七々元(七本カ)ニアリ、

一本日迄操込候兵員植木口壱万弐千人、大砲廿一門、山鹿口弐千八百人、大砲六門、南口ノ官兵死傷併セ凡四千八百人ノヨシ、

一山鹿駅ニテ賊滞陣中ノ景況ヲ聞ニ、抱腹ニ絶ヘサル一奇談アリ、該駅ニ桐野初滞陣罷在ル節、戦争勝利毎ニ賊隊長初三弦ヲ弄シ、或ハ酒樽ヲ撤キ、莚等ヲ冠リ市中横行候由、其他ノ所業モ頓ト狂人ノ所業ナリ、

四月五日

一植木口本日モ休戦、山鹿口今午前四時ヨリ鳥ノ栖村ヘ進撃、激シク攻撃、該村民家ヲ焼キ分捕生捕モアリ、尚進撃ノ際官兵ノ両翼ヲ賊横撃来ル為メニ、田島村迄引、塁ヲ築キ固守、午後四時戦止ムナリ、

四月六日

一植木口今午前五時ヨリ荻迫(植木町)村ヘ進撃、同十一時殊之外激戦、同村樹林ノ中ニ在ル賊台場ヘ巡査切リ入リ、数ケ所ノ台場ヲ抜ク、午後一時其周囲ヲ固守ス、然ルニ同四時賊数百名、樹林ノ中ヨリ突然切リ出テ官兵大敗、為メニ銃并弾薬等少ミ分捕ラル、死傷多シ、凡官兵死傷五百名余、此日巡査弐百名程進撃ノ中、死傷長尾一等大警部初巡査ニテ八拾名余ノ赴(趣)、山鹿口ハ鳥ノ栖村辺ニテ小セリ合ノミ、

一川尻町ニ賊本営有之候処、八ツ代口官兵追ミ進撃スル

ニ因リ、木山(益城町)ト申処ヘ営ヲ移スヨシ、同所ハ日向路口ニテ、該路ニ限リ官兵出張之ナクニ付、結局日向ヘ落降ル可シト衆人ノ見込ナリ、

四月七日

一植木口休戦、山鹿口鳥ノ巣村辺ニテ小セリ合而已、

一鹿児島県景況、勅使帰京之後チ、海軍士官県庁ニ在ル節、薩賊募兵ノ為出庁、右士官ヲ見認、直ニ斬害スヘキ旨主張ス、県官答曰ク、今士官ヲ斬スレバ官兵市中ヲ焼払ヘク、故ニ免スヘシ云〻ノ語ニ因リ該論止ム、然リ而シテ募兵壮丁之者早之ナクニ付、老幼ニテ千五百人ヲ募リ、八ツ代口官兵ノ裏切リトシテ同処ヘ出張候由、其人員之内一時募リニ応セサル者アリ、然ル者ハ斬害スヘキ旨ヲ以威シ、痛ク募リ候趣、且兵粮モ日向路ヨリ賊ヘ送ルニ付、該県ヘ官兵出張致サス候テハ不都合ノ云〻、河村(純義)参軍本日軍艦ヨリ着ノ末談話ナリ、

一八ツ代口官兵川尻際迄進撃、同処川ヲ隔テ砲戦ノ趣(川尻ヨリ熊本城迄距離平地ニシテ二里ナリ)、是亦河村参軍ノ談話ナリ、

四月八日

一今午前三時頃荻迫村台場ヘ賊数十名切込来リ候処、官兵防発激シ、其砲声天地モ震動スルノ勢ニ辟易シ、賊忽チ散乱、同五時ヨリ進撃、一昨日賊ヨリ襲レ候荻迫村際台場三箇モリカヘス、同午後木留町上山手進軍ノ際、賊再ヒ切リ込来ル、是亦官兵悉ク打払、此ノ日勝利、同三時ニシテ妨禦(防)線ヲ固メ休戦、

一熊本城ノ方日〻砲声放火ス、本日味取(植木町)岩山ヘ登リ遠見候処、植木街出町大窪ノ間ニ在ル山伏塚辺、頻リニ砲声放火ス、是追〻城兵ノ打出ルト士官ノ談ナリ(山伏塚迄ハ城兵至ル)

四月九日

一植木口今午後一時過キ、木留町ヨリ邊田野村賊台場ヘ野木少佐(希典、十四聯隊長心得)一聯隊引率進撃、弐箇ノ台場ヲ抜ク、其台場之(乃)地位クルヤ、極テ要害ノ地ニシテ兵進ム不能、故ニ右小佐奮激該場ヘ馳上ル、為ニ兵進ミ遂ニ乗取ルニ至ルト云、同氏其際手負、兵死傷少シ、同四時休戦、山鹿口全ク休戦、

四月十日

一植木・山鹿口トモ休戦、

一本月五日熊本出発来ル人ノ談話ニ、

一賊立田山(城ヨリ十町程隔ノ)ニ兵粮ヲ送リ、賊勢ハ甲佐ト申処ノ台場ヲ城兵ヨリ抜レ、即今木山(城ヨリ三里半程隔)・御舟町(城ヨリ四里程隔)

ト申処ニ陣ス、

一肥後ノ賊ハ近日ニ至リ山間等ニ弥潜伏スル者多シ、然ルヲ薩賊ヨリ探知強テ出兵致サスナリ、

一城西ノ方水滴（前三日付ニ記載ノ通）ニ民間苦ミ、井芹川筋ハ人民ヨリ窃カニ切流ス、坪井村并坪井町ト申処モ同様土民切流スト雖モ、水勢ノ激シキニヨリ涸ルニ至ラス、薩ヲ恨ムコト日々甚シ、

一一　河野幹事ヨリ三好判事ノ書翰進達

別紙之通三好判事ヨリ申越候、右は其筋ヨリ疾ク御承知之儀トハ存候得共、為御参照不閣及御回進候也、

十年五月五日（朱「七月ナラン」）　河野幹事

大久保参議殿

（内容は「鹿児島征討始末三」と同文に付省略）

一二　西村権少書記官ヨリ豊後地方ノ景況

謹啓、愈御安康御奉務ト遙賀、○卿公御安泰機事多端御苦慮ト遠察、○当境追次公報之都合一小段落、○陸軍一大隊着、新鋭之力ヲ以テ竹田之効ヲ奏セリ、○竹田町十ニ八九兵燹ニ羅（罹）ル、惨状ヲ極メタリ、近来戦後民屋ヲ焼ク一癖ヲ生ズト、困却物也、○賊同市中ヘ弐万円ヲ課シ、布帛類ハ強奪日向ヘ運搬セリト、威迫無量流賊ト一般、○賊戦死ノ者ハ立派ニ寝棺ニ斂シ、隊長ノ引導ニ曰ク、ワイ等ハ国ノ為メ討死ヲ遂ケ、本望ニテアロ、殊ニコノ高陽ノ地ニ埋葬サレ結構ノコトジヤ、三年立ヌ間ニハ墓参シテヤルゾ、ソレ迄ハ必ス体ヲ壊ヅシヤルナト真面目ニテ唱導スル由、○重岡ヘ潰走之途上三重市ヘ転路（デ四百戸アル小福地也）、遊撃一中隊ト交戦（賊千余アリト）、衆寡不敵官軍敗退、昨日来竹田ヨリ応援両三日間平定、日向ヘ走退可致（流賊ト一般故必敗何ノ地ニ向フヲンラス）、○竹田引取ノ際日向ヨリ弐三百ノ援兵来リ（桐野来ルト云、虚説ナラン）、其敗退ヲ叱辱セリト、為メニ三重市ニ転シテ前敗ヲ雪クト云々、威迫暴駆内外至ラザルナシ、大阿修羅王ノ軍略可想也、○小田井（三カ）高千穂ノフモト（日肥両口）ハ官軍占取セリト、当境ノ西辺ハ為メニ安着ナリ、南西重岡ノ険隘ニ拠守スレハ、豊後初メテ平定、○官兵ハ三重市ノ賊ヲ追ヒ、日向境上マテ追尾進入スルツモリト、○賊ハ日隅ニ割拠之姿タ（三好氏之探索書ニアリ）、其兵ヲ駆ルヤ新募五名乃至十名ニ薩士壱両人ヲ交互シ、新募ヲ叱駆シ退走スレハ、直チニ斬殺、敗退ヲ防ク由、為メニ戦死ハ

多分新附ニアル由、現ニ竹田ノ現況其説ノ如シ、可悪、○日向地方モ亦此術ニテ駆役、二三千ノ兵卒ヲ募リ得ベキ欤、○殆ンド十旬ノ連戦大分県官モ熊本開戦来敵ニ安眠セズト、一般労倦ノ色アリ、一発輝シ術ナクンバアルベカラズ、○肥豊賊境ノ険要ニ築塁屯兵ヲ置キ、予シメ其突衝ヲ防キ置キ、其内部ヘ進入縦横討撃ノ方法ナクテハ、必ス奔命ニ疲カルヘシ、○豊公ノ薩ヲ征スル弐拾万兵ヲ要シ、北條ヲ討スル弐十六万兵ヲ用ヒタリ、大国ヲ挙グル大兵ヲ用ユルコレ勢也、目下此勢ヒアリヤ、掃滅何ノ期ニアルヲシラザル也、或ハ隣国交戦大小ノ別有モノ姿タナラン欤、仰高慮、○肥薩ノ戦状更ラニ聴カス、聾座敷ト一般、昨日一塁ヲ抜キ、今日一村ヲ取ル如キハ敢テ聴クヲ欲セス、全体ノ大勢ニ関スベキ大勝報アラバ御一報アランコトヲ萬冀ス、○警視兵勇ハ勇也、将卒同権トモイフ姿タニテ、頗ル不紀律、現在両度頗ル不都合ヲ生シタリ、東京ノ仕込之注意ナクンバアルベカラズ、○劣生竹田陥落、同所救恤自首人取調等ノ為メ三十日出張、紛紜然タリ、山紫水明処之晩酌想像之止ニ不堪、得寸隙通一声問御閑アラハ、京坂之景況ヲ下謁アランコトヲ、頓首敬陳、

豊後竹田　　西村捨三拝

六月

遠藤盈契　玉机右

一三　鹿児島県令ヨリ同県下ノ景況上申

一三ノ一

当県櫻島赤水仮出張所ヨリ宮崎支庁云々回章之写、都城之近況等別紙之通申越候ニ付、此際之流伝素ヨリ難弁候得共、御参考之為メ上申候也、

明治十年六月十一日　　鹿児島県令岩村通俊

一三ノ二

一宮崎支庁ノ事、

軍務所

右之通改称致候条、此段及布達候也、

五月二十八日　　本営

一三ノ三

定

一戎器ヲ棄テ逃走スル者、

一戦場ニ於テ兵士之分ヲ誤ル者、

一道路本陣其人民ニ対シ乱暴狼藉スル者、

右相犯スニ於テハ尽ク割腹ニ処シ候条、厚可得其意事、
但戦場ヲ脱シ逃帰等致候者尽ク捕縛致シ、人吉直方ニテ其罪ヲ相糺候条是又相心得、夫卒ニ至ル迄無漏告諭可致事、
五月二十九日　本営

一三ノ四
一大区事務取扱所之事、
郡代所
一戸長役所ノ事、
支郡所
右之通名称被相替候条、各組中無漏通知致シ、尤此廻章早々順達、終ヨリ返納可被成候事、
六月一日　郡代所

一三ノ五
時鐘
右今日ヨリ相廃候事、

一三ノ六
一通行取締第一不行届候テハ不相済事ニ候間、若不審之廉有之者ハ捕縛致シ、本営ヘ可差廻候様トノ事、
一無根ノ虚説ヲ言触シ人心ヲ動揺為致候者、前条同断、
一敵方ヘ書通或ハ内通致ス人有之哉ニ付、右等ノ人有之候ハヽ、見聞次第前条同断、
一宮崎ヘ真宗僧多数入込、当県ノ事情等敵軍ヘ内通致候ニ付、捕縛相成候、当区ニハ執心ノ者有之場所枘ニ付、自然僧侶等人込モ難計候間、猶又注意致シ取締行届候様トノ事、
右之通当町滞在伊東昌吉殿ヨリ承知致候間、各被得其意、組中無漏早々通達可有之、左候テ此回章次度シ、終ヨリ返納可被成事、
五月二十九日　事務扱所

一三ノ七
此度出軍ニ付テハ、当県ノ内軍務通行ノ面々雇人馬ノ義、急速運兼候義モ不少候ニ付、惣テ人馬請取締ニテ通行致候間、新管轄之諸郡モ同様取計、急速之間ニ合フ様有之度、追々取締ノ人員等モ差出通行為致候ニ付、前廉相達候間、郡内駅々ヘハ人馬手当致置、不都合無之様被相達、聊苦情ケ間敷義曽テ無之様、各区戸長ヨリ説諭致置候様無漏可被相達、此旨及御掛合候也、
五月十九日　横川本営
日向国各区

区戸長

別紙之通本営ヨリ掛合致候ニ付テハ、万事不都合無之様尽力可致、左候テ各駅人馬継立ノ儀ハ、本月十九日付ヲ以テ相達候、通運会社ニテ運兼候時ハ、戸長ニテ尽力、兼テ手当致置候様可致、受取払之義ハ其節賃銭請取義ニ無之、左之通手形受取置候義ト可相心得、此旨相達シ候事、

但人馬請取払賃銭ノ儀ハ、人足壱人壱里四銭、馬壱疋壱里五銭ト相定候間、本営ヨリ掛合相成候ニ付、夜増或ハ手数料候義ハ一切不請取義ト可相心得、此旨本業ノ者へ厳達可致置候事、

五月廿三日　宮崎支庁

一三ノ八

諸県郡

宮城　佐多浦　三省

高原　野尻　其外

右ハ都城・三股・庄内・高城諸所郡代取締トシテ致出張候条、万端其指揮ヲ受熟致可有之、此段相達候事、

五月廿九日　宮崎出張

各区戸長中

追テ手負又ハ平病ニテ帰郷致、既ニ平癒ノ向ハ早々帰隊可致、且又出張先ヨリ遁逃各所へ相潜ミ居候者モ有之哉ニ相聞候ニ付、厳密ニ探索ヲ遂ケ、右等ノ者ハ尽ク捕縛ノ上、当地又ハ人吉へ向ケ可差出、尤銃器所持之者ハ是又取揚ケ、早々送越可有之候也、

一三ノ九

回章之写

今般不容易挙ニ立至リ、已ニ此際ニ臨ミ候上ハ、姦賊分隊ヲ日向路ニ差向ケ、人民困難ニ差掛候義眼前之事候間、何レ我兵割拠シ民政ヲ布キ候地ヲ父母ノ地ト思ヘハ、士民一心之義務ヲ竭スハ当然ノ事ニテ、募兵ノ尽力ハ勿論之義ニ候間、士族之外農商ハ可成強富壮年輩ヲ可募立、万々及違背者共ハ敵ト見做シ、軍制之処分可行候条、各区戸長へ御注意有之度候様、御尽力之程分テ及御依頼候也、

但南北両道迅速御諭達有之度候也、

明治十年五月廿一日　本営

支庁御中

右之通宮崎支庁ヨリ御布達相成候間、各被得其意、触方無漏可及通達候、左候テハ此回章早々順達、終ヨリ返納可有之候、

十年五月廿二日　　事務取扱所

一三ノ一〇　都ノ城辺近況

一都ノ城旧主ハ島津某（元三万七千石余）、元来賊徒ニ関係セズ、県下騒擾ノ際ヨリ其旧臣当今士籍ニ入ル者百名余ト共ニ櫻島ニ転居ス、

一初メヨリ賊徒ニ与シ出軍スル士族モ若干アリ、其数詳ナラズ、

一出軍後跡ニ残ル者ハ近来賊ノ強迫ヲ恐レ、去月末本月初メヨリ櫻島ヘ立退キ来ル者数人アリ、

一賊ハ去月末頃ヨリ都城辺人民可有之（所カ）錫ノ器物ハ、多少ヲ不問都テ取揚候由、是ハ銃玉ノ用ニ供スト云、

一士族ノ外農工商共壮年ノ者ハ強迫シテ募兵スト云、

一近日米・金及梅干ノ有高ヲ取調ト云、

一都ノ城辺ハ別段屯在ノ兵ハ昨今迄見掛ケス、三四名ツヽ巡回強迫ス、其魁ハ人吉口ノ幡重方ニテ前田一介ナラント云、

一人吉口ノ賊ハ必ス敗北スルナラン、五六日前ヨリ都ノ城辺頻ニ風説アリ、然ニ一昨日彼地ヨリ櫻島来着ノ者ノ説ニハ、既ニ人吉破レタリト、其故如何ト問ヘハ、粮米等是迄北方ニ運送スルヲ逆ニ南方ニ運ブト云、

一近況ニテハ、都ノ城近傍小林郷辺ヘ拠ルノ所存カ、頻ニ胸壁ヲ築ノ風聞アリ、

一細島ヘ軍艦数艘着ト云、其島ハ賊徒三十名余ニテ守レリ、着艦ノ報ヲ聞ヤ、一二千ノ兵ヲ増加スト云、

右風説ニ候得共、若哉御見合筋ニモ可相成哉ニ存候ニ付、此段申上候也、

六月四日　　赤水（桜島）出張所

一四　三好判事ヨリ豊後ノ景況上申

先般大分県庁ヨリ一封ヲ呈セシ後、一旦熊本ヘ復命セシ処、尚更ニ豊後路ヘ出張、官軍ノ日向地ニ入ルニ従ヒ探偵、其他尽力可致旨愈督宮ヨリ命ヲ受ケ、臨時裁判事務之義ハ河野（敏鎌）幹事ヘ協議致シ置キ、去ル十六日熊本ヲ発シ此地ヘ出張仕候、然ル処定メテ追〻其筋ヨリノ報知ニテ御承知アリシナラン、豊後路有名ノ険阻三國峠・旗返ノ両所扼シタル賊徒モ、去ル十七日払焼官軍ノ為メニ破ラレ、潰走シテ重岡（宇目町）ニ逃レタリ、官軍進テ小野市（宇目町）駅ニ拠リ、重岡ニ在ル賊ト墨ヲ対シテ砲戦（哨兵線ノ小ゼリ合ナリ）連日ナリシガ、昨

朝ヨリ官軍雨ヲ冒シ、賊塁ニ最接近シタル突起ノ高山ニ大炮二門ヲ構ヘ、頻リニ賊塁ヲ砲撃シタリ、賊屢塁ヲ出テ走リタルヲ目撃セシガ、今朝ニ至リ賊等残ラズ重岡ヲ引払、赤松ヲ越ヘ日向路ヘ向ケ遁逃シタリトノ報アリ、本日午前十時頃ヨリ、小野市口ノ前軍直チニ重岡ヘ繰リ込ミシ処、賊ハ果シテ、昨夜俄カニ雨ヲ衝キ哨兵ヲ引揚ケ、赤松川満水ナルヲ以テ、新タニ大木ヲ横ヘテ橋トナシ、延岡ヘ向ケ引取リタル由ナリ、定メテ重岡ノ遂ニ守ル可ラサルヲ知リ、延岡ニ拠リテ堅ク防禦センヲ要シ、斯ク数塁ヲ捨テ、遁逃セシモノナラン、佐伯口ノ残賊ハ今何クニアリヤ、未タ分ラサレトモ、是亦必ス別路（佐伯ヨリハ重岡ヲ経ズンテ日向ニ出ルノ路アリ、カチジ峠ト云、其外ニモ一線ノ間道アリト云ヘリ）ヲ取リテ、延岡ヘ引揚ケシナルベシ、豊後路ハ最早憂ナカルベシ、

○三國・旗返シノ二険ヲ抜キタルハ、野津（道貫）大佐ノ一手ニテ（川上・大迫・林・青山等ノ少佐之ニ属セリ）、本月十三日夜ヨリ此ノ二険ヲ守リタル賊ト連戦、賊ハ名ニ負フ険路ニ胸壁数拾（三国ニ三拾ケ所余、旗返ニ拾五ケ所余）ヲ構ヘ、必死防戦スルヲ以テ、十六日迄ハ官軍モ殆ンド攻メアグミタル程ナリシガ、諸将校策ヲ決シ、先精兵数十人ヲ抜キ（林少佐之ヲ卒ユ）、同十七日午前一時頃ヨリ三國峠ノ半腹ヲ攀ヂ登リ、賊ノ最要所ニアル胸壁ニ迫マリ、直チニ番兵ヲ刺シ（銃槍ヲ以テス）、進テ壁中ニ闖入シ賊拾壱人ヲ鏖殺シ、尚進デ数塁ヲ抜キ、一弾丸ヲ費サズシテ三國峠ノ全線ヲ乗取リシ処、旗返ノ賊ハ狼狽シテ守リヲ失ヒ、戦ハズシテ敗走セリ、官軍逃ルヲ追ヒ賊ヲ射殺シ、銃器等分捕数多ナリ（多クハエンピール短銃ニテ、或ハ火縄筒アリ及ヒ弾薬箱ニ泥土ヲ詰メタルアリ）全勝之勢可想ナリ、於是官軍ハ小野市駅ヲ本部トシテ哨兵線ヲ張レリ、

○日杵敗走ノ賊ヲ追撃シタル佐伯口ノ二軍、堀江（秀介）中佐・奥（保愛）少佐及ヒ遊撃隊井街（清顕）少佐ノ諸隊ハ未タ来ラズ、尤一昨日頃ハ佐伯ノ方横川辺（重岡ヲ距ル四里許）ニ当テ砲声聞ヘ、火焔天ニ漲ル等、多少戦ヲ接ヘタリシト見ユレトモ、未タ確報ナシ、

○賊ノ薩人百名ヲ卒ヒタリト云小隊長郷田源介、旗返峠ニテ降伏セリ、此者ハ初メヨリ出兵不同意ナリシガ、其時ノ勢不得已モノアリ、一旦従軍シ熊本ヲ経テ山鹿ニ出テ、其後追々敗走、馬見原ヨリ日向ノ椎葉山ヲ過キ、富高新町ニ出テ延岡ヨリ豊後路ヘ進ミタルニ付、日向一般ノ形状ヲ詳ニセズト雖トモ、真ニ悔悟自首スルモノナルヲ以テ、賊情多少官軍ノ為メニ陳述スルモノアリ、

其略左ノ如シ、

○熊本ノ敗レシ後、惣軍ノ内人吉近傍ニ残リシモノ五千人程、矢部・馬見原ニ三千人位、鹿児島ニ向ケタルモノ凡壱萬人、日向ニ引退キタルモノ弐千五百人位ナルベシ、其後日向ニテ壮兵ヲ募リタルモノ数千人アルヲ以テ、兵数ハ今尚三萬人位ハアルベシ、然レトモ元来私学校党ニシテ決死奮戦ヲ誓ヒシ者ハ追〻死傷シ、存スルモノハ三千人ニ満タザルヘシ、其余ハ皆脅従威服ノモノニ付、戦ニ倦ミ役ニ苦ミ、心窃ニ降伏自首セント企テ居ルモノ多カルベシト雖トモ、官軍ニ降伏スレハ絞リ首ニセラル、ニ付、寧ロ戦死スルニ如カズト云フノ説一般ニ縷布シ、志ヲ遂ケザルモノアリ、或ハ賊勢ニ圧セラレ、官軍ニ投スルノ間ヲ得ザルモノモアルベシ、

○西郷ノ所在ハ郷田モ之ヲ知ラズ、必ズ都城ニアルベシト云フ、桐野ハ愈日向ニ来リテ指揮セリ、今何レニアルヤ詳カナラサレトモ、必ス延岡ニアルヘシトナリ、

○火薬ハ未タ尽キザレトモ、弾丸ハ甚タ乏ク、日向地ノ海辺ニアル網ノ鉛ヲ以テ銃丸トナスニ至レリ、尤民間ニ蓄ヘ居ルモノハ悉皆之ヲ取集メタレトモ、其数僅ニノミ用ニ供スルニ足ラズ、猟師等ハ銘〻自分ノ猟銃弾薬ヲ以テ役ニ従フ、三國・旗返ニテ官軍ニ分捕リタル中ニモ、猟銃数挺アリタリ、

○延岡ノ人心ハ士民ノ別ナク総テ賊ニ帰シ、賊ノ為メニ周旋尽力到ラザル所ナシ、士民ノ婦女各茶菓ヲ携ヘ来リ、其最寄ノ番兵ヲ慰労スルニ至ル、其他ハ推シテ可知ナリ、

○高知県士族ノ中ヨリ使節両度来リシ由、其人名等詳細ノコトハ知リ得ス、

○三國・旗返ヲ守リタルモノハ過半薩人ニシテ、其余ハ飫肥・延岡ノ兵ナリ、惣数一千未満ナリシト云ヘリ、右数件郷田ヨリ聞ク所ニ係ル、

○重岡ニ拠リタル賊徒俄カニ該地ヲ引去リタルハ、果シテ佐伯口ノ賊等官軍ノ為メニ破ラレ、重岡ニ先テ別路ヲ取リ延岡ヘ引揚ケタルノ報アルカ為メナリ、且ツ連日ノ大雨ニテ賊ノ銃器ハ多ク転火(点)セザルニ至リ、官軍ヨリハ大小炮ヲ連発シ、殆ンド防ク可ラザル勢ニ相成リシ故、数畧ヲ捨テ去リタル模様ナリシト云ヘリ、

○延岡ノ守線ハ熊田(北川町)・ムシカ(無鹿)等ナルベシ、尤本日ハ賊等市棚(北川町)重岡ヨリ四里許・熊田重岡ヨリ五里余等ニ止宿セリト云、

○官軍ハ進デ赤松峠ニ胸壁ヲ築キ、近傍ノ要処ニ哨兵ヲ張リタリ、

○重岡ニテ雇ヒ揚ケタル人夫ノ賃銭ハ、大払ニ為スベシトテ、総テ払ハズシテ立去リタル由、人夫等其苦使ヲ厭ヒ窃カニ路ヲ逃レ帰リ来ルモノアリ、

右ハ重岡駅ノ土民ヨリ親ク聞ク所ナリ、余ハ尚後便ヲ得テ萬縷可申上、此旨要領ノミ御報告仕候也、

十年六月廿一日午後十時認　豊後国小野市駅ヨリ　三好退蔵

大久保利通殿

○高千穂辺ヘ贋札ヲ製スルモノアリ、之ヲ宮崎ヘ呼出シタリ、定メテ金札ヲ贋造スル積リナルベシト、日向ヨリ来リ居リシ人夫ノ咄シナル由、其虚実ヲ詳ニスル能ハサレトモ、聞ク所ノマヽ申上置候也、

一五　河野幹事ヨリ鹿児島地方之景況進達

一五ノ一　別紙三通本日鹿児島表ヨリ到着候ニ付、疾ク其筋ヨリ御承知之義トハ存候得共、為御参照不閣及御回進ニ候也、

九州臨時裁判所　河野幹事

明治十年六月廿四日

大久保参議殿

追申、岸良(兼養)大検事ヘノ御書翰本日相達候処、同人大分県ヘ出張後ニ付、則該地郵送致候也、

一五ノ二　今朝一書相認御用状中ニ封シ込置候後、正午十二時前二本松ノ官軍交代ノ折柄、冷水ノ方ヨリ賊二人銃ヲ携ヘ、寛〻ト攻登ルヲ見、官軍不残右両人ニ注目シ、冷水ノ方計リヲ見テ狙撃シ、其一人ヲ斃シタル処、豈計ンヤ後ロヨリ賊四五百人抜刀ニテ一勢ニ切込ミ、官軍不意ヲ打タレ、昨朝来力ヲ尽シテ攻取リタル山モ遂ニ空敷盛リ返サレ、文官ナカラモ残念至極ナリ、併磯ノ山ハ未タ官軍ノ線内ナルニ依リ、明朝当リハ取戻ス勢アリ、堂ダカ剣蚕(呑)ナモノニ御座候、

鹿児島九州臨時裁判出張所　香川景信

十年六月廿三日

近藤秀寛殿

一五ノ三　毎〻好品物ヲ属シ拝謝〻〻、過日ハ馬関ヘ御出張ノ由

御苦労ニ奉存候、扨昨二十二日者軍議吉野ヲ抜ニ決シ、第一旅団二大隊・第四旅団一大隊半、外ニ巡査抜刀隊都合四大隊余、午前第四時頃ヨリ海上ヨリ迂回重富ニ至リ、賊ノ背後白金坂ヨリ進撃シ、堡塁数ケ所ヲ抜キ、午後四時頃迄ニセハル山(篠馬場)迄押通シ、同所弐本松ノ砲塁ヲ占メタリ、賊ノ死傷無算、生虜モ亦多シト云、官兵ノ死傷ハ百余名ト云、此戦ハ入県以来ノ一大捷戦ニテ、実ニ愉快ノ見モノナリキ、今日ハ昧爽ヨリ実方辺ニテ開戦、今ニ至テ砲声絶ヘス、勝敗未タ分ラス、今朝士官某ヨリ聞ニ、賊モ最早退守ノ地無之ニ付、必ス都城ヘ拠ルナルヘシ、同所ヘハ既ニ輜重部ヲ移シ、西郷モ亦同所ニ居ルトノ探偵アリト、

肥後地ヨリ進入ノ川路御手ハ、既ニ出水ヲ越テ野田ニ来リ、三浦ハ大口ニ至リ、山田ハ飯野迄達タリト云、昨夜来ノ戦争見物ニ労レ、退庁後午睡シタル処、今夜汽船出帆ノ由ニ付、不取敢右迄写シ、御後鴻委細可申上候也、

六月二十三日　　判事大塚正男

(河野)敏鎌殿

尚々御家来長谷川ヨリ被贈下タル洗濯モノ有、御落手セリ、

岸良・小畑両先生ヘ宣敷御鶴声可被下候、追々各所ニ犯罪増加シ、嘸々御多忙拝察セリ、時下御自愛御為政アレ、

一五ノ四

今ヤ賊ハ豊後ノ重岡駅・小野市ト佐伯トノ間ニ割拠シ、険ニ依リテ数塁ヲ設ケタリ、官軍ハ野津大佐(道貫)、川上(操六)・(高敏)大迫ノ少佐等奥畑村(三重町)竹田ヨリ七里ヲ本営トシ、旗返ヨリ葛葉ヨリ諸道進撃、三國峠(大分県下有名ノ険路ナリ)ノ数塁ヲ抜タリ、官軍死傷誠ニ少シト云ヘリ、○堀口(堀江為介)中佐・奥(保愛)少佐ハ臼杵ヨリ佐伯ヨリ重岡ヘ向ケ進撃ノ筈ナリ、○野津(鎮雄)少将ノ第一旅団ハ、高千穂口ノ三田井ニアリ、豊後口ノ進ムヲ待テ兵ヲ進メ、延岡ヲ合撃セント企タリ、人吉ノ方モ大ニ勝利、加久藤及ヒ飯野(皆日向ノ地ナリ、以テ根拠スヘキ所也)迄進ミタルヨシ、賊勢ハ日々衰ヘ、官軍ハ益壮ヲ加フ、痛快実ニ此事ナリ、

豊後国竹田駅ヨリ

六月十七日午後　　三好判事

河野幹事殿

一六　河野幹事ヨリ鹿児島地方之景況進達

別紙之通大塚判事ヨリ申越候、右者去廿四日付ヲ以テ御回進致候継報之儀ニ付、尚又御参照之為メ呈進致候也、

十年六月廿六日　　河野幹事

大久保内務卿殿

今夕松尾手代乗船スル由来候ニ付、為待置昨日之末荒増左ニ申進候、一昨日催馬山（奥脱カ）・二本松之賊墨ヲ抜タル処、昨朝賊不意ニ押寄セ終ヒニ取戻サレ、夫ヨリ徹宵ノ戦争ニテ今朝ニ達ス、扨又今朝ハ第五時頃ヨリ三大隊之兵ヲ涙橋ノ方ニ出シ、谿山街道ノ山手ヨリ進撃、唐湊（とそ）山上ノ賊墨数個ヲ抜キ、進テ高見（田上）村ニ至ル、賊退テ武村ノ南部ニ拠リ防戦ス、此時高麗橋ノ方ヨリ二中隊計ヲ荒田野ニ出シテ、撒布シテ横矢ヲ入ル、新上橋（しんかんはし）・西田・高麗・城山ノ各墨ヨリモ砲ヲ連発シテ声援ス、爰ニ於テ官軍奮戦火ヲ高見村・武村ノ民舎ニ放チ、烟焔ノ中ヨリ吶喊シテ劇シク攻撃、賊狼狽シテ竹（武）村ノ上ノ山ニ遁上ル、官兵追躡シテ山上ノ砲墨ヲ抜ク、実ニ午後第二時ナリ、然ルニ賊ハ猶退テ武村山ノ西部ニ拠リ、殊死防戦シ、即今戦闘ニテ砲銃ノ声山野ヲ動カセリ、後ハ後便、草々不尽、

鹿児島同出張所

六月廿四日午後第五時　　大塚正男

長崎

九州臨時裁判所

河野幹事殿

一七　西村書記官ヨリ豊後ノ景況上申

別紙来書御参考之一端迄供御高覧候、賊勢モ頗ル衰微、薩地モ去ル廿五日川路少将（別働第二旅団）之手鹿児島ヘ連絡相成候由、最早日州沿海ノ攻進高鍋・佐土原之辺ニ相達、諸口連合之地ニ立至リ候ハヽ、日隅一角之賊巣期日屠尽ト被存申候、高千穂越三田井之官兵モ亦近日増員相成候由、重岡口ト腹背攻撃之勢ヒニ立至リ候ハヽ、延岡モ無程陥落、沿海一路之攻進其功効ヲ奏シ可申、重岡ヨリ延岡迄凡九里ノ行路山川絶険之由、是今日迄十分進撃難相成原因ト被存申候也、

十年七月二日午前　　西村捨三

大久保内務卿殿

追伸、目下攻進之緩急、日州沿海一路之行進急ノ急ナルモノト被存申候、何卒尚増兵之儀企望之至リニ不堪候也、

恵書拝読来諭委細承了、郷田源介ナルモノハ真ニ前非悔悟、実効ヲ立テ其罪ヲ贖ハントノ志願ナルヲ以テ、野津（道貫）大佐ノ手ニ留メ置カレ、今其本営中ニアリ（野津大佐・川上少佐其他ノ薩人皆知音ノ中）、別ニ口供書類ハ無之候得共、小生親ク其顛末ヲ聞ク所ニ拠レハ、渠レ初ヨリ私学党ニアラス、弾薬強奪等ノコトニ至テハ最其非ヲ論シ、出兵不同意ノ徒中ニ在リタレトモ、当時ノ勢ニ圧セラレ、遂ニ其説ヲ枉ゲ、会計軍曹ニテ熊本ヲ経テ山鹿口ニ出テ従軍中、熊本城ノ連絡後矢部木原ヲ経テ日向ニ入リ、延岡ニ滞陣中小隊長（百人一小隊トナリ、薩ノ奇兵也）、豊後口ニ進ミタリト云ヘリ、尤最初ヨリ出兵不同意、殊ニ敗軍ノ度毎ニ艱苦一方ナラズ、兵卒モ新募ノモノ而已ニテ如意使用モ出来ズ、旁以悔悟ノ念止ム能ハズ、間ヲ得テ官軍ニ降伏セント企テタルモノ数日ナレトモ、哨兵線内ヨリハ容易ニ出ルヲ得ス、空ク日ヲ送ル中、旗返峠進軍之節自分ノ隊最先ニアリ、脱出ノ機会ヲ得タルニ付、降伏ノ志ヲ遂ケタリトナリ、〇賊ニ火薬ハ充分アレトモ弾丸ニ乏ク、日向海浜ノ網ノ鉛ヲ用ユルニ至レリ、賊既ニ死傷セシモノ多シト雖モ、壮兵ヲ募集シタルニ付今尚三万人位ハアルベシ、銃器ハ不足ナリ、〇土州人両度日向ニ来テ応援ヲ約セシコトアルヲ聞ケリ（其人名ハ知ラズ）、伊豫松山ヨリモ士族某来テ、応援セント乞フタルコトアリト聞ケトモ、其実否ト之ヲ許シタリヤ否ハ確知セズ、〇桐野ハ始メ宮崎ニアリタリ、今ハ必ス延岡ニ在ルナラン、西郷ハ其所在ヲ知ラス、従軍以来一度モ面会セズ、〇延岡ハ士民共ニ頗ル賊ヲ愛スルノ風アリ、賊ノ為メニ周旋尽力到ラザル所ナシ、〇豊後路ニ入リタル賊、薩人ハ三分ノ一ナルベシ、其余ハ日向其他ノモノナリ、然レトモ隊長等ノ重立チタル役々ハ、大抵薩人ナリ、〇賊徒ノ中純粋ノ私学党三千人位ヲ除クノ外ハ、皆戦ニ倦ミタルヲ以テ、降伏自首セント欲スルモノ而已ナルベシト思ハルレトモ、其機会ヲ得ザルト、自首セシ上ノ御処分ヲ疑ヒ居ルトノ両様ナルベシ、

右数件郷田ヨリ聞ク所ナリ、此他ニモ種々ノ咄ハ聞キタレトモ、一々記臆セズ、且ツ格別ノコトニモアラザリシト思フ、其後日向米良（旧旗下領ナリ）ノ士族黒木某ヲ縛シタリ、其供スル所モ西郷・桐野ノ所在ハ、郷田ノ言ト同シ、弾薬銃器モ同様ナリ、米良ヨリハ人夫迄ニテ八拾名ナリト云ヘリ、内六十名豊後ニ入レリト、〇高鍋士族綾部直躬ナルモノ、佐伯口ニテ縛ニ就キ、今竹田ニアリト、此者ノ供

スル所ヲ聞クニ（親ク聞キンニアラズ、該犯ヲ取糺シタル某官ヨリ聞ケリ）、高鍋士族秋月種世・黒水長慥ヲ始メ拾五人、官軍ニ投帰セント企テタルコト顕ハレ、賊ノ為メニ捕ハレタリ（是等ハ皆初メヨリ出兵セス、異論ヲ主張セシモノ）、佐賀関小生ガ遣ハシタル舟ナルベンノ小舟美々津ニテ押ヘラレ、舟子ハ高鍋ニ拘留セラレタリト、此ノ外別ニ聞キ得ルコトナシ、尤昨日ヨリ壱両人延岡地方ヘ探偵差出シタリ、此モノ全フシテ帰リ来ラハ、多少ノ異聞アルベシト思ハル、然ル上ハ御報知可致、御承知ノ如ク、此地ノ戦状ハ別ニ異ナルコトナシ、廿四日五日ノ戦ハ非常ノ劇戦ニテ、互ニ許多ノ死傷アリシ由ナレトモ、重岡口ハ官軍終ニ勝利ニテ、戦闘線ハ次第ニ延岡ニ向ケ進ム勢ナリ、独リ陸地峠（カチジ）ノ方遊撃隊一敗振ハズ、（北川町）陸地峠ノ全線又賊ノ有トナリ、賊ヲシテ又豊後ニ足ヲ留メシメタリ、御同然遺憾ノ極ナリ、然レトモ延岡大進撃遠キニアラザルヘシ、不日吉報可申上候也、

重岡ヨリ

六月三十日午後　　三好生

西村君

以後若シ書ヲ恵マルヽナラバ、重岡口軍団本営ヘ向ケ御投ジ可被下候、上国ノ模様其他ノ異聞御洩シヲ乞フ、

一八　西村書記官ヨリ豊後ノ景況上申

日向口戦状追日上進仕候通リ、重岡口并ニ高千穂口トモ進撃攻入、不日延岡ニ相達シ可申候得共、両路トモ山川栄廻絶険之地勢ニ付、近日之戦状（去月廿四五六日）ニテハ、攻進頗ル艱難ト被存申候、且賊徒ニ於テモ延岡以南ハ沿海一路絶険拠守之地勢モ無之由ニ付、官軍長駆高鍋・佐土原等ニ進入、西面飯野・加久藤・大口ヨリ鹿児島ニ連絡シ、為メニ賊徒日隅ノ一角ニ窮蹙候様ニテハ、最早百事不可為ヲ以テ、目下延岡之要衝ニ拠リ西北諸険ヲ拒守シ、曠日弥久、外ハ不逞ノ声応ヲ要シ、内ハ新募ノ訓練ヲ専ラトシ、万一ヲ僥倖イタシ候所念ニ可有之欤、依テ其戦勢尚熊本ノ田原坂近傍ニ於ルガ如キ情状ヲ有シ、陸路一面之攻撃ニテハ、其成効或ハ遅延可致欤、依テ熊本ノ八代ニ於ケル如ク、更ラニ延岡之南方細島（日向市）ノ要港ヨリ一路ノ軍隊ヲ上陸セシメ、腹背三面（高千穂・重岡・細島等也）ヨリ攻撃ニ及ヒ候ハヽ、大ヒニ速効ヲ奏シ可申ト被存候、抑日州路之進軍ハ全面之一大衝背軍ニシテ、細島之中入ハ、其一大衝背ヲ達シ得ヘキ端緒タル、緊要ナル一小衝背軍ト目スヘクシテ、延岡攻陥全軍長駆、高鍋・佐土原等ニ相達シ候ハ

、、戦勢頓ニ変態ヲ生シ、賊徒内外之所念モ相絶、終ヒニ脅従輩接踵帰降之地ニ可立至ト推測仕候、元来中入進擘之義ハ危中之至危、権外之小官輩敢テ容喙可致筋ニ無之、甚以恐懼之至ニ候得共、兼テ西京出発之際、御内旨相伺置候義モ有之、敢テ愚衷上陳仕候、誠恐頓首、

十年七月二日午後　　西村捨三

大久保公閣下

一七　河野幹事ヨリ鹿児島県下之景況上申

大塚五等判事ヨリ別紙ノ通申越候処、格別之義ハ無之候得共、彼地之景況御参考之一端ニモ可相成哉ト存候間、本書之儘入電覧候也、

九州臨時裁判所

明治十年七月五日　　幹事河野敏鎌

大久保参議殿

（別紙内容は「鹿児島征討始末三」と同文に付省略）

一八　西村書記官ヨリ日向口ノ景況上申

一八ノ一　日向口戦線内見聞概略七月廿八九両日

一日州口各路ノ地勢ハ、豊日境上祖母・傾・桑ケ岳等ノ高山支脈東走スル中間ユヘ、スベテ畳山複嶺ヲ幾重モ踰越スル場処ノミニテ、コレ容易進軍ナリカタキ素因ナリ、高千穂口ノ如キハ頗ル険隘ナリト雖、五ケ瀬川沿流爪下リノ地勢ニテ、畳複山嶺ヲ横絶スルノ艱難トハ、同日ノ論ナラザルヘシト雖、此口兵員十分ナラサルヲ以テ、敢テ孤軍懸進ヲ要ゼザルナルベシ、且豊日国境ノ諸山ハ多ク官林ニシテ、松・杉・樅・樫等蒼黒欝茂、日尚暗ク、少シク雨湿ノ気アルヤ、山蛭簇出頗ル行路ノ難ヲナスト云、目下賊徒多ク此欝林中ヲ出没セリ、

一諸口ノ連絡ハ、重岡ヨリ丸一尾（蒲江町）迄凡十一里余ニシテ、各方共国境内外峰通リノ要処ニ大小塁ヲ築キ、岨（ソハ）道谷間等不意潜突ノ虞アルケ所ハ、樹ヲ伐リ途ヲ塞キ竹柵ヲ結ヒ、守線二三重ニ及ベルアリ、賊徒モ又近日鹿塞竹柵等ヲ設クル由、木浦ハ別隊派出、万一ノ不虞ニ備フルノミ、

一重岡口ナル梓越・赤松谷ノ両道ハ、豊後ヨリ日向ヘ至ル国道ニシテ、馬輿相通シ大軍ノ出入必然此路ニ依ラ

ザルヲ得ザルヲ以テ、官賊トモ堅守対抗、梓越ノ方ハ黒土峠迄宮軍進線（重岡本営ヨリ凡壱里半）セリ、梓峠（国境ナリ）ヲ踰エ日州八戸ニ達スレハ、則チ無鹿川沿流ノ一路ニシテ、進軍甚難カラスト云、赤松谷ノ方モ其末此路ニ会ス、

一陸路峠ハ（柚原本営ヨリ凡壱里半）一人立ノ間道ニシテ、馬輿トモニ不通頗ル難道ニシテ、此路モ亦其末熊田通リニ会ス、

一石土峠ハ（丸一尾ヲ去ル凡三里）是亦馬輿不通極難道ニシテ、其末日州古江ニ達シ、海ニ沿フテ延岡ニ達ス、

一参謀部ハ重岡・柚ノ原・丸一尾等ニアリ、各地トモ戦闘線迄遠キハ三里余、近キモ壱里余ニシテ、殊ニ険山中ノ対戦臨時応援モ届キ兼ヌルヲ以テ、大略兵員塁壁内ニ小屋掛詰切之姿タ也、

一重岡ヨリ佐伯ニ至ル凡八里ニシテ、大野・海部（あまべ）ノ両郡ニ跨リ、大野郡ノ諸水ハ日州無鹿川トナリテ延岡湾ニ注キ、海部郡ノ各流ハ番匠川トナリテ佐伯湾ニ入ル、分水ノ山梁モ一小坂ニシテ、恰モ一区域ノ渓間ナルヲ以テ、道路モ艱険ナラス、且黒沢（富川村）・柚ノ原（同）等ヘノ支道モ馬輿ヲ通スルユヘ、目下佐伯ニ輜重本部ヲ置ケリ、為メニ諸品運搬不便ナシト雖、反ツテ重岡ヨリ三重市ニ達シ、佐伯ヨリ臼杵ニ到ル如キ三國峠・鏡峠等ノ峻坂畳嶺アリテ、行路頗ル艱ナリ、

右目撃ノ大略ナリ、然ルニ去ル廿四日日州都城モ陥落、尓来高岡・宮崎等ノ賊拠モ掃蕩可相成、結局延岡ノ一区ニ僅ニ残喘ヲ繫クヨリ外アルマジ、為メニ重岡口ハ死賊豕突之虞モアラン欤、故ニ近日一層厳重ニ守備ノ手当アリ、

十年七月三十一日　　西村捨三

一八ノ二

別紙鹿児島県日向国飫肥士族郡司俊夫外二人ノ口供、

并聞取書供尊覧候也、

十年八月二日　　原時亮

香川権令殿

一八ノ三

仮口供

鹿児島県日向国中ノ郡

飫肥士族

郡司俊夫

四十三年一ケ月

一自分儀、都城県創立ノ際ヨリ権大属ニ任セラレ、宮崎

県設置ノ時迄奉職致来候処、故アリ、去ル七年中職ヲ辞シ、尓来閑散光陰ヲ送居候ニ、本年二月中西郷隆盛叛逆ヲ企テ、大兵ヲ率ヒ東肥ニ侵入スルニ該リ、旧飫肥藩ノ儀モ、老臣伊東直記・川崎新五郎ノ両名賊魁等ノ脅迫ニ因リ、旧臣ノ者都合八百余名ヲ召集シ、別働ノ姿ニテ東肥ニ従軍シ、山鹿・隈府辺ニテ屢官兵ニ抵抗セシガ、其后賊軍連リニ敗績ヲ取リ、終ニ今日ノ蹙勢ニ立至リ候、自分モ亦二月以降数回伊東等ノ強誘ニ預リ候得トモ、大義名分ノ愆ルヘカラサルヲ銘肝シ、終始名ヲ病患ニ寄セ遂ニ此挙ニ関渉セス、然ルニ五月頃ニ至リ、同邑士小倉処平ナル者賊魁等ノ嘱托ヲ受ケ、又〻飫肥表ニ於テ兵ヲ募リ、士族ハ勿論農商ニ至ル迄、十七歳以上四十歳迄ノモノハ、篤疾ニアラサルモノハ悉皆隊伍ニ編シ至此自分（自分ハ四十歳ニ余ルト雖トモ、先年仕官スルヲ以テ別段誘ハル）モ進退維谷ルト雖トモ、猶種〻ノ策ヲ設ケ辛クシテ遁居候事、一同七月廿四日官軍都城ヘ向ケ大進撃、賊兵防戦ニ力ムト雖トモ、遂ニ支フルコト能ハス大潰シ、同所陥ル否官兵直ニ飫肥ニ進撃シ、廿六日朝陣野尾（飫肥ヲ距ル四里許ノ地）ニテ一戦争アリ、廿七日飫肥モ亦陥ル、此時ニ当リ飫肥隊四百余人ハ、一歩モ相去ラス速ニ降伏シ、飫肥人民初テ安寧ノ思ヲ為スヲ得タリ、於是人民一統ヨリ自分外二人ヲ雇ヒ、先頃ヨリ豊後口ニ向ヒシ飫肥隊ノ者ヘ、飫肥一般帰順ノ段密知ノ為メ相越ヘキニ議決シ、同日自分外弐人飫肥駐在ノ迫田少佐・江口（高能）少佐ニ面謁、右之次第ヲ言上シ、印鑑ヲ貰受ケ翌廿八日飫肥ヲ発シ、油津港ヨリ漁艇ヲ傚ヒ、三十日朝御管下海部郡畑（蒲江町）ノ浦ニ投錨、景勢ヲ偵ヒ、本月一日佐伯村ニ着イタシ候事、右之通相違不申上候、以上、

右

明治十年八月一日　　郡司俊夫

右調

九等警部原時亮

一八ノ四　景況聞取書

一旧飫肥ヨリ出兵セシモノ、士族農商ヲ併セ総員千二百人余モ之アリ、内八百余人ハ先頃ヨリ肥後ニ出テ、夫ヨリ豊後口ニ向ヒ、死傷等モアリテ、目今豊後口ニ現在スルモノ五百余人モアルベシ、

一都城ニアリシ賊長ハ、邊見十郎太・別府新介・中島某・來島某ナリト聞ク、

一桐野ハ宮崎ニ在リ、旧縣庁ニ軍務所ヲ置キ、日々此ニ出勤セリト、西郷ハ或ハ人夫ニ変体シ、或ハ将校ノ体ヲ為シ、各地ニ出没スト雖トモ、多クハ宮崎ヲ以テ在所ト為セショシ、

一楮幣ハ本年六月初旬ヨリ発行シ、飫肥ヘモ一万円程下渡セリ、此札ハ五十銭ヨリ五円迄アリテ、西洋布ヲ合セ之ヲ造リシモノナリ、朱印アリ、又三ケ年ニ引替云々ト、此札ヲ受ケサルモノハ処分云々アリ、

一飫肥隊モ近来兵器・弾薬乏少ニ悩ミ、銃ハ多クハ火縄打ヲ管打ニ変製シ、玉ハ銅・鉄・錫等ナリ、定テ他隊モ同一ナラント察ス、

一賊兵ノ惣員農兵ノ銃器ヲ持セサルモノヲ併スレハ、殆ト三万ニ近シト雖トモ、兵ト称スヘキモノハ壱万位ト云、

一七月廿八日宮軍宮崎ニ向ケ大進撃、廿九日火ヲ新町宮崎ヲ距ル二里未満ノ地ニ放チ、勝ニ乗シ急進相成ショシ、昨今ハ定テ同地モ抜ケシナラント決察ス、自今賊ノ拠ルヘキ地ハ、僅ニ佐土原・高鍋・延岡ノ三所ニシテ、其滅亡亦不日ニアランカト想像ス、

一同廿四日都城ノ陥ルニ当リ、賊隊狼狽潰走ノ景況譬ヘカタシ、邊見十郎太ノ独歩ニテ飫肥ニ来ルヲ目撃ス、

一伊東直記・川崎新五郎ハ、廿七日飫肥陥ルノ際降伏セリ、

一小倉處平ハ目今豊後口ニ出テ隊長ヲ勤ムト聞ク、

右ハ郡司俊夫申立ナリ、

十年八月一日聞取ル　　九等警部原時亮

一八ノ五　仮口供

鹿児島県日向国中ノ郡飫肥士族

米良守衛

四十四年二ケ月

平部俊英

三十八年九ケ月

一自分共儀、本年二月薩賊暴挙以降、追々出兵可致旨被相迫候得共、守衛ハ四十歳余、俊英ハ平素弱体ノモノニ付兵役相断、町内警邏等ノ世話致居候処、同七月廿七日飫肥抜落候ニ付、人民一般ヨリ被相頼、豊後口ニ在ル同邑ノ兵隊ヘ今日ノ景勢密報ノ為メ、同日ヨリ郡司俊夫ニ随従郷里ヲ発シ、海路ヲ取リ本月一日御管下海部郡佐伯村ニ着致シ候、詳細ノ義ハ俊夫ヨリ可申上

候事、

右之通相違不申上候、以上、

右

明治十年八月一日　米良守衛

平部俊英

一九　鹿児島県官ノ同県下ノ日記

五月二日

海上小舟ニて家具雑品を運搬し、老幼男女之逃遁離散するもの陸続として不絶、多くハ櫻島等へ赴もの多し、上陸して市街を見れハ、更ニ人影を見す、実ニ寂莫を極めたり、夜間道容易に通行を許さす、

五月三日

当時賊の近辺ニある者ハ、別府新助・逸見十郎太・貴島卯太郎将として、加茂(蒲生)郷町・加次(治)木・吉田辺にありと云ふ、

五月四日

午後十一時三十分新上(照)院の方角に当り、五六発の砲声を聞く、四十分又一発、依テ警部四名を遣し探防(訪)せしむ、十二時始て南方に当り放火あり、探防を遂たるに、山口馬場なる菱刈杢之助の邸なりといふ、賊の放火したるものに相違なし、一軒焼て鎮火す、

十一時過西田橋辺迄賊一人抜刀ニて来ル、多分賊ノ斥候なるべし、

本日磯の島津邸に賊の斥候来ル、

賊蒲生を本営とし、一手ハ加治木・重富、一手ハ下田・川上の両村を経て、西田村・武村・上ノ園等へ屯集し、各自の家宅ヨリ頻りに糧食を送致する由、

哨兵線外ハ立退之布達あるにより、雑遝甚しく混淆紛乱目視すへからす、

昨夜賊弐百名斗り谿山口へ寄せたる由、

磯島津邸ハ哨兵必用之地ニ付、兵隊入込候旨本営申来ル、

五月五日　雨

午前四時五十分西田の内新上橋辺より、新上(照)院旧大徳寺の上ニある黒木中佐受持の胸壁に、賊二小隊程押ヨセ、其内壱人ハ西郷隆盛と名乗り、五六名抜刀ニテ掛る処、悉ク射殪シ、死骸も引揚ること能ハす、其他の胸壁に掛るものも皆敗走す、其西郷と名乗シ者ハ小隊長能勢彌九郎なり、屯家ハ直ク其山麓にありといふ、県庁ニて砲声を

聞くに、初めハ大徳寺の上辺、次ハ西田橋辺、其次ハ行屋通り辺なり、
五時三十分始て西田橋の方角を放火す、それより引続て九日に至る迄炎焔絶る隙なし、悲歎の至りに不堪なり、
今夕ノ戦争にハ飛丸県庁の内ニ落るものあり、
九時二十五分筑地清川行屋通り辺を放火す、
黄昏和泉崎官軍山田大尉、兵卒に命シテ新上院の空屋に至り、戸板を取寄るに、賊五人右の空屋にありて兵卒に切掛ル、兵卒辛して逃帰りて大尉に報す、直に抜刀隊を遣して悉く切殺すといふ、
十二時ヨリ降雨甚し、
午後二時頃鐘撞堂の胸壁に、賊二十名程掛る、官軍より鬨声を揚て発砲す、
午後九時武の橋の胸壁へ賊三十人程切込む、砲撃を受て皆逃遁す、又西田橋の向荒田辺へも賊二十人程来ル、悉く打払たり、

五月六日　曇

今日ニ至り兵燹また熄せす（第一旅団より兵数一中隊荒田村へ出し候処、賊より切掛ル付三人ヲ殺ス）、一説に云く、西郷ハ横川にあり、桐野ハ加茂（蒲生）にあり、別府新助ハ重瘡を受て運動能ハすといふ、〇西郷在所の事甚疑ハし、
午後三時半賊三百人程川尻に来る、川向にある官軍の斥候の報知により、士官号令シテ賊来ルトモ打ツナ、皆揃て打てと命す、大体揃たと思ふ時打出すと賊皆逃去る、
依テ士官打方止メの号令ヲ下すと、賊二十名程胸壁の下（胸壁ハ河側の石垣の際にあり）より顕れ出、抜刀にて切掛る、余り近くして打方も六ツケ敷程なり、依て胸壁の上に昇りて打、或ハ剣或ハ刀を以突合ひ切合ふになり、賊十七名程打取りたり（多分二十人程打取しなるへし、余は引汐ニ流れしなるべし）、一人生擒る（此生捕ハ大山少将の甥なり、玉三ツ受所詮生命覚束なしといふ）
今夕ハ桐野来リシ由、竹ノ橋下川尻ニテ賊十六名ヲ討取、内壱人生捕、大山辰之助後死ス、

五月七日　半晴

島津家の菩提所常光（浄）明寺焼亡す、
賊十五名程ガンドヲ（龕灯）提灯を持て来ル、悉ク打払ふ、
今夜賊四百人程西田橋辺へ襲来す、直ク川側へ来る迄ハ黙然として来りし故、大砲用る隙もなき位なりと、官軍の死傷十人なりといふ、

五月八日　雨

島津珍彦帰る、直クト櫻島へ上る、
午後三時十五分賊大徳寺の上へ襲来す、

五月九日　晴

午後二時頃四方の胸壁悉ク掛りしよし、尤四五名宛ニて多勢にハ非さる由、其内女の死体一ツあり子供三才位、

右は聞儘に記したることなれハ、いづれ本営の方を聞合、確報を記載すへし、

五月十日

一兵燹両所ノ煙禾夕不熄、

二〇　管下賊徒暴起之儀ニ付上申（福岡県令）

本年二月鹿児島県賊徒暴発之聞エ有之ヨリ、続テ熊本県下ニ闖入スルニ及ヒ、本県福岡及近郷之士族騒然動揺、物議恟〻タリ、然レトモ鎮撫ノ周到ナルト、警備探偵ノ厳密ナルト、官兵ノ追〻到着スルヲ以テ、事ヲ果ス能ハス、警察ニ於テモ亦其実蹟ヲ得サルヲ以テ、手ヲ下ス能ス、曠日弥久ナル内官兵皆戦地ニ赴キ、福岡兵営ニ駐屯スル者僅ニ一小隊、巡査モ亦戦地及久留米等江凡ソ四百名許派出シ、残ル者僅ニ百七八十人ニ過キサルニ乗シ、福岡士族越智彦四郎・武部小四郎等巨魁トナリ、福岡及近郷ノ士族ヲ嘯集シ、三月廿七日夜ヲ期シ将ニ福岡分営及県庁ヲ襲ヒ、銃器・弾薬及ヒ軍資ヲ奪ヒ、海口ヲ塞キ以テ薩賊ニ応セントス、警察早ク其状情ヲ探知セシヲ以テ、其期ニ先タチ、森十等警部ハ巡査七八名ヲ率ヒ六本松（福岡谷村ノ内）近傍ヲ、石野七等警部・小佐々八等警部ハ巡査五名ヲ率ヒ田島村辺ヲ、片山九等警部ハ巡査八九名ヲ率ヒ荒戸辺ヲ、岡野七等警部ハ春吉辺ヲ、中島八等警部ハ博多辺ヲ巡視セシメタル処、賊徒ハ銃器・刀鎗等ヲ携エ追〻通行ナスニツキ、見付次第之ヲ縛シ（此夜縛スル者凡五十名許）之ヲ糺スニ、賊情全ク顕レ、中ニモ片山九等警部ハ地行（福岡西町ノ字）ニ於テ、賊凡ソ四十人許屯集用意ナシ居タル処ヘ突入、弾薬二十箱計、刀剣十六本其他ノ物ヲ取上ケ来リ、石野七等警部・小佐々八等警部ハ、賊十数名ニ遇ヒ五名ヲ縛シ、委敷賊情ヲ得タルニ付、西町分署ノ永松十等警部ニ警報シ、永松ハ巡査十余名ヲ率ヒ同シク田島村ニ向ヒ、途ニ賊ノ斥候ニ遇ヒ竟ニ之ヲ炮撃シ逃ルヲ追フ所、賊既ニ集ル衆多ナルヲ以引揚還リ、討撃ノ令ヲ乞フ、是ヨリ先キ石野・小佐々モ還来リ、途ニ異状ヲ分営兵ニ報シタル旨ヲ述ベ、速ニ討撃アランコトヲ乞フ、乃チ巡査ニ銃器ヲ与ヘ隊ヲ組ミ、専ラ出兵ノ用意ヲナス処、賊既ニ懲役ヲ破リ役囚ヲ放散シ、且分営城ノ前後門ヲ襲フ、営兵之ヲ

炮撃シ、炮声大ニ起ル、賊又福岡追廻シ、厩谷・茶園谷・裏谷・春吉・中洲等ノ処〻ニ放火シ、煙焔天ニ漲リ市街昼ノ如ク、人数凡ソ四百人許三月廿八日午前五時、片山警部巡査三十名ヲ率ヒ福岡本道ヨリ、石野警部・小佐々警部各巡査三十名ヲ率ヒ谷村ノ西南ヨリ、岡野・中島・森ハ各巡査二十名ヲ率ヒ、各路ヨリ斉シク進ミ賊ヲ撃シム、勝敗未タ決セス、偶〻本地駐在ノ輜重兵三十名計、海軍楽隊士官及水手合三十名計県庁ニ来リ援ヲナスニツキ、乃チ福岡分営兵ト諜シ合セ、午後一時頃皆進テ賊ヲ撃ツ、時ニ賊既ニ逃ル、是レハ小佐々警部賊ノ前面ヲ衝キ、石野警部左右ヨリ横撃シ、中島警部賊後ヨリ進ミ、或ハ火ヲ放ツテ山ヲ焼クヲ以テナリ（此賊巡査壱名死ス）、而カシテ賊ノ所在頓ニ分ラズ、乃チ探偵ヲ放チ諸隊皆引揚ク、尓時市街人民ハ猶荷担シテ走リ、肩摩轂撃絡繹踵ヲ接シ、且賊ノ徒追〻暴起ノ聞エ有之、兎角鎮撫説諭ノ場合ニ無之、旁以同夜ハ海軍水手輜重兵等トモ談合シ、市街口〻ヲ固メ候処、幸ヒ第七聯隊ノ第三大隊及後備軍モ着港、上陸致シ候ニ付、直ニ福原大佐・平岡少佐等ト打合セ、専ラ警備ナス内、偵者追〻帰リ来リ、賊ハ早良（さわら）郡小笠木村・曲淵村（まがりぶち）等ニ屯集ナス趣ニ付、廿九日午前四時頃第七聯隊ノ内一中隊ト巡査六十名ヲ向ケ候処、同郡野芥（のけ）村及金武（かなたけ）村ニテ開戦、巡査壱名戦死ス（官兵ハ不分）、賊ハ同所両村ヲ放火シテ去リ、金武峠及曲淵村ニ引ク、官兵ハ七隈（ななくま）村江引揚ク、是時日既ニ黄昏ナリ、此夜火薬院町ニ起ル、放火スル賊壱名ヲ捕縛ス、市街ハ寂然殆ント人声ヲ絶ツ、蓋シ住民皆近郷ニ逃ルヽヲ以テナリ、三十日官兵一中隊巡査六拾名ハ金武村ニ向ヒ、回壱中隊及東京巡査八十名計ハ内野村ヲ経テ曲淵村ニ向フ、正午頃金武ニ向フノ官兵ハ金武峠ニテ開戦、一小隊ハ本道ヲ進ミ（巡査三名、先導ス）、一小隊ハ左ノ山ヲ上リ、巡査五十余名右ノ山ヲ上リタル処、本道ノ官兵賊ニ切込レ少シク退ク（是時先導ノ巡査一名死ス）、左右ノ官兵巡査是ヲ以テ横撃シ、賊死屍十六ヲ捨テ走ル、追テ峠ヲ越エ尾撃ス（此時巡査二名傷ス）、曲淵ニ向フノ兵ハ午後二時頃開戦、薄暮終ニ賊ヲ敗リ走ルヲ追ヒ、恰モ金武ノ兵ト合シ、賊ハ水無峠ヲ越エ肥前国三ツ瀬村ニ走ル、此日官兵十数名ヲ県下近区ニ出シ人民ヲ鎮撫ス、然レトモ人民未タ信セス、間或ハ安着スルモノモ有之、三十日賊ノ所在ヲ弁セサレトモ、其久留米ニ走ルノ報アルヲ以、久留米ヨリ同所駐屯ノ官兵ヲ出シ、又久留米警察署ノ小島四等警部・豊永七等警部・國分九等警部・川上九等警部・河南九等警部

等ヲシテ、巡査六十名ヲ率ヒ賊ノ逃路ニ備エシム、四月一日賊道ヲ転シ、将ニ秋月ニ走ラントシ、途中筑後国御(み)原郡乙隈(おとぐま)村・松隈(はら)村ノ間ニ出テ、官軍ノ福岡ヨリ熊本ニ輸送スル数十輛ノ弾薬アルヲ見、之ヲ奪ハントス、賊数凡三百五十人ト云フ、久留米ヨリ出ル官兵一中隊ト、小島四等警部・豐永七等警部・國分九等警部・川上九等警部・河南九等警部ノ手ト之ヲ聞キ、松崎ニ至ル、恰モ好シ、小倉ヨリ上陸ノ広島鎮台兵一中隊石擄ヨリ進ミ来ル、即チ之レト喋シ合セ挾テ賊ヲ撃ツ、賊徒三十余人忽チ斃レ、余ハ不残潰散ス、此時賊ノ頭分村上彦十ヲ縛シ、久世芳麿・舌間慎吾等ヲ殪ス、同日賊ノ先ニ秋月ニ進ムモノアリ、人数凡二百計、官兵巡査之ヲ追躡スレトモ夜ニ入リ不果、二日官兵依井新町ヨリ巡査ハ甘木ヨリ秋月ニ進ミ、兵ヲ分ツテ賊ノ走路ヲ絶チ置、同夜秋月城ヲ攻メ之ヲ敗リ、城ニ入ル、賊既ニ潰敗一人ヲ見ス、僅ニ二名ヲ殪シ三名ヲ擒ス、此両三日間ニハ官兵賊ヲ撃チ、賊敗走遁逃候次第逐一人民ヘ相示シ、猶区戸長等ヲシテ鎮撫セシメ候ニ付、市中人民モ漸ク安着致シ候模様ニ有之、秋月ニ於テ賊徒悉ク潰散致シタル報有之ヨリ、管下一般先ツ静定致シ候、将又是ヨリ先キ火災ニ罹リ候者、又東奔西走シ目下飢餓候者等儘有之候ニ付、夫々手当救助致シ遣シ候、三日四日ハ賊徒追々自首致シ来リ、又是ヨリ先キ秋月城ヨリ脱スル賊アランヲ察シ、宮内警部・足立警部ヲシテ巡査三十余名ヲ率ヒ、秋月ノ裏手ニ廻ラセタル処、此日賊ノ小隊長加藤堅武以下二十余名ヲ縛シ、六日賊魁久光忍太郎以下三名ヲ嘉摩郡馬見村ニ、賊魁越智彦四郎以下三名ヲ同郡椎木村ニ於テ縛シ候、其後日ヲ追ヒ管下全ク静定仕候、猶詳細之義ハ後日申上、不取敢此段上申候也、

明治十年四月廿三日　　福岡県令渡邊清

内務卿大久保利通殿

追テ賊徒人名別紙之通ニ有之候処、追々取調候上ハ或ハ相違之廉モ可有御座、且又有罪無罪之区別判然可仕候得共、不取敢上申致置候也、

二　山口県下賊徒ノ景況

明治十年五月三十日午前第八時、萩警察出張所詰警部能一述利ヨリ一等巡査松田二郎ヲシテ、県庁ニ来報セシム、其略ニ云、昨廿九日夜半石野某(姓名未詳)ト称シ、警部山本信三

居処ニ来リ告ケ曰ク、一両日来此地変動ノ兆アリ、人員ノ多寡ハ余未タ知ル能ハスト雖トモ、往々嘯集、先ツ該地警察署及ヒ大区扱所等ヲ襲撃シ、遂ニ山口県庁ヲ放火シ、兵ヲ挙ルノ策已ニ熟セリ、余モ已ムヲ得ス全意セシカ、如今遁レント欲シテ得ス、因テ密ニ顚末ヲ訴ル如此ト云、渠言フ処信偽詳ナラスト雖トモ、不取敢此旨具申ス、言二郎、於是県令大書記官各戒心アリ、密ニ警備ヲナス、已ニシテ区長桂路祐ヨリ戸長白倉夾輔カ告状ヲ具申ス、云フ、昨夜八時越カ浜ヨリ松本河原龍藏寺ヲ過キ、目代ヲ経川上台ニ溯ル者アリ、刀ヲ抜クモノアリ、前隊後隊各二十人許暗ヲ衝キ急行セリト聞ク、意フニ是該地及ヒ須佐ノ兇類ナルベシ云々、

此時ニ当リ山口分営ニハ一兵ナク、巡査ノ山口ニアル者モ八十人ニ超ヘス、而各見張所其它ニ散在シ、現在ノ者六十名以内トス、賊情測ラレス、衆心匈々タリ、即チ電報以テ巡査ノ馬関ニ在ル者廿名ヲ召集シ、及ヒ臨機ノ処分ヲ以現在ノ巡査ニ銃剣ヲ授ケ、陸軍駐在密議ス、不虞ニ備ヘ、県庁ヲ護衛セシメ、且細作ヲ発シ萩・山口間ノ諸路線ニ出シ、備具ノ処分粗々成テ天漸ク明ケタリ、

三十一日午前六時、萩詰四等巡査飯尾仙太郎夜ヲ冒シテ潜行、来リ報シテ云、昨日町田梅之進外四名不良ノ確証アルニ付、探索捕縛将ニ其余ニ及ハントスルノ際、兇徒来襲ノ警報アリ、幾モナク数十人ノ賊警察出張所ニ小銃ヲ放発ス、気焔頗熾ナリ、警部以下寡勢防クヘカラサルヲ知リ、相告テ暫ク其鋒ヲ避ケ各々散走、不肖モ亦走テ御許町ニ至リ、頭ヲ回ラシ右ニ望メハ烟焔雲ヲ烘スヲ見ル、帥チ賊ノ出張所ニ火スルヲ知ルナリ、警部以下相離レ、勢集合収拾スヘカラサルヲ知リ、已ムヲ得ス帰庁シ萩地ノ形勢ヲ報申スト云々、於是乎兇徒ノ叛状始メテ顕然タルヲ以テ、直ニ出兵ヲ馬関出張陸軍ニ倚頼シ、且伍組編製ノ巡査中ニ就キ十五人ヲ抜キ、警部高橋英一・大森勝英ニ属シ、斥候トシ一ノ坂ヲ踰ヘ佐々並ニ向ハシム、本日正午賊進ンテ明木ニ入リ、瀧口某カ宅ニ火シ、遂ニ来テ佐々並ニ拠ル、賊ノ数凡二百名計ナリト伝ルモノアリ、午後二時林少検事巡査四十名ヲ率ヒテ、而シテ発ス、巡査十名ヲ一組トシ、八等属富田國輔・仝秋良貞臣・九等警部宮原貞亮・十等属山田春三分ツテ之カ長タリ、衆皆銃荷ヘ剣ヲ携ヘ、機ニ臨ミ事ニ従フヲ計ス、又之ヲ分チ別道八丁越ニ向ヒ、宮野ヲ守ラシム、時ニ山口砲兵所製造ノ弾薬現ニ五十万発アリ、陸軍営所ニモ亦銃器数百

箇アリ、苟モ賊ヲシテ機ニ乗シ志ヲ得セシメハ、敢テ県庁ヲ焼キ敢テ官吏ヲ苦シメ、銃器・弾薬ヲ擁シ山口ノ市街ヲ横行シ、傲然自得掠略至ラサル所ナカラン、其人民ニ禍スル豈浅少ナランヤ、幸ニシテ備虞ノ処分早定マリ、巡査進ンテ一ノ坂ノ険ヲ奪ヒ、且ツ官吏ノ強壮ナル者ヲ撰ヒ百人ヲ得、分ツテ四組トナシ、県庁内外ヲ警邏セシムルヲ以テ衆情稍安シ、

本日午後高橋・大森カ報状到ル、云、本日午後進ンテ佐々並ニ入リ、短兵急撃ス、賊魁町田梅之進等数人敗走、余賊百余名奥大下村ニ（佐々波ヲ距ル十五六丁）アリ、信偽判スヘカラスト雖モ、寡兵軽進スヘカラス、且ク持重退テ板橋ニ拠ル、速ニ応援アランコトヲ乞フ、林検事モ亦木原ヨリ書ヲ県令ニ寄セテ云、前伍捷ヲ報スルニツキ木町ニアル一組ヲ前進セシム、請フ、宮野ニ在ル者モ亦来会スル様達セラレヨ、八丁越ノ岐已ニ我有トナル、余モ亦進ンテ佐々並ニ入ントスト云々、

六月一日陸軍一中隊馬関ヨリ来リ、直ニ進ンテ佐々並ニ向、遊撃一中隊モ亦翌日ヲ以テ来看ス、

本日午前五時林検事諸組ノ巡査ヲ率ヒ、進テ佐々並駅ヲ襲撃ス、賊数十人カ支フル能ハス墨ヲ棄テ、遁ル、巡査佐々並ニ入リスナイトル銃九挺ヲ獲タリ、斥候ヲ出シテ新古両道ヲ守ラシム、

午前巡査（二十五名組）先ツ進ミ、古戦場村ノ岐路ニ拠リ、要処ヲ占メテ之ヲ守ル、十一時三十分賊挙衆来リ迫ル、小銃一発短兵相接ス、巡査頗沮色アリ、長秋良・山田衆ヲ励マシテ之ニ当ル、賊魁町田楳刀ヲ揮ツテ猪突ス、曰、我カ姓名ヲ知ラサルヤト、秋良小銃（ピストル）ヲ以テ狙撃シ、其右顴ヲ洞シテ之ヲ斃ス、彼生クヘカラサルヲ知リ、刀ヲ握ツテ自尽ス、首ヲ庁下ニス、楳兇暴無頼而姓（性）極メテ残忍、殺ヲ好ム、此ニ因テ罪ヲ得、禁錮十年、客冬ノ役賊ニ与スルノ罪ヲ以又禁錮十年ノ刑ニ処セラル、此役遂ニ此ニ及フ、衆皆之ヲ快トシ、其肉ヲ啖ハント欲スル者アリ、

巨魁既ニ斃ル、余賊潰散、枠坂ノ絶険守ル能ハス、椿街ノ長橋扼スル能ハス、巡査進入無人ノ地ヲ行クカ如シ、沿道ノ捕獲已ニ数賊ヲ得、尓後（罷カ）四出擒縛、六月四日至ツテ七十余賊アリ、囚獄塡咽容ル、能ハスト云、

本月二日關口県令・河野警部萩地出張、

非常囚徒（明治十年）

一　河野鳴道取調書
二　桑門無着上申書写
三　觀善寺住職立花超玄上申書

一　河野鳴道取調書

山口県第九大区二小区
牟禮村極樂寺住職
坪井探玄徒弟
河野鳴道

右之者、矢上村出張巡査拘引ニ付取糾処左之如シ、

一宗派押広メノ為メ本年一月五日山口県下発足、十八日日向国細島町觀音寺ニ至リ、同廿四日迄滞留ス、

一同月廿五日觀音寺住職同伴鹿児島ニ向フ、同三十日着、下築町安達安右衛門方ニ宿ス、

一同三十一日滞留、

一二月一日右同断、

一同二日早朝納屋ノ下平川政二郎方ニ転宿、午後十時頃伊集院郷元妙圓寺梅覺寺等ヲ相尋ヌ、日没シテ同処ニ宿泊、故ニ巷説存セス、

一同三日帰宿致シタル処、私学校生徒弾薬奪ヒ取リ、市中持運ヒ致シ、且宮崎県公金掠奪ノタメ、人力車ニテ十二人計罷越候噂ニ付恐怖罷在内、大砲ノ響キアリタリ、

一同四日巷説、前夜ノ砲声火薬エ火移リ、死人六名計リアリタリト云フ、又種子ケ島エ兵隊迎トシテ汽船出帆ス、私学校生徒一般刀ヲ帯フル、

一同五日兵隊上京ノ説アリ、又何人カ捕縛サレタル由ニテ、自分儀ハ宿ヨリ世話ヲ以テ、元宿安達安右衛門ノ方ヘ転宿ス、

一同六日真宗僧任ミ捕ニツク説アリ、又此トキ軍艦入港シ、官吏二名上陸ノ処、直ニ捕縛シタル故、同艦ハ出港成タルト云フ、

一同七日真宗僧三名捕縛ノ儘、警察処（一分署ト云フ）ニテ雨雪ニ曝シアル由、其内大洲徹（鉄カ）然ナル者加ワリ居ル説、此トキ日向佐土原人来リテ宿泊ス、是ハ暴徒ノ連累ト見受ケ

タリ、

一同八日種子ケ島行汽船帰ル、且ツ市中ヨリ金子六万円計リ借リ上ケ、利子一ケ月一割ト定メタル趣、此トキ我宿ニ肥後人松崎迪ナル者来ル、是又暴徒ノ由也、

一同九日肥後人松崎迪ハ県庁ニ出テ官員トナリタル趣ニテ、同夜県員其外私学校生徒伴ヒ来リ、終夜酒宴ス、

一同十日松崎迪ナル者、結髪ヲ切ツテ散髪トナリ、肥後ニ帰ル、日向佐土原人モ亦日向表ヨリ兵隊三百人計リ率ヒ、上京スルノ旨申置帰ル、是ヨリ市中最モ動揺アリ、

一同十一日或人来リテ云フ、磯ト申処ニテ、四五日前ヨリ市中ノ者三百人計リ雇ヒ入レ、玉薬ヲ仕成シ、県庁脇ニテハ兵粮炊キ場出来タルト云フ、

一同十二日益騒〻敷、県庁官員昼夜詰メ切リノ噂アリ、

一同十三日前陳日向佐土原人、兵隊三百人計引キ来リタル旨申来、此トキ四方ヨリ兵隊集マルノ説アリ、

一同十四日市中往来騒〻敷ノミ、他事聞見セス、

一同十五日、警察処門前ヱ兵隊上京ノ次第掲示ニナル、午後ヨリ兵隊繰リ出ス、

一同十六日同断、尤モ両道ニ別レ繰出ス噂サ、此日西郷出発、

一同十七日同断出兵、

一同十八日同断出兵、

一同十九日出兵ナシ、鹿児島穏也、

一同廿日降雪ノタメ足ヲ害シ、途中ヨリ帰ル者三十人計リト云フ、

一同廿一日、此頃専ラ巡査ヲ募リ、志願人数多アル由、

一同廿二日熊本ヨリ大砲注文ニ付、四五挺持運ヒタル由ナリ、

一同廿三日熊本城下出火、薩兵城外ヲ囲ミタル説アリ、

一同廿四日熊本鎮台打払フタルニ付、薩人死傷百五十人計リ出来タルノ噂アリ、

一同廿五日兵隊一万計繰出ノ議決スト雖モ、銃器乏シクシテ困却シタル説アリ、

一同廿七日・廿八日両日無事ニ付、帰県ノ願書差出シ許可ナル、

一三月一日鹿児島表出発、伊集院駅ニ来ル、此処出張処ト掛ケ札アリ、番人銃器ヲ持チ、二十人計リ居合セ改メアリ、改メ中四人掛リノ駕籠来ル、是ハ鹿児島エノ飛脚ト見受ケタリ、

一同二日伊集院出発、仙臺(川内)ニ来ル、橋際ニテ改メアリ、尤モ途中ニテ駕籠四挺ニ逢ヒタリ、是又飛脚ナラン、

一同三日仙臺出発、阿久根ニ来ル、途中駕籠四挺ニ逢フ、是又飛脚ナラン、

一同四日阿久根出発牛深ニ着、無事、

一同五日牛深出発宮地嶽(本渡市)ニ来ル、人民集合アルノミ、

一同六日宮地嶽出発、四里計リ来リ地正庵ノ処ニ泊ス、無事、

一同七日地正庵出発二江(五和町)ニ来ル、途中本戸(本渡)ニテ帯刀人三十人計通行ヲ見タリ、

一同八日二江ヨリ乗船島原ニ渡海ス、同処ニ宿泊、

一同九日島原出発、江ノ浦ニ宿泊、

一同十日江ノ浦出発、矢上通行ノ砌リ、巡査中御改メノ上、御拘引相成候事、

二　桑門無着上申書写

私儀昨明治九年十一月以来、鹿児島本願寺出張所ニ於テ教務ニ従事罷在候処、不図本年二月六日捕縛セラレ候始末、概略左ニ上申仕候、

一本年一月下旬ヨリ不穏景況ニ立至リ、殊ニ今般出兵ニ付テハ、真宗僧ヲ血祭ニスル抔ト云路頭ノ流言紛々有之ニ付、昼ハ出張所エ集会、夜ハ留主ヲ置キ、教職ハ各々其知人之宅ヘ潜伏致シ候処、其虚ニ乗シ、二月三日、同四日夜該県士族村田彌右衛門・坂本某等強盗ニ入ル(該強盗私学校ノ仕ト云フ風聞ナレトモ真偽ヲ知ラス)、其後ハ尚一層注意、夜分ハ暴客ヲ避ケテ潜匿罷在候得共、昼ハ一同出張処ヘ日々出頭致候、然ル処二月六日権中教正大洲鐵然外教職七名出張処ヘ集会致居候処、午前十二時頃長刀ヲ佩ヒ、棒ヲ携ヘタル査官ラシキモノ凡三拾余名、土足ニテ大洲鐵然ヲルカト呼ハリ込、忽チ大洲ヲ縛シ、次テ外七名ヲ縛シ直チニ前途ニ引出シ、棒ヲ以テ後ヨリイソゲト云テツキ、進メハ又早イト云テ撞ク、号令渾テ棒ナリ、或ハ襟首ヲトラヘ進メト云、遂ニ警察第壱分署ニ連レ行キ、八名ノ者門内之柱ニ繋ルヽモアリ、縁ノ柱ニクヽラルモアリ、就中私ハ不運ニシテ土地ノ柱ニツナカレ、其日ハ折悪大雨ニテ、午前十二時ヨリ午後六時頃迄雨ニサラサレ、惣身ヌレヌ処ナシ、而シテ午後六時過キ土地ノ柱ヨリ解キ門内ニ上ケル故、嬉シャト思ヒ乍ラ牽レテ行ケバ、縄ヲ取ル卒曰ク、コイツ坊主ジャ

カラ兼テ抹香クサキ処ニ居ル故、便所ノ口ニ繋クト云テ、其不浄所ニ繋カル、コト六時ヨリ十二時頃迄ナリ、外七名ノ内権大講義山崎照天ト云モノ私ト共ニ便処ノ口ニ牽ル、同人ハ兼テ脚疾ヲ病ム、歩行自由ナラス、便処ノ口牽ル、時モ後ロ手ニクヽリタル儘ナレハ、ツマツイテ便処ノ口ニ倒ル、其縄ヲ取ル卒無情ニ縄ヲ引テ起ヨト云、山崎コラヘ兼テ泣ク、私傍観スルニ堪ヘス、其人ハ脚疾ヲ病ム人ニ付少シ情ケヲ垂レヨト云ヘトモ聊カ不顧、実ニ無情極ル形状ナリ、猶又其夜十二時頃山崎ト私ト便処ノ口ヨリ外ニ引出シ、五六町モ脇ノ処ロヘ連レ行ニ付、其時ハ弥ゝ死ヲ決シ、歩ゝ死ニ近クト思テ行ケハ囚獄処ナリ、囚獄番問テ云、何者乎縄ヲ取卒云ク、一向坊主ナリ、亦問、何疋カ、云ク弐疋ナリ、而シテ囚獄ノ門内ニ於テ帯ヲ解カセ、犢鼻褌（ふんどし）ヲ取ラセ獄ニ下ス、獄長云ク、何ノ子細アツテ此処ニ召込ニナリタルヤ、答、何ノ子細カハ知ラネトモ今日縛セラレ此ニ来ルナリ、獄長云ク、獄内ニハ種ゝ規則アリ、第一新来ノ者ハ雪隠ノ洒掃其他数ケ条ヲ申渡ス、私獄長ニ向テ云ク、規則ハ明日篤ト承ルヘシ、今日者惣身ヌレテ寒苦ニ堪ヘス、願クハ衣類一枚ヲ貸シ玉ヘト申ハ、獄長曰ク、吾ゝトテモ衣類ナケレハ致シ方ナシ云、仍テ其儘板場ニ臥ス、徹宵眠ル能ハス、明レハ二月七日、獄内ノモノヲ見ルニ泥的ラシキモノ過半也、又賤シカラヌモノ四五名アリ、是ハ今度ノ事件ニ付捕縛セラレタル警部且書生ナリ、

一食ハ弐度食ナリ、外ヨリ指入レノ食物ヲ禁ス、又買入ヲ禁ス、弐度食ニテハ飢餓ニ苦シム、其他酸辛言ヲ待タス、

一入獄ヨリ五日目ニケツト壱枚ヲ取入ルヽヲ得テ、始テ眠ルコトヲ得ル（本願寺出張所ヨリハ縛セラレタル翌日獄吏ニ賄ノ、ケツト一枚ソヽヲ送リタル由ナレトモ、獄吏是ヲ五日目ニ達ス）

一昼夜獄ヲ看督スル獄卒長刀ヲ佩ヒ棒ヲ持ス、其服ハ湯（浴）衣形ニダン袋ヲ着タルモアリ、形付ノダン袋ニスジヲ入レタルアリ、腰ニ鞋ヲ付ケ背ニ弾丸ヲ佩ヒ小銃ヲ携ヘタルアリ、其体裁実ニ笑止千万也、

一県庁内ニ仮檻倉ヲ建築シテ二月廿六日之ニ移ス、常事犯ノモノハ旧獄ニ残シ置キ、国事犯ト見做シタル警部・書生并ニ吾輩ヲ移ス、移ス時ハ七名ツヽ一繋キニシテ行ク、見物人数万人ナリ、

一新檻倉ハ八畳敷八間アリ、一間毎トニ七人ヲ出ス、

一獄番ハ旧穢多ナリ、兼テ断首セル役前ノヨシ、三月七

八日頃断首刃ヲ抜キ油ヲソヽク、獄内ノ者相看テ寒心ス、

一三月十日不計遠方ヘラツパノ声アリ、次第ニ檻倉ニ近ク、終ニ檻倉ノ柵外ヲ巡邏ス、囚徒皆想像スルニ、今日出兵スルニ付吾輩ヲ血祭ニスル積リナラント云、中ニ一人有テ曰ク、此ノ喇叭ハ仏式（フランス）ノ行軍喇叭ナリ、鹿児島ノ兵ニ非ス、是必ス官兵ナラント、追々檻倉柵内ニ繰込ミ来ル、果テ官兵ナリ、中原尚雄以下廿壱名拇印連ヲ檻倉ヨリ出タシ、官兵之ヲ護送ス、吾輩ハ尚其日ハ檻倉ニ残サレタリ、翌十一日午前十一時頃壱小隊計リノ官兵柵内ニ繰込ミ、忽チ獄扉ヲ開キ吾輩ヲ呼出シ、該県庁第四課ニ於テ始末一応御糺問ノ上、兵隊ニ包ミ該県ノ町家ニ護送シ玉フ、実ニ死セルヲ生カシ、再ヒ天日ヲ仰カセ玉フ、天恩一同只々感泣セル計ナリ、

一三月十二日官船ニテ長崎港ニ護送シ、猶亦坂府エ護送シ玉フ、該府ニ於テ吾輩三拾六名ヲ御解放ニナリ、廿壱名ハ東京ヘ護送ニナリタル由、

一旧檻倉ニ有ル時、一夜邊見トカ云賊将獄門ニ来リテ、吾輩ヲ血祭ニ斬ラントスルヲ、獄吏拒ンテ許サス、仍テ獄門外ニ牧場アリ、其牛ヲ斬リタル由、出獄ノ後風聞ヲ聞ク、

一縛セラル、八名ノ外、権少講義佐々木英愷・試補立花晩成両名ノ者、八名縛ニ就ク時居合ハセズ、縛ニ洩ル、依テ両名共即刻第一分署ヘ名刺ヲ出シ、私シモ本願寺出張ノ者ナリ、然ルニ同盟皆縛セラル、ニ付テハ、如何心得ヘキカト自訴セリ、該署申渡ニ、先生ハ宿屋ヘ控ヘ居ル、様、用事アレハ呼出スヘシトノコトナル由、居合ノ者ハ縛シ、居合サルモノハ縛セヌト云ハ大ニ不公平ナリ、縛ニ就タル八名モ四名者其夜獄ニ下シ、四名ハ翌日マテ分署ニ繋キ第四課ニ廻シ、糺問ノ上獄ニ下ス、私ハ即日獄ニ下サレテヨリ一度モ聞糺シモ無之候也、

右概略上申仕候也、

長崎県第五大区五小区
高來郡島原小濱村
真宗光泉寺住職　　桑門無着

十年四月十一日

三　觀善寺住職立花超玄上申書

三ノ一

一明治九年十一月中旬頃ヨリ鹿児島ニハ市中エ三四ケ所張紙有之、○鹿児島ハ鹿児島ナリ、早ゝ去ルヘシ、命チオシクハトアリ、其後十二月中旬頃、再三真宗ノ僧侶三日ノ中ニ帰ラスハ、首体分裂ス、又諸宗ノ僧侶早ク去ラスハ、真宗僧ノ如ク為スヘシ等ト張紙アリ、

一十一月上旬ヨリ私学校組東上之風聞有之候得共、定日相分リ兼申候、尤私学校ハ本県ヘハ有之候得共、郷ゝエハ別段学校取設無之候得共、毎月六日位ノ集会有之候而已ニテ、是度ノ出兵ハ西郷ヘ願出之者而已出兵ニ相成候様子ニ御座候、

一十年一月卅一日夜赤龍丸ニ積込ニ相成候弾薬ハ、私学校連中ヨリ奪取、二月一日ヨリ三日迄近在ヘ運送致候由ニ御座候、

但シ此節西郷ハ留守中ニ而西郷モ此迄運ナリ、併戦争ハ七年位ハカヽリ候様被申候由風説承候、

一二月三日ノ夜新地本願寺出張事務所ヘ、兇器ヲ携ヘ一両名押入、金蒔火鉢一ツ、ケット一枚、引廻シ壱枚奪取候、

但シ隣家柿元ト申酒屋ヘ至リ金二円ヲ押借リ、事務所ヘ案内為致候由ニ御座候、

一二月四日西洋仮掛所ヘ午後二時、士族三名帯剣ニテ説教聴聞致度段申出候ニ付、瀧澤謙致ト申者其日当番ニテ説教致掛候処、一人之士族ノ云ク、キラヌカト申出候処、一人ノ者ハ左様ノ事致候而ハ不相済旨申出、一同相帰申候処、其夜説教所ヘ押入、仏前紫幕一張・夜具一組・八角時計壱ツ、茶少ゝ・燈灯一ツ奪取、小使直五郎ト申者ヘ為持、途中ニ而人力車ヘ乗セ候ニ付、直五郎ヨリ迎モノコトニ私御宿迄持届候段申入候処、左様ナコト申サハ切殺スゾヨト申出候故、其儘相分レ候処、途中ニテ巡査ニ逢ヒ、右ノ始末ヲ申出候得ハ、直様巡査同道ニテ引返シ候処、右人力ニ出逢、始末相尋候処、人力引ノ云ク、人力料ハ取ラス、(新上)シンカン橋迄罷出候旨申入候処、凡ソ宿所モ相分リ候ト相見エ、翌五日捕縛ニ相成候処、全ク説教所ヘ帯剣ニテ三名参リ候士族ニ御座候由、

一鹿児島県下信教自由ノ御布達ニ付、十一月廿七日本願寺執事権中教正大洲鐵然并ニ権大講義山崎照天外数名出張致居候処、私学校組ヨリ、兼テ大洲ハ朝廷ヨリ探索ノ為此地エ出張致候抔ト嫌疑致居候由ニテ、已ニ二

月六日同県石燈籠(いずろ)通仮掛所へ午前十時ヨリ一同相揃罷在、兼テ嫌疑ヲ受候事承知致候故、定テ尋問モ可有之儀ト心得居候処、不図第一分署ヨリ三四十名計帯剣ニテ押込、大洲ハオルカト申鳴シ、尤大雨之処土足ニテ楼上へ踏込、大洲教正ヲ始メ外七名其儘口聞モナク捕縛ニ相成候処、実ハ三名ヲ縛シ余ハ其儘ニテ見合居候処、迚モノコトニ皆縛セヨト申者有之候ニ付、其坐ニ居合候教職ハ都テ捕縛ニ相成、第一分署エ召連レ、十二時ヨリ午後十二時頃迄留主一同入牢為致候由ニ御座候、

一私儀一月始ヨリ郷々エ派出仕居候処、本県ヨリ七里程有之候処知覧郷手蓑ト申村ヘ滞留仕候処、二月六日本県動揺粗承リ候ニ付、直様同邨ヨリ一里喜入郷中ノ名村ヘ差越ヘ、風聞承リ候得ハ、区々ノ取沙汰ニテ殆ト相驚申候間、七日早朝ヨリ二人丈旧城下ヘ指立候処、午前手蓑村知覧私学校連中ヨリ屋捜致候旨報知有之候故、皆々相驚候処、其村ヘモ喜入士族ヨリ十名計取調人寄集リ候旨相知セ来リ候処、其時分昼之分二度ハ山ニ忍ヒ、夜ハ鹽釜ヘ忍居候処、幸ニ何事モ無之、本県ノ始末モ相分リ候間、八日夜船ヨリ乗船、九日午前九時漸無事ニ而旧城下宿所エ着仕候、

一二月六日頃ヨリ、郷々ヨリ本県ヘ出兵定日伺之為昼夜往復、道中モ当分ノ処六ケ敷候処、十五日凡二千人余願済ノ者而已出兵ニ相成候由、右出兵ノ節ハ西郷並大山県令ハ其場ヘ立合ニ相成候旨、市中ニテノ風説ニ候処、尤モ私学校ノミニテハ無之、島津組士族モ願出候向ハ出兵ニ相成候得共、鉄砲所持セサルモノハ出兵御免無之、尤出兵ノ士族ハ自費之由候得共、郷々ハ戸長所ヨリ周旋ニテ、各邨ノ者ヨリ金ヲ借替致相登セ候ニ付、村々モ大ニ混雑ノ風聞ニ御座候、其砌ハ市中モ各々自分ヨリ願出出兵致シ候気合ニ候得共、市郷士族平民ノ都合承リ候得ハ、西郷付・島津付・官軍方又何ヘモ関係致サル向モ多分有之候哉ノ風説ニ御座候、右ニ付追々肥後表ヨリ戦死手負等ノ報知有之候故、初ハ出兵モ自分ヨリ望ミ出候処、近来ニ至候而ハ、在々ノ者共モ各別相進ミ不申候風聞ニ御座候、夫故跡ヨリ繰出ノ夫卒モ各出兵ヲ恐レ候故乎、三十人ハ十人位ニ相断、壱人前五十円或ハ三十円、村々ニ而聊相違ハ有之候得共、金子ハ村々人別割ニ而出兵為致候、夫ニ付谷山村ニテハ、壱人ニテ壱円四厘ツヽ出金致候由ニ承リ申候、

一県庁表向ハ至テ穏ナル都合ニテ、市中ヘモ決テ相噪キ不申候様御達有之候得共、内実ハ肥後ヨリノ報知又ハ兵隊等繰出ノ義ニ付、色々混雑ノ風聞ニ御座候、尤探索人捕縛致候人モ、私学校ノ人ノミニテモ無之、警察ヨリ召捕県庁ノ獄エ入候都合ニ候得ハ、全ク内実ハ県庁モ同脈ニ御座候哉ニ被存候、

一三月廿二三日頃ニハ市中ヘ内々梅干或漬物等、聊ツヽニ而モ宜敷候故、持出スヘキ様内通有之候風説ニ候、

一郷々士族平民ノ中ニモ、何分自ラ望テ出兵ハ難致、出兵致候得ハ、親ヘ手向ヒ候様ニ相当リ、何分互ニ善悪共咄モ難出来抔ト申人モ有之候哉ニ承申候、

一郷々ヘ巡査徘徊シ、出兵ノ人ヲ相誘ヒ候由ノ風聞モ有之候、

一三月十日御勅使柳原殿御出張ニ相成、直様御上陸ニ相成、廿一名中原等牢ヨリ御指出ニ相成、翌十一日外士族并教職八名御口聞ノ上御召出ノ上、其夜小倉ト申問屋ヘ御預ケ相成、十二日十二時官船ヘ乗込、西京ヘ御送ニ相成候、右ニ付大洲教正ヨリ郷々ヘ巡回致居候教導職五名、左ノ通入牢致候者御召出被下度旨、官軍警察ヘ願置ニ相成候得共、官船モ纔ニ御引取相成、其後心配致居候得共、今以テ県庁ヨリ御沙汰無之候由ニ付、私共ニ於テモ大ニ迷惑仕候得共、何分外県トハ大ニ事変リ候国柄ニ付、諸事相運ヒ不申候、入牢ノ人名左ノ通ニ御座候、

○伊勢津正覺寺住職中講義正親大宣

○長崎県下第一大区今籠町大光寺地中発心寺父三栗心淨　○天草牛深正覺寺住西塔寶林　○同寺徒弟壱人

○外ニ長崎磨屋町林宗元父子、右ハ鹿児島ヨリ十二里程隔居候川内ト申処ニテ入牢致候、

一同鹿児島県ヨリ五十里外種ケ島ヘ出張致シ野崎流天越中ノ者ニテ、同島ヨリ私学校出兵ノ士族迎ノ為、寧静丸ヲ差立ニ相成候ニ付、一応帰県可致旨同人エ戸長ヨリ釣合ニ相成候故、無何心乗船致候処、船中ニ而既ニ海中ヘ沈メントスルニ、其時初テ教職ヘモ懸合有之旨粗承知致候由、然処船将ヨリ船規則モ相立不申候故、船外ニテハ兎モ角、船中ニテハ見合呉候段申出候故、着船ノ上警察局ヘ申出候得ハ、同局ヨリ迎ヒ取一夜相留メ、翌日ハ牧木ト申問屋ヘ宿預ケニ相成、今ニ其儘相成、当人モ誠ニ迷惑ニ及候也、

一三月廿五六日頃鹿児島町某宅エ罷出候処、肥後ヨリ帰

県致候士族被参、金策ノ都合ニ相見ヘ、同人ノ咄ニ、三月廿二日迄ノ戦争ハ薩兵大ニ苦戦ニテ、金リ(ママ)少ク、官軍ハ人モ多ク有之、頃日ニ至テ官兵ハ勝利ヲ得、元ノ薩州ノ勢ハ無之、一大隊ノ組中ニモ十人計相残リ候組モ有之旨被申候由承リ候、

一同廿九日同医師某宅ヘ参リ候処、肥後ヨリ県庁エ報知書面ノ写有之、一見スルニ、十六七日頃ノ戦争ニ薩兵大ニ苦戦ニテ、戦死四百四五人計、手負千四百五十名計ト有之、翌日モ苦戦之処、一同声ヲ挙ケ切込候処、幸ニ勝利ヲ得、官軍モ戦死ノ由、

一十七八日戦争ハ薩兵苦戦ノ処、肥後本営ヨリ四千人計走セ来リ、官兵ハ散乱シテ、其時ノ戦死手負其数知レズト有之、

一川尻ヨリ小川・日奈久辺迄ノ戦争ニ、大将一人・米六万石・金六万円・油三百丁・七分板七百間・馬六疋・鉄砲数百丁、船木ニテ錦御旗分捕、船三艘同、

一肥後旧士族ヨリ一ノ天守ヨリ三ノ天守迄焼払、跡ニ聊相残リ候由、尤南ノ関病院焼払、病人焼死ス、

一子年上納金都テ薩州本営ヘ相納候様相成居トアリ、

一肥後御城近所ヘ薩州ヨリ高札ヲ相立候由ニテ、鹿児島ニテ書面一見スレトモ文面相覚ヘ不申候ナリ、

但シ此書状別家ニモ参居候得共、数〻相違仕候故実正ニテハ無之、全ク跡ヨリ出兵ノ都合ヲ計リ認メ送リ候哉ニ被存候処、有人モ実正トハ思ヒ難クヨシ、彼地ノ人モ内〻申居候事、

一三月廿六日廿七日両日ノ中ニ、市中ノ風説ニ二万人計出兵ニ相成段申触候処、士族ハ郷〻ヨリ直ニ通行印鑑相願、目ニ立サル様出兵致候、夫卒ハ大分旧城下ヘ繰出居候、夫モ第四課ヨリ内〻通行印鑑相許シ候由薩ノ出兵勝和ヲ得ハ右ノ繰出ハ不用之儀ト被存候、市中ノ人気モ右様相考ヘ居候様被存候

一同廿七日八日両日ノ間ニ、是度鹿児島ヘモ多分ノ戦死又手負有之候ニ付、諸神社ヘ参詣尤多ク、右ニ付女隊三小隊計モ有之、戦死ノ兄弟(者)或ハ後室戔婦・十二三ヨリ十五六才迄ノ小児輩、昼夜ノ別ナク各棒ヲ持チ広野ヘ屯シ、大久保卿・河路(介路)・猶原(奈良原)等十二三ケ所モ家ヲ毀チ、尤昼ハ女中ハ少ク、市中ヲ徘徊シ、巡査見当リ相支ヘ候得共、各別聞入不申、米・衣類ヲ切破リ池ニ入、柱ハ切付、瓦ハ悉家具ト共ニ棒ニテタヽキワリ、如何ナル品物モ我家ノ藤太郎ヘハ替ヘラレヌ抔ト申触レ候様風説有之候、右ニ付廿九日野邨ヨリ家ヲ毀ト云コト

ヲ聞、第四課ヘ届出ニ相成候ハヽ、直ニ巡査七八名出張相守リ居候処、夫ヨリ静ニ相成、尤県庁ヨリ右ノ御達御回シニ相成候也、

一此度肥後戦争ニ、尤鹿児島ヨリ夫々本通リニハ旧士族屯致シ、通行人取調候由、屯ノ場所左ノ通、

城下入口一ケ所ヨリ伊集院ヘ四里一ケ所、同所ヨリ市來ヘ四里一ケ所、同所ヨリ串木野郷ヘ一里余リ一ケ所、同所ヨリ川内ヘ三里一ケ所乎二ケ所乎、同所ヨリ西方ヘ四里屯所相分不申、同所ヨリ阿久根郷ヘ四里二ケ所、肥後路ト船渡ト、同所ヨリ泉郷（出水）肥後境迄凡八里、是道ハ未旅人ハ通行六ケ敷候由、

一鹿児島ヨリ南方西国口ノ通行ハ余程静ニ相成申候由、尤船場ハ郷士族ヨリ船出候節相改候得共、郷内ハ何事モ無御座、巡査ハ時々巡回ニ相成候由ニ候得共、道筋ハ何筋モ有之候故、私トモ三人喜入郷ヨリ船ヲ借リ受ケ、船頭ハ真宗帰依ノ人民ヨリ人撰致シ、内々尽力致シ呉候ニ付、漸ク帰省仕候也、

右御尋ニ付不顧恐見聞風聞ノ儘上申仕候也、

十年四月十二日　当県下第一大区一小区

観善寺住職

立花超玄

長崎上等裁判所

検事局御中

三ノ二

当港観善寺住職立本錢岩明治四月（十年脱）一日鹿児島発船同八日帰院ニ付略聞

一鹿児島ヨリ八九里遠在経廻中不穏ノ趣承リ、同僚ノ安否心元ナク、三月十八日頃鹿児島市中ヘ立帰候処、教正以下拘留相成居候得共、自分共ハ知音ノ宿屋ニ無事滞留致居候、

一県中ノ平民ハ皇政ヲ欽慕シ、西郷ノ志ヲ達セハ、再ヒ旧来ノ圧制ニ苦メラレンコトヲ嫌忌スル模様ニ見聞候、

一三月廿七八日頃ヨリ一万余ノ兵ヲ繰出ス噂ハ有之候得共、目撃ハ不致候、

一士族中大義ヲ弁ヘ、西郷ニ組セサル向モ不少模様ニ見聞致シ候得共、何レモ是非ヲ口外ニ致サス候、

一是迄ノ軍費、島津公ノ手元ヨリモ差出サレタル趣ニ候処、以後ハ出方不相成トノ風説、

一該地ヨリ繰出シ候人夫、一人前給金五拾円ノ由ニ候処、或ル大区ヘ三拾人割付相成候得共金調出来兼、区務所ヨリ土民ヘ証書ヲ以借請、漸クシテ十人出立為致候由、

一島津党ト唱ヘ候士族中、西郷ヘ従軍ノ志アルモノハ旧知事ヘ出願ノ上、県庁第四課ヨリ印章ヲ受取リ出発致候趣、一体巡査ノ権柄ハ比類ナキ様見受ケ候、

一町人農民中ヨリモ従軍願出候者モ多分有之候、

一串木(串木野)・永吉ノ近傍ハ、土着郷士ヲ巡査ト名付警備為致有之候得共、規則等モ無之、至極無用心ノ模様ニ見受候、

一四月一日串木地方ヨリ和船ヲ傭ヒ、天草ヘ渡リ帰港致シ候、

非常征討　明治十年

一　人民動静　熊本県
二　探索書
三　人民動静　大分県
四　人民動静　鹿児島県
五　人民動静　高知県
六　人民動静　福岡県
七　熊本県并鹿児島県探偵日誌　十年五月三十日ヨリ同六月廿日迄
八　鹿児島県探偵日誌　十年六月廿日ヨリ同七月廿九日迄

一　人民動静　熊本県

一ノ一　記

一九日午前一時出発、十一日午後四時熊本ニ着シ候得者、市街ハ一般ニ何カ穏カナラス、家具等ハ総テ取マトメ、又老稚ノ者ハ避テ熊本ノ鄙邑ニ行ク者アリ、

一熊本県上田久兵衛・宮川久米此ノ二人ハ是レマテ私塾ヲ開キ、兼テ鹿児島辺エモ往来シ、又当時勢ニ不服者ノ由シ、因テ探偵仕候得者、此ノ党ハ不義ノ挙ハ有ル間宜(敷カ)奉存候、

一池部吉十郎此ノ党ハ甚タ多シ、兼テ人望有ル人ニテ、熊本ノ動静ハ此ノ人ノ議ニ決スルト云フ位也、併シ大義名分無キニハ、妄ニ事ヲ挙ケスト云フ論也、

一宮崎八郎兼テ鹿児島エ往来シ、又民権論ヲ主張シ、既ニ先日熊本ニ一揆之兆シ有ルモ、此ノ党ノ為ス処ト云フ、

一神風連之中或ハ病気又ハ旅中ニテ、既ニ先日之挙ニ及バザルヲ恨ミ、動モスレバ暴発之兆モ有ル由シニ候得

共、誰某之説喩中ト乎云フ、尤モ此ノ党之首謀ハ福田萬太郎・梅田作太郎此ノ二人ナル由シ、

一鹿児島之挙有ル時ハ、随テ熊本一般其党派ヲ問ハス鹿児島ニ響応スル之勢ヒ也、

一鎮台士官某鹿児島エ火薬請取リニ行キ、路ニ縛ニ就クト云フ、或ハ信否明了ナラザルトモ云ヘリ、

一鎮台ハ七日頃ヨリシテ食物等ヲ求メ、大ニ備ヘヲ為セリ、

一熊本士族諸所ニ集会スル由シ、併シ其議論ハ未タ何等ノ議論タルヲ審カニセズ、

一十四日夜ヨリ鎮台ニ行ク、要害之地ハ総テ兵ニテ堅メ居レリ、

一熊本ニテハ刀剣ト見ヘシ物ヲ袋ニ入レテ、以テ歩行スル者往々有リ、

一熊本士族等ハ火薬ノ類ヲ窃ニ買ヒ入レ候者モ之レ有ル由シ、

右熊本探索之初終如是御座候也、

明治十年二月十七日　　立石榮藏

一ノ二

熊本県下片野川村ヨリ（長崎ヨリ里程六十二里余、八代ヨリ一里藤ノ在村ナリ）一翰呈上仕候、陳者下僕義不図存在、南洲ヘ従カント去ル八日午後三時発途仕候処、雨中ニ而遅延、漸ク当地ニ及ヒ候、然ルニ当地ハ別ニ異議ヲ不聞、五六日前県下山家之辺ニ農民一騒ニ付、戸長抜刀シタル由ニ而、終ニ戸長被縛（農民ヨリ）終日磔体候由、又一昨日比ヨリ当所或ハ八代之辺ニ薩人銃器求ニ参ルコト数々之由、然レトモ当地ハ戸長ヨリ之諭達ニ而、銃器売方ハ被停止候由、然レトモ間ニ者質入抔ト申売者モ有之由、彼地之風聞ハ定メテ大ナリ、米ノ津（境ヨリ一里半計リ）ヘハ固アリ抔風聞、乍併実地不見難信、右ハ同所山邊旭城ト申者ノ話ナリ、当地ノ景況委曲ハ白井氏近々確報可有之ニ付、左様御承知可賜（尤白井ハ熊本ニ而一別ス）、余ハ後鴻托シ可申候、右ハ御心得まて略申上候也、頓首、

二月十日　　亨逸（園田、二等巡査）

山川様（景範、長崎警察署長）　　百拝

閣下

二伸、取急キ認メ文筆錯乱、乞御推読アランコトヲ、

敬白、

二　探索書

探索書

明治十年二月十一日熊本県ニ於テ一知人ト問答、

第一条

問、目今鹿児島県ノ景況如何、

答

邇日該県ノ景況尤モ穏カナラサル模様ナリ、

第二条

問、何ヲ以テ穏カナラサルト云フヤ、

答

該県ノ士族兵器ヲ携ヘ諸県境ニ出張シテ、該県ノ出入ヲ禁セリト云フ、

第三条

問、前条出入ヲ禁スルハ必ス謂レナキニ非ラス、其実如何、

答

其実タルヤ未タ採ル可キ確説ヲ聞カス、然レトモ之レヲ想像スルニ、必ス確乎タル原因アラン、如何トナレハ、二三日前ヨリ鎮台ヨリ水車ヲシテ毎夜三十余石ノ米ヲ搗シメ、且諸色ヲ購求スルコト頻ナリ、

第四条

問、前条鹿児島県ノ近況ニ依リテ、熊本県ノ士気何レニ向フヤ、

答

前条鹿児島県ノ近況ニ依リテ学校派ノ内情ヲ想像スルニ、必ス彼ノ動静ヲ窺フナラン、如何トナレハ、神風党ト稍異リテ、聊カ採ル可キ所アリ（然リト雖トモ不平因循ハ固ヨリ）、故ニ該県ノ為メ煽動サル、等ノコトハ、決シテ之レナカラン、尤モ該県ニ応シテ事ヲ挙クル等ノ模様モ、未タ見聞スル所ナシ、

第五条

問、鹿児島県ノ風説ニ依リテ士気振ヘリヤ否ヤ、

答

士気稍振ヘリ、

第六条

問、何ヲ以テ振ヘリト云フヤ、

答

頃日或ル友人宅ニ於テ、壮士輩両三名ニ出会スルニ、豈料ランヤ（以文ノ如キ行状ハ素ヨリ、之レヲ談スル者決シテ之レナン）少婦ノコト等ヲ会話シテ、互ニ高笑スル景況ナリ、之レ

士気ノ振フニ出ツルナラン、

同二月十二日熊本県第十二大区八代町ニ於テ一知人ト問答、

第一条

問、鹿児島県ノ近況如何、

答

本月二日、当地商人鹿児島県下出水ヨリ帰宅セリ、其頃迄ハ至テ静穏ナリシニ、日ナラスシテ該県士輩人民ノ出入国ヲ禁セリト云フ、

第二条

問、其出入ヲ禁スル所以如何、

答

其所以タルヤ、旧該県ニ設置ノ海軍省製作所ニアル銃器積ミ上シノ為メ、過般春日艦着県、該品積込ミノ際学校生徒之レヲ奪フ、時ニ当リテ自今該県下流行ノ真宗僧侶数名、前件ヲ謀ルノ事発覚、生徒之レヲ縛シ糺問スルニ、僧徒ノ口供ハ大久保内務卿ノ内命ニヨリ、該県ノ実況ヲ熟視セン為メ出張スルニ、土風民情ノ他ニ異ナルヤ、雲壌ノ如クナルヨリシテ、此事ヲ謀ルト云フ（此ノ事ハ則チ銃器等積ミ上ン）、生徒該僧侶ノ所持品ヲ検スルニ、内務卿ト往復書翰ノ写アリテ、尤モ容易ナラサル書翰ノ由（是ハ蓋シ島津公及ヒ西郷公ヲ暗殺セントコトヲ謀ルノ書ナラン）、依テ生徒遠近相通シテ出入国ヲ禁セリ、故ニ動揺卒発ニ出デタリト云フ、

第三条

問、前条鹿児島県動揺ノ為メ八代ノ士気振ツテ、名ヲ形勢談抔ニ託シテ会議等ハ開カサルヤ、

答

頃日士族輩三十名余会議ヲ開ケリ、雖然敢テ名ヲ形勢談等ニ託スルニ非ラス、

第四条

問、其会議ノ趣意タルヤ如何、

答

鹿児島県ノ動揺ヲ聞クニ、必ス陸行シテ鎮台ニ迫ルト云フ、依テ其時旧主ニ迫ランコトヲ恐ル故ニ、其ノ機ニ臨ンデ、旧主ヲシテ難ヲ避ケシメンコト方法ヲ議スルナリ、

第五条

問、其方法ヲ聞カン、

答

一説ニハ、若シ彼レ陸行シテ迫ルノ時ニ臨メハ、密ニ旧主ヲシテ郷地ニ避ケシメント、我輩ノ論スル所ハ素ヨリ、其機ニ臨メハ必ズ十余名随従セサル可カラズ、郷地ニシテ十余名随従スル時ハ、居所露ハルヽコト容易カラン、依テ速ニ本県ニ出張セシメ、彼レ若シ鎮台ニ迫ルノ勢アラハ、上京スルニ如カズ、然レトモ旧主我論スル所ヲ欲セズ、遂ニ前説ニ決スレトモ、其機ニ臨メハ尚討論熟議スルノ宿意ナリ、前文ノ通ニテ、彼カ為メ応援或ハ煽動サルヽ等ノコトハ、我輩盟ツテ之レナキヲ保証ス、

同二月十三日(四カ)同所ニ於テ尚一知人ト問答、

第一条

問、鹿児島県ノ近況如何、

答

過般ヨリ中警視以下二十名、内務卿ノ内命ニテ真宗僧侶トナリテ出張中云々ハ昨十三日第二条問答ノ通リ、二十名ノ内三名該県人アリ、春日艦ヘ銃器等積込ミノ時ニ当リ、反イテ其実ヲ学校生徒ニ告ク、生徒集合該品ヲ奪ヒ、且ツ警視十七名ヲ縛セントスル際、一名脱走シテ踪跡知レズ、余リ十六名ヲ縛シテ糺問スルニ、内務卿ノ内命ニ依リ云々昨十三日問答ニ同ジ依テ略ス、生徒ハ何レモ銃器等ヲ奪ヒ、或ハ警視ヲ縛セシニ付、官必ス鎮兵ヲ以テ之レヲ討タン、居ナガラ官軍ヲ受クルヨリ、寧ロ出テヽ戦ハント云フテ、国ノ出入ヲ禁セリト云フ、

第二条

問、前件ニ付八代ノ士気如何、

答

当地ハ彼レ若シ迫ルトキハ、必ス旧主ヲシテ難ヲ避ケシムルニアリ、

此件問答ハ昨十三日ニ同シ、依テ略ス、

同二月十五日熊本県ニ於テ一知人ト問答、

第一条

問、鹿児島県士輩国境ニ出張シテ、出入ヲ禁セリト云フ、其実非如何、

答

松本七等判事過日鹿児島県ヘ被赴ルヽニ、国境

ニ於テ該県巡査并ニ県士兵器ヲ携ヘ守護スルコト尤厳ニシテ、決テ通行セシメズト云フ、

第二条

問、其通行セシメザル旨趣如何、

答

該県内ニ賊アリ、依テ県令ノ命ニテ諸国境ヲ厳守シテ、該賊探索中ナリト答ヘシ由、

第三条

問、熊本県ノ士気如何、

答

本県士モ鹿児島県ト声息ヲ通シ、共ニ事ヲ挙クルトノ風説専ラニシテ、人心恟〻タレトモ、其実ハ未タ確知セズ、尤モ穏ニ会議等ハ開キ居ルノ模様ナリ、

第四条

問、何ヲ以テ会議ヲ開クト云フヤ、

答

過日ヨリ或ル人毎夕家出シテ、深更或ハ翌朝ニ至ラズンハ帰宅セズ、其実未タ証トスル所ハ知ラサレトモ、甚タ怪ム所ナリ、

右探偵ノ始末具状候也、

明治十年二月十八日

警察所詰

二等巡査白井　齊印

警察所長

二等警部山川景範殿

ニノニ

蒼凖丸ヨリ天草出張ノ井手九等警部ヨリ、別紙ノ通報知致候間、供御一覧候也、

明治十年二月十七日

山川二等警部印

（別紙）

本日午後一時天草富岡村江着シ該地探偵候処、何等相変儀無之候、午併左之風聞有之候、実否之儀ハ牛深村江巡査弐名差遣置候ニ付、罷帰次第可及上申候、

一両三日以前ヨリ鹿児島人刀剣銃砲等為買入、牛深村辺ェ罷出居候由ノ処、既ニ該島出張警部、為取締巡回致居候趣ナリ、

一鹿児島人牛深村学校ェ教員奉職ノ者、国元ヨリ被呼帰引取候由ナリ、

一客月下旬、長島ノ士族三四名帯刀ニテ牛深村江参候

ヲ、該地詰巡査差押候処、既ニ鹿児島ハ帯刀被差許タル抔申張、引取タル由ナリ、

一牛深村巡査屯営江長島ノ士族押寄セル風聞ニテ、該村人民間〻家具等取片付候者モ有之由ナリ、

一鹿児島人何千人或ハ何百人宛追〻上京スル趣、尤是ハ難信、

右之次第於富岡村聞込ノ儘先及急報候也、

但同村儀ハ外ニ何タル異状無之候、

明治十年二月十六日

九等警部井手精五郎印

長崎県警察所長

二等警部　山川景範殿

二ノ三

本日午後第十時検事局十五等出仕松本堅葉到着、御信書正ニ相届キ忙手拝読、来旨之趣縷〻了承、即日氏ト百事協議、当地士族ノ景況等倶ニ申入置候間、御安着可被下候、扨三四日前ヨリ熊本県城下ニ当リ、熾ニ火気相見ヘ巷説紛〻誠ニ不穏模様ニ付、昨廿日ヨリ巡査壱名探偵ノ為彼ノ地ヘ差遣シ候処、本夜十一時実地見聞ノ廉〻、荒〻帰便ヨリ申越候間、御承知モ可有之ト存候得共、御含迄開伸仕候、

一本月十九日朝ヨリ熊本城下ニ火ヲ発シ、坪井町過半高田原古城本丸天守共一円焼失ス、此レハ官ヨリ布達シテ焼払シ由、

一本丸ノ焼失ハ、鎮台ノ過ニ出候由風説アリト、

一熊本市中ノ橋梁総テ官ヨリ焼落シ、県庁ハ残シ由、

一同日警視局ヨリ巡査数百名出張ス、

一同日ヨリ地場ノ巡査帯剣或ハ銃器ヲ携居ル由、

一同廿日昼後ヨリ、城下新町ヨリ発火、未タ鎮火ニ不至ト、之レハ当島原邨ヨリモ直線ニ見ユ、火烟頗ル熾ナリ、

一士族ノ内、間ニ自宅ヲ焼キ、隠ニ南方ヘ加担ノ萌アリシ由、

一同廿一日南方ノ士族壱千余名、熊本ヨリ二里相隔ル川尻江到着、同所宿泊スル由、

一同廿一二日ノ両日ニハ、必ス戦争ノ用意アリト、

右信否保拠難仕、来報ノ儘相認申候、

一当地ハ士族ヲ初先ツ平穏ナリト雖モ、精〻探偵ヲ入レ一層注意罷在、且港船津其他出入船改等厳重手配致置申候、

一御人選ノ上巡査五名以上至急御差向相成度、左無クテハ各屯所取締及探偵上甚差支候間、英断ヲ以テ速ニ其運有之度存候、

先尊酬旁要〻迄申進候也、

十年二月廿一日夜認

渡邊　檀

横津信義

山川景範殿

尚〻職務上ニ関スル事件及心得ニ相成可キ要点ハ、細大共御漏被下度、佇望〳〵、

二ノ四　肥後国探偵手続書

一私儀二月廿五日夕刻ヨリ、第八大区四小区島原村船津坂井茂作ヲ雇ヒ出帆致、廿六日朝肥後国河内(飽託郡)ヘ上陸可仕積之処、陸地薩兵ト官軍軍艦ト争戦、何分ニモ難寄付候ニ付、無余義大濱(玉名市)江上陸致シ景況ヲ聞合ニ、田原(鹿本郡)ニ於テ戦争烈敷、炮声殊之外相聞候ニ付、一応河内江可罷越筈ニ候処、白濱ニ参候得者、川尻(熊本市)・百貫(同上)・高橋(同上)・河内之ケ所ニ、賊兵海岸防禦之為メニ数多出張ニテ、所詮通行出来兼候段申ニ付、長須(玉名郡)江引戻シ同所江一泊、翌廿七日又〻大濱之方江出悖候処、高瀬(玉名市)ニ於テ戦争第一ニ烈敷有之候ニ付、高瀬戦場ニ近寄見物罷在、賊兵者寺田・安樂寺・向ヅル(津留)向江屯シ、官軍ハ岩崎・中村・龍願寺ニ出兵、双方合戦ニ及ヒ、薩兵川下大濱サラシヨリ撤兵ニテ、六七百名私見物罷在候川土手近辺ヲ通行、岩崎之官軍ヘ横筋より鉄炮ヲ頻リニ打遂ケ、夫ヨリ追〻手負十三四名、死人二人大濱之川ヲ渡シ申候、其節私ニ死人ヲ井倉近辺ニ持運ヒ申候、直ニ又〻河内ニ罷越途中、野見崎(呑崎)ニテ夜ニ入候故、同所藤吉方江一泊、翌廿八日野井(野出)手ヲ越シ熊本江可罷越処、途中ニテ踏込袴着用、鉄炮ヲ携ヘ帯刀シタル者両人ニテ差押ヘ、私出所姓名如何之用向欤ト厳敷取締、山中ニ者数多軍兵罷在候ニ付、不審之者ハ一向通行不為致候間、引返シ候様申聞ケ候間、原倉村(玉名郡)ト申所ニ罷越候処、又〻賊兵ニ押ヘラレ、同所屯集ノ場江三人ニテ連越勾留(拘)、直ニ吟味ヲ遂ケ、其ケ所ニ六七十名罷在、始末甚敷糺問ニ及ヒ候故、万端都合能申述候処、賄方申付兵糧ヲ宿〻ニ運ヒ付、三月三日朝迄賄方罷在候処、賊軍木ノ葉ト吉次ト之方江相移リ候ニ付、器械ヲ為運候際ニ乗シ逃去、高瀬川ヲ渡リ候ニ、羽根木(繁羽木、玉名市)所〻ニ伏兵罷在、巡

邏兵罷越差押候間、商法ニテ通行之者ト申立候処、私義敵地ヨリ参リ候段取利メ候故、何分通路相成、急此方へ参リ候段相答候得者、羽根木旧会所本営へ連越、隊長士官ト見請候者ヨリ尋問ニ相成候故、已前之通リ商人ト申立候得者、夜ニ入土蔵ニ勾留、翌四日朝尚又糺問ニテ、私義賊兵ニ入リ鉄炮ヲ打居候義明瞭致候訳納六ケ敷申聞候得共、決而左様之覚無之申張候処差免シ、途中迄見送退ケセ申候、花熊通リ川床ニ罷越之処、南ノ関(上名郡)官軍番兵厳重取締有之、無拠永田路傍へ睡眠致シ、五日朝長須江可罷越積ニテ麓へ参リ候処、官軍数多有之農家へ一泊、翌六日長須江出候得共、島原へ渡海不相成、翌七日帰国仕候上、早速前件之始末御警察御出張所へ相達候、此段手続書ヲ以テ不取敢上申仕候、猶見聞之次第巨細口上ヲ以テ可申上候也、

四等巡査　松尾稠八郎

明治十年三月七日

一ノ五寸楮ヲ以テ第一分課ニ奉ル、小子本月十五日午後第八時水俣江到着、陣町佐藤秀(一等巡査)夫寄留所桑原一布宅ニ踵キ相尋候処、一布答ルニ、旬日前桟敷(佐敷)江発途相成、其砌ヨリ御来車此レナク、定テ御転宿ト相考候云々ト、因而措カス区務所江依頼探訪相遂ケ、同濱村九拾五番地平民倉本傳七方ヘ寄留分明候、然ルニ佐藤氏明(ママ)十三日人吉江出途相成、必ス両三日ハ滞在之由、右傳七ヨリ申聞セ候、素ヨリ小子面シテ達セント両日余滞在候処、熟々考ルニ碌々相待候ヨリ、一層人吉ニ於テ相達セント、同十七日午後ヨリ桟敷駅へ引返シ、先以通運社江立寄リ色々嘶合候処、社員云フ、佐藤氏ハ一昨十五日人吉ヨリ来訪相成、本県ヨリ之郵便ハ所持呉レ候様御沙汰之末、八代江御出立之趣候、左スレハ迚テモ尋逮フコト難計、寧ロ当村江二三日滞留、猶々面会ヲ得スンハ、所持之金水俣区務所江廟置、速ニ帰着仕心得ニ候間、此段書中ヲ以テ上伸仕候也、

三等巡査　北村常則㊞

明治十年六月十八日

下宿
熊本県第十三大区七小区
桟敷五百七十一番地
森田定吉宅

第一分課　御中

追啓、最モ八代・日奈久(久)江郵便ヲ以テ佐藤氏ヘ通シ置候也、

ニノ六
一征討

人民動静

熊本県

六月六日午後一時十分熊本富岡権令ヨリ阿玖(久)根ヨリ県下天草ヱ諸品買入レノ為メ、賊徒到来ノ由、右地方取締ノ都合之レ有ルニ付、如何ノ手続ニテ何レヨリ揚陸シ、何レノ地方ヱ何レニ宿泊シ、何浦ヨリ県下ヱ到来セシヤ、其手続キ御取調御報有リタシ、

一征討

人民動静

熊本県

九月十三日午前十時四十分熊本警視出張所ヨリ飯野・人吉辺先ツ異状ナシ、

三　人民動静　大分県

三ノ一

大分県下ヘ賊侵入之始末左之通

一五月十三日午後四時竹田旧城下ヘ賊勢一千余乱入シ、該地士族ヲ煽動シ名簿ヲ造リ、戸毎ニ立入リ、悉ク之ニ迫リ随従セシメ、壮士ヲ撰ヒ二十隊之兵ヲ編ミ、(此内恐慎ンテ随従スル徒多ン)、四方ニ胸壁ヲ築キ、防禦至テ厳ナリトノ由、

一同十六日賊凡二百名、大分県庁ノ警備ノ厳疎望見センタメ、庁ヨリ二十丁余畑中迄押来レリ、然レトモ大分県庁ヨリモ賊ノ押来ルヲ聞キ、警視巡査百名、該県巡査五六十、其他改正掛(地租改正)ノ役員、加ルニ人夫等都合二百名、畑中字堀切ト申処ヱ派遣シ置クヲ、賊之ヲ望ミ、庁内ノ警備愈厳密ナリト見做シ、同所ヨリ引返ス、此時県庁ヱハ寸兵モナク、庁中モ当惑之折ニテ、県庁ノ四方ヘ台場ヲ築キアリ、

一同夜未明右賊鶴崎ヘ至リ、同所ニテ警視巡査前日佐賀(北海部郡)ノ闕ヨリ上陸、鶴崎ヘ止宿スルコトヲ聞キ、二百ノ賊十名窃ニ巡査ノ止宿所ヲ窺ヒ、熟眠ヲ察シ突入セリ、素ヨリ不意ノ事ニテ、巡査ノ即死三名、賊ハ即死一名アリタリ、残リ賊百九十名ハ近傍乙津ト云フ処ヘ屯シ、十名突入ノ賊潰走シ、両賊合シテ川船ニ乗シ戸次(へつぎ)マテ漕付ケ直ニ上陸シ、竹田ヘ合併ス、

一竹田士族ハ悉ク脅従サレ、然レトモ目今自首スル者多シ、市人五名賊ニ従ヒ百方尽力セシカ、当時ハ就縛入獄セリ、

一同廿一日頃ヨリ竹田進軍ノ兵熊本ヨリ二大隊繰出シ、小倉分営ヨリモ兵数不分繰出シ、警視巡査百名繰出セショシ、

一同廿八日竹田開戦、賊諸口ノ胸壁ヨリ炮戦、一両日間漸保シ、終ニ支ル能ハス、官軍ノ追撃ヲ防ン為メ諸市其他士族屋敷等ヘ放火シ、緒方・三重ノ市等潰走ス、官軍亦賊ノ潜伏ヲ憂ヒ亦火ヲ放ツ、故ニ焼残ル家屋僅カ三四十戸ナリト、

一同三十日三重ノ市ヘ賊多ク屯在、警視巡査台兵二百余進撃ス、官軍即死十四名、故ニ一応引上ケ尚尋テ進撃、賊敗レテウメ（宇目）・重岡ノ方ヘ走レリト、

一同六月一日午前賊大挙臼杵ヘ乱入セリ、同所出張ノ警視巡査百名、同地士族七百名共ニ賊ヲ防禦ス、然レトモ銃器等乏シク、終ニ官軍敗走、巡査ノ即死二十名、士族ノ即死百名余、傷者詳カナラス、此時賊勢二千ニ近シト、

一同日台兵二大隊・警視四中隊臼杵ヘ繰出シ、不日進撃トノ由、此前臼杵士族藤春十等警部熊本ヘ台兵招トシテ通行ノ帰途、黒岩ト云処ニテ竹田ヨリ随従ノ賊ヨリ捕縛サレ、竹田下木川端ニテ斬ス、同地久住ノ区長吉田鐵三探偵トシテ奔走ノ際、賊ノ為メ縛サレ、斬殺ノ上解体シ、胆ヲ取リ食ハセシ由、

一同七日午前熊本ヨリ台兵二大隊着、直ニ臼杵進撃ノ本営戸次ヘ繰出ス、弾薬函数百荷運送アリ、即今臼杵進撃ノ人員惣数台兵四大隊・警視隊四中隊アリ、

一臼杵士族ノ内四十名ハ全ク賊ニ随従セリ、

一竹田士族ハ、五十名ハ于今随従尽力スルヨシ、巨魁ハ堀田正一トノ由、

一同日午後ヨリ諸口ノ官軍追〻繰出シ、一手ハ野津市ト云処ニ向ヒ、一手ハ榎嶺ヨリ荒田峠ニ向フ、一手ハ芳野ヨリ臼杵ヘノ本道、一手ハ松原峠ヨリ末廣ヘ出ルノ手配ナリ、此時官軍モ数日ノ駐留ニテ、地理巡視等ハ頗ル了知シ、加ルニ臼杵士族某教導タリ、

賊ノ墨壁ヲ築キ屯在スルケ所左之通

一小川内村字エンセキ鼻ニ　一ケ所

一同村字天神之鼻　一ケ所

但此天神ノ森内ニ屯ス　人員不明

一同村字神崎茶屋山ノ上　一ケ所

一同村字切畑　一ケ所

一福良村字土橋　一ケ所

但此所江百五十人屯ス、

一市濱村字トンペキ　一ケ所

一同村字土体　一ケ所

一荒田峠ヨリ各ケ城山中ニ掛ケ伏兵アリ、

但糧食ハ自ラ運フヨシ、

一荒田峠ヨリ南三丁計リ桐カ辻エ数十名屯ス、

一各ケ城ヨリ南ヘ八丁土体ヘ多数屯ス、

一末廣村字一里松ヘ哨兵六七人時〻交代ス、

一江無田村田里正・平川源二宅ニ二十余屯ス、

一同村士族岡部治業ノ別荘ニモ二十余屯ス、

一同村江無田橋ニ百三十名余屯ス、

但此処ニ廿三間位台場アリ、

一同村十六天神ニ百余屯ス、

但此所ニモ廿三間位ノ台場アリ、

一同村各ケ城ヘ四五十屯ス、

一長尾山ニ伏兵置ク、

一陳山ヘ

但此所ニ七八十屯ス、

一戸室ヘ　一ケ所

合テ九ケ所

一賊ニ大砲三門アリトノ説アリ、

一賊ノ糧米一日十二石余ナリ、

一諏訪山ノ賊七八十時〻交代スルヨシ、

六月八日ヨリ開戦

一本日午前五時ヨリ諸〻官軍大進撃、白山越ノ官軍北ノ川内邨マテ押出シ、賊同所向ス山ヨリ砲戦、翌九日午前六時頃迄砲声不止、而シ終ニ賊ハ諏訪山ニ引上タリ、

一白木口官軍ハ末廣村一里松マテ進撃シ、同所各ケ城之賊ヲ敗リ該所ヲ乗取リ、同所ヨリ頻リニ大砲ヲ発ス、賊狼狽シテ多臼杵ヘ走ル、此時賊ノ死傷十余名アリシヨシ、官軍ノ死傷二十名アリタリ、

但此時白木峠ノ賊哨兵二名就縛、

一正午官軍数口ヨリ進撃、午后賊大イニ狼狽ノ色ヲ顕シ、山川田畑ノ嫌ナク大潰走シテ十六天神マテ引退ク、同所ニテ立直ノ色アルモ、官軍一列ニ進ムニ付踏止ルヲ得ス、市濱ヲ差シ蜘子ノ散スルカ如ク敗走セリ、

一軍艦ハ淺間・日進ノ二艦ニテ、間断ナク賊ノ蟻集スル処ヲ狙撃ス、

一同九日戸室・諏訪ノ両台ヲ抜ク、諏訪山ノ賊ハ後ロヨリ官軍ヨリ不意ニ撃戦サレ一時ニ敗レ、山ヲ下リ川ヲ

渉リ前ナル新地ニ出テ潰走スルヲ見テ、海軍ヨリ大砲数〻発ス、此時賊ノ死傷其数ヲ知ラス、取残ス処ノ死体凡四五十アリタリト、夫ヨリ賊ハ旧郭内ヘ引退ク、

同所洲崎台場ヨリ防禦ス、

一諏訪山進撃ノ官軍ハ、賊ノ潰走スルニ乗シ追撃、市濱迄進ムテ川ヲ隔テ、小セリ合アリ、

一同日午後四時比、市濱町川上字カチワタリト云処ヘ賊放火セリ（市浜町トアレトモ市浜村ノ誤ナランカ、正誤不明、戸室辺リモ少シク焼亡アリ）

一此日ノ戦争ニ官軍ノ傷者十四名アリ、尤モ薄手ナリ、

一同十日午前四時比ヨリ諸口激戦、同七時頃臼杵・平清各二ケ所、小川内一ケ所、疊屋町二ケ所火ノ手上ルヲ（賊ヨリ放火セシナリ）、而賊悉ク潰走シ、佐伯ヲ差シ逃走、官軍尋テ進入過方消防スルト雖折節風悪ク、臼杵町ノ内本町・横町・掛町・唐人町・濱町ヲ過半焼亡、正午漸ク鎮火、尤士族屋敷ハ兵燹ナシトノ由、

一賊ノ佐伯方ヘ走ルヤ、官軍三小隊津久見峠マテ追撃セリ、

但津久見峠ハ佐伯ノ本道、臼杵ヨリ一里余、

一海軍ハ賊ノ津久見峠ヲ差シ潰走スルヲ見テ、直ニ錨ヲ抜キ津久見港ヘ廻艦セリ、

但該所ニテ砲撃セシヤ否不明、

一此時臼杵ハ一名ノ賊ナキニ至ル、故ニ参謀部ハ直ニ臼杵ニ転進シタリ、

一臼杵ヲ賊ノ潰走スルヤ、十分激戦ノ上力窮ツテ走ルニアラス、官軍ノ諸方ニ満ツルヲ見テ只管恐怖ノ色ヲ興シ、自ラ保チ難キヲ思惟シ、狼狽ノ上ニ狼狽ヲ重ネ、津久見ヨリ佐伯ヘノ本道ヲ通ル能ハス、或ヒハ山嶮ノ道ナキ処厭ハス潰走、然ル処赤ノ川内露見峠（津久見峠カ）ニテ海軍ヨリ砲撃サレタリト、

但津久見港ヘ廻艦ノ二艘ナラン、

一賊徒等モ最前ヨリ臼杵ヲ久ク保難ハ銘〻知候所ニテ、以前ヨリ走路ノ探偵等ハ十分行届、加ルニ津久見田畑ト申処ヘハ堅固ノ塁壁ヲ築キ、此所ニテ一防禦ノ手筈ナリシモ、官軍ノ威ニ恐縮シ、狼狽ノ余其道ニ因ル能ハス、山中ヲ潰走セリ、此勢ニテハ佐伯ヘモ踏止ル能ハサルヘシ、該地糧米至乏キヨシ、

一臼杵ヲ賊ノ放火スルヤ、全ク官軍直ニ迫ランコトヲ憂ヘ、跡ヲ塞キシナリ、

一臼杵ノ賊潰走スルヤ、直ニ該所士族片岡貞次郎ノ家屋ヘ警察所ヲ設ケ、死体取片付或ハ犯人追捕、其他保護

上ニ付テ百事着手最中ナリ、

一同十一日、前十日進撃ノ官軍ハケイコヤ村ト申処ヘ屯ス、然レトモ無程佐伯ヘ進軍トノ由、其余隊ハ本日未明ヨリ二手ニナリ、一手ハ佐伯ヘ向イ、一手ハ三重市ヘ向発ス、

一臼杵郊内掃除(掃蕩ノ意)ノ域ニ至リ、官軍挙ツテ佐伯方ヘ進軍ニ付テハ、該地人民大イニ倚頼ヲ失ヒ、再ヒ賊ノ侵入センコトヲ恐レ、寡兵ニテモ当地ヨリ駐留之義願出、惣代トシテ福田敦見津久見本営ヘ出頭セリ、出張警部ヨリモ暫時ニテモ駐留ノ義倚頼ニナリタリ、此時ハ本営ハ津久見ナリ、

一此間賊ノ探訪三人就縛アリ、

但一人ハ末広村鍛冶屋某ナリ、二人ハ臼杵町ノ町人

一竹田士族賊ノ探訪ハ拘留中、

山村清三郎

近藤　近

其他恐従ノ者八十余名拘留吟味中、

右之通大分県下ノ実況探偵候也、

明治十年六月十七日

一等巡査梅田晴計㊞

三ノ二

一征討

人民動静　大分県

四月六日午後四時三十分佐賀支庁ヨリ電報

中津豊後ノ賊ハ大分県庁ヱ乱入シ、同所檻獄並ニ県令ノ居宅ヲ焼キ乱暴ノ節、軍艦ヨリ之ヲ砲撃ニ及ヒ賊散乱シ、尚又台兵ヨリ進撃スル処、賊敗走シテ熊本県ノ方二重峠ニ向ケ逃走ス、賊ノ巨魁ハ中津ノ士族増田惣(宋)太郎・梅谷保義・後藤喜(純)平三名ノ由、人数ハ凡ソ弐百計ノ由、右探偵ノ報知、

三ノ三

昨十四日午後九時大分県庁ヱ到着仕候処、第四課ヶ長外警部モ不在ニ付、宿直ノ五等属高取盛章氏ヱ面会シ、問ニ戦地景況ヲ以テス、同氏云フ、拙者一昨日戦地ヨリ帰ル、方今賊日向国境ノ険ニ拠リ防守シ、稍ヶモスレハ突出セントス、然レトモ互ニ険阻ノ地ニシテ攻撃不利、賊又如是、即今両線ノ間相距ルヽコト甚タ近キハ殆ント四五間、遠キハ壱里余、然ニ三日前攻撃勝利ニテ、一方或ハ戦線ヲ進ムル殆ント一里半、外ニ本日報表有リト雖モ、其処ヲ志ス如何ン、明日第四課ヱ云ヶ申通報表ヲ示サントノコト、依テ宿ヲ同所水野圓作

方ヱ投ス、本日出庁菊邨警部ヱ会ス、同氏ノ云又高取氏ノ云ニ出ス、依テ戦状報表写相添、此段大略上申仕候也、

明治十年八月十五日　　巡査松崎次郎㊞

長崎県警察所

警部御中

追テ大分市巷ハ東京警視巡査ヲ配布シ、該県巡査ハ所〻ニ出張ノ余ハ総テ県庁ヲ守護ス、

一昨十三日戦地ヨリ夫卒若干申来リ、就テハ不日大進撃有ランカト想予ス、

賊ノ言ニ曰ク、邀撃一挙シテ豊後ニ突出シ、地ヲ略シテ之ニ拠ント（是ハ曩ニ賊ニ囚レ、一昨十三日脱帰セン夫卒ノ申立ノ由）

右者菊邨氏ノ話シ、依テ申添候也、

別紙及電報共第五出張所ヱ御通知ヲ乞フ、

三ノ四

当屯所詰メ三等巡査坂田金次郎ナル者ヲ探偵ノ為メ差廻シ置候処、則チ矢上町民家ニ於テ大事ノ浮説ヲ聞伝フニ、本日西郷一人島原ヨリ上陸ノ云〻、同町戸長ヨリ伝承ス、依テハ疑惑ヲ生シ、嗚呼由断（油）大的（敵）ト相察候ニ付、尚為念矢上出張第四旅団二中隊ノ方ヘ右云〻尋問ニ差遣シ候処、同隊附下士官相答ニハ、右西郷ノ説ハ本日本部ヨリ御達ノ内申聞候条、此段至急報知ス、

九月八日　　矢上方屯所

武末爲光

警部御中

四　人民動静　鹿児島県

四ノ一

十年十月

手続書

園田亨逸㊞

鹿児島県下景況略記

明治九年十二月廿日、鹿児島県下久志木（串木野）村ノ内小瀬ノ浦ヘ上陸、同所ヨリ陸行ス、

問、久志木近傍市來湊近傍士家宴酒盛ナリ、当時月迫ニ至リ、何等ノ訳ニ候哉、

答曰フ、近日東京ヱ出立ニ付離杯スト、

問、東京ヱハ何ノ用ニテ昇ル哉、

答曰、大久保利通ハ当時参議ニアリ、彼レ先般　主上

御巡幸ノ折、旧主島津公ヘ礼ヲ尽サス不臣ノ至リ、依テ今般士族有志ノ輩ト謀リ、同人可斬ト云、

士族体ノ者五七人乃至十五六人酒瓶抔携連行放歌ス、其歌略曰、

ハヤクユキタイ東京トヤラニ
ジヤマナヤツヲハキリ〳〵ス　等ノ事ナリ、

仝夜伊集院駅ヘ一泊、当所ハ士族家七八分ニ居ル、

問、近比士ノ銃器ヲ携行スル往々有之、如何ノ訳ナル哉、

答曰、最早冬期ニ至レハ、今日ヨリ猪獅猟ノ用意ナリト云フ、愚考ルニ下民ノ騒クヲ憚リ斯ク云ナラント、

仝二十一日鹿児島県第一大区下町旅人問屋ヘ着、同所ニテ土州人松村東外（偽名）ト同宿懇交ス、

問、貴兄ハ遠路ノ波濤ヲ超エ、何ノ要用ニテ当地ニ来リ居ルヤ、

答、予亡小松帯刀ヲ知ル、依テ同人倅ヲ尋テ罷越、然ルニ当県下不妥ノ景況、依テ桐野旧少将ヘ行キ志ヲ述、然レトモ言入レラレス、両三日ヲ経テ大阪景況長崎ノ挙動探索ニ行ケト云、予肯シテ当地ヲ出発、都ノ城ニ至リ同所旧家老ノ倅某（姓名ハ彼ノ松村云ヘトモ忘レタリ）ヲ頼ミ大阪ヘ遣シ、先方行ク先キモ爰々何々ト一々桐野ノ指令ヲ伝ヘ、長崎ハ他人ニ依頼ス、依テ当時帰リマテハ桐野ヘ逢フコトヲ憚リ、隠レテ此宿ニ居ルト、

問、貴兄ハ何故ニ大阪ヘハ行カサルヤト、

答曰、予少々存念モアリ、又彼地ハ土人多ク、依テ予カ隠居且姓名ノ顕ハルヲ憚ル、

問、然ラハ貴兄ハ犯罪ニテモアルヤト、

答、否然ラス、少シ顕名ヲ憚ルコトアリ、然レトモ官ニ疑惑ヲ受ル可キ筋ナシト云、然ラハ当時知人ノ可問者無之哉、

答、別ニ可問者モ無之候得共、奈良原甲（幸）五郎ナル者ヲ近比訪ヒ交レトモ、彼レ戦争ヲ好マス、依テ卑屈論計リナリト、

問、然ラハ貴兄ハ戦ヲ好ムノ人カ、

答、否不然、奈良原ノ如キハ機ヲ不知、桐野ノ如キ英傑ノ人ニ非ラサレハ、事ヲ成サスト云フ、

問、然ラハ兄ハ前原ノ如キ賊名ヲ得テ快トスルヤ、

答曰、否前原ノ如キ小義ヲ謀ル族ト同一ニ非ス、

問、小義トハ何等ヲ云フ哉、

答、死後賊名ヲ得後世ニ名ヲ汚カス輩、小義ヲ計ル故也ト云、

谷山并ニ平川辺ハ伊集院辺ト同論、別ニ不書、
牧山愼藏公宅エ参訪二度ニ及ンテ、彼禄制ノ事ニ及フ、
問、禄制一件ニ付先般大山公出京ニ相成、当時特別ノ御指令有之トノコト如何ニ候哉、
答曰、右者過日ヨリ士族連讙ゝトシテ相騒、既ニ御着到ノ折迄御存知之通リ、乍併特別ノ御詮議有之ニ於テハ相鎮ル可クト云フ、
後日牧山氏予カ下宿ヘ訪来、百事談話会酒ゝ酣ニシテ前論興ル、牧山氏曰、過日西郷ノ塾生東京ヘ出発スルノ話シアリ、不容易言、同氏即今発スルノ説ヲ主張スルノ謂ナシ、又無名ノコトヲ興ス人ニ非ス、唯下士ノ口論而已、併シ予ハ当時隠居イタシ居、交リモ又不多、依テ保証ハ不致候得共、彼人ノ為人ヲ略知ス、騒ケ敷景風ハ不絶ノ薩風習ナリト云フ、
松村ヘ問、奈良原氏ハ日ゝ不在ナルカ何ヲ為スヤ、
答曰フ、当時彼レハ島津家ノ家令ニ付日ゝ出勤、又彼東発一件鎮説ヲ唱ヘ、頻ニ官ノ為ニ尽力スト、
問、彼ノ人ハ過日上京ノ折、大臣条公ヘ御辞職被遊様上申ストハ云ハスヤ、然ルニ今般俄ニ鎮静説ヲ唱フルトハ如何ノ訳ナルヤ、
答曰、彼ハ戦ヲキラフ、故ニ右等ノ説ニ及フカ、乍併予モ亦急発ハ無名ニ属ス、依テ之ヲ退ク、彼レノ尽力モ夫ナラン、
奈良原氏ヘ松村同道ニテ参ル、四方山ノ話シニテ異論等一切無之、彼一件ハ最早鎮定可及、松村氏ヨリ御聞及モ可有之抔等ナリ、併私咄シ申セシハ他言無用ト、
問、過日ヨリ今ニ及迄、銃器携ヘ歩行スル者未タ往ゝ有之、如何ナル哉、
答、彼レハ当地ノ風習ニテ、少ゝ異論モ有アラハ直ニ相騒クコト今ニ至テ止マス、野蛮風ト云ヘシ、併御心遣ハ無之候ト愚考ス、田舎ノ者不意ニ出ルヲ唯ゝ恐ル、而已、
愚考月迫ニ至リ、彼松村ト申書生ヘ金子二十円余送来リ、来ル一月七日東京ヘ出立ス大山氏ト少ゝ関係ノコトアリト、依テ近日園田ヘモ離旁可罷出伝言又買金一条相尋候得共不言、唯議論上不得止出金候抔曖昧ニ付ス、又来月ハ同氏出立ニ付、松村氏同航ノ約ヲナスト云、依テ問フ、兄ハ俄ニ東行ヲ奈良原ト約ス、加之買金モイタシ東行ノ金モ出ス、何等ノ訳アルヤ、
答、予此地ニ来リ、桐野一件ヨリ原良村小松氏ヘモ行

コトヲ不得、其他知人ヘモ同行ニ付、困窮至ラサル処ナシ、依之奈良原ヘ相談イタシ候、無怪東路ノ書通モアラハ、島津旧知事当リ中ニ奈良原当リ三封ニシテ書通依頼スト云フ（彼松村甚怪ハン偽名ヲ唱フルヨリ挙動粗暴ニシテ言不極、於爰疑ヲ生ン同氏ト連行、終ニ彼レノ景像ヲ写取来ル）

依之愚考スルニ、松村・奈良原ノ上京何等ノ主意タル不知、奈良原氏ハ大山氏ト関係ノ事件有之、是非一名ハ東路ニ不在候テハ、不都合抔相疑ノ甚シキ者トハ存候得共、牧山氏抔ノ言ニ符合スルヲ以テ、先ツ真ニ止置候（得ト可考事也）

或書生曰、予ハ今般条公并ニ大久保利通斬殺ノ徒ニ加入セント志願イタセ共、入レラレスト云フ（是ハ栗原幡中属、殿同道ニテ聞）

問、夫レハ西郷ノ塾ヘ願イシヤ、

答、然リ、方今ノ徒凡一万人計先般相募、田舎士七分ニ居ルト、就中加世田・出水ノ辺最多シト、軍艦ハ六艘用意シ、今発スルノ令アレハ二日ヲ不出シテ数千ノ兵集ル、実ニ不加入遺憾ノ色面ニ顕ハル、

又十二月廿日内外肥後ヨリ五人或ハ三人、西郷ノ塾ニ入リ東発ノ連ニ編入ヲ願ト雖トモ、此度ハ鹿児島県士中ニテ願ノ筋有之、有志輩数名出京ノ積リ、何ソ他ノ県ノ士族ヲ率ヒテ行クノ謂ナシ、早ゝ当地御出立可有抔ニテ皆ゝ返サレタルヨシ、姓名ハ（太田某黒田某、外ハ不知）

一月一日仙台（川内）ヘ泊シ、同所ハ先月廿二日大火アリ、他ノ県人ノ可怪アリトテ旅人改厳重ナリ、尤モ肥後人ハ両三名宛アラ〳〵滞在ノ人アリ、同所ニテ或書生ノ曰、当所近傍ノ士族先月廿三四日頃三十名余当駅出発スト云、

出水ニ至リ尋問候得共彼地ハ不知、依テ亦鹿児島ヘ行キ彼等ノ跡ヲ索トモ不得、又船ヲ尋ミルニ、船ニ乗込メ共其船禾タ帰ヘラスト、併シ鹿児島行ナルヘシト云、依愚考仕ルニ、彼地ヨリ船ニ乗レハ肥後・肥前ヘ向クト存、熊本県エ索レトモ不得、依之船都合ニ寄リ福岡県下柳川ヘ行キ知人ノ訪ヒ候処、不図彼鹿児島ノ話ニ至リ、過日同県下瀬高駅巡査屯所ヘ三十名余参リ、兒島警部ニ面会イタシ度趣申述、種ゝ談話（一等巡査森田、時三郎応援）、終ニ彼東京登発ノ事件兒島ヘ相聞カセ度存テ参リタリ、御存モ有之ラン、

彼西郷ノ私塾生徒数千人近日東京ヘ出発ス、自分輩者其外ナリト申セシ由、又兒島警部ハ久留米支庁ノ詰ナリト聞、翌日同所ヘ向ケ発足スト云フ、

愚考ルニ、此徒仙台（川内）近傍ノ徒ニ人員等符合スルヲ以テ、彼徒ナラント、又彼地ヲ挺足シテ往来筋ヲ煽動スルナラン、実ニ悪徒党ナリト思慮シ、直チニ久留米ヘ参リ、

兒島警部へ御目ニ掛リ可相伺ノ処、最早寶端丸長崎着艦ノ期ニ至候ニ付、不都合ノ廉モ有之候ニ付、直チニ新地ヨリ乗船長崎へ着ス、

右之通略〻手続ヲ以テ奉上申候也、

明治十年第一月

二等巡査　園田亨逸印

四ノ二

副書

上

二等巡査　園田亨逸印

鹿児島県下不穏景況ニ付罷越聞取書

明治十年二月八日午後三時長崎出発、同十一日午後五時過鹿児島県下出水郷之内野間ノ原（旧番所ノ跡辺、距鹿児島凡廿五里）へ通リ掛リ候処、同所ニ壱軒家有之、外ニ出小屋見張所ヲ構へ、士族体ノ者五七人炮刀ヲ備へ相詰居、通行人ヲ改ムルコト頗ル厳ナリ、依テ問、下僕熊本県ヲ経テ爰ニ来ル、然ルニ彼県ニ於テハ右等被改候事無之、又改所ト申見張抔致居候事嘗テ無之、然ルニ当御県ニカキリ見張所御設置御改メ方厳敷コトハ、如何ノ訳ニ候哉、薩人答、成程御疑モ御尤ナルカ、頃来県下ニ於テ疑惑ス可キ事有之、右取調済迄ノ処諸津口出口等厳重改メ、小商人ト雖トモ入県ノ者ハ暫時ノ処足ヲ留メ、出県ヲ不許、故ニ其方学校ヘ入校ノ志望ナレハ、当時諸校休業ナレハ志望難遂、乍併強テ本県ヘ御通行ナラハ、書生ニシテ行ク先判然スレハ此節迄無鑑札ナレト差許ヘク、併シ才領人ヲ附ケ本県ヘ送ル、帰郷ハ難相成、加之懸疑等御受相成候得者、御難渋一方ナラス抔、懇〻被申候ニ付、右ノ訳ニ候得ハ愚望モ難遂候ニ付、従是引返シ可申ト一札相述水俣駅ヘ帰泊、同駅ニ於テ聞取書略記、

同駅近村竹中村寅之助ト申者、五六日以前商ヒニ参リ候処引留ラレ、種〻尋問済ノ上毎日三時間走リ方稽古為致、僅カノ休憩ヲ与ヘ又走リ、或ハ役ニ使ハレ、夜間ハ監守人ヲ付ク、殆ト罪人ニ異ナラス、幸ニシテ深更ニ及監守ノ睡眠ヲ窺ヒ逃走、山間無道処ヲ超ヘテ帰ルト云フ、

問、其兵幾何ナルヤ、答八十人計リ、又問、其兵何等ノコトヲ咄シ居ルヤ、答、（旧暦）正月四日迄ニ是非発足ス、期至コト待長シ抔申居ト云、同所農家ニ至リ休フ、此処ニ又一ノ婦人アリテ云、

私鹿児島県下出水小川ト申処ヘ加勢奉公ニ参リ居、昨日

間道ヨリ帰リ候カ、彼地ノ事憫然ニシテ不被聞ト、　問、出水郷ヨリ幾名計リ出兵スルヤ、　婦答、壱万五千人余ト申コトナリ、　又問、彼郷吾慥ニハ不知トモ少ク知ル、郷士ノ家大底二三千戸ニ過スト思慮ス、然レハ其人員ノ戸数ニ比較シ難シ、如何ナルヤ、　婦答、郷士ハ十二歳以上四十内外迄ニテ、凡一家ヨリ多キ家ハ六七人出ル処数ケ所アリ、二才組マテ無残ト申コト、又昨暮ニ至リ家〻餅モ春カス、老母妻子等ノ愁歎見分スルニ不忍風情ナリト云〻、

二月六日鹿児島県下不穏景況ニ付、水俣駅蓑毛浅次郎（郵便局頭取蓑毛某忰）郵便夫トナリテ飛行シ聞取書

同県下郵便ノ外一切通行人ヲ不入、併用向ニ依リ明亮ナルハ差許候得共、帰郷不相成留置候由、

米ノ津駅辺農民共銃炮札付ノ儘二三挺宛持運ヒ、所〻分配ノ模様ニ相見ヘ、且ツ私学校連ト唱フル人ハ洋服ヲ着シ、鹿児島ヨリ凡二十名、出水郷士族三十名、本県巡査三四名（是モ私学校ヨリ撰挙ンタル者ノ由）出張相成候由、

当月五日熊本県士族松崎迪ナル者長キ刀ヲ帯通行候処、直ニ被咎、同人申ニハ熊本ヘ同志士三百程相募リ居、就而者西郷先生ヘ至急面会致度趣詳ニ申述候処、直ニ才領人ヲ附出水麓ノ方ヘ差許候儘于今不帰県由、

同日鹿児島県下麓士族（出水麓・谷山麓トテ所〻ニアリ、何レノ麓カ不分）沼田某東京ヨリ帰郷候処、直ニ捕縛シ本県ヘ護送ス（同人ノ吟味厳ニンテ、上下ノ廟ヲ一本抜抔ンテ詰問最中ト云フ）

真宗中教生僧大淵（洲）鐵念外二十名程、島津三郎侯・西郷隆盛両公殺害スルノ企望郵便信書ニテ顕ル、由、大底就縛ノ由、

出水郷高屋敷士族沼口某（野間口兼一）探索人ノ由ニテ就縛、本県ヘ被送ル、由（東京警部ニテ探索ニ出ル人ノ由）、

熊本県七等警部大塚元吉方ニテ、同県十三大区十小区深川村士族医業井上一洞商用ニテ参リ、鹿児島県下山野郷士族川原直喜（小学校副教員）・同郷士族松葉偵蔵右両人ヨリ聞取書写

近頃東京ヨリ警部二十名下リ候由、内壱人ヨリ露顕シ、追〻縛ニ就ヨシ、

鹿児島県下大江（大口カ）郷士族園田謙助被縛捕、

同県下馬越郷士山下竹之助同様風聞ニ付被縛、

本月八日山野郷士離盃、同日勢揃之上洋服ニテ軍器用意シ、同郷仮屋ヘ屯集シ、旅人ハ勿論同県人モ一切通行差留候由、

本県ヨリ報知ノ相図ニ、大炮三発放テハ直ニ出発ノ覚語（悟）、

海陸共ニ同シ、故ニ士族連ハ他行スルニ筒袖股引ワランヂニテ、俄ニ発ルトモ差支無之様意用ヲナシ居ル由、

井上問、熊本鎮台繰出場所ハ何方ト見込候哉、　薩人答、同県ニハ三太郎ノ難坂アリ（三太郎山ハ国境ヲ距六里計リニシテ、津奈木太郎又佐式（敷）太郎・赤松太郎、此間ニ又山坂多シ、何レ茂難坂ナリ）、是ニテ防禦共ニハ相成間敷哉ト人々是ニ注目スト云フ、

同十一日蓑毛氏又々郵便飛行同日景況

午前八時頃出水郷麓士族凡壱万五千人（余）ヨ勢揃、祝炮ヲ放チ直ニ鹿児島ヘ出発ス、但シ一郷ニ付八十八名ツヽ残シ置キ、是ヲ鹿児島出兵ノ報ヲ得テ直ニ陸行スルノ人員トス、此人員凡壱万余ト申コト、尤当十五六日比迄ニハ出発ノ積リノ由、

右ハ蓑毛ノ好知人出水麓士族松島伊太郎三男出発ノ砌、跡方ノコト迄種々依頼、暇乞ナカラノ咄ノ由、

又云、貴県ヨリモ三百名計リ入県ニ相成居、今般　主上ヲ熊本ヘ奉導連之積云々相語リ候由、

内務省御用掛山田武雄トカ申人、蒸気ヨリ鹿児島海軍出張所ニ有之弾薬等受取リニ参リ候処、同人ハ就縛、船ハ引揚ケ、鹿児島之用ニ供スルトノ咄モ有之候、

県官モ同服（慶）ナリト云、金ハ島津従二位・従三位且西郷等之手元金ナリト云、県庁ノ金モ相混スル等モ難計、不足ノ節ハ勿論出金ノ咄モ聞ケリト云、

兵士壱人ノ渡シ金金拾円、弾薬五十発（是ハ大方不足ナラン、併シ多勢ニ付不及ヲハ、先方ノ玉奪ヲ取ルヲ肝トスト諭スノ由）、

郵便信書ヲ米ノ津駅、阿久根駅ニテ開封スルコトアルヨシ、五六日比ヨリ郵便ノ彼地ヨリ来ルコト無シ、唯水俣駅ヨリ送リタル者九荷計リ米ノ津ニ溜有之由、

同十二日午後五時比彼地ヨリ郵便着シ、同駅ヨリノ書面ニ、本日午後ヨリ出立ニ付、信書丈ハ従前之通相通シ可申候ニ付、此段御掛合申候抔ノ文通ナリ、然ルトモ商人ノ被留タル者ハ十三日ノ朝ニ至リテモ、未タ不帰由トノ事、

右之外熊本県等之事ハ少シク見分仕候事モ有之候得共、同県ヘ立石榮三参リ見分ニ不異候ニ付、是等ノコトハ同人担当ノコト故、委シク上申可ニ付、此段奉上申候也、

明治十年二月十六日　　二等巡査園田亨逸回

四ノ三　鹿児島県下動静探索書

一昨九年十二月十七日夜熊本県ニ到リ、同県二等警部長

坂八郎ニ対面致シ、鹿児島県下之景況問合候処、兼テ探偵之者差出、実地ノ様子取調有之趣ニテ二三之探偵書類被差出候間、則一覧候ニ概略左之通、

一同年十一月中旬鹿児島県ノ士族凡二千余人鹿児島ヲ指テ相集ルニ、皆銃刀ヲ持帯シ、私学校ニ入ルアリ、亦市中ニ止宿スル者モ有之趣ナリ、

一其集合スルヤ何等ノ故カ未詳ト雖、西郷大将上京ニ付、供ニ赴行センコトヲ抔ト云々、

一右一旦集合スト雖、方今ハ追々帰郷ノ体ナリト云々、

一右長坂警部之口演ヲ聞ニ、方今鹿児島県下ノ形勢不容易動勢ニ付、官員ノ体ニテ入県致シナハ、却テ書生輩ノ為ニ進退等被相窺、終ニ一身ノ保護スラ差支ベキニ付、平人ノ体ニテ入県可然旨懇々被申聞候、

一同十八日熊本県八ツ代町ニ到リ、同処知人両三輩ニ面シ鹿児島県下ノ景況承合候処、近頃同県士族輩追々八ツ代辺ニ徘徊シ、銃刀求度由ニテ彼是往復等有之、且同県ノ動静不容易趣承候、翌十九日同所ニ滞在アル石州濱田ノ鉄地金商船明照丸（十八反帆）船頭須田某ニ依頼シ、仮ニ同船船主トナリ、即日同処出帆天草島牛深港着船、翌廿日鹿児島県阿久根港ニ到リ、小官ハ右船頭ト倶ニ同所ヨリ陸行致シ、同日川内町ニ到ル（明照丸ハ直ニ鹿児島ヘ赴ク）、此日道中ニテ逢フ処ノ壮士輩凡二拾余名、各銃炮ヲ持、刀ヲ袋ニシタリ、同夜川内ノ知士ニ逢テ、而鹿児島ニ同行センコトヲ依頼ス、知士漸ク肯テ一日ヲ違テ赴ムカンコトヲ約シ、即チ同士ヲ辞ス、翌廿一日彼ノ船頭ト倶ニ鹿児島ニ到ル（下加治木町坂本幸四郎方ニ宿ス）、此時市中往復ノ士或ハ拾名或ハ二拾名、皆銃炮ヲ持、刀剣ヲ袋ニス、其形勢恰モ戦中ニ異ナラサル者ノ如シ、

一翌廿二日同県櫻島居住ノ知人（私学校中ノ者ナリ）訪而之ニ述フルニ、探偵ノ旨ヲ以テス、知人恐懼シテ私学校ノ厳約アルコトヲ語ルト雖モ、小官頻ニ問乞シ、終ニ西郷氏・桐野氏等ノ遠大ノ計ト思敷条件一二ヲ挙ケテ陳ス（西郷氏、桐野氏等云々ハ後条ニ載ス）、

一翌廿三日同所滞在（此時知人曰、足下今探偵ノコト発露セハケチ過失アラントス、故ニ漸ク滞在アル可キ旨ニテ強テ止ムレハナリ）、

一翌廿四日鹿児島帰帆、此日西郷氏ノ新開地見物ノ為メ遊歩ス（開墾地ハ城下ヲ距ルコト約二里、吉野村ノ内字寺山ト云フ所ナリ）、

一同夜鹿児島裁判所詰官員ニ逢テ（常州水戸ノ仁ナリ）、県庁並裁判処等ノ景況ヲ聞クニ、警察官等ノ職務ヲ抛却ス云々、其他様々ノ悲談之アリ、

一同廿五日川内ノ知士（前日同行ヲ依頼シタル一友人ナリ）ニ逢フ、同士曰、鹿児島ノ一有士ニ（一有士ハ桐野氏ナリ）面シ天下ノ形勢如何ヲ問ニ、頗ル泰然トシテ不動ノ公談アリト謂フ（公談ハ左ノ数条ニ載ス）、

一前条二三ノ知士ヨリ伝聞スル処ノ言語皆大同小違ニシテ、能ク不吻合ノ廉無之ニ依リ、合テ以テ左ニ記ス、

一十一月中俄ニ壮年輩数千人、銃器ヲ持チ鹿児島ニ馳集ル者ハ何故ナルヤ、

知士答曰、是ハ西郷大将ノ失言ナルヘシ、何トナレハ一日私学校ノ生徒五六輩大将ニ面シ、方今長州前原等追〻義ヲ唱ヘ兵ヲ挙ク、此時コソ天下ニ忠スル秋ナルヘシト問ハ、則チ然リト答ヘタリトノ噂ナリ、然而唯一言ノ下ニ遠近相通シ、終ニ種〻ノ流言ヲ引出セリ、

一数千ノ壮士集合スルアリ、亦タ散帰スルモノハ某ノ説論ニ依ルモノナルヤ、

答曰、多分桐野氏等ナル可シ、

一方今市街ノ体ヲ見ルニ、銃炮鍛治職ハ昼夜ヲ分タス銃類ノ営膳（繕）、皮細工屋ハラントセト（ママ）等ノ細工ニ付是又昼夜ヲ力ム、之レ何ナル故ヤ、

答曰、是ハ前条ノ勢ニ付銘〻思〻ニ依頼スル者ニシテ、之ヲ制スルヤ最モ固シ云〻、

一旧君并西郷氏・桐野氏・篠原氏亦当県令殿等ノ深意ハ何レニアルヤ、

答曰、是ハ鬼神モ量リ難クト雖モ、想像ヲ以テ詳ニ之ヲ謂ニ、旧君ノ意ハ急ニアリ、西郷以下ノ意ハ緩ニアリ、之各意ノ異ル以所ナリ、

一近頃　皇帝陛下西京御行幸ノ事アリ、之ニ付テハ論ナキヤ、

答曰、幾分欤壮士ノ論アリ、然リト雖モ是ハ全ク青士ノ論ニテ、曾テ鹿児島有士ノ採ルモノニ非ラサル可シ、諺曰、鯛ヲ釣ニ釣竿ナシト謂テ大ニ笑フ、

一鹿児島ニ国家ヲ憂フルノ士アルヤ、果シテ然ラハ大題何等ノ事ヲ唱フルヤ、

答曰アリ、一ハ内治二ハ外患ナリ、之レ則チ西郷氏等ノ最モ遠大ヲ計ル以所ナリ、

一西郷大将等上京ノ意アルヤ、

答曰、近頃他聞スルニ、天機窺トシテ来三月頃上京スト謂フ者アリ、然レトモ信セラレサルコトナリト云〻、

一西郷大将野ヲ耕スニ牛馬ヲ牽キ馬糞ヲ負荷ス、之レ何故ナルヤ、

答曰、当県ハ西僻ニシテ士民生活ニ乏キ故、諸人ノ活ヲ救フカ為メ、農事ヲシテ煽動スル者ト想像ス云々、

一琉球通艦ノ蒸気二艘、此程ヨリ渡海ノコトヲ止メタリト言沙汰アリ、信ナルヤ、

答曰、之レ全ク流言ニシテ信セラレス、

一私学校ノ厳約トハ何等ノコトナルヤ、

答曰、之レ容易ニ語リ難シト雖トモ、大意ハ身ヲ捨テ世ヲ済フノ事ナリト云々、

一此他細事ハ筆紙ニ尽シ難ニ付略ス、

一路傍ノ説并小官前後ノ視察ヲ以テ想像ノ説等左ニ記載ス

一鹿児島県中ハ一種ノ風俗アリテ他ニ異ナル者アリ、爰ニ一旅舎アリ、子行テ泊ス（鉄地笠五駄ヲ持チ、商法ノ為メニ至ル）、家内男子壱人モ居セス、固ヨリ疑アリ、女房ニ問テ曰、主人ハ何国ニアリヤ、答曰、近頃商法ノ為メ肥後筋ニ出タリト云、亦鉄地金ノ売捌ハ分家某来リ懇ナリ、既ニシテ夜半ナリ、子寝枕ニアリ、然ルニ勝手ノ方近隣ノ年若キ女房一両名来リ互ニ密話ス、一婦ノ曰、我夫未タ一紙モ通セス、故ニ心通スト云フ、他婦答曰、弾薬ヲ製スルハ最モ密ニシテ、門外ノ出入ヲ禁スト云フ、依テ未タ一紙モ送ラサルハ此故ナル可シト、傍婦亦曰、我夫モ東京迄御供スルヤ否ヤ、或婦ノ曰、未分、何レ西郷様ノ思ニアルナラント云フ（解曰、此ノ処ハ市来港ト云フ所ニシテ鹿児島ヲ距ル、コト八里ノ田舎ナリ、各夫ノ行役スル処ハ鹿児島私学校辺ナルヘシ、）

右ハ同県ノ俗能ク一ニ帰シ、馬夫牛卒婦女子ニ至ル迄国事ヲ慎ム斯ノ如、纔称ス可キ者アリ、

一鹿児島県ノ風俗ハ漸々心学ノ体ニ類似スルモノアリ、故ニ外面ハ未タ古風ニシテ、内部ハ幾分欵開化ノ徳アリトス、何トナレハ淫逸ヲ制スルコト甚タ厳密ナリ、故ニ芸娼妓ヲ禁止及俳優ノコトヲ制ス、爰ニ大門口ト云フ街アリ、一ノ能芝居ヲ許ス、子行テ一覧スルニ、見物者ノ衆百ヲ以テ算ス、其所為ノ古風ニシテ最モ迂遠ナリ、故ニ是ヲシテ今仮ニ長崎ニ於テ興行スル者アレハ、猶壱人モ之ヲ見ル者ナキヲ保証スヘシ、彼是ヲ以テ参酌スレハ、独一向ヲ重シ他ニ依ラサルノ俗、亦此ニ於テ詳カナリトス、

然ルニ近来真宗ノ僧徒大ニ入県シ、各処ニ出張処ヲ設立シ、仏徳ヲ説テ宗徒ヲ募ルコト甚タ急ナリ、故ニ民亦能聴能知ル、之レ則チ同県ノ勇気ヲ乱ス一端ナラン

カ、

一爰ニ同県下ヲ徘徊スル書生輩ノ吟声ヲ聴聞スルニ、「古ヨリ野獣已ニ尽キ而猶狗烹ル勇略主ニ震フ者ハ身危ク、功蓋天下ハ亡」云々抔ノ語アリ、嗚呼慷慨ノ意ナキヲ保セサルヘケンヤ、

一前陳皆確実ノ証ナシト雖トモ、纔ニ小官ノ想像ニ依レハ、同県ハ頗ル不平輩ノ屯集スル処ニシテ、恰モ甲兵野ニ充チ、謀士亦タ内外ノ機ニ従事ス、果テ形勢一ヒ動ケハ亦タ随テ動クヘシ、然而該地ノ動静ハ形勢ニアリ、亦タ形勢ハ該地ニアルモノヽ如シ、之ニ依テ是ヲ視ハ、朝タニ動クモ夕ニ静スルモ、能ク他人ノ視察スヘカラサルモノアリ、

右ハ探索ノ顛末筆紙ヲ以テ難明了ト雖トモ、概略如斯御座候、以上、

明治十年一月六日　長崎県四等警部飯島矩道㊞

長崎県令北島秀朝殿

追テ、十二月廿八日鹿児島県令帰県ノ後ハ、市中并遠近トモ鎮静ノ体ニテ、鉄炮等所持徘徊致候者更ニ見受不申、依而小官事同月卅一日該地出発帰県仕候儀ニ御座候也、

五　人民動静　高知県

高知県其他探偵之雑誌

明治十年五月卅日愛媛県出張之命ヲ拝シ、仝卅一日午前八時長崎ヲ発シ、諫早ヨリ若津ヲ経テ仝二日午前九時福岡県下山家駅ニ至ル処、突然山口県ニ於テ数百ノ賊徒蜂起、県庁ヲ襲撃シ、県令ヲ始メ数多之警官ヲ殺害スルトノ街説ヲ聞ク、依テ仝所ヨリ急行スルニ道路浮説益甚シ、猶ホ急行之処、仝日午後六時過キ山口県下赤間関ニ着シ、直ニ警察ニ出頭シ該地ノ景況ヲ聞クニ、警部某氏曰ク、此一日巡査二拾余名繰出セシ儘景況更ニ不分明ト、依テ同所ヲ退出シ、愛媛県ニ渡海之便船ヲ尋ヌルニ、是又来ル五日迄便船無之ニ付、徒ラニ滞在シテ時日ヲ費スヨリ、寧ロ山口ニ赴キ実地ヲ探偵セント直ニ仝所ヲ発シ、仝三日午前七時山口ニ着シ、直ニ県庁第四課ニ出頭シ、七等警部波多野中路氏ニ面会シ実地之景況ヲ尋ヌルニ、氏ノ曰ク、去ル三十一日夜、山口県下萩ノ士族町田梅之進ナル者、同志ヲ集メ銃器ヲ携ヘ、百八拾余名ニテ突然萩警察ヲ襲撃シ、仝所江放火ノ後一二ノ民家ヲ襲ヒ、或ハ放火シ或ハ金銭若干ヲ奪取セシ趣、翌一日払暁県庁ニ報アリ、

依テ巡査ヲシテ進撃ノ処、篠浪ニ於テ賊数名ニ出会シ巡査奮戦スルニ、賊銃器ヲ棄テ、川上口遁逃、猶オ進撃シカセガ坂ニテ諸方ヨリ進撃ノ巡査一纒メトナリ、萩地ヘ向ケ進撃ノ途中、一舛カ谷ニテ巨魁町田賊数十ヲ率ユルニ逢フ、依テ巡査抜刀ニテ奮戦ノ央、警部心得十二等出仕秋良貞臣氏ナル者、ピストルニテ巨魁町田ノ面部ニ傷ク、忽チ眩暈シテ地ニ倒ル処、二等巡査某ナル者直ニ飛込ミ、町田カ首級ヲ取ル、其勢ニ恐レ残党悉皆逃走ス、巡査ハ其勢ニ乗シ萩地ニ進撃シテ残党弐拾余名ヲ捕縛スルニ因リ、最早萩地ハ鎮定スト云フ、依テ仝所ヲ退出シ処〻実見スルニ、県庁ノ警備甚タ厳ナリ、県官悉ク銃器ヲ携ヘ県庁ヲ固ム、仝日午前十時頃(隆吉)關口県令県官并ニ巡査都合一小隊ヲ引率シ、萩地鎮撫ノ為山口ヲ発ス、以上ヲ見聞シ、仝日午後三時過山口発シ、仝四日午前十時赤間関帰着シ、事情ヲ本県ニ報知シ該夜ハ仝所ニ泊ス、

仝五日小汽船白水丸出湊之処、運輸局ニ雇ハレ出湊差止メラレ、余ニ渡海之便船ナシ、依テ不得止細キ押切船ヲ雇ヒ、愛媛ニ向ケ出港、

仝六日午前九時赤間関ヲ発シ、仝九日午前六時頃愛媛県下三津ケ浜ニ着港、仝所ヨリ上陸スルニ港口且ツ途中ノ警備尤モ厳ナリ、仝八時松山ニ到リ旧友二三氏ヲ問ヒ、尋テ該地之景況ヲ探偵スルニ、方今該県士族ノ状態ハ一モ懸念スヘキハ無シ、悉ク一家独立ノ士ニシテ、或ハ農ニ帰シ或ハ商ニ帰シ、悉皆家業ニ安ンジ、不平之色且ツ怨言之声更ラニ見聞セズ、加之梶山陸軍少佐新募之巡査千人ヲ率ヒ、宇和島ヲ本営トシ八幡濱ヲ公営トシ、豊日両国接近之海岸ヲ固ム、是ニ於テ人民等大ニ安堵之意ヲ露セリ、然レトモ今ヲ去ルコト四十日前、旧大州藩ニ武田豊城ナル者同志ヲ集メ、銃器弾薬等聊カ買込趣早ク県庁ニ聞ヘ、直ニ巡査ヲシテ之ヲ逮捕セシメ、仝人始外二拾名ヲ捕縛シ、本県ヘ護送ノ上推問スルニ、武田曰ク、固ヨリ方〻之政体ニ不服之廉勝不可言、如何トナレハ宰相独リ天下ノ権ヲ握リ、夥多ノ奸臣之ヲ助ケ、人民ヲ塗炭ニ苦メ猥リニ民権ヲ圧制シ、殆ント日本帝国ヲシテ滅セシムルニ至ル、依テ早ク之ヲ除カズンバ外国之奴トナルコト今日ニ近シ、之ヲ除カントスルトモ吾一人ノ能スル処ニ非ス、之ヲ除ク者ハ独リ西陲ニ西郷アルノミ、彼已ニ兵ヲ挙ゲ已ニ百余日、吾幸ニ同志ヲ集メ西陲ニ走リ、彼ト力ヲ協セ、共君側之悪ク除カント欲シ、故ニ同志ト謀リ器械ヲ集メタルニ因リ、早ク処分ヲ乞フト判然申立

ルニ付、悉皆松山裁判所ニ引渡シ、当時拘留中之由探偵ス、尤モ其余党アル趣ナレトモ、其後更ニ不審之挙動ナキ趣ニ付、該夜ハ同県下魚町二丁目ニ泊ス、

仝十日午前十時頃巡査一名宿処ニ来リ謂テ曰ク、昨夜氏ヨリ宿泊ノ届書ヲ見ルニ、長崎県一等巡査ノ由、県官ヨリ尋度次第有之ヨリ出頭可致段申サレシニ付、仝人同道県庁ニ到リ、応接所暫時相待居ルニ、豈図ンヤ岩村権令(高俊)御出浮ニ相成、長崎県ノ景況御尋ニ預リ、依テ見聞之儘具ニ上申スル処篤キ御言葉ニ預リ、而後愛媛県ノ景況モ具ニ御嘶シ有リ、考フル御嘶之趣悉皆前説ニ同シ、事終テ正午十二時退庁シ、猶オ又旧友ヲ問フニ、氏ノ曰ク、吾レ氏ノ為松山ノ景況ヲ昨日ヨリ探偵スルニ、固陋ノ士族輩是迄典売刀剣ヲ窃ニ求メル者アリ、然レトモ是レ何等ノ所以ヲ知ラスト云フ、依テ退出後旧友一二氏ニ問フニ、果シテ前説ノ如シ、夫レヨリ高知県ノ事情ヲ探偵スレトモ確説不分明、依テ該夜モ亦前宿所ニ泊ス、

仝十一日払暁愛媛県ヲ発シ高知県ニ赴ク、途中松山ヲ去ルコト拾里計ニシテ一ノ茶店ニ休息スルニ、二人ノ商人云フ、高知県ニ於テ兵ヲ挙ゲ他人ノ通行ヲ禁止シ、且ツ諸船ノ入港モ亦タ禁セリ、加之ニ日々ノ練兵殊ニ盛ンナリト、吾之レヲ聞テ且ツ驚キ且ツ怪ミ、夫ヨリ昼夜兼行シテ該県ニ赴ク、

仝十三日午前七時頃高知ニ着スルニ、前説ノ景更ラニ無シ、尤モ市街入口ニ巡査見張処ヲ置キ、行人ヲ点検シ、確証無キ者市街ニ入ルヲ許サズ、海岸ハ警視巡査之ヲ固メ諸船之入港ヲ検シ、是又証無キ者ハ入港ヲ許サズ、其余警視巡査四百余名入込、市中所々ニ見張処ヲ置キ、警備尤モ厳ナリ、依テ旧友ヲ問フニ、旧友悉皆他県ニ住スル趣キニ付、遺憾ニ堪ヘズ、唯芒然トシテ呂里ノ街説浮説ヲ聞ノミ、更ニ確説不分明ニ付徒ラニ該日ヲ暮シ、十四日早朝ヨリ市街ヲ徘徊スル央、幸ニ旧同藩坂本氏ニ面会シ、同道氏ノ宅ニ至リ雑話数時ヲ経、尋テ該県士族之状態且ツ立志社ノ主張スル論ヲ尋ヌルニ、氏曰ク、素ヨリ拙者ハ他県人ト云ヒ、且ツ小臣ノ者タルヲ以テ議論ノ深意ハ悉ク了知セスト雖トモ、目今見聞スル処ヲ言ン、抑モ此説ノ世上ニ起ルヤ已ニ久シ、小臣始ヨリ心ヲ万緒ニクバリ、事物ニ就テ察スルニ、立志社ノ主張スル処ハ民権ヲ振起シ、人民ニ参政ノ権ヲ附与スル論ニシテ、猥リニ暴挙シテ西陲ニ荷担スルニ非ズ、且ツ政府ノ為ニ力ヲ尽スニ非ズ、始ント局外中立ノ如シ、如何ントナレハ板垣

氏社員ニ云ヘルコトアリ、吾レ方今ノ政府ニ力ヲ尽スニ非ス、唯タ天下之人民ニ吾カ義務ヲ尽シ、速ニ民撰議院ヲ興シ、日本帝国ヲシテ早ク開化ノ域ニ進マスノ意ノミ、是ヲ以テ考レハ、暴動擬念ハ少ナシト雖トモ、孰ゝ士族ノ状態見ルニ殺気凛ゝタリ、且ツ方今本社為替ヲ止メ、貸付ノ金穀ハ督責シテ之ヲ取ル、且ツ先般モ県庁エ護郷之兵ヲ編ヲ願ヒタレトモ、一時県官ノ説諭ニヨリ其義中絶シタレトモ、窃ニ儀伍ヲ編ミ居趣キヲ聞知シタリ、之レニ加フルニ当庁ノ如キハ他県人寡ク、立志社ヨリ出ツル者多シ、方今他県人ノ如キハ往ゝ職ヲ辞スル者アリ、小臣モ已ニ辞表ヲ捧タリ、且ツ又当県ニ靖献社アリ、自助社アリ、此党殆ント一万ニ垂ントス、是等ノ説ノ如キハ立志社ト説ヲ異ニシテ、唯タ君側ノ悪ヲ速ニ除クノ説ニシテ、少シク劇烈ナリ、然レトモ是レ全ク外面ハ異ニシ、内面ハ同一ナリ、是等如モ卒尓患フル足ラズト雖トモ、後日必ス患フルコトアラント云フ、依テ該家(夜)ハ坂本氏ノ下宿ニ泊ス、

仝十五日坂本氏ト同道氏ノ知己二三氏ニ面会シ景況ヲ探スルニ、悉皆前説ニ仝シ、尤モ方今立志社ゝ員ノ内、或ハ東京ニ赴キ或ハ西京其他所ゝニ向ケ他行スル者半ニ過ク、然レドモ其行先ヲ詳ニスル者ナシ、其内西京ニ集マル者多シト云フ、氏亦曰フ、先般立志社或ハ靖献社ノ両社政府ニ建白ノ書アリ、後刻必ス其ノ書ヲ見セン、依テ其場ヲ退キ市街ニ出テ、呂里ノ景況且ツ士族ノ状態ヲ見ルニ、立志社党ノ如キハ至テ穏ニシテ、恰モ平民ニ異ナラス、唯靖献社党ノ如キハ之ニ反シ殺気凛ゝタリ、然レトモ全県ノ景況ヲ察スルニ、直ニ暴挙ノ患ハ無之哉ニ察ス、夫レヨリ猶市街ノ景況ヲ探偵シ、午後五時頃同氏ニ帰リ前ノ建白書ノコトヲ待ツニ、午後六時過キ氏知己来リ謂テ曰ク、夫ヨリ種ゝ心ヲ廻ラシ其書ヲ求ムレトモ得ス、漸ク社員ニ逢テ、立志社ヨリ建白ノ箇条ノミヲ得タリト、依テ其書ヲ与エタリ、吾是ヲ取テ別紙ニ写ス、此ニ略ス、該夜ハ市街ノ下宿ニ泊ス、

仝十六日再ヒ坂本氏ニ到リ暇ヲ告テ去ル、午後一時高知県ヲ発シ仝十八日愛媛県帰着スルニ、松山市街ニ於テ阿波自助社ヨリ出兵スルニ付、讃州丸亀其他処ゝニ宿割致セシ街説頻リニ有之、因テ直ニ警察ニ出頭シ、警部某氏ニ面会シ事情ヲ尋ヌルニ、氏ノ曰ク、当所ニテモ其風説ヲ聞クニ付、即刻巡査一名差向クヘク旨申サレシニヨリ、幸ニ該県三等巡査矢野某氏ト同道仝処ニ赴キ、是迄大略

丸龜ヨリ本県ニ電報モセント、両事ヲ兼ネ仝日午後四時松山ヲ発シ、仝廿二日午前十時頃丸龜ニ着シ実地ヲ探偵スルニ、豈計ン哉前説ノ証跡全ク無之シ、依テ該地戸長福田信行ニ面会シ其景況ヲ尋ヌルニ、戸長笑テ曰ク、如斯キ事情ハ当地ニ於テ更ラニ之レ無シ、尤モ此度丸龜分営松山ニ転スルニ依、其節ニ至リ人夫宿割等不都合無之様、区内人民エ予メ達方取計シ事アリ、是等ニヨリ其街説ノ起ルナラント、亦戸長ニ電信局ノ有ル処ヲ尋ヌルニ、戸長亦曰ク、電信ハ先般当分営ニ懸リ唯陸軍ノ用ノミヲ通セシカ、方今器械ノ破損ニ因リ更ニ通信セス、今修覆中之由ト云フ、依テ該夜ハ仝処宿泊之処、幸ニ小汽船ノ下ルニ逢ヒ、直ニ該船ニ乗シ、矢野氏同道仝廿三日午前二時三津ケ浜ニ着、再ヒ松山ニ上陸シ、仝午前九時再ヒ該船ニ乗シ直ニ抜錨、夫ヨリ上ノ関・三田尻・下ノ関ヲ経テ、仝廿五日福岡県博多ニ着シ、仝処ヨリ上陸、仝廿八日午後四時過長崎ニ着ス、

右探偵之手続如此候也、

明治十年七月一日　　藤岡克己㊞

六　人民動静　福岡県

六ノ一

本月廿七日福岡県下ニ於テ、兵器ヲ携エ民家エ放火暴挙之徒有之趣、昨廿八日午後十二時過キ伝聞仕候ニ付、原因虚実等ハ未タ分明ナラス候得共、不取敢探偵トシテ巡査二名福地江出張申付候後、当区区長坂本経懿ヨリ別紙写壱葉差回シ候ニ付、本日午前十一時ヨリ巡査引率濱崎駅エ出張仕、非常取締方着手之上ハ、都合ニ寄リ一時巡査江委任帰区可仕、且福岡県動揺ノ模様ハ、探偵巡査ヨリ報知次第便(敏)速具上可仕候条、先以此段御届仕候也、

唐津警察出張所

明治十年三月廿九日　　八等警部上原寛満㊞

県令北島秀朝殿

六ノ二

昨廿七日濱崎村川上傳助・井上源治・立石彌七之三名人力車買人ノタメ福岡ヘ相越候処、仝廿八日午前三時頃ヨリ出火シ、次第ニ砲声相響キ、夜ノ明ルニ随ヒ刀ヲ帯ヒタル者東西ニ行違ヒ、町々大ニ動揺、家物我(先カ)増ニ取片付、婦女子老若八方ヘ逃出シ、追々出火砲声烈敷、

或ハ鎗ヲ携ヘシモノ有リ、八時頃一名ノ死骸ヲ車力ニ載セ、呉服町博多ニ移リ掛リ之処ノ浜手ヲ通行スルヲ見タリ、十時頃ニ至リ立退キ候条、町々ニ触示シ来ル、博多福岡ニテ五六ケ処一時ニ出火ノ説、而シテ行違中ヲ巡査欵兵隊欵廿四五名一連ニ福岡町ヲ巡行シテ、刀ヲ帯セシ者ヲ見認ニナリ、其刀ヲ取揚ケ旧城ノ如ク拘引ニナリタリ、前文死骸ハ右隊長ナリトノ説、併シ町々ヲ列ヲ与ニテ巡行アルヲ見レハ、右隊ハ強キ事ニ見受ル、

右者川上傳助呼出シ見聞之次第ヲ聞取ノ儘不取敢御報知申上候也、

三月廿八日　濱崎区務所

午後十一時出ス

六ノ三

一征討

人民動静

福岡県

四月六日午後二時福岡県第四課ヨリ

アンカン社ハ賊ニ関係ナシ、

四月九日午後十一時三十分佐賀飯島警部ヨリ

柳川異状ナシ、

三月卅一日午後三時十分佐賀支庁

只今久留米支庁ヨリ左ノ報知アリ、

昨卅日午後ヨリ早良郡金竹村ニ屯集ノ賊攻撃シ、十六人ヲ討取リ、余ハ飯葉村ニ敗走、官兵追撃金竹村ノ嶮ヲ乗リ取リ、今一手ハ那珂郡別所村ヨリ椎葉村ニ入込ミ、直チニ曲リ淵ニ向ケ進撃ノ旨福岡ヨリ報知アリ、亦其後ノ報ニハ、椎葉村ヨリ曲淵ニ及ヒ置シ処、内野村ヨリ別手進撃、曲淵村暴徒打払ヒ、飯葉村追ヒ詰メタリ、

四月一日午前三時四十分佐賀支庁ヨリ

福岡賊徒ノ内リウタマヲ・イトウナミト二名神崎分署エ自首シタリ、依テ取糺セシニ、賊ハ大ニ疲レテ戦ノ勢ナキ由、右二名ハ当監獄エ留置取調中ナリ、

同午前九時十分

福岡ノ官軍三ツ瀬ニ百五十名計リ備陣、今日賊ヲ逐テタボ山ニ進軍ノ由、

四月一日午後十二時十五分佐賀支庁ヨリ報

本日午前一時頃賊三百計リ、中原駅・掃除村二ケ所ニテ支度シ、瓜生野駅エ出テ、別途筑前ノ賊ヲ待合セ久留米ニ向ト、右賊ノ噺アル由、尤手負ノ者六名ブコニ

入レテ引連ル由、

同日同時同報

瓜生野駅ヱ行ク賊ヲ追撃ノ為、久留米ノ巡査六十名当地ノ巡査拾名余、猶又久留米出張ノ台兵二中隊繰出ニ成ル由、

四月三日午後六時十分佐賀報

当支庁ヨリ出シ探偵久留米ヨリ電信ニ、昨日秋月辺迄、(以下空白)

七　熊本県并鹿児島県探偵日誌（十年五月三十日ヨリ　全　六月　日迄）

佐藤一等巡査

今般、鹿児島県賊徒暴動ニ付、為探偵肥後表ヱ出張被命、十年五月三十日崎陽（長崎）ヲ発シ茂木村ヨリ乗船、同三十一日午後四時肥後水俣江口少佐本陣（鍾）（到）ヘ投着、戦地ノ実況ヲ聞ク、

一当肥後表ヘ出張ノ総官軍第三旅団（三浦少将大）、別働隊第二旅団（山田少将人吉口ヘ向フ）、別働隊第三旅団（川路少将出水口ヘ向フ）ヲ以テス、又賊徒総員大約千内外、捕虜口供、確説ナランカ、巨細分ラス、

一昨三十日、賊「矢筈嶽」（麓地ニアル高山ナリ）ニ胸壁ヲ築キ屯集スルヲ、別働第三旅団ヲ以テ進撃、賊敗績墨ヲ捨テ、散乱ス、因テ官軍墨ヲ築キ固守ス、

一諸口ノ官軍日々勢頗ル盛ナリト、因テ午後六時水俣ヲ発シ（里程五リ）、午後九時佐敷町ニ至リテ本県ヘ電報ス、

一此日同処白坂利平方ニ泊ス、

一佐敷町近傍花岡村住上村左原并ニ宇土町住藤井壽吉外十四名、

右者共旧二月三十日魚類商法ノ為メ人吉町ヘ行ヤ否ヤ、直チニ賊徒ニ捕縛セラレシ処、官軍人吉ニ達スルノ際ニ乗シ逃帰ス、故ニ右ノ内五六名ヲ旅宿ニ招キ、事情尋問シ、彼等申立左ニ記載ス、

一旧四月上旬頃ニハ人吉町賊兵大約五百名（銃器ハヱンビル）、然ル処鹿児島城下ヘ官軍上陸ト聞キ、同所ニ百名ヲ残シ悉ク鹿児島方ヘ退ク、其後都ノ城ノ兵凡八十名尚繰込タリ（和銃ヲ所持ス）、

一玉弾尤モ乏ク、玉ハ網ノユラヲ買入、弾薬ハ硝石ニテ、鹿児島方ヨリ運送ス、目今「ヲコバ（大畑）」ニ於テ製造スル由、

一人吉士族ハ総テ賊徒ニ党与スル由、

一賊兵ハ肩ニ赤白ノ印ヲ施シ、白印ハ精兵ニシテ戦闘ニ臨ムヤ毎ニ勝利アリ、赤印ハ弱兵ニテ毎ニ潰走ス、故ニ官軍赤印ト対スルヤ勢ヒ頗ル烈シク、進ムコトモ亦随テ強シト、昨今ニ至リ赤白ノ印ヲ交換シタル由也、

右左原申立如斯、

追加、人吉山田少将ヨリ水俣川路少将ヘ報左ノ如シ、

一昨朝「テルカワ山」攻撃、一時苦戦ニ候得共、午前九時攻落シ、平垣(坦)ノ地迄進入致候、我カ哨兵線ヨリ僅カ十丁余ニテ人吉城ニ達スヘク候得共、何分難路長駆シテ兵士疲労、直入致難クニ付「モスベノ山」ニテ固守、左右翼ノ進入ヲ待テ夕景ヨリ残兵次第ニ増加シ、懸軍孤立ノ勢ナリ、

五月三十一日

一昨日来連戦諸兵勇奮、今日午前九時人吉城ヲ落シ候、地形宜シカラス、諸兵疲労甚シク、玖麻川ヲ界トシ、今夜ハ厳守スル積リナリ、此旨相報ス、

六月一日　　山田少将

川路少将殿

六月二日、通軍(運カ)会社長会フ、長(社長)曰、

一上古羽(佐敷ヨリ東南五リ)之要害ニヨリ、賊徒胸壁ヲ築キ固守スル由、

一客月廿九日ソヽ木村(佐敷ヨリ以東五リ)ニ賊徒屯集スルヲ、官軍進撃賊徒応戦ス、官軍苦戦退クニ道ヲ失ス、高サ二十間余ノ滝ヨリ落チ、或ハ即死シ或ハ傷キ、死傷共二十名余アリシ由、

一此日湯浦郡字長崎ニ於テ、賊徒九十名余降伏ス、

一午後一時仝処ヲ発シ湯治・津奈木・歌坂ノ三高山ヲ経過シテ、水俣江口少佐本陣ヘ投着、別段異状ナシ、仝処八番地桑原一布方止宿ス、

六月三日、上古羽并ニ大關山賊巣窟要害堅固ノ地ナリシカ、陸軍第二旅団(三浦少将)ヲ以テ進撃、暫時激闘、賊支持スル能ハス悉ク塁ヲ捨テ潰走ス、故ニ数十塁ヲ乗取リ総テ官軍ノ地トナル、

一人吉口モ一昨一日、別働第二旅団(山田少将)ヲ以テ進撃ス、賊徒頻リニ防戦数刻、官兵勇奮激射ス、遂ニ支ユルコト能ハス、賊徒悉ク人吉城下并ニ大橋ヲ火シテ潰走ス、則人吉城下モ亦総テ官軍ノ地トナル、

一六月四日、午前十時江口少佐同行水俣ヲ発シ、金比羅・クモリ・春坂等諸山ヲ経過、寶山絶頂ニ至ル、賊ハ仁

王木山（宝ノ山ト相対ス）ノ絶頂ニ胸壁ヲ築キ、距離凡ソ十丁余、東西奔走スルヲ見、稍〻アリテ発砲スルコト数度ニ止メ、弾丸頭上ヲ通ル、官軍此ニ塁ヲ築キ固守ス、賊ノ襲撃ヲ警戒ス、稍〻日没ニ至リ、互ニ篝火ス、此夜樹陰ニ泊ス、賊徒等敢テ襲来セス、翌天明ヲ待テ水俣ヘ帰宿ス、

一六月五日、官軍巧（地名）ミ通ショリ鬼嶽ヘ進撃、午前四時頃開戦、互ニ激射数刻、賊徒少シク屈撓ノ色アリ、官軍奮テ進ム、彼防キ得ス、鬼ケ嶽ヲ引薩地ヘ退コト壱里余、官軍勢ヒニ乗シ尚追撃ス、砲二門ヲ分捕リ賊四名ヲ虜ニス、然ルニ午後四時頃ニ至リ、豈計ランヤ賊鬼嶽ノ西南ヨリ突然襲来横撃ス、官兵防戦数刻ニ及フト雖モ賊敢テ屈セス、故ヲ以テ官兵鬼嶽ヲ引揚ケ、元ノ巧ミ通シ迄退キ、防禦ノ策ヲ設ク、賊亦鬼嶽ニ来リ、互ニ激戦、徹夜止マス、

一六月六日、昨日ヨリ鬼嶽ノ連戦、此日午前六時戦止ム、官軍死傷二十一名、内三名即死、賊ノ死傷多キ由、詳細明瞭ナラス、

一午前八時水俣ヲ発シ佐敷ヘ着ス、仝所有本平九郎方ヘ泊ス、

一六月七日、午後一時仝処ヲ発シ、仝十時頃人吉ノ内湯本村ヘ着、川端武八方ヘ泊ス、

一六月八日、午前九時頃仝処ヲ発シ、人吉町山田少将本陣ヘ至リテ、令公ノ書翰ヲ少将ニ呈ス、則チ少尉馬場正雄并ニ参謀幕僚井上恒之助来会シテ曰ク、本月一日午前九時当処ヲ陥ルト、

一目今当隊線度右翼ハ高岡ヨリス、左翼ハ岩野ヨリスト、

一賊徒降伏スル者多ク、本月三日ヨリ本日迄殆ト六百名ニ垂タリ、内三百名当人吉士族、残員ハ鹿児島県下都ノ城・佐土原等ノ士族ナリ、

一賊兵隊号、鳳翼隊・雷撃隊・龍口隊・行進隊（以上私学校徒ノ由）・常山隊・破竹隊等ト号ス由也、

一人吉士族奥村郷右衛門并ニ草光某、此者賊徒ノ会計部ニテ金子二万円所持降伏シタリ、

一降伏賊徒ノ内ニテ左ノ三名口供ヲ得、写ス、

副総長　大道治成

参謀兼監軍　瀧川俊蔵

参謀　東九郎次

一本年二月ノ初、鹿児島県ニ於テ犯憲ノ大事ヲ企タル刺客捕獲ノ処、該犯ノ口供仝ク在朝大臣二名ノ使タル処

ニ係ル、就テハ容易ナラサル事変、実ニ国家ノ危急、臣子ノ身トシテ傍観黙止スルニ忍ビス、因テ有志ノ士ト同心合力相共ニ禁闕ヲ守護シ奉リ、上ハ国恩ノ万一ヲ報ヒ、下ハ臣子ノ義務ヲ尽サント欲ス、本県ニ至ルノ際薩肥ノ兵ニ随従シ、終ニ官軍ニ抗シ、義兵ト相心得罷在候処、其後御布達ノ趣キ奉敬承、初メテ薩肥ノ不義ナルヲ知リ、戦慄恐懼罷在候得共、降伏スルノ機会ヲ得ス、今日ニ立至リ奉恐入候、依之自訴仕候、此儀相違不申上候也、

但金子并兵器等数多処持シタレトモ之ヲ略ス、

明治十年五月五日

一午後四時頃本陣ヲ発シ、午後十時告村ニ来リ泊ス、

一六月九日、告村ヲ発シ佐敷町ヘ着シ、本県ヘ報告ス、

一広島鎮台軍曹藤木某ニ会フテ聞ク、鬼嶽等賊塁ヲ陥ルト、

一六月十日、佐敷町ヲ発シ、水俣江口少佐本陣ヘ着ス、昨今ノ戦況ヲ聞ク、

一本月七日、陸軍第三旅団并ニ別働三旅団警視隊ナリヲ以テ、賊ノ巣窟鬼ケ嶽并ニ近傍ノ諸山ヘ向ケ大進撃ス、賊徒暫時応戦防禦スト雖モ、彼寡我衆支ヘ得ス、鬼ケ嶽并近傍諸山全敗シテ悉ク大口方ヘ引退タリ、此時賊五名ヲ虜ニス、砲二門其他弾薬等分捕リ多シ、

一六月十一日、鹿児島県下出水麓ニ賊屯集スル由ニ付、午前三時ヨリ警視隊進入、此日烈風暴雨ニシテ賊徒等モ高枕安臥ス、故ニ官兵窃ニ賊塁ノ側ニ進ミ喊聲ヲ隔ノコト五六間、突然射撃ス、賊大ニ狼狽ス、一時防戦為スト雖モ、官兵正面左右ヨリ奮進激射スレハ、遂ニ禦キ得ス、全敗シテ武本・紫尾山等ヘ逃走ス、此地悉ク官軍ノ地トナル、于時賊死傷多シ、詳ナラス、三十二名ヲ虜ニス、官軍死傷十二名、内一名即死、分捕和銃凡百挺、刀鎗・長刀等殆ト二百ニ近、実ニ愉快ノ戦闘ナリ、

一六月十二日、全処滞在中、熊本籠城東京巡査高岡正直ニ会、籠城中賊ヨリ矢文ヲ得、写ス、

一今般政府妄リニ暗殺ヲ計リ、自ラ国憲ヲ犯スノ罪有之、尋問ノ為メ西郷大将外二名帥師ス此ニ至ル、然ル処当県鎮台名義ヲ弁セス、城ヲ閉シテ迎拒キ、人民ヲ妨害ス、其罪我衆甚憤怒シ、将ニ日ヲ刻シ城中ヲ鏖ニセントス、然レトモ曚昧脅徒等其情憫ムヘキニアリ、諸ミ前非ヲ悔ヒ兵器ヲ捨テ来脈(附)スル者ハ必ス其罪ヲ問ハス、且山鹿・高瀬諸道ノ東軍我輩之ヲ撃破シ、各県義兵ノ

起ルコト蜂巣ヲ破ルカ如シ、然ルニ公等猶孤城ヲ守リ粮竭キ、今ニ及テ向背ヲ決セヨ、

十年三月十一日　　岡田長四郎
　　中島尚雄

谷少将宛

一六月十三日、陸軍第三旅団ヲ以テ鹿児島県下山野・朝照山并近傍ノ諸山ニ向ケ進軍、警視隊ヲ以応援ニ充テ、午前八時官軍進撃朝照山ニ於テ開戦、僅ニ三十分ニシテ賊忽チ潰走ス、是ヨリ先キ白金山等ノ賊モ一時ニ全敗シ、数十ノ塁ヲ捨テ大口方ヘ退ク、官軍北兵ヲ追撃ス、賊徒河ヲ渡リ逃走スルノ際官軍奮進連射ス、賊斃ルヽヤ其数ヲ知ラス、然ルニ警視隊ヤ騎虎破竹ノ勢ヒ勇奮ニ過キ、流ヲ乱テ攻撃スルノ際、賊迂回シテ横撃ス、官兵数名斃ル、苦戦シテ悉ク引揚タリ、午後四時戦止ム、警視隊死傷共十九名、賊死傷多シ、十二名ヲ虜ニス、銃器等分捕アリ、

一人吉口モ此日進撃アリタレトモ、実況詳カナラス、

一六月十四日、本県ヘ電報ヲ以テ進退伺ハント欲シ、仝処ノ電信局ニ至ル、線損シ不通、報シ難ク、仝十五日午前水俣ヲ発シ、午後三時佐敷町ヘ至ル、進退ヲ伺ハント欲シ適〻仝処電信局ニ至ル処、昨十三日廃局ノ由ニテ其儀ナラス、故ニ翌十六日ノ天明ヲ待テ直ニ仝処ヲ発シ乗船、午後八時八代駅ニ投着、電報ヲ以テ進退相伺、翌十七日午前十時迄指揮相待ト雖モ報ナキヲ以テ、金力ハ乏ク依然トシテ滞泊シカタシ、直ニ仝処ヲ発シ宇土住吉ヨリ乗船、翌十八日午後一時島原港ニ着、直ニ仝処ヲ発、午後十二時愛津ノ駅ニ投泊ス、翌十九日午前七時仝処出発、午後四時本署ニ帰着ス、

右之通探偵仕候也、

七月　　一等巡査佐藤秀夫

八　鹿児島戦地探偵日誌 十年六月廿日ヨリ 同 七月廿九日迄

佐藤一等巡査

六月廿日、尚戦地ヘ出張被命、汽船日賓丸ヲ以テ彼地ヘ航海セント欲シ、午後六時波戸場ニ至ル、豈計ランヤ同船発シテ浪ノ平ノ浦手ニ至ル、頻リニ大声ヲ以テ呼フト雖モ遂ニ応セス、直ニ茂木村ニ駈至ル、急ニ小舟ヲ雇ヒ出帆セントス、是又暴風航スル能ハス、暫ク時ヲ空シクス、稍〻平波ヲ待テ出帆ス、行クコト殆ント壱里余ニシテ尚逆風烈シク、将ニ舟覆ラントス、于

時酔テ吐スルコト数度、故ニ苦痛シテ航海センヨリ寧ロ陸行センニハ若カスト、舟ヲ立濱ニ漕付、上陸シテ矢上ノ駅ニ至リ乗馬、徹夜シテ翌廿二日島原港ニ投着、同処ヨリ乗船、午後十二時肥後小島ニ着ス、

六月廿三日、午前一時小島ヲ発足、加々見駅ニ於テ北村三等巡査ニ面会、直ニ分袂シテ八代ヲ経、日奈久ヨリ乗船ス、

追加、此日鹿児島県下千代(川内)ノ賊ヲ陥タリ、巨細ハ江口隊戦闘表ニ記ス、

仝廿四日、午後六時水俣ヘ着ス、戸長詰処ニ至ル、戦地ノ実況且警視隊本陣ヲ問フ、戸長曰、大口ハ過ル廿日台兵ヲ以陥ル、又千代ハ警視隊ヲ以テ昨廿三日陥ル、悉ク官軍地トナリタリ、自分儀モ本日大口ヨリ帰宿スト、又警視隊本陣ハ鹿児島県下ヘ移転アリト、于時午後八時ナリ、故ニ此地ヘ一泊ス、

追加、

一此日警視隊本陣ハ宮ノ城ニアリ(水俣ヨリ十三リ、鹿児島ヨリ十二三リ)、鹿(鹿児島十里位宮ノ城ニリ)ヨリ警視隊進撃、賊徒敗レテ鹿児島方ヘ退ク、官兵漸次進入、佩山(はえんやま)ニ至ル、此ニ於テ賊徒大ニ防禦激射ス、官兵モ亦応シ殊死シテ進撃ス、賊遂ニ支ヘ得ス左右ノ山中ヘ潰走スルヲ以テ、第五大隊先鋒郡山ヲ陥レ、午後十二時頃鹿児島城下ニ達ス、此ニ於テ初テ仝処ノ囲ミモ悉ク解ケ、総官軍ノ喜悦幾許ナランカ、

但江口隊ハ戦跡警備ノ為メ、翌未明直ニ宮ノ城ニ復陣ス、

一仝廿五日、午前八時水俣ヲ発シ、午後六時鹿児島県下出水麓ニ投着、鶴山某宅ヘ一泊ス、

此地ニ警視分署設立アリ、警部井上一貫巡(香脱カ)六十五名出張ス、

一仝廿六日、早朝右分署ニ至リ警視隊ノ本陣相尋ネシ処、該本陣ハ宮ノ城ニ転スト、故ニ仝処ヲ発シ紫尾山ノ麓ニ至ル、昨日来大雨ニシテ洪水、舟筏等モナク渡ル能ハス、空シク又出水ニ来リ泊ス、

追加、此日江口少佐本陣宮ノ城ヨリ入來(宮ノ城ヨリ二里)ヘ移転ニ付、少佐狙撃組十二名ヲ引率、長野原(宮ノ城入来ノ中央ニアル)ニ至ルノ際、賊徒路傍ノ茂林ニ潜伏シ(凡一小隊)、少佐ノ来ルヲ待テ一時ニ連射ス、軍夫ニ中ル故ニ、狙撃組ヲ以テ防禦激射ス、幸ニ賊ノ小隊長ヲ斃ス、残賊悉ク逐退タリト、

一仝廿七日、暴雨洪水ニテ、此地ニ滞泊スルコト二日、

該地事情ヲ見聞スルニ、該地士族ハ私学校徒ハ僅カナリシカ、近頃ニ至リ邊見十郎太来リ、強迫シテ六小隊一小隊百名ノ兵ヲ募ル、大隊長ハ伊藤助則(祐徳)、小隊長ハ小田原用助外五名ナリ、併シ隊長伊藤ヲ初メ悉ク降伏ス、

一仝廿八日、午前七時仝処ヲ発シ紫尾山(此山ノ奇哉、登リ四里下リ三里ノ深山、然ルニ中央ニ至ルヤ木葉ニ数千蛭棲ミ、人馬通行スレハ落チテ人血ヲ吸フ、実ニ嶮岨患難ノ地ナリ)ヲ経過テ、午後八時宮ノ城ニ投着、此地ニ一泊ス、

一仝廿九日、此地ニ別働三旅団糧食課アリ、因テ該課ニ至リ江口少佐本陣ヲ聞ク、該本陣ハ、昨日入來ニ転スト、因テ午前八時仝処ヲ既ニ発セントスルノ際、幸ニシテ少佐ニ逢フ、少佐曰ク、過ル廿四日、一応鹿児島ニ達シ、本日ハ該近傍警備ノ為メ此地ニ仮本陣ヲ設クト、故ニ本陣ニ泊ス、

一此日降伏スル者六名アリ、

一此日「シウリ」ヘ賊胸壁ヲ築キ、屯在スル由、

一仝三十日、此日大村宮ノ城ヨリ三リ江賊屯集スル報知アリ、故ニ少佐諸兵士引率進撃ノ積リニテ出張ス、大村ニ到ルヤ賊一名モ屯在セス、因テ本陣ヲ該処ニ確定ス、此日旅宿ヲ求ムレトモ更ニ無之、不得止該陣ニ泊ス、

一此日川路少将ハ四番大隊ヲ引率帰京セラレタリ、

一此日鹿児島城下下町突然火起リ焼失シタリ、

一此日蒲生近傍ニ於テ戦闘アリシ由、砲声聞ク、巨細分ラス、

一七月一日、午前八時ヨリ津川副官諸兵士引率長野(永野)大村ヨリ三里ヘ進軍、賊ハ「シウリ越」ヘ屯集シタレトモ、戦ハスシテ退キタル由、

一山鹿(山ケ野)ノ金山・高塚越ヘ、賊塁ヲ堅固ニシ屯集スル由、

一宮ノ城字船木村平民内門彌之助ナル者、江口少佐本陣ニ来テ曰、今日賊徒一名私宅ヘ来リ、明日山崎迄該村ヨリ夫卒二十名出ス可ク、若シ出夫セサレハ、当船木村悉ク焼払フ可キ旨申聞ケ帰リタリト、因テ少佐直ニ兵士四小隊率ヒ、右彌之助ヲ案内者トシテ山崎村ヘ進軍スレトモ一名ノ賊モ屯在セス、空フシテ尚大村ヘ帰陣ス、

但山崎村人民ニ問フニ、賊徒二三日前一小隊許リ通行シタル由、

一七月二日、仝処ヘ滞陣、此日別府新助(晋介)加籠ニ乗シ、千余ノ兵士ヲ引率シ生蒲(昌)谷江屯在セショシ、

一七月三日、仝処ヘ滞在、加治木方ニ当リテ焼払ト察セラル、煙天ヲ焦ス、

一佐志士族旧戸長林彦八郎、此者ハ賊徒ニ与ミシ、田原・木留辺ヘモ出兵シタル者ニテ、江口本陣ヘ降伏ス、申立左ニ記載ス、

一賊徒大隊長ノ姓名左ノ如シ（曩動初メ出兵ノタル私学校派ハ大隊ノ長ナリ）

一一番大隊長邊見十郎太（旧区長在勤）、次ヲ別府九郎（新助ノ舎兄ナリ）、次別府新助（晋介）（是モ旧区長在勤）、次野村牛助（忍介）、次高野収一、次喜（貴）島清二、次長崎直五郎・酒匂軍助、次相良喜右衛門、以上八名也、

一蒲生士族多ク肥後国田浦ノ駅ニ於テ降伏ス、然ルニ本月廿四日邊見十郎太蒲生ニ来リ、右降伏シタル者ノ妻子等九十名ヲ捕縛シ、賊本陣ヘ拘引セシ由、

林ノ申立概略如斯、

一七月四日、少佐本陣大村ヨリ蒲生ニ移転ス、該地ノ士族悉ク出兵ス、併ン降伏スル者多シ、

一七月五日、少佐本陣蒲生ヨリ邊川ニ移転ニ付、午前五時同処ヲ発シ、山田郷ヲ経過スルノ際、以東ニ当リ砲声盛ンニ聞ユ、國分辺ノ戦争ナリシ由、午後四時邊川ニ投着ス、

一此日、清水・カツ坂并ニ新川ニ沿フテ賊胸壁ヲ築キ固守スル由、

一七月六日、本県報道セント欲シ、午後一時ヨリ鹿児島ヘ向ケ出発、加治木ニ至ル、此地悉ク焼失之跡アリ、本月三日此処ニ於テ戦争アリシ由、直ニ仝処ヲ発シ、重富ヲ経テ鹿児島新築地ニ至テ泊ス、

仝七日、仝処ヘ滞在、該地事情左ノ如シ、

県庁・裁判処・警視出張処・陸海軍等本陣ノ設ケアリ、市街人民等帰宿、商業ヲ為シ大繁昌、島津久光公ハ櫻島ニ難ヲ避ケ六百名余ノ衛士アリ、

仝八日、鹿児島ヲ発シ新覺寺（心岳寺）村過ルノ際、以東向地ニ砲声盛ニ耳ヲ貫キ、國分・小村ノ戦闘ニテ人家焼失ト見エ、煙天ヲ焦シタルナリ、加治木ニ至テ日既ニ没ス、此地ニモ県庁出張処ヲ設ケ専ラ救恤ニ尽力ス、仝処ヲ発シ、午後十二時旧大隅地曽於郡江口少佐本陣ヘ投宿ス、

此日踊（牧園）ニ於テモ開戦、賊ハ霧島山ノ麓ヨリシ、官軍ハ蹄ノ麓ヨリス、巨細分ラス、遂ニ賊敗走シタリ、

仝九日、仝処近傍ノ山野ニ於テ開戦アリ、此戦タルヤ別働三旅団上田隊進撃ス、暫時砲戦、賊少ク屈撓ノ色アルヲ以テ官兵激射ス、賊引退ク、勢ヒニ乗シ我進ム、彼等左右ニ回リ攻撃ス、官兵一時苦戦ノ際応援スルニ、

多数人ヲ以テス、尚又賊ヲ回リテ攻撃ス、挾レテ賊大ニ狼狽、苦戦潰走シ、而シテ戦止ム、于時官兵死傷共三十名、賊死体五十余アリタリ、

仝十日、

元鹿児島県西田町産

田中勇八

右之者元西郷私学校小使ナリシカ、今般騒擾ニ付テ、篠原・桐野ノ属員トシテ、肥後田原坂・木留等ニモ出張シタル者ニテ、一昨八日踊戦争ノ際ニ乗シ逃来リ、本日江口本陣ヘ自首ス、因テ彼者ヲ旅宿ニ招キ賊徒ノ事情ヲ尋問シ、彼申立ノ儘左ニ記載ス、

一本月二月(年カ)ノ初メ出兵、私学校徒八大隊（一小隊二百名、一大隊二千名、総員一万六千人也）ナリシカ、戦死手負六大隊モアランカ、残徒二大隊位カ、目今行進隊ノ符号ヲ以ス、

一賊徒銃器尤モ乏シ、三分一ハ銃器ヲ持タス、唯帯刀ノミニテ抜刀隊ト号ス、併シ戦闘ニ臨ムヤ此兵毎ニ戦ハスシテ逃走スル由、故ニ目今ハ諸兵士抜刀隊ヲ指シテ逃ケ隊ト号スル由、

一賊徒軍配ヲ為スヤ、毎ニ総本営一ケ処ヲ設ケ、西郷是ニ居ル、出張本営ヲ二ケ処設ケ、桐野・篠原・村田等之ニ居ル、然ルニ現今ハ総本営ヘ桐野列一統之ニ引揚ケ居リ軍議ヲ為ス由、目今出張本営長ハ中島立彦(健彦)旧大尉ナリ・相良五世(旧大尉)、副長喜島伊太郎(旧少佐ノ由)・松本龜五郎ナリシ由ニテ、百事指揮ヲ為ス、

一西郷隆盛ハ当時都ノ城ニ居リ、精兵百五十名（此兵未タ一戦モナサス、唯西郷ヲ護衛スルノミ、銃器ハ総テ七錬(連)銃ヲ処持ス）ヲ以テ護衛シ、味方ト雖モ輒ク面会セス、村田新八百般ノ軍事ヲ着手シ指揮ヲ為ス由、

一官兵ヲ生擒タル者凡四十名モアランカ、夫卒或ハ伍長・軍曹等ニテ、使役ヲ為サシムル由、生擒殺モ数十名アリ、

一現今賊徒草鞋等モ乏レナク、兵卒悉ク縄ヲ以テ足ヲ巻キ居ル由、

一弾薬製造長仁良(仁礼)半八ナル者ナリ、

一植木ニ於テ官軍ノ銃器(針打銃ナリ)二百挺分捕セシヲ、当時ハ行進隊(私学校徒ナリ)七番小隊ニ用ユル由、

一鹿児島近傍製鉄処浦手ノ山中ニ、賊徒等大砲二門埋メアリト、故ニ江口隊ニテ掘出シ、全ク大砲二門ヲ得タリ、

賊徒巨魁等戦死左ノ如シ、

田代五郎・小玉八ノ進（見）・淵部彌一・武郷兵衛・松永某・西郷小平（兵衛）・永山久清・村田某（是村田新八ノ嫡子也、肥後国鳥ノ巣ニ於テ戦死ス）・桐野某（桐野利秋舎弟、病死ス）・西郷某（西郷隆盛嫡子也、熊本ニ於テ銃創ニテ股ヨリ切タリ）其他数多ナレトモ概略如斯、

追テ篠原ハ肥後国木留ニ於テ戦死ス、

一七月十一日、江口本陣松尾ニ転スル筈ニテ、少佐一大隊ヲ率ヒ河原村ニ至レハ、賊徒松尾ノ高岳ニ胸壁ヲ築キ居ル、故ニ避ケテ木原村ニ移転スルナリ、

一午前六時、当曽於郡ヲ発シ、清水・川原ニ至ルノ際、賊徒松尾山ニ胸壁ヲ築キ奔走スルヲ見ル、此地ヲ過テ木原村ノ原野ニ至ルノ際、陸軍第四旅団右松尾山ヘ進撃ス、互ニ砲戦アリ（迂生戦場ヲ距ルコト谷ヲ隔テ丁余、弾丸屢〻来ル、故ニ樹陰ニ匍匐シ実戦ヲ望見ス）、此役ヤ稍〻戦フ中、賊徒屈撓ノ色アルヲ以テ戦ヲ後見シ、午後五時木原村ヘ着ス、

右戦況追テ聞クニ、賊大敗走シ海岸ニ走出ツ、然ルニ軍艦ヨリ頻ニ発砲シ、官兵大ニ勝利ヲ得タリト也、

一七月十二日、此日赤坂ニ於テ開戦（赤坂ハ都ノ城ヨリ二リ七合ナリ）、此役ヤ上田隊ノ三番・七番両小隊哨兵之持場ニ、賊徒大砲二門引来リ盛ニ交発ス、官兵殊死シテ禦戦スルノ際、江口隊ヨリモ二小隊ヲ繰出シ、併テ奮進激射ス、暫時ニシテ賊敗走ス、故ニ官兵線ヲ進メテ厳守ス（右赤坂ノ高丘ニ登レハ都ノ城ヲ眼下ニ見ル）、

一此日芋迫ニ於テ開戦、四旅団ヲ以テ進撃、時ヲ移サス賊逃走シタリシ由、

一仝十三日、此日江口少佐仝行哨兵線ヲ巡行ス、休戦ナリ、

一仝十四日、当木原村ヘ滞泊スルコト三日、此地ヤ極辺隅ニシテ戸数十三戸、此ニ官兵来ルコト凡二千余モアランカ、因テ家屋ニ泊スルコト能ハス、樹陰ニ泊スルコト三夜也、実ニ困却ス、併シ是ゾ戦場武士ノ常ナランカト思慮ス、

追加、此日島津久光公モ櫻島ヘ難ヲ避ケラレシ処、旧邸ヘ帰ラレタリ、

一仝十五日、本県ニ報告セント欲シ便ヲ求レトモ得ス、故ニ少佐ト分決シ、鹿児島ヘ向ケ午後一時出発シ、午後八時國分ニ来泊ス、

一仝十六日、國分ヲ発シ野口・加治木・重佐（帖）・重富等ヲ経テ、午後八時鹿児島城下ヘ投着ス、然ルニ如何ナル

訳ニヤ、少ク脚気ヲ生、水気胸ニ登リ、一時苦痛ス、新築地町江口某宅泊ス、

一仝十七日、仝処別働三旅団本部参謀課ヘ出頭ス、檜垣少佐・綿抜(貫)中佐ヘ面会スレトモ別段異状ナシ、然ルニ辻生脚気症ニテ少佐ヘ依頼シ旅団病院ノ診察ヲ得、薬剤ヲ用ユ、此ニ滞泊スルコト四日、

一仝廿一日、病症稍〻平癒ノ期至ル、故ニ尚旅団参謀課出頭、檜垣少佐ニ面会ス、戦地実況尋ヌレトモ別段異状ナシ、因テ少佐ト分袂シ山田少将本陣ヘ向ケ出発ス、加治木ニ至ル、日既ニ没ス、未タ脚気清癒ニ至ラサルヲ以テ足痛甚シク、故ニ仝処小枝傳太郎方ヘ泊ス、電報ヲ以テ進退ヲ伺ヒ、翌廿二日迄指揮報相待ツト雖モ得ス、故ニ仝廿三日山田少将本陣ヘ向ケ出発シ、横川ニ来リテ電信局ニ至リ、山田少将在陣相尋ヌレトモ小林、飯野辺欤、実地分ラス、然ル処幸ニ本署ヨリノ指揮報ヲ得タリ、依テ直ニ仝処ヲ発シ、午後八時栗野ニ至ル、一泊ス、仝廿四日仝処ヲ発シ、午後七時玖麻ノ人吉ニ来リ泊、仝廿五日仝処ヲ発シ八代ノ駅ニ来ル、泊ス、此ニ初メテ蚊帳ニ入リテ安臥ス、仝廿五日松橋ニ来リ泊ス、仝廿六日仝処ヲ発シ小島ヨリ乗船、翌廿七日午前八時島原港ニ投着ス、直チニ仝処ヲ発シ直喜ニ一泊、仝廿九日仝処ヲ発シ午後四時頃帰署ス、

西南之役懲役人質問

懲役人質問　第一

明治十三年三月二日、岡谷繁實・木下眞弘市ケ谷監獄署内ニ於テ、懲役人(旧鹿児島県二等警部)野村忍介・長倉譲(寄兵隊大隊長)ヘ質問ノ条〻、

問、西郷隆盛高山(こうやま)ヨリ鹿児島ヘ帰ルハ何日ナルヤ、

答野村、一月三十日、三十一日弾薬掠奪ノ事アリテ、三四日ヲ経帰リタリ、長倉大山綱良(鹿児島県令)ヨリ自分宮崎支庁ニ在ルニ、二月四日付ノ書状来ル、其文中已ニ西郷ハ鹿児島ニ帰リタル趣ナリ、然レハ四日ニ帰リタルナリ、

問、弾薬掠奪ハ、中原(猶雄)等捕縛ノ前ニアルハ何ソヤ、

答二人、一月初比ヨリ警視局奉職ノ者窃ニ帰県シ、何事カ為ス事アルトノ風聞アリ、高山辺(肝属郡)ニモ其類一人アリ、野村等相議シ、西郷ニ知レサル様保護ノコトヲ取計レリ、尤モ西郷ニハ其事ヲ知ラス、右ノ疑アリテ未

タ確証ハ得ス、其内赤龍丸弾薬積込ミニ来ル故、生徒等掠奪ニ到ルナリ、掠奪ノ主謀ハ汾陽五郎左衞門等ナリ、桐野（利秋）・篠原（国幹）ハ当時其事ヲ知ラス、

問、暗殺ノ一条ハ、西郷ハ実ト思ヒシナルヤ、

答二人、全ク実ト思ヒタルナリ、

問、大山綱良高雄丸ニ到ルハ如何ナル都合ナルヤ、

答野村、自分初メ高雄丸ニ到ル、艦長伊東（祐亨）海軍中佐ニ逢フ、伊東ハ予カ知ル人ナリ、因テ許ヲ受テ船ニ上リ、伊東ニ伴テ川村（純義）大輔ニ逢フ、其時川村曰、吾上陸セントスレトモ海岸ノ模様穏カナラス、先ツ大山ニ面会ス可シ、子能ク之ヲ通セヨト、乃チ帰リ県庁ニ出テ之ヲ大山ニ告ケ、大山ト同道又船ニ到ル、其時ノ応接委敷ハ聞カサレトモ、川村ヨリ西郷ニ面会セント欲スト云ヒタリ、依テ大山同道シテ帰ル、此時海岸ニ生徒等已ニ騒キ、小舟ニ乗リ、高雄丸ニ赴ムカントス、大山之ヲ制セシメ舟ヲ出スモノヲ返ス、

問、西郷ヨリ川村ニ逢ハント申シタルニアラスヤ、

答野村、然ラス、自分大山同道西郷ノ許ニ到ル、西郷ハ私学校ニ居ルナリ、大山ヨリ川村カ西郷ニ面会セント欲スルトノ言ヲ告ク、西郷亦川村ニ面セント云フ、篠原等之ヲ留メテ止ム、因テ衆議ニテ西郷小兵衞（隆盛弟、一番大隊一番小隊長）・河野主一郎（正義隊・破竹隊大隊長）両人ニ、川村ニ面会セヨト云フ、小兵衞曰、今日ハ桐野・篠原外ニ二三人船ニ赴クヘシト、議已ニ決ス、波止場ヲ出シ処、高雄丸ハ已ニ櫻島ニ転セリ、

問、邊見十郎太（宙撃隊大隊長）等舟覆リ、泳テ岸ニ上ルニアラスヤ、

答、然ラス、野村モ此時同様舟ニ乗シ、波戸場ニ出ルニ、波高ク船動揺シ、潮水船中ニ打込ミタルノミノ事ナリ、

問、生徒高雄丸ニ逼リタルニ非スヤ、

答野村、自分等其事ヲ見ス、

但西郷手許ニ評議中、生徒等其事アリタルヤ計リ難シ、

問、大山二タヒ高雄丸ニ到ル時ハ如何、

答野村、川村ヲ上陸セシメ、県庁ニテ大山同道ニテ応接スヘシトノ事ニテ、大山一人又高雄丸ニ到ル時ハ、応接終ニマトマラスシテ帰ル、

問、中原等口供ハ二月十三日ニ在テ、県庁ヨリノ届ハ十二日ニ在リ、前後スルハ何ソヤ、

答、中原等口供ハ十二日已ニ成ル、野村綱ヲ獲ルニ及テ、是亦一ツノ証ナリトテ追テ加ヘタリ、故ニ一日後ル、ナリ、

問、十五、十六、十七日ニ鹿児島ヲ出発ス、其兵ヲ編制スルハ何日ソヤ、

答野村、十二三日比ノ事ナリ、認野村綱十三日ニ口供ナル、其日編制シタリト聞ク、自分十三日ニ鹿児島ニ着ス、時ニ兵隊已ニ路上ニ陸続タリ、十四日鹿児島発足、

問、兵ヲ集メタルハ県庁ヨリ達シタルヤ、桐野・篠原等ヨリ令シタルヤ、

答、生徒各自随行ヲ願フナリ、間ニハ随行ヲ許サレス屠腹シタル者アリ、

問、県庁ヨリ軍用金トシテ、一人ニ十円宛渡シタルト云フハ実ナリヤ、

答、其事ハナシ、皆自費ニテ出ルナリ、

問、大山船ニ到ル時、林少輔（友幸、内務少輔）ニ面シ、県庁ノ現金皆渡シ尽クス、今後官吏ノ俸給モナキニ到ル、是必竟我奉職亡状ナリ、辞職セント云タルトノ事聞キシヤ、

答二人、其事ハ曾テ聞カサル事ナリ、

問、何故ニ鹿児島ニ戻ラサルヤ、

答、桂四郎（大小荷駄本部長）鹿児島ニアリ、当時海岸ハ大丈夫ナリト云書面熊本ニ遣ハセリ、故ヲ以テ安心シテ兵ヲ遣ラス、

問、長崎ヲ襲フ策アリト、如何、

答、熊本攻城中之アリ、問フ、西郷小兵衛ノ策ナリト、如何、答フ、之ハキカズ、

問、何故海路ヨリ出テサルヤ、

答フ、船ナシ、

問、大有、鹿児島等ノ船アリ、如何、

答、曖昧、

問、兵粮ハ鹿児島ヨリ送リシヤ、

答、出先ニテ弁ス、

問、西郷ノ居所知レスト云ハ如何ン、

答、知ラサルモノナルヘシ、アタリ前ニシテ居レリ、

問、割拠ト云策ハ何ノ故ソ、

答、弾薬ニ尽キ如何トモスルコト能ハス、止ムヲ得ス割拠ノ策ニ出ツ、

問、大軍出発ニ付テハ軍令条アリヤ、

答、軍令条ト云フモノハナシ、但銘〻相約シテ飲酒乱暴等ヲ禁シタルノミナリ、渾テ出発ノ時ハ合戦ノ覚悟ニテハアラサリシ、

問、銃器ハイツクヨリ渡シタルヤ、

答、戊辰戦争ノ年比ヨリ銘〻所持セシモノナリ、弾薬

ハ掠奪ノ品アリト雖、多分ハ残シ置キシニ熊本開戦ノ後之ヲ取寄セタリ、

問、西郷ハ陸軍大将ノ礼服ヲ着シテ出軍シタルト云ハ実ナリヤ、

答野村、荷物中ニ所持アリタルヤハ知ラス、戦争中ハ追々本営ニ到リ西郷ニ面セシニ、其事ハ一切ナキナリ、

問、西郷ノ本営ニハ、新政大総督トカ、大元帥トカノ表札ヲ掲ケ居タルト云フハ実ナリヤ、

答野村、其事ハ一切之レナシ、自分等此地(懲役所)ニ到リ、初テ右ノ噂ヲ聞クナリ、

問、西郷ハ何日熊本ニ到ルヤ、

答、熊本城開戦ノ夕方川尻(熊本市)ニ到リ、一泊シ、翌廿三日春日(熊本市)ニ到ルナリ、

問、川尻・春日・二本木(熊本市)孰レヲ本営トスルヤ、

答、春日ヲ本営トス、旧祠官光永大膳カ宅ナリ、後二本木ニ移ル、川尻ハ出張本営ナリ、

問、本営ヲ護スルノ兵ハ何程ソ、

答、多分ハナシ、一中隊位ナリ、各隊ノ押伍ヲ一組トシ、本営ヲ護ス、其後少シハ増加ス、

問、西郷、軍事ハ総テ桐野ニ委ネタリト云フハ如何、

答野村、然ラス、戦地ヲ巡見ハセサレトモ、本営ニ在テ諸方ノ大駆引ヲ指揮ス、苦戦ノ時ニハ自ラ出テ戦ハント云フ事モ度々ナレトモ、諸将之ヲ留メタリ、自分等植木ノ敗ヲ見テ山鹿ヲ引揚ケタル時ナトハ、大ニ面責ヲ受ケタリ、

問、西郷、軍中ニ在テ恒ニ何事ヲスル、詩ヲ賦シ、碁ヲ囲ム等ノ事ハナキヤ、

答野村、其事アルヲ知ラス、自分等軍事ヲ以テ到ル時、多クハ諸方ノ懸合、書状或ハ新聞紙ヲ見ル事アリ、

問、篠原建議、一挙城ヲ抜ク、兵ノ半ヲ失フニ過キストノ策行レサルハ何ソヤ、

答、西郷モ其策ヲ可トシ、已ニ人数ヲ撰ミ打入ノ手配ヲナス、其時熊本県士来リ云フ、城中糧尽キ、三日ヲ保ツコト能ハスト、西郷其言ヲ聞キ、多ク我士ヲ殺スハ不可ナリト云テ之ヲ止ム、

問、俘囚ノ言ニ、熊本攻城ノ時西郷子息討死トアルハ如何、

答、弟小兵衛ノ事ナルヘシ、子息ハ菊次郎ヨリ外ニ戦場ニ出ル者ナシ、菊次郎ハ創ヲ蒙リタリ、

問、西郷、二本木ヲ去ル時ノ事如何、

答、西郷ハ此地ヲ去ル可カラスト云フ、然トモ川尻口已ニ敗レタルヲ以テ、桐野等強テ木山(熊、上益城郡)ニ退カシメ、予此地ニ留リ大丈夫ナリト云ヘ、

問、植木(熊、鹿本郡)方面引揚ノ時、官軍之ヲ知ラス、所ヘ火ノ手上ルヲ見、初テ其退クヲ知リ、尾撃ストアルハ如何、

答野村、然ラス、自分其時鳥巣(とりのす)ニ在リ、中島健彦(振舞隊大隊長)ハ植木ニ在リ、俄ニ永峰ニ引揚クヘシトノ令到ル、十五日ノ朝ノ事ナリ、鳥巣ノミ引テ植木ニ通セサレハ、植木孤立スルヲ以テ、之ヲ中島ニ通シ一時ニ引揚ク、然ルニ敵ト相接スル、近キハ一丁内外ニアルユヘ、敵ニ知レサル様ニ、一塁ヨリ両三人ツヽ漸次ニ引揚ケシム、行クコト二里計リニシテ後ヘニ火ノ揚ルヲ見ルナリ、

問、連絡ノ後割拠ト云策ハ如何、

答野村、自分ハ鳥巣ヲ引テ大津(熊、菊地郡)ニ到ル、数ヘ敵ノ攻撃ヲ受ク、時ニ以為ク、割拠ノ策ハ非ナリ、割拠スルニハ兵粮・弾薬鹿児島ニ取ラサルヲ得ス、然ルニ敵軍艦ヲ以テ鹿児島ニ入ラハ、根拠忽チ失セン、若カス豊後ヨリ突進センニハト、之ヲ河野四郎左衛門(破竹隊監軍)ニ語ル、四郎左衛門大ニ同意ス、之ヲ桐野ニ説カント欲シ、四郎左衛門ト同道木山ニ至ル、至ル時ハ、敵軍已ニ逼ル、桐野曰、予レ(ハ)此ニ死セント、自分等留メテ曰、子総軍ヲ掌ル、今日子カ死所ニアラス、強テ之ヲ矢部(熊、上益城郡)ニ引揚ケシム、已ニ矢部ニ入ルノ後、人吉本営ヨリ人ヲ遣シテ曰、此兵ヲ以テ割拠スルハ謀ニアラス、今一タヒ是非熊本ニ向ヒ快戦セヨト、此時ハ大兵既ニ引揚ケタルアトニテ、如何トモスルコト能ハス、野村ノ手ニ予備トモ弾薬千二百発ナラデハナシ、

懲役人質問　第二

明治十三年三月七日、岡谷繁實・木下眞弘市ケ谷檻獄署内於テ、懲役人野村忍介・長倉詡ヘ質問ノケ条

問、大山綱良ヨリ長倉ヘ寄セタル書状二月四日附トノコトナルニ、筆記ニハ六日トアリ、イカヽ、

答長倉、四日附ニ相違ナシ、宮崎ニ達スルハ七日ノ午前二時頃ナリ、而シテ其書中ニ、来ル七日頃ニ陸海大挙東上ノ筈トアリ、差出シタル筆記ト云ハ自筆ニアラス、日ノ間違モアルナラン、

問、大久保内務卿ト西郷トノ間ハ如何ニ聞取居タルヤ、

答野村、以前ハ矛盾スルコトナシ、征韓論ノ始メ、西

郷ヨリ大久保ノ邸ニ到リ、征韓ノ説ヲ唱タリシニ、大久保曰、自分モ真先キニ行ヒテ撃ツモリナリト、西郷大ニ喜ヒ、家ニ還リ常ニカハリテ酒ナト飲ミ、大久保ハ我ニ勝レリト云ヒタリ、(野村長倉)而シテ岩倉(具視)右大臣帰朝ノ時大久保ハ横濱マテ出迎ヒ、夫ヨリ説ヲ変シ、二人矛盾ノ始トナル由承レリ、

問、大久保参議ト大山綱良トノ間ハ如何聞居タリヤ、

答長倉、予之ヲ今藤(鹿児島第一課長)宏ニ聞ク、明治九年頃内務卿ヨリ大山ヲ臨時呼ヒ登シノ事アリ、時ニイカヽノ議論アリシニヤ、大山曰、貴君ニハ何事モ開化トノミ唱ヘテ、人民ハ大ニ苦ミ国家ノ為メニナラス、早ク職ヲ辞セラルヘシト云、大久保怒リ、鹿児島県ノ事務一向挙ラズ云々、大山怒リ直ニ辞表ヲ出ス、今藤ハ大山ニ随行シテ居タリシカ、大山ヨリ判任官総代ニテ一同ノ辞表ヲ出サシム、然ルニ誰人カ中間ニ入リ之ヲ調和シ、大山今後県内ノ事ハ万端委任シ、思フ通リニスヘシトノコトニテ帰県シタリト、今藤ヨリ直ニ承レリ、

問、高雄丸着港ノ時汽船三隻アリテ、兵士其中ニ充満シタリト云ハ実ナリヤ、

答野村、其事ハ知ラス、但自分高雄丸ニ到ル時ハ、壮士輩ノ勢実ニ甚シキ事ニテアリシ、

問、諸口ヲ堅メタルハ何日頃ヨリノ事ナリヤ、

答野村、高雄丸ノ来ル時分ハ、諸口々々ニ銃器ヲ持チ居レリ、其頃ロ已ニ兵隊ハ組カヽレリ、

問、野村高雄丸ニ到ル時ハ、如何ナル心得ニテ至ルヤ、

答野村、始メハ官船ナルヲ知ラス、其何ノ故ニ入港ナルヲ問ント欲シ、船ニ近ツキ始テ官船ナルヲ知ル、会々伊東(祐亨、高雄丸艦長)中佐ニ逢テ其故ヲ問フ、伊東曰、川村(純義、海軍中将)大輔能ク知レリ、就テ問フヘシト、乃チ船ニ上リ、伊東同伴ニテ川村ニ逢ヒタルナリ、

問、其時刀ヲ帯ヒテ船ニ上リシニアラスヤ、

答野村、然ラス、刀ハ帯ヒ居タレトモ、元船ニ残シテ高雄丸ニ上リタリ、

問、集兵ノ時、櫻島ノ士人西郷カ面前ニテ屠腹スト云フハ実ナリヤ、

答野村、入隊ノ事ニ付キ屠腹シタル者アルヲ聞ク、誰ナルヲ知ラス、然シ西郷カ面前ニテ屠腹シタルモノハナシ、

問、西郷ハイツ頃熊本ニ来リシヤ、

答野村、攻城ノ軍議決シタル時、西郷ハ八代(熊、八代市)ニ着シタ

リ、中島等宇土(熊、宇土市)ニアルニ報知シ、宇土ヨリ西郷ニ告ク、西郷乃チ急ニ熊本春日ニ到ル、二十二日ノ事ナリ、

問、川尻(熊本市)ニ一泊シテ熊本ニ入ルト云ハ否ナルカ、

答野村、一泊モセサルナルヘシ、若シ一泊スルコトアルモ、暫時ノ休憩ニテ熊本ニ来ルナルヘシ、

問、官軍ノ赤帽ヲ恐レタリト云フハ実カ、

答野村、如何ニモ赤帽ノ方強キ様ニ見エタリ、

問、官軍ノ士官ヲ見テ撰ミ撃シタルトハ実カ、

答野村、然リ、士官ラシキ者ヲ狙フハアタリマイノコトナリ、

問、西郷カ熊本引揚ノ時ハ如何、

答野村、西郷ニ本木ニ在リ、人〻引揚ケノ事ヲ勧メタルニ、西郷曰、此地ヲ去レハ人気モ散乱セン、快ク一戦シテ死ヲ決スヘシト、桐野等強テ之ヲ止ム、乃チ去ルト、

問、西郷ノ死ヲ決シタルハ、熊本連絡ノ時ニ在ルカ、

答野村、然リ、

問、人心ノ西郷ニ服スルハ、維新前ニ外城ノ士族ヲ、城下ノ士族ト同権ノモノニシタルヨリト云フモノアリ、然リヤ、

答野村、然リヤ否知ラス、

問、熊本連絡後議論五ツニ分レ、或ハ豊後ニ打出ルト云ヒ、或ハ鹿児島ニ割拠スヘシト云ヒ、或ハ島津氏ヲ擁シ上京ナトヽ云ヒタルトハ実ナリヤ、

答野村、議論五ツニ分ルナトヽハ聞キタルコトナシ、

問、島津氏ヲ擁スルノ説ハ、村田カ別府カ此策ヲ建テタルニ、西郷大ニ叱シタリト云フモノアリ、如何、

答野村、右ノ事一向聞カス、長倉同犯人ノ此(檻獄ヲ云)ニ居ルモノ総テ五百人計リアルニ、一人モ右様ノ噂ヲスルモノナシ、

問、木留当リニテ弾薬欠乏ノ時、農民ヲシテ鉛丸ヲ拾ハセ、之ヲ用ヒタルト云ハ実ナリヤ、

答野村、之ヲ拾ハセタルニ非ス、彼等利ヲ欲シ拾ヒ来テ鬻キタルナリ、

問、鉛山ニ着手シ、幾許カ鑿取シテ軍用ニシタルコトヲ聞ク、如何、

答野村、其議アリタレトモ行ハレス、予輩モ之ヲ留メテ、トテモ用ニ立ツ程ハ出来ヌト申シタリ、

問、紙幣ヲ製造シタル時、金・銀貨モ製スルノ説アルヲ聞ク、如何、

答野村、其事ハ聞カス、金銀ハ得ヘキノ所ナキナリ、

問、土人カ西郷カ七ツ塚ト称スルトノ説アリ、如何、

答野村長倉、左様ノ事ナシ、

問、西郷カ本陣ニ西郷ニ似タルモノアリテ、探偵者往々西郷ニ誤リタリト云コトアリ、如何、

答野村、医者一人肥大ナル者随行セリ、容貌稍々似タリ、蓋シ其者ナラン、姓名ハ知ラス、

問、桐野ノ妾降参シタル説アリ、実ナリヤ、

答野村、陣中ニ婦人ヲ連レタルコトヲ聞カス、勿論薩摩ニテハ妾ヲ抱ヘルモノナシ、虚説ナルヘシ、長倉永陣中ノコトユヘ、日州当リニテ婦人ニ酌ヲトラスル等ノコトアリテ、其事ヲ云ヒタルナラン、

問、島津家ヨリ病院負傷者ニ、衣類ヲ贈リタルコトアリト云フハ実ナリヤ、

答野村、其事ハ一向聞カス、

問、西郷人吉退去ノ後何等ノ説アリシヤ、

答野村、予輩矢部ニ在リシトキ、西郷今一タヒ是非熊本ニ向ヒ快戦スヘシト申越シタリ、予カ豊後衝突ノ策ハ西郷兼テ聞込ミタルユヘ、至極宜シキ間、兵ヲ分ツヘシト申越シタリ、

問、西郷ハ屢々戦死シテ此局ヲ了ルト云ヒタルヤ、

答野村、然リ、延岡ヲ復セントシタル日モ、自ラ兵ヲ引テ打出ントシタルヲ、別府晋介ト予ト之ヲ留メテ曰、未タ先生ノ先鋒ニテ戦フノ時ニアラス、我輩死スルニ到ラハ則チ可ナラン、西郷只哂テ止ム、

問、延岡攻戦ノ日ハ寄兵隊ノ事如何、

答野村、予三田井（宮、西臼杵郡高千穂町）ニ在テ豊後衝突ノ策ヲ建ツ、西郷書状ヲ遣シ、明日延岡ニ出テ大快戦ヲナスユヘ、兵ハ分ツヘカラスト云フ、延岡攻ノ時ハ、奇兵隊半分ハ揃ハス、延岡ニテ敗レタル後ニ着シタリ、

問、長井村（宮、東臼杵郡北川町）ニ囲マレタル時ノ景況如何、

答野村、長井村二里四方位ノ内ニ集ル官軍、四面ヲ囲ム幾許ナルヲ知ラス、夜山々ヲ望メハ篝火ヲ見サル所ナシ、

問、長井ヲ去ル時、西郷自ラ病院ニ到リ、万国ノ公法モアルユヘ、敵必ス害ヲ患者ニ加ヘサルヘシ云々等、懇々申諭シタルト云フハ如何、

答野村、予其時銃創ヲ負ヒ篤ト知ラサレトモ、病院モ処々ニアリタリ、西郷自ラ赴キタルニアラス、病室掛リニ中山（元鹿児島県三等警部）盛高ナル者アリ、中山ヲ呼テ右等ノ事申付タ

リト聞ケリ、

問、長井ヲ去ル時書類ヲ焼キタリト云フハ如何、

答野村、然リ、西郷ヨリノ焼ケト云差図ニテ皆焼キタリ、

問、長井ヲ去ル時ハ、諸将知ラサルモノ多シト云フハ実ナリヤ、

答野村、然ラス、諸将ハ皆之ヲ知レリ、尤小隊長以下ハ各所ニ布置シテアリシユヘ、知ラサルモノモアリタルナラン、

問、可愛岳脱出ノ前(宮、東白杵郡北川町)、一タヒ出テ引返シタルコトアリタルヤ、

答野村、予ハ豊後ニ打出ルヲ利アリトシ、鹿児島ハ所謂散地ニテ守ル可カラスト申出テ、一時其策ニ決シタリ、其夜桐野前軍ヲ引テ行クコト二里計リ、峯山険岨行ク可カラサルヲ以テ又引返ス、凡ソ勝軍ノ時ハ議論モ能決定シタレトモ、敗戦ノ後ニ到リテハ議論紛紜多ク相合ハス、

問、可愛岳突出ノ議ハ何時ニ起リシヤ、

答野村、桐野引返シタル翌日三時頃、邊見予ニ謂テ曰、此地已ニ迫レリ、何レトカ事ヲ決セサル可カラスト申談シ、十七日ノ夕方本営会議ニテ、鹿児島ヘ打出ルノコトニ決シ、極密ニシテ衆人ニ知ラシメス、其夜オソクナリテ俄ニ兵ヲ出ス、夫レユヘ達セサル処モアリタラン、

問、長井ニテ諸説区々ナリシニ、先ツ三田井ニ出テ後向フ所ヲ決スヘシト、西郷云ヒタリトノ説アリ、如何、

答野村、其言アリタルカ、予病室ニ在リ之ヲ聞カス、然トモ鹿児島ヘ打出ルノ軍議ハ已ニ決シ居タリ、

問、西郷ヨリ兵士ヘ、降ル者ハ降レ云々トモ云ヒ、又一層奮戦シ退歩ノ念ヲ絶チ、進戦シテ悉ク斃レ、恥辱ヲ後世ニ貽スコト勿レト云ヒタリト云、予盾ニ似タリ、如何、

答野村、降ル者ハ降レト云ヒタリ、

問、可愛岳切抜ケノ時、斧ヲ持チ鎌ヲ提クル者三十人許前行セシムト云ハ実ナリヤ、

答野村、雇ヒタル者ハナシ、各自木ヲ切リ草ヲ排シテ路ナキ所ヲ攀チ登リタリ、

問、其時官軍ノ哨兵稀薄ナル所ヲ望テ、切リ抜ケタリト云フハ実ナリヤ、

答野村、然ラス、可愛岳ハ大山ナリ、哨兵ノ厚モ薄モ

見ヘス、直ニ進行シタルナリ、長井ヲ出ルハ夜ニ入ル頃ニテ、可愛岳ノ麓ニ到ルハ未明ナリ、峯上ニ篝火ノ点ミタルヲ見ル、夜明クレハ敵ヨリ撃タル、カユヘニ、未タ明ケサルニ乗シ打破ルヘシト云テ進ミタリ、

問、其時ノ兵数三百五十計リトモ、五六百トモ、千人計リトモ云フ、如何、

答野村、銃器ヲ持タザル者迄ヲ併セテ、六七百人モアリタリ、

問、三田井ニ出ルハ如何ナル策アリシヤ、

答野村、兵ヲ三田井ニ出シ豊後ニ打出ル形ヲ示シ、而シテ鹿児島ニ向ヒシナリ、

問、山中径行ニ兵糧ハ継キシヤ、

答野村、継カス、一日ハ一食モセス、水ノミヲ飲ミタルコトアリ、脱出ノ翌日、山中ニテ官兵ノ狙撃ニ逢フ時ニ、別府モ予モ創ヲ負テ轎ニ乗レリ、因テ西郷ト三人ノ轎ニ筵ヲ覆ヒ、別府ヲ前ニシ、西郷ヲ中ニシ、予ハ後ニナリ手負ノ姿ニシテ通リタリ、

問、鹿児島ニ入ルハ割拠ノ策ナリシヤ、

答野村、西郷ハ鹿児島ヲ打破リ、其兵ヲ引テ蒲生（姶良郡）ヘ入リ、之ヲ根拠トスルツモリニテ、将ニ鹿児島ニ打入ラントスル時、自分ニ蒲生城ノ主任トナルヘキヲ命ス、辞シテ曰、予不才且已ニ創ヲ被リ、之ヲ能クスル能ハス、曰、奔走スルモノハ外ニ人アリ、汝城ニ拠リ指揮セヨ、鹿児島ニテハ唯一旦戦フノミ、是ニ於テ予蒲生ニ留レリ、然ルニ兵皆鹿児島ニ赴キ、蒲生ニ残ルハ纔ニ十六人、小荷駄方ト弾薬製造スル者ヲ合セテ二十七八人ニ過キス、予事皆違フヲ以テ、轎ヲ馳テ西郷ニ追ヒ及ヒ之ヲ議セント欲ス、二里計リ行キタレトモ及ハスシテ引返ス、夜明ル時吉田辺ニモ官兵来ル、乃チ十七人本営ニ集リ曰、トテモ此人数ニテ城ヲ守ル可カラス、守ル可カラサル兵ヲ以テ守ルハ、笑ヲ敵ニ受ルノ外ナシ、引揚クルニ若カスト、予曰、予ハ城ヲ守レト云フノ命ヲ受タルユヘ、一人ト雖コヽニ留ルヘシト、皆曰、守ラサルノ罪ハ共ニ受クヘシト、遂ニ同行シテ鹿児島ニ入ル、九月一日ノ事ナリ、

問、蒲生ハ如何ナル処ナリヤ、

答野村、鹿児島ヨリ北ニ当リ四里ニ在リ、元ハ直支配ニテ士族五六百モアリテ地勢堅固ナリ、鹿児島ハ守リ難キ地ニテ、蒲生ヲ持コタユレハ相応援ス可キ形勢ノ地ナリ、

問、鹿児島ヘ入リタル時、桐野ハ喜テ宅ニ入リ、酒ナト飲ミタリト云フハ実ナリヤ、

答野村、然ラス、桐野ハ城山ノ硝兵線ヲ巡視スルコト一日ニ凡三タヒ位ニテアリタリ、

問、鹿児島籠城ノ時糧食ノ用意ハ如何、

答野村、鹿児島ニ入リシトキ米ヲ集メタリ、然レトモ意ノ如クナラス、故ニ戦士ノミ飯ヲ喫ヒ、予等如キ患者ハ少シツヽ粥ナトスヽリ居タリ、此時兵已ニ乏シク、県士ノ応スル者モ官兵ニ支ヘラレ、来ル者纔ニ四五人アリタリ、守城ノ兵一丁ニ三人位ノ割ニテアリシ、

問、深見有常（薩軍本営付、募兵、兵器弾薬補充担当）甑島ノ士族ヲ募ル、其応援ヲ頼ミ城山ニ籠リタルト云説アリ、如何、

答野村、然ラス、始メ城山籠城ノ覚悟ニテハアラサリシニ、吉田（鹿児島郡）方面ノ敗ヲ聞テ即チ城山ニ拠リタリ、吉田敗レハ、城山ニ拠ラサレハ致シ方ナキ地勢ナレハナリ、

問、城山ニテハ桐野打テ出ルノ議アリト云フ、如何、

答野村、桐野ハ其説アリシ由ニ聞ク、貴島ハ打出テ戦死セリ、

問、城山籠城ノ時西郷ハ如何ナル所ニ居タリヤ、穴中ニ居タルノ説アリ、如何、

答野村、始ハ高キ所ニ居レリ、岩崎谷ノ上ナリ、予モ共ニ居レリ、後ニハ敵ノ弾丸至ラサル所ナキユヘ、凹処ニ入リタルカモ知ラス、其頃予ハ創ヲ被リ病室ニ居リ、其側ニ居ラサル故知ラズ、

問、降伏ノ論ハ坂田（福島隊ミ長）諸潔始テ之ヲ唱ヘ、将ニ出ントシテ桐野ニ逢フ、桐野之ヲ叱シ返サシムト云フハ実ナリヤ、

答野村、実ナリ、坂田ハ再タヒ其議ヲ建シコトハ聞カス、

問、河野主一郎出テ使スル時ノ事ハ、西郷ハ知リ居タリヤ、

答野村、西郷ハ城山ニテ死ヲ決シ居タルナリ、

問、山ノ田（山野田一輔）返リタル時ハ如何ナル議論ナリシヤ、

答野村、其日五時迄ニ返答スヘキ筈ナリシニ、或ハ討死スヘシト、或ハ出テ言ヒ訳ケヲスヘシト、或ハ言ヒ訳スルハ是非溯リテ、弾薬掠奪ノ事ニ及フヲ以テ、汾陽五郎左衛門ヲ出スヘシナト、議論紛然トシテ纏マラス、已ニ夜モオソクナリ、明朝山ノ田再タヒ出ルツモリナリシニ、未明ヨリ官軍来リ逼リタルナリ、

問、西郷ノ弾丸ニ中ルヤ、別府晋介傍ニ在リテ其頸ヲ刎ネ、之ヲ土中ニ埋メ、直チニ屠腹スト云フ、如何、

答野村、予其側ニ居ラス、故ニ知ラス、長倉曰、西郷兼テ別府晋介ニ、戦敗ルヽ時ニ至ラハ、汝速ニ我首ヲ刎ネヨト命シタル由、此事晋介ハ人ニ語ラスト雖、其兄別府九郎予ニ語レリ、弟晋介ハ非常ノ一大難事ヲ託セラレ、甚タ苦労シテ居レリト、

問、或ル書ニ、西郷討死ノ処ニ、叱敗〻〻ト云ヒタル由見ヘタリ、方言カ如何、

答野村、右等ノコト聞カス、長倉曰、叱ルトキ咄ト云フカ如キコトナルベシト云、

懲役人質問　第三

明治十三年四月廿日、岡谷繁實・木下眞弘市ケ谷監獄署ニ於テ、懲役人野村忍介・鮫島敬助・大野義行ヱ質問ノ条〻、（奇兵一番中隊右小隊長）（狙撃隊一番中隊長）

問、西郷隆盛鹿児島出発ノ時、従前朝廷ヨリ拝受シタル辞令書等、皆焼キタリト云モノアリ、如何、

答三人、左様ノ事ナシ、可愛岳切抜ノ前ニナリテ、出陣以来諸軍ノ往復及手負・戦死、又ハ有功ノ者ノ取調書等、胴乱ノ儘渾テ焼キタルナリ、中ニ見込書等モアリタルヤノ由、

問、西郷発足ノ時旧知事公ニ面謁シタリヤ、

答三人、磯ノ邸ニハ面謁セス、門外ヨリ拝シタルノミ、二ノ丸方ニハ面謁アリタルト聞及ヘリ、

問、西郷ノ居宅ハ何ト云所ナリヤ、

答三人、竹村（武）ニアリ、又西別府ニモアリタリ、

問、其居宅ノ牀（床）下ニ入リテ、刺殺セント図ル者アルヲ、捕ヘタリト云フハ実ナリヤ、

答三人、左様ノ事ナシ、

問、西郷出発ノ時警衛ハ何程ノ人員ナリヤ、

答三人、一小隊ヨリ一人ツヽ之ニ従フ、是ハ警衛ト称スルモノニアラス、斥候兵ナリ、熊本開戦ノ後十三日目（三月六日ニ当ル）、一小隊ヨリ押伍二人ツヽ、本営詰ノ兵トス、河野四郎左衛門隊長トナル、

問、出陣ノ時軍令ノ如キモノヲ出シ、方今ノ政事ヲ破リ新政ヲ以テ兵ヲ集ム、従ハサルモノハ、軍法ニ行フト云カ如キモノヲ出セリヤ、

答三人、左様ノ事ハ一切ナシ、

問、西郷ニハ帷幕ノ臣ト称スヘキアリヤ、

答三人、アルコトナシ、其甥ニ市來宗助ト云者戊辰ノ